
心の装甲

篤岡義人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の装甲

【Nコード】

N57430

【作者名】

篤岡義人

【あらすじ】

一九九六年。世間を賑わしたサノヤマ感染症は人々に特殊な能力を与えた。

これはその特殊能力・SAを使い、人助けをする一人の少年とそれを時々、助ける常識人の少年の物語である。

【第一章 俺のこの手は……】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。

【第一章 俺のこの手は……】

超能力が現実の物として受け止められたのは十三年前の一九九六年の事だった。

その年の日本時間一月一日午前十二時、北海道の北部に隕石が落下した。

一月十八日、隕石落下地点で原因不明の熱病の蔓延が発生。調査隊が隕石の調査を開始。

二月五日、調査が終了。隕石の周辺から採取した謎のウイルスが熱病患者の血液から採取された物と同一の物であると判明。しかし調査隊のメンバーも熱病が発症。

二月十五日、北海道で住民のほぼ全員の発症を確認。熱病が青森にまで広まる。

三月十五日、日本での国民のほぼ全員の感染、発症を確認。世界保健機関がこの熱病を発見者の名前から因んで『サノヤマ感染症』としての見解を発表。

四月三十日、全世界で感染が急激に広まる。この時点でも原因は不明。

五月十五日、全人類の感染及び発症を確認。史上最大規模の感染症となるが死者はゼロ。

その上、五月下旬、感染していた人々の症状が緩和。

六月上旬、症状を訴える人が激減。原因も治療方法も不明のまま、感染症の被害は収束に向かう。しかし未だに感染者体内にウイルスの存在は認められた。

そして六月二十七日、サノヤマ感染症患者らが特殊な能力を顕現し、以後世界中で能力を持った人々が増加し始め、感染者患者からの新生児の体内からもウイルスが認められた。この一連の事件は『

サノヤマ感染症事件』として世界中で報道された。

恐らく、隕石に付着しサノヤマ感染症を世界中に広めたこのウィルスの影響で人々に身に付いた俗にSA（SENTIMENTAL・ARMOR）と呼ばれるこの超能力。使用者の精神に呼応する形で発現する生命エネルギー『福音』を素に生成され、様々な超常現象を起こすという物だ。

そのSA能力者は全世界に出現し、最早、超能力の存在は非常識から常識へ、フィクションからノンフィクションへ、異能から一般技術へと昇華していた。

十年前。とある少年が当然のように能力を開花させた。

その少年の名は松野浦龍之介。

彼は保育園から自宅へ帰宅中に交通事故に遭い、その拍子に能力を開花させSA能力者・スピリットアカレイドの仲間入りを果たした。

少年、松野浦龍之介は目を覚ました。現在の時刻は午前六時三十分で午前七時に起きる龍之介にとっては少し早く起床したようだ。

龍之介は今日から通う事になる中学校・『私立城門学園』の制服のSAの文字の刺繍が入ったワッペンが右胸に貼ってあるブレザーを自室で素早く着ると、ドタドタと階段を下りてリビング・ルームに向かう。

キッチンで一人分の朝食を用意する彼に肉親はいない。

彼が幼い頃に行方不明となってしまったのだ。それからというもの、彼は近所の住人の補助を受けながらこうして健康に人生を歩んでいる。

彼が暮らしているこの家も近所の地主さんから提供された物だ。

「頂きます」

そう言うとは彼は一人で朝食のパンを頼張る。彼は一人の朝食にはもう慣れていた。だから寂しくない。と、彼・松野浦龍之介は思考する。数分後、彼は味気ない朝食を終え、最低限の荷物を薄っぺらな学生鞆に詰め、

「行つてきます」

誰かに向かつて言うはずのその台詞を自分に戒めるように吐き出すと彼は学校への道を歩き始めた。龍之介は一瞬、SA能力を使って登校しようと思ったが直ぐにその考えを頭から無くした。時間はまだ有るし、折角少し早起きしたのだから早朝の清々しさを味わおうと思ったのだ。

深呼吸し、龍之介は歩きながら辺りを見回した。鳥の囀り声が聞こえてくる。近くの公園の緑は青々としており、とても爽やかだ。

龍之介は気を取り直して鞆を引つ提げ、歩き出そうと思ったその時、

「君、可愛いね。ちょっと付き合つてよ」

何やら朝から騒がしい連中が道の隅に屯していた。龍之介は何事かと遠くから様子を眺めてみる。

どうやら複数の柄の悪い男たちが一人の困った顔をしている、善良な、か弱き少女を囲んで下卑た笑いを顔に貼り付けているようだ。少なくとも龍之介にはそう見えた。

「（女の子が不良に囲まれている？ フラグをぶつ立てる大チャンスじゃないか。こうしてはいられない。SAを発動させて、カッコ良く女の子の前に参上して、バシッと決めてやるぜ！！）おい、テメェら！！」

龍之介は下心満載で不良たちに声を掛けた。それに気付き、不良たちは仁王立ちし腕組みをして不敵な笑みを浮かべている彼を睨む。しかしそんな事は気にせず龍之介は言葉を続けた。

「その子、困っているじゃないか。無理意地はいけないし、そして何よりもッ！！俺ん家の前でナンパなんかしてんじゃねえ！！」

「どこで何をしようが、俺らの勝手だろお。ナメてんのか？」
「ナメてねえし、舐めたくもねえよ、汚ねえな」

「んだとお、ヒヨロヒヨロしてるくせに調子乗ってんじゃねえ!!」
そんな不良からの一言を聞いた龍之介はより一層、不敵な笑みを顔に貼り付けて両腕を前に突き出し、こう言った。

「果たして、これを見ても同じ台詞が吐けるかな？」

その言葉と共に突き出された彼の拳が眩い光を出す。光の所為でよく見えないが何か装甲の様な物が彼の両拳を覆い始めていた。

「最近の喧嘩は単なる腕力じゃ、勝敗は決まらねえ」

「ま、まさかコイツは……!!」

「SA能力者!？」

不良たちが急に慌しくなり始める。彼らはSA能力者と闘った事があったのだろうか、否、そうでなくとも人知を超えた力を持つ彼らの噂を聞いた事ぐらいあるのだろう。

そして、そんな不良たちの様子を見た龍之介はさらに調子に乗った。

「そう!! お察しの通り、能力者さ!! テメエら如き、俺の素晴らしい拳でコンクリートの上に沈めてやるぜ!! この【居眠りの龍之介】がな!!!!」

その台詞を言い終わる頃には既に装甲は完成していた。指は金、手の甲と掌はコバルトブルーという派手な色をした装甲がそれぞれ両拳を覆い、手の甲の部分の装甲——コバルトブルーの装甲——からは純白の機械的な羽が折り畳まれるようにそれぞれ三枚ずつ付いている。

「これが俺のSA能力、『クラッシュクラスター』だ。俺に喧嘩を売ったって事は、まあ、そういう事だよな。……しっかりと心に刻めよなあ、俺の『心の装甲』を!!」

そう言いながら龍之介は拳を構える。龍之介の『クラッシュクラス

ター」。その能力は「装甲の一部分——起爆剤の羽——を消費し対象を爆破する」。左手は開き前方に持つていき、右手は硬く握りしめ右脇腹の方にゆつくりと持つていく。徐々に装甲が光を帯び始め、閃光へと変わつていき、右拳の親指に最も近い起爆剤の羽が拳に向かって垂直に立ち、吸い込まれるように、挿し込まれるようにして収納された。

「牽制のエントリーフィストオオオオオ！」

龍之介は己の光り輝く右拳を、助走をつけ、前方の不良たちに向けて突き出す。その繰り出される拳の凄まじさを見る限り、その威力は計り知れない。

拳が不良たちに接近する。客観的に見てどちらが勝っているかは最早、分かり切った事で、そんな物は愚問である。

[illegible]

「うおおおお お お お お お お おお！！！」

不良の一人が勇気を振り絞り正面から龍之介と対峙する。既に双方の覚悟は決まっている。

完全武装した拳と裸の拳が交叉し、そして――

「どうしてこうなった……？」

龍之介はコンクリートの上に仰向けに倒れながら思考した。彼のS A能力『クラッシュクラスタ』は爆破の爆破は威力によって三段階に分かれる。

彼が不良たちに放った技は攻撃技の一つで最初に放つジャブのよ
うな技でエントリーフィストという。本来ならばこの技は単なる繋
ぎでこの後に、威力の順に、掃討のグレートフィスト、止めのオン
スロートフィストのコンボを相手に叩き込むはずだったが、この時
の龍之介は牽制のエントリーフィストの威力をうまく受け流され、
バランスを崩し、その隙に不良にフルボッコにされたという訳だ。

「情けねえなあ……SA能力を使ってもこのザマだ。女の子も混乱に乗じて逃げちまつてるしょお」

ふう、と彼は目を閉じ、そしてゆっくりと立ち上がった。

「登校しねえと、鞆どこだあ？ お！ あった、あった」

龍之介は近くに落ちていた鞆を拾い上げ、そして

「な」にやっつてんだよ、松野浦」

少し遠くに落ちていた彼の財布を拾い上げて立っている一人の少年と再会した。

「お、お前は拓巳。拓巳じゃねえか！！」

龍之介が再会した人物、城門学園のブレザーを着た見栄崎拓巳は懐かしむように龍之介を見ると静かに微笑した。拓巳はキチンとブレザーのボタンを留めている龍之介とは違い、ワイシャツの上から軽く羽織っているような感じで右胸にSAという文字の刺繍ワッペンが貼ってあるブレザーを着ている。

「久しぶりだな、【居眠りの龍之介】クン」

「な、おま、見てたのか！？」

「ああ、とてもカッコ悪かったぞ。小物臭が漂ってた」

「ひでえ言いつぶりだな」

「純粋な事実を述べてみたまでだ」

「ッ……！！ あ、そうそう。お前、そのブレザーを着てるってことは……」

「ああ、城門学園に編入だ。勿論、能力に目覚めてな」

そう言いながら財布を差し出す拓巳。龍之介はそれを聞き、財布を受け取りながら内心ホッとした。財布の中身は、空っぽだ。龍之介は財布の中身を見て一瞬、もの凄く落ち込んだが直ぐに気を取り直した。

「いや」お前が居るって聞いて安心したよ。友達出来るか不安でさ」

「お前は昔からぼっちだったからな」

「俺が一人ぼっち！？俺がロンリイだって！！！？」

「そ、お前は友達が少ない。その腕の能力の所為でな」

「まあ、き、気にしてねえし。……だ、大体お前も、もう能力持ってんだろ！！」

「ああ、そうだな。と、そんな事はさて置き、そろそろ登校しねえとヤベェんじゃねえの？」

「ああ。じゃあ、時間もねえし……『クラッシュクラストー』！！」
掛け声と共に再び拳の装甲が構築されていく。光り輝く装甲は完成直後に一枚の羽を吸収し、爆発に変え、爆風を作り、推進力に変える。

「じゃあ拓巳。感動の再会でいい所だったかもしれないが、俺は先に登校させて貰うぜ。初日から遅刻はしたくないからな」

龍之介は左手で靴を持っているため、右拳からバランスを取りつつ推進力を放出し、粉塵や近くに置いてあった空き缶を巻き上げ、吹き飛ばしながら小刻みにしかし確実に宙に上がっていく。その様子に拓巳は焦り、彼を引き留めようとした。

「お、おい！！俺も連れて行け！！」

「俺の財産を見殺しにしたテメエは歩きで登校しろよ。じゃあな、入学式でまた会おうぜ。行くぞ！！ブースト！！」

叫び声に装甲が反応し、龍之介は凄まじい速さで城門学園に向かって行った。無論、その推進力を起こすための爆風の影響は発射地点にも残る。

「げっほ、がっは！！りゅ、龍之介え！！覚えてやがれ！！」
強烈な突風と埃を喰らった拓巳はそんな台詞を吐き、学校に向かって走り出した。

龍之介は空を飛んでいた。かつて様々な人々が夢見た世界を龍之

介はライト兄弟のように飛行機も使わず、身一つで飛行していた。拳の装甲から爆破が断続的に続くことで生まれた推進力を使い、『飛ぶ』というよりかは『跳ぶ』事で空中を移動している彼なのだが城門学園が見えてきたので近くに着陸できる場所は無いのか、探しているところだった。

「（それにしてもデカイ学校だな、この城門学園は）」
と、近くにあった城門学園所有の駐車場に向かって降下し始めた龍之介はそう思考した。

私立城門学園。東京都東久留米市周辺で初めてS A能力の授業がカリキュラムに組み込まれた、小学校、中学校、高校、大学の小中高大一貫校である。それ故に校舎とその敷地面積は広大で緑溢れる素晴らしい学園、と彼が事前の下調べに見たパンフレットには記載してあった。

龍之介は小学校の頃から編入を進められていたのだが、せめて小学校は普通の学校で過ごしたいという本人の希望から中等部からの編入になったのであった。

「よつと」

駐車場に降り立った龍之介はまず校門を目指し歩き始めた。能力を使ったお陰で余裕を持って入学式に参加できそうだ。彼はゆっくりと駐車場の出口に向かって歩いていった。

と、そこに

「ぜえ、ぜえ……。りゅ、う、の、す、けえー！！　よくも置いて行きやがったな！！　くぬ、くぬ！！」

遅刻しないように全力疾走をして来たのか汗ビツヨリの拓巳が拳を放ってきた。体力が落ちていたため動きにキレが無い拓巳の拳を難無く避けた龍之介は即座に反論した。

「俺の財産を守ってくれたのならともかく、何もしなかったお前を連れて行く義理が無いだろ？」

「俺の能力は移動には向いてねえんだよ」

「自業自得だ」

「くっ……何も言い返せねえ」

「で？　この後どうするんだっけ？」

その問いに拓巳は校門で配布されていた予定表を見ながら答えた。

「中央広場で係員の生徒に説明を受けるんだとさ」

「じゃあ、中央広場つてのに行ってみるか」

「そだな」

龍之介と拓巳は他の新入生に付いて行くようにして中央広場に到着した。広場の中央には大きな台があり、そこで係員と思しき生徒がメガホンで何やら指示を飛ばしていた。

『えー、お早うございます。今日はこの私立城門学園にご入学、おめでとうございます。私は今回皆様のご案内をさせて頂く、安全保障部の普遍川浪不と申します。どうぞお見知りおきを』

「あの人が普遍先輩か……」

「ああ、あの腰辺りの膨らみは……間違いない、ホルスターだな」
今、龍之介たちの話の内容を順々に説明しよう。

まず、普遍川浪不。龍之介たちがここ、私立城門学園で入部をしたいと思っている安全保障部、略称安保部、通称パシリ部に所属している近所のお兄さんだ。学園の安全を守り、悩みを聞いてくれる便利屋集団の一員である。

次に、川浪不の腰だめのホルスター。一九九六年のサノヤマ感染症事件を発端に増加し続けているスピリットアカレイドの存在により主に一般人や弱い能力を持ってしまった者が弱装ゴム弾を使用する護衛用の拳銃——勿論、銃器所持免許という物を取らなければならぬ——を所持しても良いという、新しく日本国憲法に『防衛権』が追加された。これを安全保障部は学園内外で生徒の暴走を鎮圧するため利用しているという訳だ。

「俺たちも一応、銃器所持免許は持ってるけど……入部できるかな」
「さあ？　どうだろうな。噂によると、この後の能力判定テストで

スカウトするらしい」

新入生は入学してすぐに能力判定テストを受けさせられる。そこで成績に関わる重要なランク付けをされ、それぞれのクラスに配属させられるのだ。

「とりあえず、テストを受けなきゃなんも始まらないって事だな」

「そゆこと」

龍之介たち新入生は教員から軽い指示を受け、テスト会場である運動場に向かった。

【第一章 俺のこの手は……】（後書き）

友達に誘われて投稿してみました。感想待ってます。

【第二章 入学試験】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言・「俺の趣味は『人助け』だ！」 by 龍之介

【第二章 入学試験】

龍之介と拓巳はそれぞれ別々の試験を受けていた。理由は双方の能力のタイプの違いである。拓巳のSAは『視界に入った全ての事柄の未来を予知する』というチカラだ。拓巳の能力は龍之介と違い、外部に物理的な影響を与えない。そのため、二人の試験方法は大きく異なるのだ。

という訳で龍之介は運動場の端の方に設置してあった能力測定用のサンドバック形の前に立っていた。説明によるとSA能力を用いサンドバックを攻撃する事でデータが読み取られ、能力の強弱が判明するシステムのようなのだ。

「よし、俺の本気の一撃をお見舞いするぜ」

龍之介は気合を入れ、硬く拳を握った。彼の拳に『クラッシュクラスター』の装甲がゆっくりと纏わり着いていく。彼は普段とる戦闘スタイルとは違う、全ての起爆剤の羽を吸収した両拳をそれぞれの脇腹に持つていくというスタイルをとった。必殺技を打つつもりである。

「うおおおおおおおおおッッッ！！！！ 唸れ！！

本命のクラッシュクラスターだああああああああああああああああああああ！！！！」

そして彼は爆発によるブーストと同じ要領で後方に爆風による推進力を生み出し、両腕を突き出し、サンドバックに突撃した。

龍之介の『クラッシュクラスター』の必殺技・本命のクラッシュクラスター。能力名を冠する事を許されたその技の一撃は通常の技とは一味違う。三段階、全ての爆発を一点に集中するのだ。他の技の発動光とは違い、七色の光を発しながらサンドバックに接近する。その拳は正に、本命、本気の一撃だ。

龍之介が地面から足が浮いた状態でその拳がサンドバックに真正面

から衝突する。凄まじい衝撃をともに受けたサンドバックは、徐々に能力による連続的な爆発を起こし、亀裂が走っていった。既に検査装置がエラーを起こし、危険を知らせるサイレンを鳴らしている。係員の教員が龍之介に試験終了を伝えようとした、その時、事件は起こった。

「ああッ!!」

サンドバックが限界に達し、破裂したのだ。当然、攻撃対象を失った拳はまだ死んでいない推進力によって前に進む。そのルートの先には体育館が存在していた。

「せ、制御が出来ねええええええええええ!!」

龍之介は悲痛な叫び声を上げながら、体育館の壁に拳を衝突させてしまった。未だ凄まじい威力を持った完全武装の拳は体育館の壁を爆発と爆風を添えて容易く打ち破いた。

「あ、あ、あ、あ……やってしまった……」

反動で吹き飛ばされ、尻餅をつきながら彼は絶望に打ちひしがれた。――やってしまった――この言葉が龍之介の頭を埋め尽くす。成績を上げるはずの行動が、逆に成績を著しく下げてしまう結果を招いてしまった。

しばらくして数名の安全保障部の部員が校舎から小銃を携えて彼の元にやって来た。その中に何故か拓巳の姿も見受けられた。駆けつけた部員の中の隊長格と思しき金髪をショートカット気味にした女子生徒は部員証を見せながら、こう言った。

「安保部の副隊長のサヤ」ロバーツです。貴方を重要監視対象として護送します。付いて来なさい。銃器も没収します」

「わ、分かりました……」

勝気な瞳をした彼女の強気な発言に龍之介は力無い声で了承し、上着を脱ぎ、愛用していたナイロン製のショルダーホルスターごと愛銃を素直に手渡した。その様子に何故か先程から安保部員の付き添いをしている拓巳は心配になって声を掛けた。

「お、おい、龍之介。一体どうしたんだよ？」

「よ、よう拓巳。実はテスト中に能力が暴走しちゃってこの有様で訳さ」

「成程、あの大破した体育館の壁が全てを物語っているな」

「で、お前はなんでここに居るんだ？」

「実はな——」

龍之介が事故を引き起こす十分前。拓巳は自分の能力を測るために射撃ゲームのような測定器の筐体の前に立っていた。彼は画面の中の的を電子銃で予測して、撃って、予測して、撃って、という作業を繰り返していた。

「（適当に手え抜くか……）」

拓巳は醒めた目で画面を見ていた。拓巳のSA『ヴィヴィドプロフィット』を使えば、全ての的に弾を命中させることが出来るのだが、彼はそんな気は全く無い。

下手にいい成績を収めてしまうと上位クラスに配属されてしまい、ハードなカリキュラムを組まれ、学園生活を存分にエンジョイする事が出来なくなると考えたからだ。

そんなこんなであと少しで試験終了というところで、拓巳は不意に声を掛けられた。

「きみ、本気を出したまえよ」

「（ッ！ー！）」

いきなり肩に手を置き、拓巳の真意を見抜いた安保部の制服を着た彼は自己紹介を始めた。それを拓巳は画面を見ながら、試験を受けながら、聞く。

「僕の名前は吉野吉事、安保部の隊長さ。そして僕のSA『タクテイクスラスカル』は『物体の観察し、真意を見抜く』が出来る。君

を観察していると、どうも本気でやっているとは思えないな。そう
だろ、見栄崎くん？」

「それで？ 俺に本気を出せと？」

「ああ、そうだ。君の能力はとても希少だ。ぜひ仲間にしたい」

「スカウト、ですか？」

「そうさ。僕ら安保部は能力判定テストで優秀な新入生をスカウト
しているんだ。その中でも僕は君のような捻くれ者のスカウトを担
当している」

「（チツ……、少し露骨に点を落とすすぎたか……ま、最初っから
入部するつもりだったし、好都合か……）へえ、そうなんですか」
拓巳は能力が目覚めてまだ間もないため、うまく微調節が出来ない
のだ。その不振さを見抜かれたのだろう。と、彼・見栄崎拓巳は思
考した。その時、ちょうど試験が終了し、スコアが画面に表示され
た。まあまあな成績だ。しかし拓巳はそれを無視し、吉事の方に向
き直った。

「で、入ってくれるかな？」

「ま、いいですけど」

「そうか。これから宜しく頼む」

そう言っ吉事は手を差し伸べてきた。

「こちらこそ」

差し出された手を拓巳は愛想笑いを浮かべながら握り返した。

「そういえば」

吉事は突然、思い出したかのように呟いた。

「きみの友達で松野浦くんという子がいたね？」

「は、はあ」

「噂に聞くところには結構な能力を持っているそうじゃないか。一
度、会ってみたいんだが……」

「良いですよ。確かあいつは——」

——体育館の近くの会場でテストを受けているはずですよ——と、体
育館の方向に拓巳が指を指そうとした、その時だった。

ドンツ！！ という爆音が拓巳たちの耳を激しく刺激したのだ。
「な、なんなんだ！？」

耳を押さえながら拓巳は叫んだ。

「どうやら事故のようですね。連絡を取ってみましょう」

「龍之介、大丈夫かな……」

「情報が入った。きみの友達の松野浦くんが試験中に事故を起こしたそうだ」

「ほ、本当ですか！？ 俺も行きます！！」

「分かった。付いて来てくれ」

「——という事なんだ」

「へえ、お前…… 安保部に入部できたんだな」

「ああ、試験で手を抜いてるのがバレちゃってな」

「そっか……」

「お話は終わりましたか？」

「は、はい……」

「では付いて来て下さい」

「どこに行くんですか？」

「行けば分かるわ、私の空間移動能力でね……」

龍之介の問いにサヤは静かにそう言い、

「『ミリアドポイント』」

という彼女の能力名を唱えた。

一瞬、龍之介たちは浮遊感を感じ、意識が朦朧とし、視界が霞み、いつの間にか違う場所に居た。どうやら安全保障部の部室のようだ。

「ここは…… 安保部ですか？」

「そうよ」

「松野浦くん、見栄崎くん、歓迎しよう。ようこそ、安全保障部へ」

龍之介の思考が停止する。思わずあぐりと口を開け、呆けたような表情になった彼だが直ぐにその状態から脱却すると吉事に話しかけた。

「え？ え？ 一体、どういう事ですか？」

「どうもこうも無いよ。そのままの意味さ」

「え、でも、俺は重要監視対象として何かしらの処罰が……」

「与えられないよ？ きみは無条件で安全保障部に入ってもらった事になった」

「何ですか？」

「きみのそのSA、『クラッシュクラスター』は物体の爆破能力だったね？ それは希少な能力の一つなんだ」

「それで、俺みたいにいっつに入って貰おうと？」

拓巳が割り込んで言った。吉事はニンマリと笑い、

「Exactly」

と、言った。

「そうですか……」

「じゃあ、そういう訳できみ等は安保部員だ。制服も後で配るよ」

「あ、ありがとうございます」

龍之介は未だに狐につままれたような顔をしていた。そんな彼を軽く無視しつつ、吉事は散らばっていた部員や龍之介たちと同じ配属予定の新生を招集し、フランクな口調でこう言った。

「じゃあ、自己紹介といこうか。お互いの事を知らなければ、今後の活動に支障が出てくるからね。僕の名前は知ってる人も全く知らない人がいるから改めつつて事で紹介させて貰おう。僕は吉野吉事、安保部の隊長さ。能力は『タクティクスラスカル』で『物体の観察し、真意を見抜く』事が出来るよ！！これから宜しく。じゃあ、まずは新生からどうぞ！！」

すると龍之介は一步前に出て、吉事の次に自己紹介をした。

「どうも、松野浦龍之介です。能力は『クラッシュクラスター』。

『装甲に付いている起爆剤の羽を消費して対象を爆破する』チカラ

ですね」

淡々と能力を説明し終えた龍之介が一步下がると、アイツは体育館を爆破した奴じゃないか？　とか、朝の事件の……とか、そういう声がポツポツと聞こえてくる。次に薄い褐色の肌の少女が一步前に出て来た。

「こ、こんにちは！！　私は雨崎琴音つています！　あ、あと苗字は《あめさき》じゃなくて《さめさき》って言うんで間違えないで下さいね！　能力は『ラン・アンド・チェイス』で『対象をどこまでも追跡する』事が出来るんですよ！！」

かなり緊張した感じだったが、無事に自己紹介を終えた彼女・雨崎琴音に龍之介は見覚えがあった。

「きみは……朝、不良に絡まれていた……」

「あ、そうそう！！　あの時は助けてくれてありがとうございました！！」

あの時は勢いで突っ込んでいったため、よく認識できなかった——そのため思い出すのに時間が掛かった——が、今の龍之介はきちんと琴音の事を認識できた。短めのポニーテール、軽く日焼けをしたようなメリハリのある肌、大きくて可愛いキラキラと輝く瞳という風に結構、顔立ちは整っている女の子だった。

琴音が一步下がると、龍之介も拓巳も知っている人物が前に出た。「はじめまして、数野宙助です。好きな事は美小じ……ギャル、いや……ゲームで、能力は『ハイウェイシューズ』。『どんな所でも移動する』事が出来ますね」

平均身長より少し低めのその男子生徒は龍之介や拓巳が小学校の頃に一緒にいた男で、何よりもゲーム、特に美少女ゲームに目が無い奴だった。

「久しぶりだな。宙助」

「よお、松野浦に拓巳！！　久しぶり」

「相変わらず小さいな」

「うつせえ！！」

軽く感動の再会を味わった三人は自己紹介の進行の妨げにならないように直ぐに静かになった。すると拓巳が思い出したかのように「おっと、俺は見栄崎拓巳。能力は『ヴィヴィッドプロフィット』。『視界に入った全ての事柄の未来を予知する』事が出来る。宜しくな」

と、簡単な自己紹介をした。

「じゃあ次は在校生の順番だね」

そう言った吉事の前置き後に龍之介たちより長身で安保部員が着ていた制服をだらしなく着崩し、短く立てた髪の毛が印象的な男子が前に出た。

「俺の名前は金山浩孝。能力は『アクセルスタンピード』。『対象物に加速と減速を与える』事が出来るんだ。加速は素晴らしい。あの素晴らしい世界、それを統治するためだけに俺は減速を使っている。まあ、加速世界が味わいたいのなら俺に話しかけてくれ」

さすが在校生だけあって自己紹介はお手の物だ。浩孝に続き、他の在校生もドンドン自己紹介をしていく。

「僕は普遍川浪不。下の名前は『かわらぶ』でも『かわろうぶ』でもなく『かわらず』、間違えないでね。僕の能力は『瞬間出力限定開放』。『対象物の一部の性能を十分間だけ好きなだけ弱体化したり強化したり出来る』んだよ。便利だろ。テストの時に僕の所に来る生徒は毎年、結構居るね」

そして最後に、

「私はサヤロバーツ。安全保障部の副隊長です。能力は『ミリアドポイント』。『瞬間移動させることが出来ます』。移動の際は私に言っして下さい」

彼女・サヤロバーツが前に出た。勝気な瞳、肩の辺りで切られたショートカット気味の金髪、キリッとした眉、全体的に整った顔立ちとキツチリと着こなした安保部制服が冷徹な指揮官を思わせる。

その事を龍之介は今更ながら再認識した。

「これで自己紹介は終わりだね。じゃあ、松野浦くん、見栄崎くん、

雨崎さん、数野くん。これを差し上げよう」

差し出された紙袋には男物と女物の違いが皆無のすっかり見慣れた安保部制服と革製のカバーに挿入された部員証が入っていた。背広型の軍服のような制服でネクタイは黒、ワイシャツは白、上着とスラックスはフレンチベージュの物で『安全保障部』の黄色いロゴの刺繍が施されていて高級感溢れる質感だ。また付属品として、正面に『Save The School Staff』という黄色のロゴの刺繍が施されたフレンチベージュの野球帽があった。これも制服の一部だろう。

「どうだい？ 気に入ったかい？」

「ええ凄いつすね、これ。へえ、これが安保部の制服かあ」

「気に入って貰えて嬉しいよ。明日からはこの制服で登校してきてください。——あ、そうだ。龍之介くん、きみから没収してた拳銃、あれ今から返すね」

「あ、どうもありがとうございます！！」

吉事から差し出されたホルスターに入った拳銃を受け取り、龍之介は安堵の表情を浮かべた。確認するかのように彼はホルスターから拳銃を引き抜いた。

彼の愛銃、S & W・M39・RMカスタム、通称・スカーレットセントリーはスミス&ウェッソン社のS & W・M39の外装だけを龍之介の好みに改造した物で頑丈な天然木桐材のグリップには目の赤い緑色の竜のマークが刻印されている。またグリップを除くフレームやスライド、ハンマー、トリガー、マガジンなどが緋色に塗装されているのも大きな特徴の一つだ。

しばらく眺めた後、龍之介はスカーレットセントリーをホルスターに入れ、吉事に再度、頭を下げた。

「拳銃と言えば……きみたち、銃器所持免許持ってる？」

「あ、はい持ってます」

「持ってますよ」

「持ってるね」

「松野浦くんはもう持ってるみたいだし、全員持ってるみたいだね。じゃあみんなに支給する小銃なんかはあの部屋のロッカーに入れておくからね」

吉事は部屋の端にあるドアを指差し、

「じゃあ今日のところはここで解散だね」

と、宣言した。安保部員は新たに新入生を各々、帰り支度に取り掛かり始めた。そんな中、龍之介は拓巳と宙助と琴音に声を掛けた。

「おい、一緒に帰らないか？」

「ウホッいい帰宅」

「いいぜ」

「い、いいですよ!!」

三人の了承を得た龍之介は机に置いてあった鞆をヒョイツと持ち上げ、三人と下駄箱の方向に向かって歩き出した。

【第二章 入学試験】（後書き）

結構久しぶりの投稿ですが、それでも全力で書いています！！ 頑張って書くんで、ちよくちよく見ていただけると嬉しいです。

P・S・ヒロインの能力を変更しました。理由は描写が難しそうだったからです。

【第三章 ミッション！！ 琴音と拓巳を助け出せ！！ ～前編～】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。～
今回の一言・「龍之介はフラグを何とか立てようと奮闘しているよ
うだが……まだまだだな」by拓巳～

【第三章 ミッション！！ 琴音と拓巳を助け出せ！！ ～前編～】

龍之介たちはかれこれ二十分も校舎の玄関、下駄箱に留まっていた。琴音を待つたためである。龍之介たちと一旦、玄関まで来た琴音はサヤに、女子部員だけで話し合いがあるという事で部室に連れ戻されたのだ。そのため、龍之介たちは彼女一人を措いて帰るのは精神衛生上良くないので玄関で待ち惚けを食っていた。

「しかし……雨崎さん、遅くね？」

「ああ、遅いな。もう昼の十二時二十分だ。何時になったら終わるんだろう」

「ちよつと様子見に行ってくるか？」

「やめとけよ、ロバーツ先輩は秘密の話し合いだつて言ってたぜ」
さつきからこんな感じで琴音を待っていた三人だが結局、昼の十二時三十分を回ったところで様子を見に行くために雑談しながら部室へと引き返していった。

「拓巳。お前の鞆、なんかゴツイな」

「スーツケースって……何が入ってるんだよ」

「秘密だ、秘密」

「そう言えばさ……」

宙助が龍之介に話題を振った。

「お前のその、スカーレットセントリー？　なんで真っ赤っかなんだ？」

「真っ赤っか言うな。……昔から赤系統の色の物は普通の物の三倍の性能を出すと言われてるんだ。ま、お呪いの効果さ」

「オマジナイ、ねえ」

「何だよ、その目は」

「おい静かにしろ。見えてきたぞ」

そんな他愛も無い雑談をしている内に三人は部室に辿り着いた。部室内は防音処理が施されているため、内部の話を盗み聞き出来ない

ようになっている。

「ふゝむ、どうやら直接……」

「覗き見るしかないようだな」

龍之介が三人を代表してドアノブに手を掛け、数センチほど隙間を開けるようにドアを開いた。その僅か数センチの隙間から三人の右目が室内を覗く。三人の視線は部屋の窓際の仮眠用のベッドに向けられた。

その目に広がっていたものとは、

「あ、もう止めて下さ……いやあ、そんなところ触らないでえ」

「いいじゃないか女同士、減るもんじゃあるまいし」

琴音とサヤがほぼ全裸で絡み合っている——サヤが一方的に琴音に迫っているように見える——光景だった。

龍之介たちは静かに眼を閉じ、ドアの隙間を無くした。

「やっぱり覗き見っていけないよね！ 異次元空間に繋がっちゃったみたいだ」

「そ、そうだよな！！ 誰だよ、覗き見しようなんていった奴！！」

「いやお前だけど、拓巳」

宙助の冷静なツツコミに二人はシーンと静かになった。が、龍之介は直ぐに気を取り直して、

「いやきつとノックをしなかったのが悪かったんだ。だから異次元に繋がってしまった。Are you OK？」

「Ok Ok！！ 龍之介の言う通りだ」

「ちょ、おま」

龍之介は何か言いたそうな宙助を無視し、二、三回ドアをノックして「失礼しまゝす！！」

と、ドアを開けた。

その目に広がったものとは、

「い、いやぁー!! み、見ないでえー!!」

「あら? 松野浦くんじゃない。まだ『琴音ちゃん』とは話が終わってないの。ちよつと待っててね?」

ベッドに座ったサヤの膝の上に強制的に座らされた涙目の琴音がサヤに後ろから胸を揉みくだされている場面だった。

「あ、スイマセン。HONNTOUNI、SUMIMASEN D
ESITA……」

途中から妙な片言染みた言葉を残し、龍之介はドアを閉め、一拍措いて話し始めた。

「現在、我が安保部室は何者かによって占拠されている模様だ。よって我々は内部に捕らわれた雨崎琴音とサヤ〓ロバーツを救出しなければならぬ」

「分かった。突入だな」

「そうだ」

「ちよいちよいちよいちよい!! ちゃんと現実を直視しろ!!」

「現実って、何だ?」

「あの二人が全裸で絡み合ってたことだよ!!」

「おいおい、あの二人が? Gでしな? 百合な? そんな関係だと? 馬鹿言ってんじゃねえよ。そんな訳無いだろ?」

「そうそう。もしそうだとしたら、その幻想をぶち殺します」

「よし準備しろ」

「ちよつと待てよ」

相変わらず龍之介と拓巳は宙助をガン無視して突入の準備をしている。

「よし、配置に着け」

「ああ」

「おい、泣くぞ?」

龍之介と拓巳はドアの両端に立ち、宙助も泣く泣く龍之介の後ろに立った。

「よし。カウントダウン！！ 3……2……1……」
「GO！！ GO！！ GO！！」

ドバンツという音を立て、ドアを蹴破り、龍之介を先頭に三人は室内に躍り出た。龍之介はスカーレットセンチリー、拓巳はスーツケースから取り出したショットガンのモスバーグM500、宙助は黒光りする刃を持つ自作折畳み式ファイティングナイフのコーンブレイドを構え、突入を敢行した。

しかし室内には、

「誰も、居ない！？」

「どういう事だ！！」

「一体どこに……？」

予想外の事態に三人とも慌て出した。銃口やナイフの先端を部屋中に探し回るように向けるが、何の反応も無い。何も見つからなかった。

「くそッ！！ どこへ行ったんだ！？」

イライラしていた拓巳が近くにあったゴミ箱を蹴飛ばし、声を荒立てた。

「お、落ち着け。きつと、ロバーツ先輩の——ゴハッ！！」

「私なら、ここよ」

拓巳を落ち着かせるために宙助が声を掛けようとした瞬間、『ミリアドポイント』で瞬間移動したサヤ——能力でいつの間にか安保部制服を着ている——の背部からの上段回し蹴りが宙助の頭にクリーンヒットした。宙助の手からナイフがすっぽ抜けて、回転し地面に刺さる。それと同時に回し蹴りによって吹っ飛んだ宙助の小柄な体が宙を舞った。

「な！？」

龍之介がスカーレットセンチリーの銃口をサヤに向ける。しかし突如、仲間が吹っ飛んだ衝撃から立ち直り、銃口を彼女に向けるのに僅かな時間を要し、その隙を突かれ、中段前蹴りによって愛銃を廊

下に吹っ飛ばされ、咄嗟に手を押さえた彼は突き返し蹴りによって強制的に地面に伏せられ、容赦の無いサッカーボールキックを食らい、沈黙した。

「クソが！！ ガッデム！！！」

龍之介が攻撃されている内に拓巳が龍之介ごと彼女を吹き飛ばす勢いでショットガンを撃った。が、瞬間移動によって難無く回避され、背後からの後ろ回し蹴りを食らい、手に持ったショットガンごと壁に叩きつけられた。

「一体何なの？ 物騒な連中ね」

拓巳はその一言だけを辛うじて聞き取り、気絶した。

三人が目を覚めたのはそれから暫らく経った時のことだった。何故か後ろ手に縛られ、縄でぐるぐる巻きにされ部室の床に寝かされている三人は腕組みして壁に寄り掛かっているサヤの方を見た。龍之介が騒ぎ出した。

「おい！！ これは一体どういうことだ！！ 説明して貰おうか！！」

「こつちが説明して貰いたいわ。何で突入なんかしたの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ 発狂でもしたの？」

「あんなもん見せられたら発狂したくなるわ！！」

「ああ、あれね。ただのスキンシップよ。ねえ、こ・と・ね・ちゃん」

「！！！」

突然声を掛けられた布団に包まっていた琴音はブルブルと青い顔をして震えだし、

「はい…… ソウデス」

「ね？」

「ね？ じゃねーよ！！ 思いつきりおかしいじゃないか！！」

「ま、それはともかく」

「いや、まだ話は終わってねえよ」

「貴方たちは、うゝんそうねえ……拓巳さんと琴音ちゃん以外は出て行ってもらうわ」

「ちょ、先輩!!」

「じゃあね」

「あ……!!」

一瞬、龍之介と宙助は浮遊感を感じ、意識が朦朧とし、視界が霞み、いつの間にか違う場所に居た。玄関だ。縄は瞬間移動時にどこかに行ったのか、今は体には巻きついていない。

「くっそ、してやられた!!」

「拓巳も拉致られちゃったな……」

「ああ、だがな!! 俺たちはあいつ等を助け出す!! それが俺の生き方だ!!」

「しかしなあ、龍之介。あいつ等はどこに行っちゃったんだ? 先輩のことだ、もう場所を変えてるだろうよ」

「うむ、しかし校舎内からは出てないはずだ。徹底的に探せばどこかに居るはずだ」

「よし、付き合っぜ」

「ああ、頼む」

龍之介と宙助は行動を開始した。早速、最初に探すところを二人で話し合うことにした。

「まずは……保健室だな」

「なんで保健室なんだ? 宙助」

「あの口振りだと、先輩は拓巳と雨崎とエロティックな事をするはずだ。エロティックな事といえば保健室、保健室といえば——」

「——エロティックな事が……成程」

宙助の言葉に龍之介は神妙な顔で頷いた。それぞれサヤの厚意で

鞆やスカーレットセンチリーとコーンブレイドと一緒に瞬間移動されて来た事を確認した二人は安保部部室と同じく校舎一階にある保健室に走っていった。

「たのもー!!」

気合を入れて保健室の引き戸を開けた。しかし室内には誰も居ない。部屋の端に小さな黒いモップのような物があるだけで、

「いらつしやい」

「うひゃあ!!」

突如、モップから聞こえてきた声に龍之介と宙助は自分でも情けないと思うほどの声を上げた。よく見るとそのモップのような物は長い髪のように真っ白なワンピースを着ている。声の高さや感じからモ女子である事が二人にも認識できた。

「な、何だ!? このモップみたいな物は!?!」

「モップみたいな物とは失礼しちやいますね!!」

その『宙助よりも背が低い』その女の子と思われる人型は頭を掻き揚げ、その長髪を頭から外し、床に投げ捨てた。

「!!!!」

驚いて声も出なかった。女の子の黒い長髪は唯のカツラ、ウィッグだった。カツラの被ってあった頭は実は黒いショートボブだった。まだ幼さが残る顔立ちをした女の子は上目遣いで龍之介たちを見てキラキラした純粋な目でこう言った。

「驚いた!? 驚いたでしょ!!」

二人は絶句した。くりくりとした大きな目などの整った顔立ちで上目遣い、保護欲を掻き立てる小柄で幼女体形、正直に言うところもある。これに反応しない男子いないだろう、いや女子でも思わず抱きしめたくなると思う。特に生粋のロリコンである宙助にとってはどストライクであった。

「だああああ好きだああああああああッッッ!!!!!!」

「ひゃー！ な、何ですか！？ いきなり！！」

我慢できなくなった宙助は叫び声を上げ、彼女の胴体にしがみ付き、至福の表情で頬擦りをし始めた。はつきり言ってセクハラである。

「止めんか、このバカチンが」

龍之介がスカートレットセントリーのスライド部を握りしめ、抱きついて彼女から離れない宙助の後頭部に気絶させない位の力でグリッブを叩き付けた。頭を押さえ、地面をのた打ち回る宙助を尻目に龍之介は彼女に声を掛けた。

「大丈夫かい？ えっと……」

「伊豆香です。島月伊豆香」

「伊豆香ちゃん、ね……。ごめんね、うちのバカが変な事しちゃって」

「いや、いいんです。気にしてないんで。あと私は伊豆香ちゃんでは無く伊豆香先生と呼んで下さい！！ 一応この学園の養護教諭をやってるんですから」

「えー！！ マジですか？ っていうか先生は、……失礼ですけど今、何歳なんですか？」

「二十歳ですよ？」

龍之介は驚愕した。パツと見、十歳前後の女兒に見える伊豆香が二十歳でこの学園の養護教諭をやっているという事実は彼を大きく混乱させた。しかし直ぐに冷静になった彼はようやく本題に入った。

「あのつかぬ事をお尋ねしますが、ここに口――」

「サヤちゃんは来てないですよ！！」

突然、口調が慌てたものになり、まだ殆ど話を終えていないのに返事をされた龍之介は彼女を訝しんだ。怪訝そうな目で伊豆香に再度尋ねる。

「……本当ですか？」

「ほ、本当ですよ！！ 疑わないで下さい！！」

このまま続けても平行線のままで、と彼・龍之介は思考し、鞆の中からおやつに食べるはずだったプリンを取り出した。

「これをあげるので本当のことを言って下さい」

「……ちよつと待ってて下さい」

伊豆香は冷蔵庫の方に向かうと中から板チョコレートを取り出し、プリンと交互に見比べ始めた。ははーん、と龍之介の疑念は確証に変わった。

——伊豆香先生は買収されたな。

それが彼の出した結論だった。しばらくして伊豆香が彼らの方向に歩いて来た。

「本当の事を話しましょう」

彼女は龍之介のプリンに再買収された。

「実はあの冷蔵庫の裏に地下室『乙女の間』へ続く扉が隠されているんです……」

「地下室ですか……」

「サヤちゃんは多分、その地下室に居ると思います」

「そうですか。ご協力ありがとうございます」

「……この事はサヤちゃんには黙っていてくださいね？」

「分かってますよ。情報提供者の情報は絶対に漏らしません」

「で、この先貴方たちはどうするんですか？」

「友人を助け出します」

そう言った彼の目には燦る闘志が見え隠れしていた。そんな彼の殊勝な気持ちを察したのか伊豆香はゆっくりと頷いた。

「装備は十分に調えた方がいいと思います」

「ご忠告ありがとうございます」

龍之介は軽く頭を下げるといまだ頭を押さえて痛がっている宙助を連れ、部室の方に走っていった。

再度、部室に辿り着いた龍之介はドアをゆっくりと開け、次いでロッカールームのドアを開けた。吉事の話によるとここにはロッカ

ーの中に支給品が入っている。龍之介はそれに目を付けたのだ。ロツカーの中には人間工学に基づいた設計が行われている個人防衛火器のFN・P90とその予備弾薬、首から下の全身を保護する強靱な繊維であるケブラーやアラミド繊維と無数のナノジヨイントを幾重にも織り込んで作られたウェットスーツのような物が入っていた。説明書によるとこのウェットスーツのような物はNA(NEXT・AROMER)と呼ばれるパワードスーツ——織り込まれたナノジヨイントが皮膚表面の微弱な生体電位信号を読み取り、動作補助をするようだ——の一種であり、新開発された物でCN(CORD・NAME)パンツァードライブという機種らしい。

龍之介と宙助はロツカールームの机の上にFN・P90と予備弾薬を置き、CN・パンツァードライブを着るために制服を一旦脱ぎ、下着の上から装着した。そしてその上から制服を着直して、シャドーボクシングなんかをしてみると普段より数段、動きが軽快かつ鋭いものになっていた。

「これならロバーツ先輩を倒せるかもしれないな」

「ああ、この武装させあれば奴らを救出できる——」

二人は右手にFN・P90をしつかりと持ち、龍之介はスカーレットセントリーを左脇の下のショルダーホルスターに収納し、宙助は折り畳まれたコーンブレイドを左ポケットに入れ、部屋を出た。

彼らが向かうのは保健室の冷蔵庫裏に続く地下室『乙女の間』。

彼らは二人を救出するために動き出した。

【第三章 ミッション!! 琴音と拓巳を助け出せ!! 〰前編〰】(後書き)

頑張って速く書きました。ぜひ感想をいただけると嬉しいです。

【第四章 ミッション！！ 琴音と拓巳を助け出せ！！ 〽後編〽】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〽
今回の一言・「私はただ寂しかっただけなの……さみしかっただけ、
なの」byサヤ〽

【第四章 ミッション！！ 琴音と拓巳を助け出せ！！ ～後編～】

二〇〇八年四月七日、漆黒のNA、CN・パンツァードライブを着込んだ龍之介、宙助の二名は伊豆香の協力で地下室『乙女の間』に侵入する事を成功した。

二人が『乙女の間』に繋がる長い通路『乙女の回廊』に足を踏み入れて最初に感じたこと、それは、

「うっ！！ 結構狭いし、暗いな。ここは」

「ああ、慎重に行こう」

龍之介と宙助は所々錆び付いた鉄で囲まれた質素な通路を歩いていく。どうやらトラップの類の物は無さそうだが油断は出来ない。二人はFN・P90を両手持ちのスタイルに持ち直し、気を引き締めなおした。

『乙女の回廊』はジメジメしていて換気機能が十分じゃないことから、結構昔に造られたことが推測できた。視界が十分に確保できず、二人は慎重に、慎重に足を進めた。

カッーン、カッーン。二人の足音だけが通路内に木霊し、他は静かだ。

「こういう雰囲気って……ホラー物の映画だと俺たち、間違いない死ぬパターンだよな」

「縁起でもない事を言うんじゃないよ！」

「ああ、すまん、すま……声を抑えろ、宙助。何か声が聞こえる」「え？」

急に真剣な顔になった龍之介に促され、宙助は息を殺し、周囲の音に集中した。すると龍之介の言うように何かしらの声が通路に反響して聞こえてきた。

『……次はどっちにしようかしら。そうねえ、……拓巳くんにし

よっ！！」

『や、やめてくれえ！！』

『やめてあげない』

『う、うわあああああああ！！』

『サヤさん！！ もうやめてあげて下さい！！』

『貴女にもしてあげようか？』

『ヒッ！！ ゴ、ゴメンナサイ……』

サヤのサディステイックな声と拓巳と琴音の悲鳴だ。どうやら彼らはこの先の部屋に居るらしい。伊豆香の情報通りだった。

「この先に拓巳たちが居るんだな……」

「気を引き締める。チャンスはこれっきりだ」

そう、『乙女の間』の制圧に失敗し再度、瞬間移動させられたら、拓巳たちは別の場所に送られてしまうからだ。そうなれば情報も無い状態で搜索せねばならない。そうしたら拓巳たちを救出できる確率はほぼゼロになってしまう。

そんな最悪のケースを考えつつも二人は息を殺し、足音を立てぬようにゆっくりと足を進めた。通路を進むに連れ、サディステイックな声と悲鳴はそのポリウムを上げていった。暫らく歩いていると大きな鉄の扉が二人の前に立ちはだかった。耳を澄ましてみるとどうやらその部屋の中から例の声が聞こえているらしかった。

龍之介はドアの左、宙助はドアの右の壁に背中を預け、大きく深呼吸をした。

「じゃあ、行くぞ……。3、2、1……」

「GO！！」

掛け声と共にドアが大きく放たれ、龍之介たちが中に突入してきた。

「手を挙げ——居ない！！ 後ろかッ！！」

龍之介は部屋の中に拓巳と琴音しか居なかった事を素早く察知し、

勢いよく体を屈ませ、サヤの瞬間移動直後の上段回し蹴りを間一髪避けた。そのまま彼は地面を蹴り、前に飛び出し一息つく間に、縄で縛られた拓巳たち――下着姿で拓巳はともかく琴音の目のやり場に困る――の許に辿り着いた。蹴りを繰り返されなかった宙助もそれに続き、到着。彼は拓巳たちを縛っていた縄をコンブレイドで切断し、バラバラにした。

「拓巳！！ 雨崎さん！！ 大丈夫か！？」

「龍之介、グッドタイミングだ！！ 貞操の危機だったぜ！！」

「き、来てくれたんですね！！」

「全く…… 龍之介、ここまで付き合わされたんだ。後でなんか奢れよ」

「分かったよ、宙助。―― ロバーツ先輩、無駄な抵抗は止めて大人しく投降して下さい！！」

片膝を地面に付けた龍之介と宙助は両手に持った個人防衛火器の銃口をサヤに向けた。

「よく私の蹴りを避けたわね…… 賞賛に値するけど、その身体能力はCN・パンツァードライブの性能ね？」

「ええ、よく分かりましたね？」

「だって…… 私も着てるもの」

そう言ったサヤはいきなり、勢いよく、走り出した。瞬間移動をしなかったことから助走をつけた跳び蹴りを放ってくるつもりだ、と彼ら・松野浦龍之介と数野宙助は思考した。

案の定、彼女は龍之介たちの少し手前で大きく跳躍し、ドロップキックを放った。龍之介は左に居た琴音を、宙助は右に居た拓巳をそれぞれの居た方向に庇うように押し倒した。そのお陰でサヤのドロップキックは空振りし、後ろの壁に当たった。

ドゴツ、というおよそ彼女のあの細身な脚から放たれたとは思えない衝撃音が地下室に鳴り響いた。サヤがそのまま壁を蹴り、空中で一回転し、見事に着地を決めた。

「ね？」

「ひゅー、結構使い慣れてますね」

「ええ、伊達に副隊長はやってないわ。……ん、でも貴方たちにだけ銃があるってのは戴けないわね」

こつちも使わせてもらっわ、とサヤは壁に立て掛けられてあった丸みを帯びた小銃を瞬間移動で素早く引き寄せた。

彼女が持っている小銃、名をFN・F2000と言い、同社製のサブマシンガンで龍之介たちが携行しているFN・P90同様、人間工学に基づいた設計がなされている。サウジアラビアやインド、パキスタン、スロベニアなどが採用している最新鋭のアサルトライフルだ。

「おい！！ 俺たちのロッカーにはそんなもん入ってなかったぞ！！」

「しょうがないじゃない。これ、まだ正式採用はされて無い試験運用品なんだもん」

そう言って、声を荒らげる宙助を窘めながらも彼女はゴム弾を放ってきた。ゴム弾が壁に当たり、あちこちに兆弾する中、龍之介は

「拓巳！！ 雨崎さんを連れてここを出ろ！！ 地上で協力者が保護してくれるはずだ！！」

と、拓巳に促しながらFN・P90の引き金を引いて応戦した。宙助もそれに続く。龍之介は久しぶりに拳銃以外の銃器を使った。銃器所持免許のテストは拳銃のみならず様々な銃器を扱うものだが龍之介はそのテスト以来、普通の拳銃しか扱ってこなかったからだ。そのため、龍之介は感覚を確かめるように引き金を引いた。引き続けた。

サヤと龍之介たちの間には机、ロッカーなどの無数の障害物があった。双方ともそれをうまく利用し、相手の体にゴム弾を命中させようと必死になっていた。タカタカタッ！！ と軽快な銃声が地下室に鳴り響く。

「カサカサと逃げ回って……まるでゴキブリみたいね!!」

そう言いながらサヤは龍之介にロツカーを盾にしつつもゴム製の銃弾を浴びせてくる。

「先輩こそ!!」

龍之介はそれを倒れ込むように避け、机の下から彼女の脚に向かって同じく銃撃を浴びせる。が、瞬間移動によって難無く避けられる。倒れ込んだ龍之介を追撃しようとサヤは彼の右に瞬時に移動し、FN・F2000による銃撃を加えようとしたが、

「させねえ!!」

龍之介の左に居た宙助の援護射撃によってそれを阻まれた。彼女は宙助の銃撃を連続でバック転をすることで避けた。着地したサヤは「へえ……なかなかやるわね。伊達に安保部にスカウトされて無いわ」

「先輩……もう止めて下さい……」

「今なら拓巳や雨崎さんも許してくれますよ」

「止めないわ。私は楽しみを邪魔されたから、ね」

そう言った彼女は小銃を床に投げ捨てた。そして銃ではなく拳を構える。

「直接、やり合うわよ。松野浦くん？」

そんなサヤの挑発に龍之介は五秒考え、

「……分かりました」

と、返答した。

「止めとけ、龍之介!! 先輩にゃあ適わない!!」

「決め付けんな。それに……心配すんな。俺には、夢がある。困ってる人を助けるって夢がな」

そう言つと龍之介はFN・P90を宙助に向かって放り投げ、サヤと向き合った。

「直ぐに決めるわ」

「いいですね。後腐れが無さそうだ」

「じゃあ」

「行きますか」

向き合った二人は互いに戦闘態勢に入り、そして、

「ハアッ！！」

先ずサヤが蹴りを決めて来た。龍之介はそれを上手く下に受け流す。彼女が蹴り、彼が避けるか受け流す。ビシッ、パシ、ビシッ、パシ、と小気味のいい音が地下室に響く。しかし、彼女の次第に速度を増していく容赦の無い蹴りのラッシュに彼は少し押され気味になり始めた。音もビシビシッ、パシ、バス、パシ、という風にサヤの蹴りの音だけが凶悪になっていく。

「何よ、避けてばかりで。少しは攻撃をして来なさいよ」

「生憎、女性を殴るのは趣味じゃないんで」

「ふ〜ん、そういう態度？　ならいいわ」

その会話を皮切りに彼女の蹴りのラッシュはシュババババツ、と有り得ない音を出し始めた。その影響か、龍之介も何発か受け流せなかった蹴りがドスッ、ドスッ、と体にヒットし始めている。結構痛そうだ、と彼・数野宙助は思考する。

そこから更に速度を増した蹴りを龍之介は捌き切れなかった。顔、胸、腕、脚、と彼の蹴りの直撃が及ぶ箇所が段々と増えていく。

開始数分で龍之介はボコボコになった。顔は腫れ上がり、体全体がギシギシ、と嫌な音を上げ始め、全身痣だらけで立っているのがやつとのような。サヤは無傷だ。が、龍之介も手だけは傷や痣が少ない。サヤは一旦、蹴るのを止め、龍之介に話し掛けた。

「……貴方、見上げた根性ね。それとただのヘタレかしら？」

「だ……か、ら、言った、で、しょ……。女……性を殴る、の、は、趣味じゃ……な、いって……」

「ふ〜ん、じゃあ楽にしてあげる」

サヤは瞬時に右足をフラフラと今にも倒れそうな龍之介の頭上に上げると同時に、脳天目掛けて打ち下ろそうとした。そう、踵落とし

だ。しかし、その一撃は、届かない。

「この、時を……待って、いた……」

満身創痍だった龍之介が左手でサヤの踵落としを受け止めたのだ。まだ動けたのかッ！！と驚愕するサヤを尻目に龍之介は右手をホルスターに伸ばし、スカーレットセントリーを取り出した。

「あ、貴方……！！」

「ちよつと、眠って下さい……」

龍之介はそう言いつと、引き金を躊躇無く引いた。ドスドスッ、とゴム製の弾丸がサヤの無防備な体に減り込んだ。

「反則、よ……それ……」

「喧嘩や……戦争に、反則も……クソも、ありませんよ。ルールが無いんだ。そういう世界には、ね……」

「それも、そうね……」

サヤはふっ、と静かに笑うとそのまま俯せに倒れ込んだ。龍之介は彼女を力無く受け止めると宙助を呼んだ。龍之介も彼女の蹴りが原因で着込んでおいたCN・パンツァードライブの補助で立っているのがやっと、だ。

「宙助え……先輩を、頼む」

「ああ、いいけどよ……。お前、結構卑怯だな」

宙助は苦い顔をしてそう言った。龍之介もそれに苦笑し、

「人を、助けるのに……手段は選んじやいらねえよ……」
と、息も絶え絶えに返した。

「じゃあ、行くか」

「ああ……」

宙助はサヤに肩を貸しながら歩き始めた。龍之介もそれに続き、フラフラ、ヨタヨタ、とゆっくり歩き始めた。

こうして『乙女の間制圧戦』は幕を閉じた。

二人は先に脱出した拓巳たちの後、地上まで無事脱出できた。宙助は保健室のベッドにサヤをゆつくりと寝かし、布団を掛けた。伊豆香によって顔に消炎剤を貼って貰った龍之介は、よっこいしょういち、と近くにあった椅子に適当に座った。既に伊豆香の取り計らいで服を着ている二人は龍之介と宙助に話し掛けた。

「おい、龍之介。大丈夫か？」

「あ、ああ……、この程度、なんとも、無いさ……」

「本当に、ありがとうございました……」

「なあに、俺たちが勝手にやった事だから……」

「宙助。お前も付き添い、ありがとな」

「どういたしまして」

「さて、と……」

龍之介は全員が落ち着いたのを確認すると一拍措き、伊豆香に話し掛けた。

「伊豆香先生。どうしてサヤさんはあんな事をしたんですか？」

「そ、それは……」

「お願いします」

「実はサヤちゃんには親がいないんです」

「！」

龍之介は自身にも共通するところがあり、少しはっ、とした顔をした。

「サヤちゃんは、寂しかったんだと思います……。子供の頃、遊んでくれる人が、触れ合ってくれる人が、いなかったんですよ。彼女は……」

龍之介たちはまだベッドの上で眠っているサヤを見た。

「この事は忘れてくれとはいいいません。でも、彼女を許して欲しいんです！！」

「僕は……いいですけど……」

と、龍之介は拓巳と琴音をチラツ、と見た。

「お、俺も気にしてないッス……！ ……それに少し気持ち良かったし……」

「わ、私もです……！ ……あんなこと初めてでしたけど……」

二人は後半の言葉を何やら濁していたが、許しているという意思は伊豆香に伝わったようだ。伊豆香はパア、と明るい笑顔をして、

「ほ、本当ですか……？ ありがとうございます……！」

と、喜んだ。と、そこでサヤが目を覚ました。まだお腹の辺りを痛そうに押さえている。

「う、う……？」

「あ、サヤちゃん……！ 起きたんですか？」

「え、ええ……。あ、貴方たち……えっと……その……」

「いいですよ、もう気にしてません」

「私も、もう大丈夫ですよ」

「そ、そう？ ごめんね、やり過ぎちゃった……」

サヤは申し訳無さそうに言った。特にボコボコにってしまった龍之介にはその後、もう一度、深々と頭を下げた。

「さてと、帰りますか」

龍之介の声に全員は頷いた。伊豆香ももうやる事が無いので帰宅するそうだ。既に時刻は昼の一時を回っていた。

【第四章 ミッション！！ 琴音と拓巳を助け出せ！！ ～後編～】（後書き）

こんにちは、って言うよりかはこんばんわですな。

順調に投下しております。感想待ってます

P・S・ヒロイン・琴音の能力を変えました。理由は描写の難しさです。

【第五章 戦いの後の昼飯】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「背が小さいって言うな!!」 by 宙助〉

【第五章 戦いの後の昼飯】

龍之介たちは部室に鍵を掛け、玄関に向かって歩いていった。宙助はNAを脱いだのだが龍之介はまだフラフラだったので着用したまま帰宅することになった。もう彼ら以外の生徒は下校してしまっただのか、静かな校舎にはコツコツ、という彼らの上履きがタイルを蹴る音とウイン、ウイン、という龍之介のNAのナノジョイントの駆動音だけが響いている。

玄関まで歩くと何やらソワソワと何やら落ち着かない女の子が視界に入ってきた。龍之介、拓巳、宙助はその女の子に見覚えがあった。

拓巳の妹、見栄崎かぼす。それが彼女の名前だ。かぼすは拓巳の姿を見受けると輝く笑顔を浮かべて走って抱き付いてきた。全体的にスリムで活発そうな体型をしている彼女は漆黒の髪を腰まで届くツインテールに纏め、アーモンド型の円らな瞳をし、頬を薄い紅に染め、私立城門高校予備生の制服を着ている。

「お兄い！！ どこ行ってたの？ 心配したよ？」

「ああ、すまんすまん。少し部活でな」

「入学早々部活？」

「ああ、スカウトされちゃった」

「えへへ、さすがお兄いだね！！」

「やあ、かぼすちゃん。久しぶり」

「あ、松野浦さん。お久しぶりで——って、どうしたんですか？ その顔」

かぼすは龍之介の顔——最新の湿布型消炎剤を貼って貰い、大分腫れは引いたがまだ少し腫れているし消炎剤が頬にデカデカと貼っている——を見て心配そうに言った。その問いに龍之介は当たり障り

の無い言い訳を即座に思い付き、口に出した。

「あ、ああ。ちょっと階段で転んじまってな……」

「大丈夫ですか？」

「ああ、これ位何とも無いさ」

「そうですか、お大事にして下さいね!!」

「久しぶり。随分背が伸びたね、かばすちゃん」

「あ、数野さん。お久しぶりです。かばすは絶賛成長中ですよ」

「はは、そうか」

「ところで」

「「「ん?」」」

「後ろの三人はドナタデスカ？」

と、かばすは拓巳に抱き付きつつも後ろに居た、琴音、サヤ、伊豆香を指差した。龍之介他男子勢は皆一様にそういえば、という顔をして

「ああ、彼女たちは僕らの同僚と擁護教諭なんだよ？」

と、龍之介が、

「こちらの金髪のショートヘアをした人が俺たちをスカウトしてくれたサヤ」ロバーツ先輩、日焼けしたような肌のポニーテールの人が俺たちの同僚で雨崎琴音さん、でこっちの小っこいのが月島伊豆香先生だよ」

と、彼女らをそれぞれ指差しながら拓巳が、

「みんな気の良い美人さんさ」

と、最後に宙助が、という順番で口々に言った。それに対しかばすは龍之介たちに気付かれないほどの刹那に、濁ったような光を失ったような、そんな瞳をして

「フーン、ソウナンデスカ……」

といい、拓巳の前に出て

「兄を宜しく願いますね」

と、打って変わって朗らかな口調で彼女らに向かって言った。サヤたちも、宜しくね、とか、こんにちは、とかいう風に口々に挨拶した。龍之介たちはそれを見て、どうやら彼女らは自分たちが心配するまでも無く上手くやっていけそうだ、と思った。

「で、この後どうするんですか？」

「普通に帰宅って言うのも味気無いですね……そうだ！！ みんなで昼ご飯を食べに行きませんか！？」

「それはいいね。どうしますか？」

琴音の提案と龍之介の問いに拓巳たちは二つ返事で了承した。もう昼の一時なので皆、空腹だったんだろう。早速、どこに行くか話し合い始めた。ラーメンや寿司、カレーライスなどの提案がなされたが、結局、全ての料理が注文できるのであるうファミレスに決まった。

「ファミレスか、行ったこと無いなあ」

「龍之介はファミレス、初めてなのか？」

「ああ、まあな」

「じゃあいい体験になると思うぜ」

「そうだな」

ファミレスの代金は伊豆香の奢りという事で龍之介たちは少し遅めの昼食に出掛けた。

「あ、相席ですか……？」

「すみません。本日はほぼ満席なんですよ」

「そうですか……」

龍之介たちが訪れた《ファミレス・ミラノコンツェルン》はこの席も家族やその他団体でほぼ埋め尽くされており、相席によってどこにか全員が同じ場所で食べられる位、繁盛していた。

しかし伊豆香は兎も角、龍之介他食べ盛りな十代は既に空腹が限界に達しているため、相席でもいいからとにかく飯にありつきたい、

という主張で多数決によりミラノコンツェルンでの食事となった。
「こちらです」

と、案内されたボックス席には一人の少年が座ってカレーライスを食べていた。少年の短く切られた髪は見事な金髪で目は青い。まるでドイツ人青年のような整った顔立ちをした彼は白いワイシャツと紺色のスラックスを着用しており、その傍の席には茶色のステンカラーコートが丁寧に畳んで置いてあり、その上に口が折畳まれた紙袋——よくファストフード店やパン屋で見られる小分け用の薄茶色の物で『A i m C u l p r i t e』というロゴマークが金色で印刷されている——と茶色いソフト帽がコートの上に乗せてあった。

「どうも、相席させて頂く松野浦龍之介です」

「どうもこんにちは。僕は田辺吉尾と言います」

宜しく、と笑顔で食事を一時中断した吉尾と握手をした龍之介は拓巳たちを簡単に紹介した。礼儀正しい人物なのか紹介する度に吉尾は、宜しく、宜しく、と拓巳たちに握手を求め、彼らもそれを拒まなかった。

そうしてそのボックス席には最初から居た吉尾、龍之介、琴音、かばす、拓巳、サヤ、宙助、伊豆香という順番でテーブルを囲むように全員が座った。

しばらくして店員が注文を聞きに来た。龍之介は豚骨ラーメン、拓巳は焼き魚定食、琴音はオムライス、かばすは拓巳と同じ焼き魚定食、サヤも焼き魚定食、宙助と伊豆香は吉尾以外のメンバーの意向——本人たちは不満だったが——によってお子様ランチをそれぞれ頼んだ。

料理が来るまでの時間、龍之介たちは会話を弾ませていた。

「へえ、田辺さんって生粋の日本人なんですか」

「ええ。ずっと昔のひいひいお爺さんがゲルマン系の血を持っていただけで、両親も江戸っ子ですよ。ここの私立城門高校に通わせて

貰っています」

「僕たちと一緒にじゃないですか！　という事はS A能力者ですか？」

「ええ、まあ。でも能力は弱い方でして」

「そうなんですか」

「はい。小等科の頃から通っているんですが、なかなか成果が出なくて」

「能力は何時、伸びるか分からないんです。まだまだこれからですよ」

「ありがとうございます、月島先生。そう言って貰えると嬉しいですよ」

そんな風に雑談していると料理が運ばれてきた。料理を食べながらも龍之介たちは雑談を続けていた。

「拓巳くん、あゝん」

「せ、先輩！？　なんですか！？」

サヤが焼き魚の身を箸で摘んで拓巳の眼前に持って来ていた。

「お兄い！！　あゝん」

かばすが箸で摘んだ白米を拓巳の眼前に持って来ていた。

「か、かばすまで……　一体どうしたんだ？」

「焼き魚を食べさせてあげようと思って」

「ご飯をお兄いに食べてもらおうと思って」

「いや、俺、そんなの恥ずかし——」

「拓巳、あゝん」

ジャキッ！！　という金属音と共に拓巳の眼前には銃口が向けられている。

「龍之介え！！　テメエ銃口向けて何言ってやがる！！」

「いやゴム弾をご馳走しようと思って」

「テメエは百パーセント嫌がらせだな！！」

そんなこんなで食事会もたけなわ。彼らの話題は吉尾の紙袋の方に

いった。

「その紙袋には何が入ってるんですか？」

「あ、これですか？ これはですね……」

吉尾は紙袋の中をゴソゴソと漁った。そして暫らく中身を漁った後、中からミニチュアフィギュアを何体か取り出してテーブルの上に置いた。スケールは十六分の一、兵士フィギュアによく使われる縮尺だ。どれもこれもいい出来だ。見たことも無いデザインなのでオリジナルだろう。

「よく出来てますねえ」

「でしょう？ 私、模型部に入ってますね。こういうのをよく作るんですよ」

「うわっ！？ 動くんですか、これ？」

「はい、苦労しましたよ。そのスケールでフル可動なんて」

「へえ……凄いですねえ」

「しかもこれ、結構頑丈に出来てるんですよ」

龍之介は吉尾の熱心な説明を受けながら、フィギュアの一つ——「マックス・コマンド」という名前の、CN・パンツァードライブを着込んだ兵士——を動かして遊んでいた。

「ホントに頑丈だなあ」

「ええ、耐久性と可動部が一番苦労したところですから」

「へえ」

それから龍之介たちは一頻り会話をした後、ファミレスを出た。吉尾と別れた龍之介たちは更に散り散りになって自らの自宅へと帰って行った。

サヤを除いて。

「あの〜先輩？ なんで僕たちの家まで付いて来ちゃったんですか？」

サヤは解散してからも拓巳とかぼすの後に付いて来てしまっていた

のだ。拓巳が、なぜ付いて来たか、を問うと、サヤは今にも泣き出しそうな顔で、

「私……一人暮らしなの……」

「……」

「でね……今日、拓巳くんたちと過ごしてたら、なんだか……寂しくなっちゃって……それで、一緒に住みたいなって……」

「し、しかしですねえ」

「そうだよ!! この家にはかばすとお兄いしか住んでないんだよ!! あまり寂しさとか変わんないだろうし、家計も火の車になっちゃうの!!」

かばすはどうか、サヤを家に入れないように必死に反論してくる。「うん、迷惑なのは分かってる……分かってるけど……」

いつも強気なサヤはその白魚のような綺麗な両手で顔を覆い、泣き出してしまった。どうやら今日、拓巳

たちと触れ合って、人の温かみを思い出してしまい、何年も塞き止めていた感情を抑えきれなくなったようだ。拓巳はこのまま彼女を放って置くのは精神衛生上良くないと判断し、優しい笑みを浮かべてサヤに手を差し伸べた。

「先輩、泣かないで下さい。分かりました、一緒に暮らしましょう」「いいの……?」

サヤは拓巳の言葉を聞き、顔を上げた。

「はい」

「お、お兄い?」

「なんとかするさ」

「お、お兄いがそう言うんだったら私も頑張る!!」

「おお、そうか。頑張れよ」

「うんっ!! ……ソレニ、アノ女八目ノ届ク所ニ置イテオカナイトイケナイシネ……」

「うん? 何か言ったか?」

「ううん!! 何でも無いよ、お兄い」

二人はサヤを新しい家族として向かえた。拓巳のアルバイトもその量と質を増していくだろう。そして、かぼすは……。

【第五章 戦いの後の昼飯】（後書き）

試験期間中なので投稿が遅れました。感想待っています。

【第六章 保安侍役】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「松野浦さん、凄い怪我だったけど大丈夫かな？」 b
y 琴音」

【第六章 保安侍役】

翌朝、龍之介は何事も無かったかのように登校していた。勿論、CN・パンツァードライヴを着込んだままだ。まだ体が痛むのか、彼は肩や脇腹を擦りながら歩いていて、そこに琴音が後ろから走ってやって来た。

「おーい、松野浦さん！！」

「あ、おはようございます。雨崎さん」

「えへへ。名前、ちゃんと間違えなくてくれましたね」

「ええ、まあ」

「まだ痛むんですか？」

「はい、でも大丈夫ですよ」

「無茶しないで下さいね！！」

「分かりました」

——いいなあ、こういう雰囲気。

と、暫らく二人っきりの時間を満喫したかった龍之介だが拓巳と宙助が二人の間に割り込んで来たため、強制的にいい雰囲気吹き飛ばしてしまった。

「よお、龍之介え。まだ痛えかあ！？」

「痛えから背中バンバン叩くなよ、拓巳」

「ははは。ごめん、ごめん」

「おはようございます！！ 見栄崎さん」

「おはよー、雨崎さん！！」

「おはよう」

「よ、宙助。成長期はまだですか？」

「うつせえ！！ 背の事は言っない！！」

怒った宙助はからかった龍之介の脛を思いつき蹴った。

「いつてええ！！ 何しやがんだ、宙助！！」

「うるせえ！！」

「んだとオー！！」

「二人とも！！ 朝から喧嘩しないで下さい！！」

「大丈夫です、ちよつとじゃれ合ってるだけですから」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、ホント」

「なら良いんですけど……」

「さあ宙助！！ 第二ラウンドだ！！」

「望むところだ！！」

「やっぱり喧嘩じゃないですかあー！！」

ボコスカ、ボコスカと二人は軽く殴り合った。

——ま、賑やかなのもいっか。

琴音に仲裁をされつつも龍之介はそう思った。

こうして龍之介たちは春の暖かい陽気に包まれながら、登校した。

私立城門学園の授業に筆記用具やノート、教科書ですら必要無い。ノートパソコンによって授業を進めるからだ。『この小等科では読み書きよりも先ずパソコンの使い方を習う』という皮肉が有名になるくらい、この学校は一人一台ノートパソコン配備の徹底をしていた。また生徒は大した荷物も無く登校でき、忘れ物も少なくなるというメリットもあり、生徒には好評だった。

そのため龍之介たちは先ず、校門でB4サイズのノートパソコンを配布された。このノートパソコンはJLC（Jyounonn・Laptop・Computer）と呼ばれる城門学園内で開発さ

れた機種で無線LANは勿論、最高性能CPUを搭載し、カーボンファイバー素材製で携帯性と堅牢性、バッテリーの持続時間が重視され、耐水、圧、熱、衝撃、振動、防塵性能も備わっており、学園外部の軍、警察、消防にその採用が計画されている高品質な学校指定品であった。色も自由に選び、オーダーメイドで追加機能を付属してくれる生徒もいた。やはり高品質でずっと使う物となると細部まで気になるらしく龍之介もその一人であった。

彼は色——彼は指定色を本体はライムグリーンでキーボードは黒にした——は勿論、キーボードの『音』にまで拘った。彼はキーボードの音をノートパソコンや最近のデスクトップパソコンのような静音ではなくメカニカルスイッチのようなキー音の軽快さや入力の実感、そして独特の打鍵感を獲得したタイプの物にした。無論、リレーやスイッチの接点が切り替わった際に、微細で非常に速い機械的振動によって、電気信号が断続を繰り返す現象『チャタリング』は起きない高級品である。

龍之介はその特注品であるJLC・RC（RYUNOSUKE・COSTOM）を受け取り、掲示板に貼ってあるクラス分け表を見に行った。

「えっと……何組だ……？」

龍之介の目が左右上下に動く。数秒探した後、龍之介は自分の名前を発見した。次に拓巳たちの名前を探した。これは直ぐに見つけた。何故なら彼らは同じクラスに所属させられていたからだ。

「あいつらと一緒にか……うん、よかったよかった」

龍之介は独り言を言うつと玄関で上履きに履き替え、自分の教室に向かった。綺麗に掃除された通路や壁は新築校舎を思わせ、風紀の良さそうな学校だな、と彼・松野浦龍之介は思考した。ようやく教室に着き、荷物を置いた龍之介は早速、駄弁っている拓巳たちの許に行った。拓巳たちは龍之介の知らない少女と話している途中だった。龍之介もその中に混じる。

「おう、拓巳！！ 雨崎さん！！ 宙助！！ 同じクラスだなあ。」

で、その子どもなんだ？」

「よう龍之介。この子は——」

「ボクは松崎刃先っていうんだ。宜しく」

刃先と名乗ったその女の子は茶髪——本人曰く、天然モノらしい——をマニッシュショートカットにしており、可愛いと言えばそうなのだがどちらかというと格好良いと評した方が良さそうな少年然とした凛々しい顔立ちをしていた。そんな外見な上、スリムで全体的に起伏の少ない身体つきをしているため遠目から見れば男子と間違えてしまいそうだ。

「宜しく、俺は松野浦龍之介っていう名前だ」

「松野浦くんか、改めて宜しく」

「こちらこそ。クラスメイトとして、何よりも友人として……。さて、何の話をしていたんだ？」

「ああ、一番美味しいコーヒーは何なんだろうなって話をしていたんだ」

「別に普段はインスタントで十分だろうって言ってるだろ」

「宙助は分かってねえなあ。俺は豆に拘るぜ」

「ブルーマウンテンとか？ ボクはマンデリンかなあ」

「へえ、俺はグアマテラだけだな。龍之介は？」

「俺はコロンビアだけだなあ。金ねえし」

「わ、私はカロシ・トラジャとか好きだなあ。酸味は苦手なんだ」

「へえ。皆、人それぞれだな」

「お、授業が始まるぞ。席に戻ろうぜ」

龍之介たちは雑談を中止してそれぞれの席に着いた。生徒は皆、ノートパソコンを起動させ始めた。龍之介もそれに倣う。ぴろくん、という起動音と共に城門学園開発部製のOSであるJOUMONSのロゴが画面に映し出された。そして直ぐにロゴが消え、『ようこそ、JOUMONSへ』という文字が映し出されると次に壁紙

である大空がパツと画面に広がった。最初からある程度、基本的なソフトがインストールされているのか壁紙の左端には幾つかのアイコンが並んでいた。

全員がパソコンを起動させたのを確認した担任の先生・佐藤広重は教科書データの入ったCDを配布していった。生徒は早速、各々自分のファイルを作成し、その中にCDの中身を移して保存していく。中にはそのやり方がよく分からず、他の生徒や先生に操作方法を教えて貰っている生徒――主に龍之介の隣の席に座っていた琴音が龍之介に何度も聞いていた――も居たが、そういった生徒も無事、教科書データを受け取り、自習の時間になったため、JYOUNMONS・Wordというソフトを使い、テキストデータを作成し、ノートを作っている生徒やファイルをキチンと整理し始める生徒やパソコンの性能を見るため、色々操作し始める生徒も出始めた。

その中でも龍之介はノートも作り終え、ファイルも整理してしまつたため、暇になり拓巳たちにメールアドレスを使ったチャット型メールソフト、JYOUNMONS・Chat・Mailを起動するように促し、チャットにログインし、ルームを作成し、タイトルを設定し、手始めにメッセージを送った。

「【コーヒー】みんなで話そう美味しい珈琲雑談室【雑談】」

『from/名無しのジョン/暇だからさっきの雑談の続きしようぜ』

『from/シモ・ネイタ/把握。で、お前はどんなコーヒーの淹れ方をするんだ？ やっぱドリップ？』

『from/テンパリ/こんにちは。私はペーパードリップですねえ』

『from/シモ・ネイタ/テンパリさんはペーパードリップですか。一般的な淹れ方ですよ（笑）』

『from/名無しのジョン/俺もペーパードリップですかね』

『from/テンパリ/やっぱあの淹れ方は手順さえ守れば誰でも

も一定水準のコーヒーが淹れられるってところが良いですよね」

『from/シモ・ネイタ/俺はエスプレッソマシンで淹れてるなあ』

『from/名無しのジョン/イタリアンwwwwwwwww』

『from/シモ・ネイタ/うつせwwwwwwwww』

『from/高周波ブレード/どうも、お邪魔するね。色々な意見が出ているんだけどボクはネルドリップ一択だ』

『from/チビって言うな/今北産業。俺もペーパードリップかな』

『from/名無しのジョン/もう、議題知ってんじゃん。今北産業の意味が無いwww』

龍之介たちがそんな風にチャットをしていると龍之介、琴音、拓巳、宙助は広重に呼び出された。

「何でしょうか？」

「安全保障部の召集だそうだ。この後は大した授業も無いし行って良いぞ」

「……分かりました」「……」

龍之介たちは何の召集だろう？　と思いつながら安保部部室に向かった。

部屋にはニコニコと笑みを浮かべている吉事とシリアスな表情をしているサヤが居た。龍之介たちは椅子に座っている彼らに向き合うようにして立ち、用件を聞いた。

「何のために僕らが？」

「貴方たちを呼び出したのは他でもない、『保安侍役』を決めるためよ」

「保安侍役？」

「うん、保安侍役とは所属隊員の学年別に設けられる特殊隊員の事

を指すんだ。役職名通り、その隊員には刀が渡される」

「刀が……」

「それで君たち一年生隊員の中でもその役職を冠する者を決めて欲しい」

「ど、どうする？」

「うーん、誰にするかなあ？」

「刀って事は格闘戦が出来る奴がいいよな」

「この中で格闘戦が一番しつくり来るのは……」

「……龍之介？」

拓巳たち三人とサヤたち二人の視線が龍之介一人に向けられた。そして彼らは何やら納得した表情を浮かべ、

「決まったようだな」

「お、俺か？」

「ああ、頼む」

「早速、刀の製作を開発部に依頼する。松野浦くんはその間、免許習得のため基本的な剣技を頭にインプットして貰う。こいつでね」
吉事はヘッドギアのような物を取り出した。

「これはインプットマシン。そのまんまの装置だ。脳にイメージをインプットして忘れさせない。ほら、被ってみてくれ」

龍之介は吉事に言われるままにインプットマシンを被って仮眠用のベッドに横になった。すると突如として強烈な眠気が彼を襲った。

龍之介は自分が眠っていくのを自覚しながら瞼を閉じた。

龍之介が目を覚ますと辺りは夕暮れ色に染まっていた。彼の頭に一体、何時間眠っていたんだ？ という疑問が浮かんだ。体が痺れて上手く動かない。寝過ごした日曜日の昼下がりに訪れるものに良

く似た感覚を覚えながら彼はゆつくりとベッドから這い上がった。

「おや、起きたようだね。どうだい気分は？」

傍で座って本——『モテる男の運動力学』という題名の本だ——を読んでいた吉事が龍之介に話し掛けた。

「最悪ですね……何ですか、この宙ぶらりん状態」

「ま、最初はそんなものさ。あ、あとこれ」

龍之介は吉事から差し出されたカードを受け取ってまじまじと眺めた。運転免許証のようなカードでプラスチック製だ。彼は自分の名前と何時撮られたかも忘れた真面目な表情をした自分の写真がプリントされた刀剣類所持免許というカードと吉事を数回見比べ、こう言った。

「なんすか、これ？」

「見ての通り、刀などの刃物類を所持するのに必要な免許だよ。数野くんが持っていたはずだよ？ 知らないかい？」

「あ、あゝあゝ」

龍之介は以前そんなカードを宙助から見せられたなあゝ、と思い出した。

「それはしつかり持っておきたまえ」

「はい、分かりました」

龍之介は生徒手帳に免許を入れると、こう続けた。

「で、刀はどこなんですか？」

「ああ、それならここだよ」

吉事は細長い布包みを取り出した。龍之介はその風呂敷をゆつくりと開封した。

中には一振りの日本刀が納められていた。刃長は概ね二尺、つまり約六十センチで反りが強く長大な業物であるため、その分類は太刀と思われる。吉事曰く、名を陣竜影子宗太郎というらしい。黒い鍔は丸く、刀の号である『陣竜影子宗太郎』の文字が金字で刻印された鞘は漆黒で光沢を出しており、柄頭には紐のようなものが付い

ており、それには小さな木製の竜の頭が付いていた。刃文はゆつたりとした大波のように見える、のたれだ。また最近造られた全ての刀剣類にあるとされている斥力発生器が柄に内蔵されており、刃に薄い衝撃膜——対象を切り付けた際、対象を弾き飛ばしてくれる膜の事だ——を貼ることによって殺傷、非殺傷モードを切り替えることが出来るらしい。

龍之介はその刀を抜き、手に取って眺め、ふう、と一息吐いた。

「かつこいいですね、これ。結構重いですし」

「ああ、それがきみの愛刀であり、相棒になるわけだ。大事にしたまえ」

「は、はい」

龍之介はベルトに鞘をしっかりと括り付け、抜いていた刀を鞘にゆつくりと戻した。

「結構、様になってるじゃないか」

「ありがとうございます」

龍之介は吉事に一礼した。

【第六章 保安侍役】（後書き）

完全に復帰いたしました。感想待ってます。

【第七章 自称特殊部隊FLASH・SOUND創設】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「FLASH・SOUND、か……ふっ、面白そうだ」
by代雲ゝ

【第七章 自称特殊部隊FLASH・SOUND創設】

龍之介は拓巳たちが部屋に来るまで暇だったので部室地下にある部屋で刀を振るっていた。彼は吉事に言われた通りに自分の脳内に記録されたイメージを元にただひたすらに、がむしゃらに腕を振った。彼が得物を振るうたびにフウン、ビュン、ビュツ、シャツと刀身が風を切る音が室内に鳴った。縦に振り下ろし、横に薙ぎ、斜め上に切り上げ、斜め下に切り下げ、前に突く。この一連の動作を彼は前後左右、縦横無尽に室内を飛び回りながら行った。一通り振り終わった後、龍之介は汗を腕で拭い、陣竜影子宗太郎を鞘に収め、首にタオルを巻いた状態で部屋から出た。既に部室には全員揃っていた。

「あ、松野浦さん。練習は終わっただんですか？」

「ええ、まあ」

「じゃあ松野浦くんも来た事だし定例の会議を始めようか」

龍之介は席に着き、サヤがホワイトボードの前に立って折りたたみ式の指示棒を引き伸ばし、皆の注目を集めるためにホワイトボードをピシピシと叩いた。先ず彼女は学園の地図を指示棒で指した。

「ではこれから主な部活動内容であるパトロールについて説明するわ。松野浦くんたち、一年生はここ」

サヤは大きな中庭を指示棒で指した。中庭は食堂、講堂、自習室、校舎の入り口が面している大きな広場で昼休みはここで昼飯を食べる生徒が多いと言われている人気のスポットである。

「中庭を中心にパトロールしてもらっわ。私たち、上級生にはこれから配るインカムで連絡が取れるわ。もしもの時は迷わず連絡しなさい。周波数は146.7よ。別エリアを警備中の私たちがすぐさま飛んで行くわ」

「分かりました」

龍之介たち新入生たちでも、ここ城門学園ではスピリットアカレイドが徒党を組み、悪さを働いているという噂を聞いているため、警備対象が何であるかは、言うまでも無く分かってしまう。説明は不要だろう。

吉事は小型の青色を基調としたカラーリングの機械を龍之介たちに配った。その機械は骨伝導式のヘッドセットで龍之介たちはそれを耳に装着した。

「周波数は側面のダイヤルで調節できるから。それで私たちや仲間と連絡を取って。君たちの周波数はインカムの側面に書かれてるから」

「はい」

「じゃあ早速行つて来て貰おうか。百聞は一見に如かず。実際に体験して貰った方が良い。じゃ、ロバーツくん。転送を」

「はい、隊長」

龍之介たちはその声を聞いた後、浮遊感を感じ、意識が朦朧とし、視界が霞み、いつの間にか違う場所に居た。先程、ブリーフィングで言っていた中庭だ。龍之介たちはいつの間にか制服の上、主に肩肘、手の甲、太股、膝、脛にプロテクターがバンドできつちりと装着されている。その手にはFN・P90が握らされていた。瞬間移動による芸当だろう。

「装備もいつの間にか転送されてる……準備の良い人たちだ」

「全くだ。今回の演習で俺たち新入生の戦闘データを取るつもりなのか」

「多分そうだろう。データ収集にはもってこいだからな。これで俺たちの実力を測るんだろう」

「じゃ、じゃあそろそろパトロールを始めよう」

「そうしようか。雨崎さん」

「しかしその前に決めることがあるだろ。前衛後衛とかのポジションとかリーダーとか」

「ああ、折角の実験だしさ。俺たちのチーム名も決めようか。それ

つばいの」

「そうだなあ……うん」

「フェンリルなんてどう——」

「特殊部隊、FLASH・SOUNDなんてのはどうだ？」

拓巳の中二臭い提案に割り込むようにして龍之介が提案した。

「閃光音、か……」

と、拓巳は自分の案が無言の却下を受けた事を不満に思いながら和訳を口にした。

「ああ、優秀そうだろう？」

「良さそうですね！！ あ、私、部隊のマークとか刺繍してきましようか？ 裁縫は得意なんですよ——」

「あ、マークデザイン込みでカッコイイのをお願いします」

「じゃあ、次は周波数の確認だ。俺は……146・9だ」

と、拓巳。

「私は146・3ですね」

と、琴音。

「俺は146・5だ」

と、龍之介。

「俺は……あれ、どこだ？」

「ここ、ここ」

「あ、そこか。……145・8だな」

と、龍之介に指摘されながらも宙助。こうして四人は各々の周波数を確認した。これで何時でも連絡が取れるようになった。

「よし、次はポジションだ」

「ま、保安侍役の俺は前衛だろうな」

「じゃあ俺は後衛で……」

コソコソと後ろに回る宙助。しかしそんな彼の挙動を拓巳は見逃さなかった。彼は宙助の肩をグワシッと掴み、

「宙助、お前は前衛だ」

「え！！ 何だよ」

「お前のその能力は実は前衛向きだったりするからだ」

「知らねえよ！！」

「それにお前は小柄だから機動力も高い。どう見ても前衛向きだ」

「今、サラッとチビだって言っただろ！！」

「褒めてるんだぞ？」

「ぜってー貶してただろうが！！」

「ま、とりあえず宙助は前衛ってことで」

「うがー！！」

宙助が奇怪な叫び声を上げていたが三人は見事にそれをスルーし、
琴音と拓巳のポジションについて相談し始めた。

「雨崎さんはどこがいい？」

「私の能力は戦闘向きではないので後衛でお願いします」

「OK。じゃあ拓巳は？」

「俺も後衛だな。俺の能力は近接には向いてない。援護射撃や狙撃
でお前ら二人を援護する。作戦指揮も俺がやった方が、都合が良い
だろう」

「じゃあ拓巳がこのFLASH・SOUNDの隊長だな。じゃあ俺
は前衛で切り込み副隊長をやらせて貰おう」

「うん、バランスの良さそうな振り分けですね」

「よし！！ じゃあ早速パトロールを開始しよう」

「ああ。おい、宙助！！ 何時まで拗ねてんだ？ 置いてくぞ」

「待ってくれよー！！」

特殊部隊FLASH・SOUND創設の瞬間である。

龍之介たちはとりあえず、中庭を練り歩く事にした。既に下校時
刻を過ぎているので夕日に染まった中庭に人通日も疎らだ。龍之介

無理矢理割り込んだ。龍之介は愛刀を右手で握りながら刃を進行方向とは真逆の方向に向け、柄にそつと左手を添え、男の脇腹目掛けて斜め左上に向かって切り上げた。いや、正確に言うと『切り上げようとした』が、頑丈なAK-47が刃を遮っていた。

「話を聞け」

静かにそう言ったカラシニコフ男はアサルトライフルの台尻で龍之介の頭を強打した。ゴツという音と共に龍之介は地面に放物線を描きながら倒れ込んだ。しかし彼はゆっくりと立ち上がった。額を切ったのか血がダラダラ流れている。

「やっぱり前衛は男で良かったな」。女の子の顔に傷なんて残ったら一大事だもんな」

「ああ、そうだな」

「大丈夫なんですか！？ 松野浦さんは！！」

「心配しなくても大丈夫だ。あいつはそんなにヤワじゃない」

「そうだ。逆に心配したら失礼に当たる」

「いや……結構痛いんだが……」

「気にするな」

龍之介は不服そうに頭を擦り、刀を正眼に構え直した。一番、ポピュラーな構えだ。男は感心したように、ほほう、と声を漏らすと覆面を脱ぎ去った。覆面の下から現れたのは天然パーマで頑丈そうな黒縁眼鏡を掛けた男だった。

「俺の名は鬱井清。頭から血が流れ出ても平然としているんだ……。よし、貴様を戦士として認めてやろう。掛かって来い！！」

「オーケー、オーケー……そっちがその気なら、手加減しねえ。本気でブチのめす！！」

龍之介は刀を仕舞い、拳を振り被り、走り出していた。石畳の道を蹴り、途中から『クラッシュクラスター』を使い、ロケットのよう

に清目掛けて飛んでいった。

「ふふふ……良いだろう、受けて立つ。……『アンダーリアクティブ』――！」

「うおおおおおおおおおおお！！！！ 掃討の――！」

グレエエトフィストオオ！！！！」

龍之介の『クラッシュクラスター』が腕を交差し受身の態勢に入つた清に衝突する直前、清の服は内側から物凄い力を受けたかのように弾け飛び、彼の筋骨隆々な逞しい体が出現した。その様子は、あたかも清自身の筋肉の力で服が千切れたかのように見えた。

「な、なに――！ グレートフィストが効かない、だとおおおお！！！！」

「そう。これが我が能力、『アンダーリアクティブ』の内の鉄壁の防御技……ハイ・ボディアーマーだ」

「ちい――！」

龍之介は一旦その場から立ち退き、形成を立て直そうとした。が、

「逃がさん――！ バスティング・インパクト――！！」

ゴパツ、という音を立て、拳を構えた清が逃げる龍之介に急接近する。

「グッ――！」

無防備な体勢で清の拳を腹に受けた龍之介は前のめりになって一、二メートルほど吹っ飛び、硬い石畳の道路に受身も取れず落ちた。

「どうした？ その程度か？」

「ま、まだ、まだ……いけるぜ」

「良い心構えだ」

ヨタヨタと、やっと起き上がった龍之介にあからさまに能力の補正を受けているとしか言えないロケットスタートしてきた清の拳が接近する。

『アンダーリアクティブ』。清のこの能力は『近づいてくる物体を遠ざける斥力を発生させる』という単純なSA能力だ。しかし単純なだけに威力が高く、それを利用した全身に斥力を張り巡らされ、清を守るハイ・ボディアーマーは高い防御力を発揮し、拳に斥力を張り巡らせ、殴るバステイング・インパクトも高い破壊力を誇る。

清はバステイング・インパクトによる渾身のアッパーカットを繰り出した。しかし龍之介もただでは喰らわない。

その突き出された清の腕を掴んで、爆破した。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！！」

「ゴフッ！！」

龍之介はアッパーの衝撃で体を大きく反らし、清は爆破され焦げた右腕を片腕で押さえる。復帰は龍之介のほうが早く、清に爆風を利用した掌底打ちを、まだ腕を押さえ、うずくまっている清の顎に打ち当てた。

「くお！！」

掌底のあまりの衝撃に清は倒れそうになるが寸でのところで踏み留まった。

「クソッ！！ あと少しだったのに！！」

「良い掌底打ちだ……。だが、まだ俺も――」

パシユ、ドドン！！ 清が何かを言いかけたところで後方から何かが破裂する音が聞こえた。音のした方向に全員の視線が集中する。そこには一人の男が立っていた。何の特徴も無いように切られた黒い髪をし、半開きで眠そうな目をしている男は清たちとは違い、山鳩色をした背広型の軍服を着用していた。男は軍服には赤い肩章が付いており、茶色いウェスタンブーツを穿いている。彼は手に持ったワルサーカンプピストル――信号銃のような外見をしている小型榴弾投擲銃を天に向けて高らかに掲げていた。音の正体はきつとあの銃だろう。

「き、貴様は!!」

清が思わず声を漏らす。どうやら奴はSTEALTH・DECOYのメンバーまたはその協力者、少なくとも清の知り合いらしい。声を掛けられたその男は掲げていた銃をゆくりとトリガーガードを支点にして銃をクルクル回す、ガンスピンという技をしながら下ろし、腰だめのヒップホルスターに収納した。

「情けないな。新入隊員にそこまで追い詰められるなんて……」

彼はやれやれ、と言うかのように手を肩の位置にまで持って行き、首をフルフルと軽く振った。そしてビシッ、と清を指差すと

「それでもSTEALTH・DECOYの幹部なのか？」
と、言った。

「くう!! き、貴様こそ、そこで何をしている!!」

「俺か？ 俺はただの見学、高みの見物だよ」

はっ、と当たり前のような口調で彼は答えた。その態度に清は益々、腹が立った。

「手伝え!!」

「ふっ、嫌だ。俺はSTEALTH・DECOYの高級将校、菊嶋代雲だぞ。滅多に戦闘なんてしないよ。そういうのはお前ら、中堅将校の仕事だろう？」

「貴様!! 出て来い!! そして奴と戦え!!」

清は代雲を睨み付けながら龍之介を指差し、言った。

「……これだから脳味噌筋肉野郎は……とにかく撤退だ!! 早くしろ!!」

代雲が声を荒らげる。それに清は渋々従った。ザッシュ、ザッシュと音を立て、STEALTH・DECOYの三人は草むらの中へと消えていった。

「龍之介、大丈夫か」

「ああ、何とかな」

「何であの時、突撃した？ 話を聞いても遅くは無いのに」

「……俺、昔から思ってたんだけどさ。バトル物の登場人物って敵役の話を最後まで聞くじゃないか。あの間に隙だらけの敵を何で攻撃しないんだって疑問だったんだ。だから」

「だから突っ込んでいったのか？ 馬鹿だな」
「いいか、と拓巳は続ける。

「ああいう時は相手をよく分析したり、作戦を立てたりするもんなんだ。だから主人公はべらべらと自分のことを語っている敵に攻撃を仕掛けたりしないで、ああやってじつと戦闘が始まる、その時まで色んな事を考え万全の状態で戦いを挑むんだ。分かったか？」

「そうだったのか……」

「お陰でSTEALTH・DECAYの情報があんまり集められなかったぞ」

「すまん……」

「ま、気にすんな。過ぎた事は過ぎた事だ」

「ああ」

龍之介たちはパトロールを終え、安保部部室に引き返して行った。龍之介はその心に何かやり切れない気持ちを感じていた。

【第七章 自称特殊部隊FLASH・SOUND創設】（後書き）

感想とか待ってます！！　そしてその感想でドンドン作品を良くしていきたいです。P・S　宙助のポジションに誤字がありました。本当にすみません！！

【第八章 心の装甲のプロパティ】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「彼らは能力を上手く使いこなせるようになるかなあ
……？」by吉事〉

【第八章 心の装甲のプロパティ】

龍之介たちは事の次第を吉事たちに報告した。吉事はその報告を一通り聞き、ふう、と息を吐いた。

「ふうん、STEALTH・DECOY……か」

「あいつ等、何者なんですか？」

「彼らは学園内を支配しようとしている古風な輩だよ。ちゃんと序列とかもあるみたいだし、統率力で言ったら安保部にも匹敵する勢いだよ？ しかもメンバーが結構多い」

「厄介ですね」

「厄介どころの話じゃない。正直言って、学園統一の最大の障害だよ」

「その中で高級将校を名乗る菊鳩という男が居たんですが」

「菊鳩代雲か？ あいつはSTEALTH・DECOYの中で少佐の地位に就いていて発言権も大きい。幹部クラスのメンバーで何人も病院送りしている危険分子だ。そのくせ、どんな小さな証拠すら残さずに立ち去っていく……。あいつが学園を我が物顔で居るのはそのせいだよ」

「じゃあ鬱井清って奴は？」

「あいつはただの脳筋野郎だよ。気にしない方が良い」

「……そうですか？ 結構、強かったですよ？」

吉事の答えに、龍之介が訝しげに尋ねようとしていると、それは、とサヤが会話に入ってきた。

「貴方たちがまだSA能力の事をよく分かっていないからよ」

「SA能力の事？」

「そう、貴方たちはSAを全体の中の何割かしが使ってない」

「まだS A能力には何かあるんですか？」

「うん」

これはこの学園でこれから習う事なんだけどね、と新入生三人の問いに答えるようにサヤは続けた。

「S A能力は福音が発現しただけの物なの。人々の体に蓄積されている生命エネルギー、福音は主にこんな感じでその質や大きさが決まる」

そう言つてサヤが持つてきたフリップには『内蔵量』、『出力』、

『効力範囲』、『持続力』、『精度』と書かれている。

「S A能力のランクはそれぞれ値に比例して高くなるわ。でもそれぞれの値のバランスも必要よ。例えば外界への影響力である出力が高くても体内の福音の量を表す内蔵量とS Aの持続力が低ければその能力は燃費が悪いの。そしてその能力だけど……決して一人一つじゃないのよ」

「え！？　じゃあ俺たちはまだ別の能力を出せるんですか！？」

「ええ、S A能力はスピリットアカレイド自身の『想像力』が最も重要だといわれているのよ。例を言えば私の場合『自分は自分が強く念じたら色んな所に自由に物体を飛ばせる』と、松野浦くんの場合『自分は掌で触った物を爆破できる』と、『想像』する事でその能力が構築された。つまり、自身の『想像』とはS Aの『創造』なのね」

「へえ」

琴音が感嘆の声を上げる。でもね、とサヤは説明を続ける。

「それは逆にS A能力の幅を狭めてしまうの。ほら、私の場合は、移動する場所を明確に念じないといけないから『強く念じたら』と松野浦くんの場合、『爆破』というイメージを固めるために『掌で触った物』という限定条件が付属してしまったのよ」

「そういえば俺は『視る』というイメージを追うがゆえに『目で見た物』という限定条件が能力の創造に大きく影響しているんだな」と、拓巳。

「そ。だからSAの創造力を高め、強い物にするには想像力を強めなきゃいけないのよ」

「で、俺たちにはその想像力が足りない、と」

「そうよ」

宙助はサヤにキツパリと断言されてしまった。

「とにかく君たちは、まだ可能性を秘めたSAを持っているの。それをこれから自主トレしてきて」

「自主トレ……ですか？」

「ええ、極論を言うとな自分が何でも出来ると思い込みなさい」

「……中二病全開ですね」

「悪く言えばそうね。けど、自分の可能性を諦めないって意味では立派な事だと思うわ」

「そうですね」

「そうよ」

またもや断言された。一体、どこに根拠があるんだろう、と龍之介は思った。

その日はそれで解散となり、龍之介たちは他の生徒が部活をしている中、帰宅する事になった。拓巳が、ずっと待ち伏せしていたかぼす、何故か付いて来たサヤと一緒に帰宅する事が龍之介と宙助に発覚し、リア充爆発しろ！！とか、Son of a bitch h,Takumi!!などの口汚い罵声が彼らから拓巳に浴びせられたが、琴音が仲裁に入った事もあり、即座に沈静化された。

その後、拓巳たちと別れた龍之介たちは宙助も別の道に行き、龍之介は琴音と二人っきりで帰り道に行くことになった。

「全く、拓巳ときたら二人の女の子に囲まれてイチャイチャして、あんなニヤケた顔して……しかも一方は実の妹なんですよ!？」

「そうだね」

「ロバーツ先輩の事は良いとしても、かばすちゃんの件が俺は気に入らないんですよ！！ いや、一言、一言言ってくれば良いんですよ？ 妹と一緒に帰る、とか……二人で夕飯の買い物があるからとか……そういう一言が、言い訳でも良いからあれば、俺も納得しますよ？ いやそりゃ二、三発シメるかも知れませんが……でも何も言わないってのはいけないと思うんですよ！！」

「そうだね」

「絶対何がありますよ、あの三人。疚しい事があるから俺たちに黙ってたんだな、うん。じゃねえとあの態度は説明いかなえし、納得いかなえ。『いや、違えよ。そういうのじゃなくて……何というか……と、兎に角！！ 二人とはお前たちが想像している関係とかじゃ、断じて無え！！』ってどこが違うんだか……ハア、あいつの即席フラグ立てにはホトホト厭きれますよ。雨崎さんもそう思いますよね？ あいつは昔からそうだったんですよ」

「そだね」

「雨崎さん？ おうい、雨崎さん？ 貴女、俺の話をさつきから聞いているようで聞いてないですよ。適当に相槌打ってるだけですよ？」

「そね」

「おうい、ついに自分から認めちゃいましたよ？ おうい」

「そんな事よりもっと楽しい話しましょうよ！！」

ね？ と琴音が上目遣いで龍之介の顔を覗き込んだため、彼は、うつ、とそれ以上の追求を止めた。可愛い女子の上目遣いは反則だ、と龍之介は再認識したのであった。

「そ、そうですね」

「あと、敬語とかいいからもっとフランクに喋ってよ！！ 同級生なんだからさ」

「え？ ああ。こんな感じか？」

「そうそう、そんな感じ」

「で、どんな話だ？ 楽しい話」

「これ見てみて！！」

そう言つて満面の笑みで彼女はある一枚の写真をポケットの中から取り出した。写真には犬なのか猫なのか分からないが、兎に角、尋常じゃないほどモフモフしている生き物が、琴音に抱かれて写っていた。

「何、この可愛い生き物」

「この子は河川敷に捨てられていたのを私が拾ってきた子なんですよ」

「へえ、犬？ 猫？」

「分かりません」

「わ、分からないんだ……。じゃ、じゃあ名前は？」

「『もふにゃ』って呼んでます」

「もふにゃ……。か。そのまんまだな」

「分かりやすくして良いでしょ？」

「まあ、そうだな」

その後も龍之介は自宅まで琴音と雑談しながら歩いていった。

帰宅した龍之介は早速、家自体の大きさにしては狭い自室の中心で胡座をかき、掌を組み、目を瞑った。集中力を高め、想像力を強化するためである。

「（俺は……。そうだな。掌以外でも触れた物体は爆破できる……。かな）」

龍之介は脳内で自分が体の表面をあちこちで爆破を発生させてい

るイメージを思い浮かべた。彼の体の中でピリリツと何かが走る。

ああ、これが福音か、と彼・松野浦龍之介は思考した。更に彼はこの感覚を操ろうとイメージする。彼の体の表面がフツフツと鳴り始めた。『いや、違う』と、彼はイメージを再構築する。

「（体の表面じゃない……肌に触れている物体、服とか靴とかを巻き込まないように……）」

龍之介は想像する。

「（『クラッシュクラスター』並みでなくても良いから……小さい爆発、それでいて、強力に凝縮したもの……）」

龍之介は創造する。自身の新たな能力を。

彼は服の表面が焦げながらも小さな小さな爆発を起こす。……ポンッ、……パンツ、……バスツ……次第に音が強くなっていく。

「（もつと、もつとだ……！！）」

ドンッ！！ シュビッ！！ 一際大きな音が自室に響いた。思わず瞼を開けた龍之介は驚愕した。

彼は知らぬ間に胡座をかきながら拳を前に突き出していた。しかし龍之介自身は腕に力は全く入れていない。突き出した右腕を包む服の袖やら裾が所々焦げていて煙を出している。

「これは……？」

龍之介は知らず知らずの間に『爆破による姿勢制御』を行っていた事になる。やはり、他の部位での爆破程度なら彼には造作も無い事だったらしい。普段からバカス力と能力を使っていたお陰かも知れない、と龍之介は思った。龍之介は立ち上がり、

「やった——！！！」

と、大声で叫び、歓喜した。彼は自宅の庭に躍り出た。運動靴を履き、芝生を足で踏みつける。これから全身を爆破によって動かすつもりだろう。それから松野浦家の庭で花火のような音が夜遅くまで鳴っていたのは言うまでもない。

【第八章 心の装甲のプロパティ】（後書き）

感想待ってます。

【第九章 とある早朝の出来事】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言・「ハッ！！ 今何時だ！？」by清々

【第九章　とある早朝の出来事】

眠そうに登校して来た龍之介は目の下にクマが出来ていた。しかし彼は常に爆破時の爆風による姿勢制御——彼はこれを『ノンアクティブ・スラスタ』と名付けた——を続けていた。時折、彼は左の腰に結わえ付けてある愛刀・陣竜影子宗太郎の柄に右手を伸ばし、引き抜こうとする動作をする辺り、戦闘訓練のつもりだろうか。彼は軽い残像のような物を出しながらシャツ、シャツ、と摺り足で素早く移動していた。

コツが掴めたとは言え、まだまだ未熟者でその動きに無駄が多い龍之介は何回も反復練習する事で『ノンアクティブ・スラスタ』を完全に習得しようという魂胆で登校しながら練習しているのだろう。そんな所で琴音が龍之介を発見した。

「おゝ！ やってる、やってる」

「あ、お早う。雨崎」

「おはよゝ。それも修行？」

「ああ、小さい爆発だけど体あらゆる所で爆発を起こせる様になったんだ」

「へえゝおめでとう！！ 私なんかまだまだなゝ」

「俺の場合、能力を頻繁に使ってたからそれのお陰だと思うよ」

「何にしても凄いよ！！ 松野浦くんは」

「どうも」

龍之介は琴音と雑談しながら更に練習する。他の事に気を配りながらも常に『ノンアクティブ・スラスタ』を発動させたままにするための訓練にもなる。そこに拓巳、宙助、サヤも合流する。

「お早う」

「や、お早う」

「なんだお前？ 掌以外で爆破出来たっけ？」

「ああ、昨日俺の天才的なインスピレーションを働かせたところ出来るようになった。結構、神経すり減らしちまったけどな」

「凄えじゃねえか」

「へへ、まあな」

龍之介は鼻を人差し指で擦りながら恥ずかしそうに笑った。今時、こんな風に照れ隠しする人間はそうそう居ないだろう。

「で、お前はとうなんだ？」

という龍之介の問いに、

「俺か？ 俺は……いや、まだまだだな」

と、意味有り気な笑みを浮かべながら拓巳。

「俺も頑張っているけど……まだ駄目だ」

と、ふう、と一息吐きながら宙助。

「私は周辺の物体の位置と形が大体、把握できるくらいだよ」

と、嬉しそうに琴音、といった順番で答えた。

「へえ、琴音ちゃんはそんな事出来るの？」

「はい！！ 見てて下さいね」。『マイソナー』っていう名前を付けたんですよ！！」

サヤの問いに琴音はニコニコしながらそう答えると集中のためか目を瞑り、両耳にそれぞれ両手を当て、SA能力『マイソナー』を発動した。

「あー！！」

早速、反応があったようだ。琴音が驚きの声を上げた。

「反応！！ 六時の方向から軽自動車一台がこちらに山なりに接近！！」

は？ 思わず龍之介以下安保部のメンバーは一瞬、意味が分からなと言わんばかりの顔をし、思考が停止した。

直後、ズドッ！！ ゴパッ！！ という轟音を立て、懐かしのス

バル360が琴音の報告通り後方から降って来た。地面を挟りながら二、三回地面を跳ね回り、スバル360は完全に沈黙。鉄屑、スラップと化し、車体が炎上した。

勿体無いな、と龍之介は現実逃避気味の思考を巡らせるが直ぐに意識を車が降って来た後に集中させた。

そこには、あのSTEALTH・DECoy中堅将校と言われている鬱井清が仁王立ちをしていた。流石に野戦服等は着用していないが、その代わり通常の制服が彼自身の筋肉ではち切れんばかりに膨らんでいた。

「て、テーマは……」

「そう、俺だ！！鬱井清だア！！！」

「テメー、まだ懲りてなかったのか!!」

「懲りるウ？　ハッ！！　笑わせてくれる。あの程度で懲りるものか！！」

むしろ、と龍之介を睨み付け、

「興味湧いたわッッッ！！！」

「一々、五月蠅え奴だ。朝っぱらから近所迷惑だろ？」

「フッ、他人のことなど……知ったことかアアアア！！！！」

以前とは違い、余程早く龍之介と戦いたいのか会話を中断して突撃してきたのは清の方だった。しかし龍之介はそれに冷静に立ち向かい、対処しようとする。

「（奴は好戦型猪突猛进単細胞系ファイターだ……。突撃は少し自分の立ち位置をずらせば簡単に避けられる……。そこから『ノンアクティブ・スラストー』で一気に叩くッ！……）」

龍之介は拳を構え、軽くステップを踏む。目は接近してくる清をしつかりと捉えていた。

[illegible]

半ば奇声を上げ、拳を振り上げる清の攻撃を龍之介は見切る。

スラスタ―』で後方へ向かって、地面を滑るようにしてなんとか回避した。能力補正も受けていないというのに清の蹴りは凄まじい勢いで龍之介の眼前を通り過ぎた。

「（何だ、こいつ……無敵か！？ いや必ず勝機はある！！）」

「龍之介えー！！！！ 援護するぞ！！」

叫んだ拓巳が龍之介の後方から愛銃による牽制射撃を清に行った。

拓巳の愛銃、T-DP (Takumi-Dust-Player) は見栄崎邸の地下室を改造した工房『見栄崎工房』——拓巳はその二代目で一代目の拓巳の父親はスイスやアフガンを渡り歩き、その個人工房で修行し、今の『見栄崎工房』を作った——で作られた九ミリ口径の自動拳銃で、拓巳が工房で初めて作ったハンドメイド品である。その外見は、イスラエル・ウエポン・インダストリーのジェリコ941やデザートイーグルに似ていて漆黒に塗装されている。全長200ミリメートル、重さ1092グラム、スチール製で有効射程距離は50メートル、フルオートとセミオートを使い分ける事が出来、装弾数は十発となっている。

低反動でなかなかの威力を誇るそのT-DPから発射されたゴム弾だが『アンダーリアクティブ』を纏った清の腕で軽く払われた。彼の腕には痣一つ残らない。

「くっ……！！」

龍之介が苦い顔をしながら、非殺傷モードに設定した陣竜影子宗太郎を抜いて、正眼に構えた。それを見た清は、ふっ、と鼻で笑い、「来いよ」

と、人差し指を立て、それを二、三回前後に振った。

「でりゃあああああああああ！！！！」

清の挑発に敢えて乗った龍之介は両手で握った刀を上から下へと斬り下ろす。それを清は依然、SAを纏わせた腕で受け止める。鬱井清、彼の顔に焦りの表情は無い。むしろこの戦闘を楽しんでいた。

サヤが突如、姿を消す。清は空間移動系のスピリットアカレイドの戦略にありがちな、後方からの奇襲に備え、後ろを振り向いた。しかし彼の思惑は外れた。

サヤの叫び声の後、清の顔面に熱い衝撃が走る。前方から蹴られたのだ、と清が認識するまでにおよそ二秒掛かった。この間に形勢を立て直そう。誰もがそう思った。しかし、

「ええっ！？」

サヤの驚愕した声が辺り一帯に響く。驚くべき事に清は認識するより先に、脊髄反射の如くサヤの蹴り出された脚を掴み、空へ投げ飛ばしたのだ。

だが動いたのは清だけじゃない。サヤを投げ飛ばしたが、未だ意識が朦朧としている清に果敢に突撃する影が一つ。『ノンアクティ
ブ・スラストー』を使用した龍之介だ。

「!？」

流石に清もこれには反応し切れなかった。なんとかSA能力を発動させ、脇は守ったが、

「……奴はロバーツ先輩を投げ飛ばし、意識の大半を先輩に向けているはずッ……!! だから『脇ががら空きた』と言つてやり、突撃する。すると好戦型猪突猛進単細胞系ファイターである奴は咄嗟にこう思ふはずだ……『脇を守らねば』、と。ところがどっこい俺が攻撃するのはそこじゃあない。奴の『アンダーリアクティブ』によるハイ・ボディーマーは脇に集中していて防御が足りない所があるはず、だ。俺はそこを突くッッ!!!!」

ヒョウツ、と風斬る音がした。音源は『ノンアクティブ・スラスタール』により加速がついた動作によって突き出される、陣竜影子宗太郎の刃。刃は吸い込まれるようにして清の腹に食い込んだ。

「うがはッッッ！」

やはり。龍之介の思惑は的中した。クリーンヒットだ。

非殺傷モード時の刃は物体を傷つけない。しかしその衝撃は凄まじい物で清は卒倒した。

「なんとか……倒せた」

ひゅふう、と龍之介は息を吐きながら地面に座り込んだ。座り込んだまま、器用に刀を鞘に仕舞い、龍之介は立ち上がって言った。

「さ、早く行きましょう。遅刻してしまう」

その後、走って登校した龍之介たちは遅刻寸前に教室に滑り込んだ。既に着席しているボーイッシュな少女・刃先は呆れたように駆け込んで来た四人に言った。

「どうしたんだ？ 皆。遅刻ギリギリじゃないか」

「ハッ……ハッ……ハッ……。す、少し寝坊してな」

「全く……目覚まし時計はセットしたのか？」

「いや……忘れてたみたいだ」

「今度からセットしなよ？」

「分かった」

「ホームルーム始めるぞ」

担任・佐藤広重の声が教室に響いた。席に着きながら龍之介は思った。

——鬱井の奴、絶対遅刻したな。

と。しかし龍之介はそんな事は直ぐに頭から忘却の彼方に葬り去り、暖かい春の太陽を体全体に浴び、大きく背伸びをした。

【第九章 とある早朝の出来事】（後書き）

感想待ってます。一般の人にも感想が書けるように設定し直しました。

【第十章 DodgeBall〜限界突破〜】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〜
今回の一言・「龍之介とは仲良くやっていけそうだ！」by憲次
〜

【第十章 Dodge Ballの限界 突破】

その日の龍之介たちの体育の授業はドッジボールだった。

ドッジボール、飛球、避球。様々な名称で呼ばれるそのスポーツは小学生の間でなかなかの人気を誇り、日本ドッジボール協会が設立されるまでは、スポーツというよりも、遊びの一つとして存在していた。そのため、基本的に相手にボールを当ててアウトにするとか、内野外野（外野は最低、一人ずつ必要）を用意し、陣地から出た場合アウトになるとか、相手の陣地に人間がいなくなったら、パーフエクトゲームとなり、勝ちとか、外野の人が敵の内野の人をアウトにすると内野に入れる等という超原則以外のルールは様々な物が各地の子供たち独特の感覚で決められていたが明確なルールがある。

先ずファールだが、

ダブルパス……内野同士、外野同士のパスはしてはならない（外野サイドから相手内野の投球が外れ、もう一方の外野サイドに行った場合は例外）。

ジャンパーアタック……ジャンパー——試合開始時に上に投げられたボールをジャンプして自分の陣地に落とし、先攻を勝ち取る人の事——へ第1投の攻撃は禁止。

ジャンパーキャッチ……ジャンパーが第1投を捕ってはいけない（サドンデス時に内野が1-1の時はセーフ）。

オーバーライン……投球時、捕球時にラインを踏んではいけない。キープ・フォー・ファイブ（オーバータイム）……ボールを取った場合は5秒以内に投げなければいけない。

ホールディング……相手コートにあるボールをかき寄せてはいけない。

タッチ・ザ・ボディ……相手選手に故意に触れてはいけない。
ヘッドアタック……顔面や頭部を故意に攻撃してはいけない。
ファイブパス……内野・外野のパス回しは4回まで。

フライングスロー……審判のホイッスルより前に投球してはいけない。
い。

イリガール・キャッチ……バレーのトスやレシーブのように、ボールを一回バウンドさせて捕ってはならない（パスカット時に行った場合はアウトプレイとして外野へ行く）。

アシストキャッチ……味方があいてプレイヤーからの投球をはじいた時、味方、もしくは自分が捕ればセーフ（捕ったのが外野の味方でも可）。

と、いった風に沢山あるし、

外野がアウトを取った後、すぐに内野へ戻らない場合、内野へ戻れない。

外野がアウトを取った後、そのボールに触った場合、内野へ戻れない。

内野・外野への移動はコートの外側を通らなければならない。

外野から内野を当てても、作戦上内野に帰らなくてもいい。

などがある。勿論、このスポーツは小学生以外の幅広い年代でも十分通用する面白さを秘めているものだった。

龍之介たちは担任で体育教師でもある佐藤広重から新たに

はじめから場外にいる人（元外）は、自分のチームにボールを当てられた人が出た時に、一度だけ交代で陣地の中に入れるというルールと顔面や肩はセーフとするルール、軟らかいボールを使うというルールと制限時間——制限時間を過ぎても勝負がつかなかった場合、内野（または外野）の人間の数の多寡で勝負を決するというルール付き——を設けて、ちょうど三十人がクラスに在籍しているのでそれを二手に分け、試合を開始する事になった。

龍之介たち三十人は、審議の結果、SA能力使用可能で龍之介班と拓巳班にそれぞれ十五人ずつ分かれ、試合を開始する事になった。「へっへっへ……拓巳、覚悟は良いだろうな？」

「そっちこそ、どうなんだ？ 足が震えているぞ？」

「へっ！！ これはこの寒さで半袖短パンって状況だからさ。お前こそ手が震えているぞ？」

「はっ！！ これは武者震いって奴さ！！」

むむむ、と睨み合ったまま膠着した二人をそれぞれ琴音と刃先——ちなみに女子は半袖に紺色のスパッツだ——が仲裁し、試合が再開した。

まず、それぞれジャンパーを選出し、先攻後攻を決めた。龍之介と拓巳が互いに相手方の陣地に入って身構えた。ピーッ とホイッスルが鳴り、審判の広重によってボールが天高く打ち上げられた。打ち上げられたボールは重力に従い、落ちてくる。それを狙い、龍之介と拓巳は勢い良く、ジャンプした。

バシッ！！

空中で両者によって弾かれたボールは龍之介の陣地に落ちる。それを透かさず、琴音が拾い、着地し戻ってきた龍之介に渡す。龍之介は端っこに居た拓巳班の角刈りの少年・後藤健吾に向けて『ノンアクティブ・スラスタ』の能力補助を受けながら思い切り投げた。「うわっ！！」

健吾は反応し切れず、敢え無くアウトとなる。開始二秒後の出来事だった。しかしその出来事を『予測』していた拓巳は健吾に当たり、地面をバウンドし、外野に落ちそうなボールを難無くキャッチした。どっちのボールか？ 結構、際どいキャッチだったが拓巳班側のボールだった。内外ラインギリギリでキャッチした拓巳は足を内野ゾーンに残したまま、体の殆どの部位を外野ゾーンの宙に浮かせている——特にボールをキャッチした右腕は伸びきっているという奇妙

なポーズを取りながら不敵に笑っていた。

「ふふふ……」

「後藤を捨て駒にするとはテーマも酷え事するな」

「あいつなら……小等部から野球部に所属していてエースとして期待されているという噂がある後藤なら……直ぐに内野に復帰するかな……」

「そうかい」

「ああ……だから心配無用、そおい」

「うお!？」

気の抜けた掛け声と共に拓巳から体勢を変えずに投げられたボールを龍之介はノーモーションで避ける。ボールはそのまま龍之介の後ろに居た里山憲次にヒットした。

ボールが龍之介の足元に転がってくる。

「憲次……」

そう龍之介が名前を呼んだ里山憲次と言うテクノカットの少年は、彼が今朝の一時間目の総合の『親睦を深めるタイム』の時間で親睦を深めたクラスメイトの中の一人だった。

うう、と苦しそうに声を上げる憲次。龍之介は彼に寄り添った。

「憲次!! 大丈夫か!？」

「へ……へへっ、龍之介え……先に（外野に）逝ってる、ぜ……」
「憲次い——!!!」

「茶番はその位にしとけよ」

「「ああ」」

刃先の一言に龍之介も、さっきまで苦しんでいた憲次も、しれっと立ち上がった。憲次は外野に向かって走って行った。交代するように元外の田代雅部が内野に入った。

「憲次の仇討ちだ!!」

「いや俺、お前狙ったんだけど。憲次、お前が能力使って逃げたか

ら巻き添え食らったんですけど」

「……仇討ちだ!!」

「あ、そういうスタイルっすか」

「行くぞおおおおおおおお!!」

「おう!!」

「あ、向こうの奴らノリノリだ」

拓巳の指摘通り、龍之介班の男子は皆、目をギラギラと輝かせ、闘志に満ち満ちていた。琴音以下女子勢も男子よりかは声が小さいが「おお!!」

と、声を出している位だ。その結束感を警戒した拓巳班の面々も身構える。

龍之介は冷静に試合を把握しようと素早く思考を巡らせる。

「（現在、俺の班も拓巳の班も一人ずつ外野に送られて同点だ。この状況を俺たちに有利な状況に持っていければいいのだが……えっ」と同盟隊メンバーには——）」

ボールを持った龍之介はチラリと後ろを見る。

同盟隊。正式名称・松野浦同盟隊と言い、彼らは龍之介が試合前に即興で作ったチームで、メンバーはリーダーである松野浦龍之介と昨日は学校を休んでいたため、今朝、クラスメイトだったと言う事が判明した田辺吉尾、かりあげヘアスタイルが特徴的でナルコレプシー——日中において場所や状況を選ばず起きる強い眠気の発作を主な症状とする脳疾患（睡眠障害）の事で龍之介も似たような症状の特発性過眠症を患っている——を患っている少年・田代雅部、さつき外野に送られた里山憲次が居る。

龍之介は憲次の方にアイコンタクトを送る。すると憲次はボールを取るような仕草を必死でしていた。

「（ボールを渡せと言う事か……？　しかし何故あそこまで積極的……）」

まさか、と龍之介は憲次の視線の先を見た。その視線上——つまり

憲次のボールの射線上には拓巳班の斉藤架姫——フロントの前髪を
まっすぐに切りそろえ、左右の前髪につながるサイドの髪の部分を
顎にあたる長さで切って俗に言う姫カットという髪型にしている顔
立ちの整った大人しめの女子——が居た。

「（アイツ……斉藤を！？ 狙う……つもりなのか！！？ 初期
の方で女子——しかも大人しめの斉藤を狙うなんて非難が集中する
ぞ……！ まさか、アイツ……そこまでして勝利を……よし。こう
なったらそんなお前の熱い情熱に、俺は……！ 応えてやるしかねえ
ええええ……！）行くぞ、憲次……！ 受け取れ……！ ザ・マウン
テン・ライク・オーバーハンド・パス……！！！」

龍之介はT・M・L・OH・Pという投げ方——簡単に言うとな
なりに投げる事——でボールを真上に打ち上げた。これで拓巳班は
能力でも使わなければボールは取れない。

「届け……！！」

龍之介が心の底から願う。しかし、

「甘い……！ 甘い……！ あっつまああああいいいい……！！」

宙助が何も無い空中を駆けていた。彼のSA、『ハイウェイシ
ーズ』は『どんな所でも移動する』事が出来るという能力。つまり
彼・数野宙助は足場の無い空中でも『強制的に』足場を創り、そこ
を走っていたのだ。まるで見えない階段を昇るかのように宙助は腕
を振り、ドンドン空を駆ける。

「しまったッッ……！ 忘れていたッ……！ 奴の能力を……！！」
今、ボールは空中にある。相手方のエリアの空中に浮いているボ
ールは体の一部を自分のエリアに付けなければ、取る事は出来ない。
しかし宙助はその、『相手方』のプレイヤーなので、外野にボール
が届かない限り、そのまま取りに行く事が出来る。しかも龍之介は

かなり高くボールを打ち上げた。これではいくら地上から手出しできないと言ってもその反面、外野に届く時間も遅い。つまり数野宙助とT・M・L・OH・Pはとても相性が悪かった。

案の定、宙助は自身のチームの領空にてボールをキャッチする事が出来た。

「さて、どいつから当ててやろうか？」

龍之介班は絶望的な状況に追い詰められた。これでは龍之介たちは宙助に空中から自由に狙われてしまう。

「龍之介！！俺に任せろ！！『ポイントパワー』！！」

外野で憲次が叫ぶ。彼が掛け声を発した直後、ボールを持った宙助の両手が外野に向かって引つ張られた。

「な、なにいいいい！！！！ボールが引き寄せられている！！」

里山憲次のSA能力、『ポイントパワー』は『物体に力の噴出点を貼り付け、任意のタイミングでそこから予め溜めておいた力を噴出できる』能力だ。

「落ちな！！俺たちのエリアヘッ！！」

「くっそ！！このままじゃ俺は陣地越えてアウト、もしくはオーバertimeでアウトだ！！どっち道、俺はボールを手放すしかないのかッ！？」

悲鳴も空しく、宙助は龍之介側の外野に墜落した。既に宙助がボールを取ってから五秒が経過していた。

「よし！！」

これで宙助は外野行きだがファールによるアウトなので憲次は内野に入れない。これで拓巳班は元外が一人も居なくなった。

「ガンガン行こうぜ！！」

龍之介班の志気が高まっていく。このままでは拓巳班は不利な状況になってしまう。拓巳は班員全員に叫び、士気を高めようとする。

「ま、まだだ！！まだ差は小さい！！」

「そんな悠長な事は言ってられんぞ！！」

皆に声を掛けていた所為で注意が散漫になっている拓巳に龍之介は

拓巳の絶叫に全員が即座に従う。滑り込むようにして倒れ込んだ真上をボールがとてつもない速さで通過する。伏せていなければ何人かアウトになっていたはずだ。

シパアンツツツ!!!

聞くからに痛そうな音が龍之介の掌から響く。しかし龍之介は余裕の表情だ。

「昔からお前の咄嗟の指揮能力には舌を巻くよ、拓巳」

「それは事前から策を練っていない行き当たりばったりな俺への当て付けか？ それと素直に褒めているのか？」

両方だよ、と拓巳の問いに答えるようにして龍之介は伏せていて動けない拓巳向かってボールを射出する。転がるようにして拓巳はそれを避けた。

「無様だなッ!!! 拓巳!!!!」

「言ってる!!!」

跳ねるように体勢を整えた拓巳はバウンドし、アウトする危険性が無くなったボールを右手で掴み、一旦、龍之介に背を見せ、

「フッ!!!」

裏拳気味にそれを放った。龍之介は顔を少し動かし、それを避ける。先ほどの意趣返しに、拓巳の放ったボールは外野に突き抜けた。拓巳が外野に向けて放ったボールは外野に居た、清野現助に拾われ、蝉ヶ原近衛に渡った。

近衛は髪をスポーツ刈りにした男子で彼の能力名は『無色迷彩』。文字通り、『対象物を不可視にする』能力である。彼はこのSAで自身とボールを透明にした。

「なッ!!! 消えた!!!」

「ど、どこだ!?!」

龍之介班の面々から次々と驚愕の聲が上がる。班員全員が辺りをキョロキョロと見渡す。が、ボールと近衛の影はどこにも無い。

「（しまった……これではボールが見えないし、投げる人間の動作から弾道を予測する事も出来ない！！）」

ボスツ、バスツ！！

透明なボールが龍之介班の何人かに直撃する。早速、犠牲者が出たようだ。

「クソッ！！ ボールはどこだ！？」

龍之介班はパニックに陥った。近衛のSAは完璧で一寸の光の歪みすら見えない。このままでは何も出来ないまま、試合が終了してしまふ。次々と仲間が倒れていく中、龍之介は咄嗟にいい策を思い付いた。

「喰らえッ！！」

龍之介は突如、グラウンドの砂を思いっきり、蹴り上げた。直後、砂のカーテンが形成され、透明なボールに砂が付着する。

——見えた！！

龍之介は所々に砂がついた透明な何かを見つけた。ボールだ。龍之介はそれを透かさずキャッチし、軽度の爆破により焦げ目を作り、ボールを視認出来るようにした。

「これで貴様の詰まらん策は終わつたようだな」

「さて……それはどうかかな？」

龍之介は拓巳の余裕の表情を見て、何かを感じた。

「やれ！！ 松崎！！！！」

拓巳の掛け声に刃先が応じる。彼女は手を龍之介に向かって突き出した。その手には何か文字のような物が浮かび上がり、突然、ボールが発火した。

「なああああ ああああああ！！！！？？？？」 これはツツッ！！ 炎！！？？ 紛れも無い、実物の炎だ！！！」

龍之介は自分の手の中で燃え出したボールを思わず、投げ捨てた。ボールは転々とし、拓巳班の内野まで転がって行った。

「一体何を……!?!」

理解できない物を見るかのような目で自分の掌を見た。余りにも勢い良く燃えたので心配になったのだ。しかし火傷の痕は――

「な、無い!!」

「そつだ。その炎は幻影の炎、松野浦に被害を及ぼす事は無い」

「ど、どういう原理だ!!」

「それはボク 능력による現象だ」

「SAか!?!」

「そつ。能力名『フリー・フレイム』。『自身が設定した炎を自由に出す』能力だよ」

因みにこのボールには任意で発火するようにプログラムさせてもらったけど、と刃先は付け足す。

「く、くそ……形だけの炎か……!! 俺はそれに騙されて……」

「そつだよつと」

刃先が投げたボールは呆然としている龍之介の胸に当たり、丁度そこでチャイムが鳴った。試合終了だ。

「また遊ぼうね」

最後に刃先は龍之介に向かって意地悪そうに言った。

試合の結果は内野の人数が多かった拓巳班の勝ちだった。龍之介班の一番の敗因は、やはり近衛の透明ボールによる狙撃だろう。

龍之介は大きな敗北感を抱えながら男子更衣室に向かった。

【第十章 DodgeBall〜限界突破〜】（後書き）

感想待ってます。

【第十一章 マーカスⅡバーンズ】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言・「我々ハ学園ニ反抗スルツ！」 by マーカス

【第十一章 マーカス・バーンズ】

龍之介は拓巳、宙助、琴音、刃先と共に食堂で昼食を取り、そのまま刃先を除いた四人で部室に向かっていた。今日の授業は午前中までだったのだ。龍之介は喉が渴いていたため、途中、自動販売機を利用し、紙パックに入ったコーヒー牛乳を飲んでいた。またもや道中、他愛も無い雑談をしながら彼らは部室まで歩いて行った。

今日は軽い地震があったなあ、と回想しつつも龍之介は部室のドアを開けた。部室内には川浪不と浩孝だけが居た。サヤや吉事はまだ来ていないらしい。

「お。お前ら来たか」

「あ、どうも金山先輩」

「加速世界を味わいたくなったか？」

「いえ、遠慮しておきますが……」

「そうか、残念だ」

浩孝との軽いやり取りを終えた龍之介は川浪不に話し掛けた。

「こんにちは普遍先輩。ところでロバーツ先輩と吉野先輩はどちらへ？」

「こんにちは、松野浦くん。彼らは今、所用で席を外していてね。今は居ないんだ」

「そうですか……」

「そうそう。君たちに頼みたい事があつてずっと待ってたんだ」

「？　なんですか？」

「実は我々に協力してくれている科学部が占拠されてね」

「……！」

瞬間、部室内の空気がピリピリとした物に変わった。占拠、そんな事が今、学園内で起こっている。その事実を龍之介たちの体を震え

させた。

「占拠している組織は皆さんご存知のSTEALTH・DECAY。実行犯のリーダーはマカス・バーンズ。組織のリーダーでもある」
浩孝は一枚の写真を机の上に放った。写真には赤いフリッツヘルメット（PASGTヘルメット）に同じ色をしたゴーグルマスク——その都度、入ってくる光の量を調整する青い自動偏光レンズの双眼タイプのゴーグルにフェイスガードが合体したような形式の物——に黒い幾何学模様が迷彩のように全身に描かれている他の装備品と同じく赤色の装甲服を着ている男が写っていた。

「この男はいつも装甲服を纏っている正体不明な奴で、分かっている情報と言えば奴が男って事とSTEALTH・DECAYのリーダーだって事だけだ」

「コイツが今回の占拠事件の実行犯リーダーですか？」

「ああ、奴は今日の午後一時半に科学部を部下数名と共に占拠した。その時の武装は軍用ライトブリットのB-A135・シュートマスターだ。現在も絶賛立て籠もり中だそうぞ」

軍用ライトブリット、B-A135・シュートマスター。龍之介、拓巳、宙助の三人はその単語を聞き、顔色を変えた。

ライトブリット、光の弾という名前を持ったこの銃器は二十一世紀初頭に登場した物で弾丸の代わりに内部取替え式バッテリーパックによって生み出されたエネルギー体を打ち出し、対象物を麻痺ないし破壊する、最近はドンドン小型化が進んでいるという代物だ。その中でも今年の一月に日本銃器——防衛権の確立によって急激に業績を上げてきている兵器製造会社——という会社から発表された最新鋭のライトブリット、B-A135・シュートマスターは拳銃程の小型さで携帯性に優れながらも中々の性能を誇り、警察や自衛隊にも採用される予定だそうだが、民間には出回っていないかったはずだ。その事を拓巳に一番、驚いていた。浩孝は更に続ける。

「占拠の理由は大方、科学部が俺たち安保部に技術提供しているからだろう。今日も新しい装備品の納品があつたつて言うのに……」
「じゃあ納品で科学部が大変だった時に占拠されたんですか？　ちよつとタイミングが良過ぎですね」

「ああ。奴ら、STEALTH・DEC OYの情報網は凄まじい物だからな」

「つまり納品の日にちが奴らにばれていたと言う事ですか？」

「ああ。奴らはそれを嗅ぎ付け、納品を防ぎ、自分たちの装備にしようとは画策したんだ」

「なるほど」

「今回の君たちの任務は装備品を輸送中のSTEALTH・DEC OYから奪われた備品を回収する事だ！！」

「……了解！！」「……」

龍之介たちはロッカールームに入り、各種プロテクターを装着し、小銃を引つ提げ、部室を飛び出た。

龍之介たちが部室を飛び出る少し前の頃。マークス「バーンズ」団は備品の積み込みを学園に出入りする業者の物に偽装した軽トラツクの荷台に積み込み終えていた。

「隊長。備品の積み込みを終了しました」

「ウム、私毛直ぐ二行ク。先二とらつくヲ発進サセテイロ」

「クソッ！！　貴様ら、こんな事をして、只で済むと……ッ！！」
科学部部長の橋本将隆は後ろ手に縛られながらも懸命に唸り、相手を睨み付けた。勿論、その相手はマークスだ。それに対し、マークスはゴーグルマスクによって加工された音声だろうか妙にくぐもつた機械的な声で静かに答えた。

「——思ッテナイナ。ソレ相応ノリすく、でめりつと、不利益ガ生ジルダロウ……。シカシ、タトエ学園内ノ爪弾キ者ニサレヨウト、

後口指ヲ指サレヨウト、今回ノ備品強奪は我ガSTEALTH・DECoyニトツテ有益ナ物ダッタロウナ……」

「く、腐ってやがる！！ お前らはアー！！！！！」

「何トデモ言ッテロ」

「うっ！！」

マークスは左手に握られた自動拳銃をのっぺりとさせたかのような外見のB-A135・シュートマスターの銃口を将隆の首筋に向けてスタン・モードで引き金を引いた。発射された光弾を受けた将隆は小さく短い呻き声を上げ、三回ほど陸に揚がった魚のように跳ね動かなくなった。

「サテト、行クカ。アンマリ、アイツ等ヲ待タセテオケンカラナ……」

謎の男、マークスは偽装トラックに向かって歩き始めた。

この男、マークスが学園に反抗し始めたのは何時頃からだろうか。成績の良し悪しを能力値によって判断された時だろうか。能力値が低いと言う理由で蔑まれ、見下したような視線や嘲笑を浴び、陰口をたたかれ、暴力を受けた時だったろうか。

いずれにしても彼は何時頃からか、マークス「バーンズ」という偽名とゴーグルマスクで素性を隠し、自身の青春時代の大半を学園の反抗活動に費やすようになり、STEALTH・DECoyを創設した。

STEALTH・DECoy。彼らはSAの能力値が低い生徒の集まり、武装し、学園に悪意のある活動を行うようになった組織である。

武装品は安保部に納品されるはずだった物を科学部から盗んだ物が大半を占めていたが、最近は菊鳩代雲が入隊し、どこからか入手した新旧入り混じった装備品もその一部を担うようになってきた。

そして彼らが活動理念に掲げる『学園の解放』。これは能力値に束縛され、上手く自身を表現できないような生徒を救うため、立ち上げられた理念だった。そのため、彼らは弱いスピリットアカレイ

ドを救おうと、学園や優秀な生徒への憎悪を糧に能力を歪んだまま成長させ、体術や戦闘術を学び、共通した境遇を持った者たちの仲間意識による堅い絆によって統率され、対抗力をつけてきた。

ふう、と、マーカスは今までの人生を思い返し、少し嘆息を漏らした。

「（俺は何も間違っではない）」

何らかの活動した後、そうやって彼は自身の行動を正当化してきた。それを裏打ちするかのように学園内でも彼らはある程度の支持を受けていた。メンバーが中々捕まらないのも、支持者が彼らの存在を隠匿するからだ。

「（俺はいつも自分が正しいと思う事をしてきた……）」

彼は仲間が偽装トラックのエンジンを温めて待機している仲間の下へ歩いて行った。

龍之介たちが科学部に到着したのはマーカスがその場を立ち去って少し経った時だった。既に犯人らは撤収している、と判断した拓巳は前衛である龍之介と宙助の二人を先行させた。案の定、その通りだった訳だが、そんな事情は知らない龍之介たちは慎重に足を進めさせた。

「拓巳、どうやら奴らは本当に居ないようだぜ」

「そうらしいな。縛られた科学部員しか居ない」

「『マイソナー』でも確認していますが、それらしい反応はありませんね」

「よし、雨崎と俺は縛られた部員を解放するから龍之介と宙助はこの部長の橋本って奴から話を聞いてくれ」

「……分かった！……」

三人は拓巳の指示を受け、テキパキと自分の役目を果たそうと行動

し始めた。

龍之介と宙助は更に部室の奥に進んだ。科学部室の棚や引き出しは悉く荒らされており、書類や細かな機械部品が床に散乱していた。「酷え有様だ」

「全くだな」

そんな調子で歩いていくと一番奥の部屋に白衣を着て、縁無しの眼鏡を掛けた、肌の色が日焼けをしたように少し黒い、科学部部长・橋本将隆が縄で縛られて地面に転がっていた。

「おい！！ 大丈夫か！？」

「う、うつむ……」

「意識が戻ったようだな。話を聞かせてくれ」

「お、お前らは安保部だな……？」

「ああ、そうだ」

「そ、そうか……。奴らを、お、追ってくれ！！ 大切な装備品が、ぬ、ぬ、盗まれた！！」

「ライトブリットのスタン・モードでも喰らったのか？ 呂律が回ってないぞ？」

「そ、そ、そうだッ！！ 装備品をあ、悪用し、っしよとッ、奴らは学園の、の、外にッ！！」

「何だって！！」

「ヤバいんじゃないか！？」

「ああ、ヤベエ」

「拓巳に報告だ！！」

龍之介は素早く耳に装着されたインカムのダイヤルを弄り、拓巳のインカムの周波数である146.9に通信した。

『拓巳！！ 俺だ！！』

『どうした、龍之介』

『橋本の話によるとSTEALTH・DECOYは学園外に逃亡を図っている模様だ』

『何！！ 学園の外だとッ！！』

『ああ、この学園は広いから、まだ外には出ていないはずだ！！
俺は奴らを追う！！』

『よし、任せたぞ！！ 俺は普遍先輩に連絡を入れる！！』

『じゃあな！！』

龍之介は通信を切ると、『クラッシュクラスター』を構築しながら校舎三階にある科学部の窓から飛び出し、ブーストで空を飛んだ。宙助も『ハイウェイシューズ』で空を駆けた。二人は見る見るうちに、空の青色に吸い込まれていった。

「ど、どこだ！？」

龍之介たちは上空から必死に辺りを見回す。眼下に広がるのは校門に居る下校途中の生徒、グラウンドで忙しく動く主に運動系の部活動に所属している生徒、資材搬入に來ている業者のトラック——稀に出て行くトラックもあった——など、STEALTH・DEC OYには一見、関係の無さそうなモノばかりだった。しかし龍之介はその中に明らかな違和感を持った。

「何か引つ掛かるな……」

その雰囲気は龍之介にとって何か大きなイレギュラーが学園の日常を浸食しているかのように感じられた。下校や部活動はどの学校でも見かけられるような様子だから違和感はない。だが資材搬入のトラックはどうだろうか。

資材の搬入。その動作は少なくとも小一時間は掛かる。また、資材搬入はどんな種類であれ、午前中に一回、午後に一回行われる。効率のためだ。

そして今はちょうど、午後の資材搬入の時間の真っ最中だった。

「（なんだこの違和感……）」

龍之介はトラックの動きに注目した。そして小さいけれど確固たる異常性が漂うイレギュラーを発見した。

「あのトラック……！」

龍之介が叫ぶ。龍之介が見つけたイレギュラーはトラックの動きにあった。

作業は小一時間掛かり、一度に資材を搬入するならば、どのトラックも同じ時刻あたりに来て、同じ時刻あたりに帰らなければおかしい。

しかしそのトラックは――、

「あのトラック、作業の真つ最中なのに帰ろうとしている!!」

「あれがSTEALTH・DECOYのトラックなのか!？」

「多分、そうだろう!」

龍之介と宙助はすぐさま、そのトラックの許に高速で降り立った。

同時刻。偽装トラックは学園の外に出て、スピードを上げようとしていた。

「隊長」

「何ダ」

「上から何か来ます」

「?」

ドゴッ!!!!!!

轟音と共にトラックがコンテナから拉げて潰れた。マーカスとその部下の篠宮和人は中破したトラックの運転席から飛び出た。彼らは、何事か、とトラックを見た。そこには、

「痛てててててて!!!!」

「全く無茶しやがって。ってかトラックはどこだ?」

「俺たちが踏み潰しちまったみたいだな」

宙助は中破したトラックの上からキョロキョロとあたりを見回す。すると道の脇にマーカスと和人の姿を確認できた。龍之介は彼らを

激しく睨み付けながらトラックからゆっくりと降りて来た。

「テメエ等か？ 備品を強奪したのは……」

「ソウダト言ッたら、ドウスル？」

「叩きのめす、さ」

「イイ度胸ダ」

「た、隊長！！ 援護を——」

「おっと、テメエの相手はこの俺、数野宙助サマだぜ？」

龍之介はマークスと、宙助は和人と、向き合った。それぞれの間に一陣の風が吹く。その傍らでトラックの残滓が揺ら揺らとした淡い火焰を出していた。

「（まさに決闘の雰囲気だな……）」

と、頭の中で思う龍之介は未だに痛む体を無理矢理動かしてマークスと間合いを取った。

「（コイツ……並々ならぬ殺気を放ってる……）」

龍之介は、吉事が『見たら』何と思うだろうか、とも思った。その男、マークスバーンスは、ほぼ写真通りの格好をしていた。『ほぼ』というのは、彼がB-A135・シュートマスターを手に持ち、腰に丸い物体を二個ほどぶら下げていたからだ。

龍之介はその物体に見覚えがあった。彼が拓巳から様々な兵器について話し合っていた時の事だ。

その兵器の名はエナジーグレネード。火薬の代わりにエネルギーを使った爆発を起こさせる画期的な兵器で非常に不安定で扱いにくいが、威力も高く、非常にコストが掛からない安価な代物だ。これもやはり軍用ライトブリットと同じく民間には出回っていないという話の物だった。

形状からしてマークスが携帯しているのは、鈴木機械製作工場のENG-S127・スズキグレネードだと、龍之介は判断した。

「（あれを炸裂させられたら……怪我だけじゃ済まねえぞ！！）」

龍之介は冷や汗を掻きながらマークスを睨んだ。龍之介はスケールツトセントリーを、マークスはB・A135・シユートマスターを、それぞれ構え、その銃口をお互いに向け合った。

一方、宙助はマークスの腹心の部下、篠宮和人と対峙していた。和人は男子にしては少し長めのストレートヘアが特徴的な男性であった。彼もまた歴戦の猛者でその爽やかなルックスに対し、良く鍛え上げられている肉体や宙助に向けられる、全身から溢れ出る闘志、殺気、プレッシャーは宛ら野生動物のような荒々しさに満ち満ちていた。

「（コイツもまた……ヤベエ雰囲気持つてやがるぜ……）」

「どうした？ 早く掛かって来い」

「そう慌てんな。俺は逃げも隠れもしねえーぜ？」

「（良く喋る男だ……時間を稼いでいるのか？）……ならばこちらから行かせてもらおう！！」

急接近する和人に対し、宙助は落ち着いて向き合った。

こうして両者の戦いの火蓋は切って落とされた。

【第十一章 マーカス・バーンズ】（後書き）

感想待ってます。受験期なので更新が滞る事態が発生する場合がありますかもしれませんが、出来るだけ早く皆様に作品を提供していきたいと思っています。

【第十二章 二人の勝負】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「見せてやろう!!」これがSTEALTH・DEC
OY隊長の側近、篠宮和人の闘いだ!!!」by和人ゝ

【第十二章 二人の勝負】

——何か嫌な予感がする。

拓巳はそう心の中で呟きながら琴音と共に龍之介と宙助を追跡していた。琴音のSA能力『ラン・アンド・チェイス』は龍之介たちの居場所を正確に把握していた。『ラン・アンド・チェイス』は琴音の体を目的地に向かって誘導させる。拓巳はそれに付いて行くようにして随伴した。

宙助が和人と戦っている頃、龍之介はマーカスの無線越しと思しき会話に不審なワードを聞き取っていた。

『面倒ダカラWSヲ出セ』

WS、ダブリュー・エス。これはWORKING・SERVANTの略称で全高3.5メートル、総重量5トンのサイズが主流の汎用作業重機である。二十一世紀初期に主に建設現場に姿を現し始めた物で、その小型さと乗用車とほぼ同じ安価さを売りに大量に回り、世の中に浸透していったWSはその低コストさ故に作業重機以外の用途にも使われ始めた。

マーカスの言っていたWSは少なくとも通常、日本の建設現場で御目に掛かれるような物では無い、改造機体かバリバリの軍用機だろう。

「おい、テメエ何と呼んだ？」

「我がSTEALTH・DECOYノWSダヨ」

「WSを持つてんのか？」

「アア、上物ダゾ？」

その返事の後、直ぐに空から空輸でやって来たWSは改造機だった。そのWSは着陸時、道路をお構い無しに凹ませ、削った。向こう側で戦っていた宙助も和人も思わず、その光景に釘付けになった。

「紹介シヨウ！！ コレガ我が愛機、《キングウィーク》だー！」
型式番号——WS・C111、《キングウィーク》。そう呼ばれた本機体はWSのデザインのテンプレートの人型で兎に角、派手で豪華だった。赤と白を基調に塗装された中肉型の本体は首、肩、肘、膝の付け根の関節部から放熱用の白い短めの毛がサラサラと生え、指はキチンと五本生えていた。頭部はゴーグル式のカメラアイを搭載しており、側面には細長い円柱形のセンサーが取り付けられていた。その外見からは改造元の機体が何であるか判別が不能なほど徹底的に改造し尽くされていた。
背部の四角いコックピットハッチが開き、その中にマークスは乗り込んだ。

『踏ミ潰シテヤルゾ』

頭部に取り付けられたスピーカーからマークスの声が漏れた。

「ヤバイ、このままじゃ歯が立たん」

龍之介はまだ人気の無い、通学路に逃げ込む。それをマークスの《キングウィーク》がズシン、ズシンと追い掛ける形で追跡していた。

龍之介には策があった。龍之介は昔から近所の地主の滝山幸造たちと共に中古部品や軍からのお下がりを使い、ハンドメイドWSを作成していた。まだ幼い頃に両親を失った龍之介はそれ位しか娯楽は無かったのである。まだ子供の頃から周りの様々な人々の影響を受け、その年頃にしては少し大人びていて、WSが好きだった龍之介はデザインやカラーリングを任されていた。そうして彼らはハンドメイドWSをごく最近の二月に完成させたのであった。

型式番号——WS・H119を冠する、その機体の名は《アクセ

ルショット》。黄色やオレンジ色に塗装されたテスト機染みたその機体は、龍之介本人の希望で重装甲かつ、高出力でそれなりに機動力も確保したレイアウトの機体だった。細い双眼式のカメラアイを備えた頭部は猫の顔を模したデザインで猫の耳のようなセンサー集合体を取り付けられ口元とも言うべき部位はフェイスガードで保護している。腕部には五本指のマニピュレーター補助用に作業用アーム『猫の手』が普段は折り畳まれて内蔵されてあった。

龍之介はそれに乗り込み、マーカスの駆る《キングウィーク》に對抗しようとしていた。免許なら習得していた。昨今、青少年の犯罪が増え、免許の習得を早めさせる事で若者を教育し、犯罪へ走る危険性を減らすという基本理論を持った大幅な法改正によって車やバイク、WSの免許習得は龍之介の歳になれば可能な世の中になっていた。勿論、試験はそれなりに難しいが龍之介はそれをなんとかクリアし、今に至る訳だ。

しかし自宅に収納されている《アクセルショット》への道のりは険しい物だった。

「クッソー！！！！どこまで追って来やがる！！」

龍之介は振り向き際にスカーレットセントリーを《キングウィーク》に向かって乱射しながら走っていた。しかし射出されたゴム弾は空しくコン、コンと軽い金属音を立て、パラパラと地面に落ちた。既にFN・P90の弾薬は撃ち尽くしていた。

「なんて硬い装甲なんだ！！」

龍之介は叫びながら走る。それが息を苦しくさせる、無意味で非生産的な行為だと分かりながらも、彼は叫ばずに入られなかった。

その頃、和人は宙助を一方的に攻撃していた。何故、宙助はそこまで不利だったのか。その理由は彼・篠宮和人のSAにあった。

『LC（LAG・CLOCK）』。『周囲に最大十秒の時間差を作り出す』能力。この能力によって宙助は窮地に立たされていた。

「（ヤベエ……アイツ、殴れねえぞ!!）」

宙助の拳は見事に時間差によって封じられていた。宙助が拳を振るえばSAでその動作に『時間差』を作られ、即座に動けなくなってしまう。そこを和人は突き、宙助を一方的に攻撃していたのだ。かと言って『LC』の効果範囲外に逃れようと試みれば、

「（い、今だ!!）」

宙助は精一杯走るが、

「『LC』!!」

『十秒』の時間差で移動を封じられ、

「（う、動けない!!）」

先回りされてしまい、

「そこだ!!」

和人の上段回し蹴りが宙助の頭に炸裂した。

こうして宙助は『LC』から逃れられず、ただただ体力を削らされていた。

「どうした？ その程度なのか？」

「く、クソッ!!」

宙助はナイフを振るったがその『動作』も時間差によって停止させられた。設定された時間差は『十秒』でその間、彼は和人に一方的に攻撃された。

和人の拳が、肘が、足が、膝が宙助の顔、鳩尾、腕、脚にめり込む。『十秒後』、その痛みは一気に電気信号となり宙助の脳に刺激を送った。彼は激痛に顔を歪ませ、あまりの痛さに愛用のコーンブレイドが手から離れ、地面に転がった。

彼は能力の他にも様々な武器を持っていた。

彼の、筋肉が凝縮し、鍛え上げられた肉体は正確で鋭く、重い打撃を生み出し、彼の頭脳は素早く回転し、能力を使いながらも作戦を

立て、常に宙助の上を行つた。

「早く立ち上がれ」

「く、くおお……!!」

「無様だな」

「おおお……!!」

宙助はヨロヨロと立ち上がった。足元のナイフを拾い、弱々しく振るが、直ぐに和人によつて顔面に拳をめり込まれた。

既に能力を使わなくとも和人は宙助に勝てるような状況だった。

だから和人は『LC』を停止させた。

「『遅れている』な……あまりにも『遅すぎる』」

「……」

「貴様はそこで寝ている……さて、と。隊長に合流しなければ……」

和人は身を翻し、ゆっくりとその場を立ち去ろうとしていた。宙助はそれを見ながら残りの力を振り絞っていた。そして一言ボソリと呟いた。

「……ここで一つ言っておく……『俺はまだナイフを持っている』と……」

「？」

その言葉を不審に思った和人が振り返るとナイフが急接近していた。

「……『LC』……!!」

和人は咄嗟にSAを使い、ナイフの動きに『十秒』のラグを生み、ピタリとその動きを停止させた。

「危ねえ……何しやがる!!」

和人は宙助を睨み付けようとするがそこに宙助は居なかった。

「何!? ど、どこだ!!」

和人は必死になって宙助を探すが、道路上にはどこにも居ない。

そう宙助は『地面』には居なかった。

「ははは……ふふ、はははははーッハハハハハハ！……！」
和人に『上』から笑い声が降って来た。宙助の笑い声だった。

「な、何——！！！」

うゝ上に……」

宙助は自らのSA「ハイウェイシューズ」を使い、空高く飛翔していった。

「ナイフに氣を取られたなア——！！！！」
篠宮和人才！！！！」

現在、宙助の居る高さは「25メートル」。宙助が戦闘中に無意識に感じ取った「LC」の効果範囲「20メートル」は優に超えている。

「喰らえ！」

宙助は空中で一回転し、何も無い空を『蹴った』。宙助は今、『2
5メートルという高さ×CN・パンツァーの補助による蹴り×宙助
自身の体重』という位置エネルギー、運動エネルギー、質量と蹴り
が炸裂した時の衝撃をかなり高めた状態で和人に大規模な跳び蹴り
を見舞おうとしていた。

その凄まじいスピードと恐怖感によって和人が宙助の蹴りに『ラグ』を生み出すのは不可能だった。

「この……クソカス、があああああああッッッ！！！！」

「往生せえやあああああああああッッ！！！！」
 宙助は己の全てを右足に集約させ、高威力の蹴りを放った。和人は自慢の肉体でその蹴りを受け止めようと両腕を交叉させ、身構えた。宙助と和人。その足とその腕。その二つは激突した。

龍之介は、なんとか自宅の大きなガレージまで辿り着いた。ガレージの中はお目当てのWS以外にも彼の様々な作品が並べられていた。彼は自身の工房の機能も兼ねるガレージに滑り込むように突

入すると、体育座りの体勢で収納されている《アクセルショット》の許へ駆けつけた。

「ちゃんと動いてくれよ」

祈るように独りごちた龍之介は《アクセルショット》に掛けられていたブルーシートを急いで外す。まだ新品同様に光沢を放つ《アクセルショット》の姿に龍之介は勇気づけられた。龍之介は背部コックピットハッチ開閉用の丸いノブ型レバーを『開く』と表記された方向に捻り、ハッチを開いた。

コックピットは暗く狭かったが安心感をもたらす雰囲気を持っていた。彼は軟らかいシートに腰掛け、WS用のOSを起動させる。コックピット内が明るくなりモニターが青白い光を放ち、動き出す。太く短く握りやすい形の二本の操縦桿を握り、ペダルに足を乗せた龍之介と彼を乗せた《アクセルショット》はガレージの外に出た。

「カメラアイとその他のセンサー系、問題無し。駆動系のモーター問題無し」

龍之介はモニターの右端に小さく表示されるWSの稼働状況のプロパティ、つまり様子を表す文字の羅列を目で素早く追う。

「準備万端、オールグリーン、と」

龍之介はモニターに映し出される景色とその中央に存在する《キングウィーク》に目をやった。龍之介の心に迷いは無かった。彼はWSでの戦闘はこれが初めてだったが、WSに乗るのは初めてではなかったからだ。そしてマーカスを殺す訳ではなく、行動不能にさせるだけが目標である、それが龍之介の迷いを消していた。

「フルボッコにしてやんよ……!!」

龍之介は《キングウィーク》を駆るマーカスにそう宣言した。

【第十二章 二人の勝負】（後書き）

『心の装甲』文章データがキング・クリムゾン（『吹っ飛ばされるの意』されたので結構時間が掛かってしまいましたが無事投稿出来ました！！

お久しぶりです。感想待ってます。

【第十三章 リアルバトル】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「ククッ……」 by 吉尾〉

【第十三章 リアルバトル】

龍之介とマークス。《アクセルショット》と《キングウィーク》の睨み合いは相当のプレッシャーを放っていた。

WS 同士の格闘戦は周辺地域に大きな被害をもたらす。その被害額は自動車事故のそれを上回るだろう。よって二人とも下手に動く事は出来ない。現実は無情だ。アニメのように激しいドンパチも出来ない。龍之介もマークスも弁償など出来ればたくないのだ。出来れば動いた時の隙を狙い、攻撃するのがベストだったのだが、龍之介は先に動いていた。好戦的な彼は長い沈黙に痺れを切らしたのである。

WS は機種にもよるがロボットアニメのように飛んだり跳ねたりは得意としていない。関節系や駆動系にダメージを負わせる事になるからだ。

WS はどの機種でも銃撃戦をあまり得意としない。狙いを付けるのが難しいからだ。

よってWS は派手な戦闘が出来ない。少なくとも戦場ではないこの日常的風景の中では無理な話だ。

だからWS は至近距離による格闘戦が望ましいのだ。龍之介とマークスも例によってその戦法を選んだ。

「うりゃあああああああッッッ！！！」

「セエエエエエエエエエッッッ！！！」

コックピットの中で叫び声を上げながら二人の男は激突した。二機の装甲から火花が散り、激しい振動が両者のコックピットを揺らす。龍之介とマークスは激しいWS 酔いに陥り、吐き気を催した。

しかし二人の戦闘はそんな事では当然、終わらない。

再び間合いを取った両機は短く睨み合い、龍之介の《アクセルシヨット》はWSサイズの野球用のバットのような形状の電流を流すスタン・バットを、マーカスの《キングウィーク》は堅く破壊力満点のマニピュレーターを、それぞれ武器に選択し、衝突した。再び火花が散る。バットと拳でさながら鏖迫り合いのような事をしながら二人は無線の共有回線で怒号を飛ばし合った。

『何故ここまでしてッ……！！！！』

『弱キすぴりつとあかれいどノ保護ノタメ、ダッ！！！！』

『それなら結局ッ！！ お前らは何も変わらないッ！！』

『何トダ！！』

『弱い者を虐げている者たち、とだ！！』

『ナニイ！！』

『自分の主張を能力や暴力を使って押し通す……正にお前らが憎んでいる一部の優等生みたいじゃないかッ！！！！』

『アイツラト一緒ニスルナッ！ ダッタラソウ言ウオ前ハドウナンダ！？』

『俺は……違ッッ！！』

『イヤ、同ジダ！！！ ソノ癖、自分ハ清廉潔白聖人君子気取り……ソノ上カラ目線ガ気ニ食ワナイ！！！！』

両者の実力は拮抗していた。その癖、両者とも、引かない、譲らない、力を緩めない。そして同時に彼らの主張は平行線だった。その議論には一切の譲歩は存在しない。

だから二人ともあらゆる意味で『拮抗』していたのだ。

「ちえすとオオオオオオオオオオオオオオオオオッッッ！！！！」

「ゼヤアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！」

スタン・バットとマニピュレーターは幾度と無く衝突、激突を繰り返した。その度に幾千もの火花が空中に四散していった。

《アクセルシヨット》がスタン・バットを大きく振り被り《キン

グウィークの頭部目掛けて振り下ろすが、際どい所で腕部にガードされる。

《キングウィーク》のストリートが《アクセルショット》の胴体すなわちコックピット部に目掛けて放たれるが、寸での所で避けられる。

その様子は攻防一体、一瞬の隙も無かった。再び両者が衝突した時、マールカスは龍之介にコンタクトを取ってきた。

「……貴様ラ安保部ハ、イツモソウダ……自分タチガ全テノ生徒ヲ救ツテイル氣ニナツテイル……ソナ下ラナイ錯覚、妄想、見当違イニ、才前ラハ取り憑カレテイルンダ……」

『そうじゃないッ……！……確かに俺たちが救えていない生徒、一見、救えているように見える生徒は、いるかもしれないし……！……いないかもしれないし……！……兎に角、俺は入部したばかりだから詳しい事は分かんねえ……！……』

「……【イルカモシレナイ】ヤ【イナイカモシレナイ】ジャナイン
ダ……現二居ルンダヨ……ソウイウ生徒ハ……」

『ああ、確かにお前の主張は間違つて無いかもしれない……でも、それは手段を間違えたやり方だ!!!』』

「俺ハ結果ダケヲ求メテ生きテイク……」

「目標達成までにどれだけ犠牲がでて良いって言うのかよ!!!」

龍之介はコックピットの中で無線に向かって叫んだ。龍之介の咆哮、訴え、思いが混然一体となった『ソレ』は無線越しにでもマールカスに確かに伝わった。

そのためか、マーカスの機体は僅かに不安定に、揺らいだ。それは彼の心の揺らぎを体現した物だったのかもしれない。

——そこだッ！！！！！！

龍之介が動かす《アクセルショット》のマニピュレーターはスタン・バットをしっかりと握り、僅かな揺らぎによって生じた《キングウィーク》の、マーカスの心の隙を突いた。
ゴンッ！！！！

マーカスの機体に生じた隙は右下腹部にあった。コックピット部から少し離れた部位である、そこは《キングウィーク》のバランスーと冷却機の一部が収納されている箇所だった。そこにスタン・バットから流れ出る高圧電流が侵入した。

《キングウィーク》の重要な部位をショートさせた高圧電流は機体の腰辺りから全身に行き渡り、あちこちショートさせた。

《キングウィーク》に痙攣、麻痺のような拳動が見られ、動力系に深刻なダメージを与えた事が分かった。

「う、お、お、おおお、おおおッ！！！」

後、一押し。そう言わんばかりに龍之介機が前に少し前進する。勿論、スタン・バットを《キングウィーク》の下腹部に突き刺したまままだ。そのまま押し込むようにしてマニピュレーターを操作しながら龍之介は《アクセルショット》をゆっくりと前進させた。

バキン、みしみし、ぱキッ、バチッ！！

嫌な音が住宅街に響いた。

『ウ、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ
！！！！』

共有回線からマーカスの機械に加工された苦しそうな呻き声が聞こえてきた。きつとショートしたコックピットの周辺機器が火花を散らし、マーカスⅡバーズが感電したのだろう、と、彼・松野浦龍之介は思考する。

すると、

『ピッ』

共有回線から明らかにマーカスの声では無い、音声が聞こえた。ん？ と龍之介は怪訝そうに顔を顰めた。

その時だった。

ボバツ、ボンツ、ドツ!!

短い爆発と激しい爆発が続けて起こった。発生源はマーカスの機体、《キングウィーク》のコックピット部からだった。

《キングウィーク》の頑丈そうだったコックピット部の装甲が内側から火柱を上げて、爆散した。やがて爆発は《キングウィーク》の上半身とそれに貼り付いていた装甲を纏めて吹っ飛ばした。

「え」

龍之介は驚愕に目を見開いた。たった今、マーカス「バーンズ」を乗せた《キングウィーク》は彼を乗せたまま、コックピット部が吹き飛んだ。

「ツツツ!!!???」

龍之介は慌ててコックピットハッチを内部から開けて、勢い良く外に飛び出た。

何かが焦げた臭いが充満していた。《キングウィーク》が両膝を地面に着かせる体勢で爆発し、燃えていた。その爆散したパーツが宙を舞い、あちこちに軽い金属音を立てながら散らばった。

龍之介はそこで、ハツ、と思い出した。

「（奴は……マーカス「バーンズ」は……あの不安定な『エナジグレネード』を携行していた……。さっきのシヨートによる感電で、『エナジグレネード』が点火してしまったんだ……）」

マーカスの退場はあまりにも呆気無さ過ぎた。

「俺は……奴を、殺した……?」

龍之介は途方に暮れていた。その半ば偶発的に生まれた言いようの無い罪悪感の所為で。

その後、直ぐに警察のWSと消防署のWSが現場に駆けつけた。誰かが通報してくれていたのだろうか、と、龍之介は思った。

近所の消防署が《キングウィーク》から出ていた火焰を消火した。警察が龍之介を重要参考人として署まで連行した。取調室で龍之介は刑事に安保部員証とWS免許と銃器所持免許と刀剣類所持免許を提示し、事情を一通り話した。

そして軽い取調べを受け、龍之介は解放された。

「（俺が殺ってしまった……おれがやってしまった……俺が……）」
龍之介は警察署からフラフラと亡霊のように帰って行った。

龍之介は、

少しマークスの機体を止めようとしただけだった。

殺す気は無かった。

彼・マークスⅡバーンズがエナジージェネードを所持していた事を少し忘れていた。

龍之介は思い返す。

彼の主張、叫び、嘆き——そして断末魔を。その全てが龍之介を責め立てる。

彼・マークスは、その方法は間違っていたけれど学園の事を考え、自分なりに行動していた人物だった。きっと、イジメを受ける前は善良な人間だったに違い無かった。少なくとも龍之介はそう思った。そして龍之介はそんな彼を殺してしまった、という自責の念に囚われていた。事故とはいえ殺人を犯してしまった。龍之介はそれらの思念が脳内で飛び交い、入り混じり、カオスとなって思考の海に溶けていく感覚を持った。

危険な事には慣れているつもりだった。SA能力が発見されてか

ら治安の悪いこの日本で、沢山の戦いを見る事も、実際に自分がやる事もあり、戦いには慣れていくつもりだった。しかし殺人は違った。するのは喧嘩と正当防衛だけで、殺人なんて起こした事がない龍之介はその罪悪感に埋もれていた。

しかし彼・松野浦龍之介には、その安保部員という立場と事故という状況から、彼を心から慰めてくれる人、心の痛みを共有して和らげる人は勿論、その罪を指摘してくれる人すら存在しなかった。

龍之介は皆の、その優しさが辛かった。

こうして彼の、その脆い『心の装甲』は簡単に、そして深く傷付けられていった。

【第十三章 リアルバトル】（後書き）

誤投稿すいません!!! これがキチンとした十二章です!!!
感想待ってます。

【第十四章 OwnCrimson】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「ラインハルトは趣味で付けた名前です。中二病全開
だなんて言わないでね」by密友／ラインハルトゝ

【第十四章 OwnCrimson】

上空二十五メートルから人間が落下すると死ぬ。これは当たり前の常識だ。勿論、落下時に巻き込まれた人間は下手をすると、いや、上手く対処しなければ巻き添えに、死ぬ。これも当たり前だ。幼稚園児でも分かる事だろう。

しかし宙助はそれを実行し、攻撃の手段として使った。宙助にはキチンと対処法が思い浮かんでいた。『滑り台作戦』である。宙助は蹴りをかます際、蹴りが外れないようにルートを作った。そのルートの形こそが『滑り台作戦』の真相だった。

宙助は自身の『移動するルート』をSAで滑り台の坂状に作り上げた。

滑り台の頂上から直に飛び降りるのと滑って降りるのでは脚に伝わる衝撃が天と地ほどに離れた差がある。宙助はこれを基本理論とし、『高さ二十五メートルの滑り台から滑って蹴りをかます』というコンセプトで攻撃を実行した。

これによって宙助は脚に伝わる衝撃を殺し、和人への蹴りの衝撃を多少減らしたが、なんとか維持しつつ、蹴りをキめた。その際、足元がミシリと骨が軋む嫌な音を鳴らしたが、宙助は衝突時の衝撃を和らげるために上手い脚捌きをしていた。勿論、打撲による腫れで足が紫色になりかけてはいるが、骨はなんとか異常が無い程度に衝撃を和らげられた。

「うりゃあああああああッッッ！！！！」

ガ、ガガガンッ！！！！ 衝突音が鳴る。

決まった、と宙助は内心、ほくそ笑んだ。宙助は前方向へと空中

でスライディングしながら、勢いを殺していく。SAで作った『ルト』なので空気以外の摩擦もしくは抵抗は皆無だった。

篠宮和人は見事に前方へと吹っ飛んだ。彼は安全にスライディングをしている宙助とは対照的に道路を二、三回バウンドし、最後に無様な感じで道路へ強制的にキスをする羽目になった。

形勢が逆転した。

「どうだッ！！！」

宙助がガッツポーズを取り、満面の笑みを浮かべた。

しかし宙助が本部に連絡を取ろうとインカムを弄ろうとした時、
「く、クソがああアアあああああああああああッッ
！！！！！！」

転がっている和人から叫び声が響いた。その声、いや轟音は大地、空気を揺さぶった。

「な、何だ！？ まだそんな元気が……！？」

「元気どころの話、じゃなああああああああいいいいいいいいいいッッッ！！！！」

「なッ！？」

宙助は心底、驚いた。両腕で宙助の滑り台キックを食らい、少なくとも腕が骨折していたであろう和人がすつくと立ち上がったのだ。

右目と両腕に紅き憎悪の焰、いや禍々しい闘気を宿らせて。

「て、テメエ！！ なんだそりや！！？ SAか！？」

「お察しの通り、俺の真のSA『オウン・クリムゾン』だよ……数野宙助エ！！！！」

「『オウン……クリムゾン……』？」

「そう。その意味は『我が濃紅』。……イギリスでは伝統的に血の色と関連付けられ、それゆえ暴力、勇気、苦痛を連想させる色でもある、クリムゾンの名を冠するSA……それがこの『オウン・クリムゾン』だ！！！！」

和人はその心の叫びの塊である能力について淡々と話し始めた。

「……この『オウン・クリムゾン』が崩す『所有』とは物体を結び付け、形作る上でとても重要な『概念』だ……。例えば貴様の手、その『手』は『腕』と所有で結び付いていて、『指』とも所有で結び付いている。そしてソレはお前の所有する『肉体』の一部だ……しかしその所有を崩せば？　どうなるか……簡単だな。『手』が崩れ去る」

「……！」

「なに、痛みは無いさ。現にお前の『肩』は服越しに掠った『オウン・クリムゾン』に焼かれ、一部が崩れ去っているんだぞ？」

「ッ……！」

確かに宙助の肩は歪に数センチ抉られていた。宙助は奇妙な感覚を味わっていた。血がダラダラ出ているのに全く痛みを感じず、違和感だけがあった。

「く……！」

「な？　痛みは無かるう」

「き、貴様あ……！」

「さて、貴様はどうする？　このまま屠られて死ぬか？」

「う、ぐ」

宙助は濃紅のSAを纏った和人の腕で首を掴まれ、高々と掲げられ、宙ぶらりんとなっていた。首が絞まり、呼吸が不安定になる。

「ウツがぎ……！」

「フハハハッ……！！　そのままゆっくり死」

ね、という言葉は発せられなかった。理由は簡単。

「ククク、『加速』して飛んできてやったぜえ。後輩よ……！」

「大丈夫ですかね？　自己治癒力を『強化』してあげましょうか？」

安保部の古株先輩である、浩孝と川浪不が和人の脇腹目掛けて二人同時にそれぞれのSAに補正された蹴りをかましていたからだ。

「せ、せんぱい……！」

「情けねえ声出すんじゃねえよ、数野」

「安保部員でしょうが、貴方は」

「す、スイマセン」

宙助は九死に一生を得た。あのまま和人に首を掴まれていたら、窒息死するか、首の骨を折られるか、『首』の所有を崩される所だったであろう。宙助がホツと安心していったその時、誰かが先輩たち二人の後ろから歩み寄ってきた。

「後輩さん、助かったか？」

「ええ、なんとか。ありがとうございます。ええと……情報提供者の『ラインハルト』さん」

「ま、本名は影由密友だがな」

童顔で中肉中背な密友は髪の毛はツンツン頭にし、青くカラーチェンジした制服を会社員のスーツみたいに改造しており、デフォルメされたイタチのイラストが入ったネクタイを着け、英文字がビッシリと並んだワイシャツを着用していた。この学園は個性とSAを十分に育むために改造制服を推奨しています。

「あ、貴方が先輩たちに連絡を？」

「そうだ」

「ありがとうございます！！」

宙助は深々と頭を下げた。

「なあに大した事無いさ……っとお目覚めのようなだぜ？」

密友が視線を向けた先にはフラフラとまるでゾンビのように立ち上がる血走った目をしている和人の姿があった。彼はそんな恐ろしい目で三人を睨む。

「糞共が！！　こうまでして我々の邪魔を……！！　まあ、良い！　！　獲物が増えただけ——ん？」

ぴー、ぴー、というブザーが彼の強がり割り込んだ。どうやら無線機に通信が入ったようだ。和人も何かと気になり、ポケットから小型無線機を取り出す。

「はい、もしも——た、隊長！！　は、はっ！！　分かりました！

！　それでは！！」

どうやら通信相手は彼の隊長——すなわち『マークス』だったようだ。どうやら彼は和人になんらかの連絡ないし命令を言い渡しているようだ。

「失礼します！　——ふ、運が良かったな、貴様ら。私はここで一時退場だ。見逃してやった、その命——精々、長持ちさせるのだな！！　さらばだ！！！」

彼はそんな三流染みた捨て台詞を残すと、どこかへと走りさってしまった。どうやら和人が隊長から受けた命令は、どうやら『撤退』だったようだ。

彼もN A——パワードスーツを着込んでいるのか、近くに建っていた建物の壁を蹴ったり、捕まったりと超人のような動きで宙助たちの目の前から姿を消した。

あまりに突然の撤退だった。全くの予想外の出来事だった。これからの戦闘について色々と考えていた三人は、その様子をただ見ている事しか出来なかった。

残された彼らは突然の出来事に啞然としていた。

——こうして和人と宙助の闘いは呆気無く幕を閉じた。

【第十四章 O W n C r i m s o n】（後書き）

明けましておめでとうございます！！ 初風呂のあとの初投稿です！！

感想待ってます。

今年も宜しくお願いします。

【第十五章 松野浦龍之介と『クラッシュクラスタ』】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「俺の出番が……」 by 浩孝〉

【第十五章 松野浦龍之介と『クラッシュクラスタ』】

龍之介は警察署からの帰り道、右腕に『クラッシュクラスタ』を顕現させようとした。しかし、心にダメージを負った今の彼ではくすんだ金、コバルトブルーの弱々しい装甲の残滓しか召喚できなかった。しかも淡く発光するだけに留まっているソレは時折、ノイズのように揺らぎ、今にも消えそうなほど不安定であった。

「ははっ……か弱すぎて反吐が出そうだ……」

龍之介は揺らぐ『クラッシュクラスタ』の残骸【CCR】を握りつぶすような動作で心の中に仕舞った。ポケットに手をつ込み、そのままゆつくりとしたペースで龍之介は学校に向かっていった。

「（俺の『クラッシュクラスタ』はどうやら結構、萎んじまっているみてえだな）」

SA。心の装甲は、その能力を使うスピリットアカレイド自身のメンタル面が大きな影響を与える。精神の強弱はSAの強弱に直結している。故に今の龍之介の弱り切った精神では、『クラッシュクラスタ』は勿論、『ノンアクティブ・スラスタ』すら出せず、顕現出来るのは精々『CCR』程度だった。

『クラッシュクラスタ』から爆破作業だけは受け継いでいる『CCR』だが、装甲の色彩もくすみ、その能力を制限しつつも、そのお陰で威力を上げる事の出来る『純白の起爆剤の羽』も付属していない。よって龍之介は爆竹並みのショボイ爆発しか起こせないまでに能力が弱体化していた。

「……『クラッシュ……クラスタ』……」

彼が力無く呼んだ、かつての相棒は自身の精神力の弱さ故に心の奥底に引き籠もってようで、その名を呼んでも姿を現さなかった。

それは今の龍之介をよく体現していた。

龍之介は考える。これからどうするかを。

「（マーカスの奴を事故とは言え、殺してしまったのは事実。俺はこの先、奴の死を背負わなければいけない）」

龍之介はホルスターに入った紅い拳銃を取り出す。弾は戦闘で撃ち尽くして、今は撃てない状態だ。しかし龍之介にとって、もっとも身近な『武器』の一つだ。

「……（俺の武器……能力は、人を傷つけるためだけの道具として持ったんじゃない。誰かを守るために持ったんだ）」
龍之介は銃を仕舞い、天を仰ぐ。

「——悩んでいても……マーカスは帰ってこない。悔やんでいても、前には進めない」

龍之介の脳裏にマーカスの言葉が蘇る。彼は弱者の自由のために闘っていた。その姿には——その方法が間違っていたとしても——輝く何かが見えていた。

「（……マーカス、すまねえ。俺はお前にした事を本当に後悔している。だから、その贖罪っていうのか、何だかは分からねえが——俺はお前が助けたかった分も『人助け』をしていこうと思う。……これが、今の俺に出来る精一杯だ。本当にすまねえ）」

龍之介は、マーカスに謝りながら、学園への帰り道を進んでいく。
龍之介にとって出来るのは、マーカスへの謝罪と彼に誓いを立てて、『赦し』を請うことだけだった。

——自分で自分を責め、故人への謝罪を続けていると、龍之介は心の傷は幾分か軽くなったような感触を感じた。
少なくとも誰にも責められなかった、さっきに比べれば、マシになったようだ。

——しかし彼はまだ知らない。マーカス＝バーンズが密かに生き

延びている事を。

一方、その頃、宙助たちは雑談をしていた。

「ふう……なんとか撃退できたな」

「そッスね……あ、ところで密友先輩ってどんなSA持つてるんですか？」

「ああ。『フラットメイス』というのを持つてる」

そう言うのと密友は両腕に上書きするように、覆い被さる筋骨隆々な『紫色の腕』を形成した。

「これはだな……『極限まで薄く引き伸ばされたエネルギーを操る能力だ』

「薄く……引き伸ばされた……？」

「そうだ。そしてこの『紫色の腕』だが……これはその薄いエネルギーを重ね合って形成されている。お陰で強度、パワーは最高だぜ」

「積層構造型、レイヤードSAってヤツですか？」

「ああ、そうだ」

積層構造型SA。スピリットアカレイドの中でもこのタイプのSAを持つ者は戦闘において近距離型の戦士になる場合が多い。その一つの理由に積層型の『射程が短く、パワーが高い』という点にある。積層型はその名の通り、小さなパワーのSAを重ねるようにして顕現させる。一つ一つのSAを細かく発動させ、纏まったパワーを出す、所詮は細かいSAの集合体なので刹那的にしか、そのパワーを発揮できないのだ。

「逆に言うとロングレンジからの攻撃には無力なタイプのSAなんだよ、レイヤードは」

「へえ」

「ちなみに俺の薄く引き伸ばされたエネルギーは隠匿性に優れ、爆

発的に反応する。……まあ、奇襲強襲に持って来いだな」

「安保部の協力者なんですよ？ 心強いッス」

「はは、どうも」

「確か……密友のコードネームは【紫腕のラインハルト】。【居眠りの龍之介】も同じ位の知名度だっけ？」

「そうなんスカ？ 龍之介と同じ位の？」

「ああ、龍之介は『能力が顕現しても中等部まで城門学園に入学しなかった事』、密友は『接近戦最高クラスの戦力』として有名だぞ」

「そうなんですか」

「ああ、俺と知名度が同じ位だけど意外性はあっちの方が高くてな……全く憎い奴だよ」

と、苦笑しながら密友は言った。残り三人も笑い声を上げる。

「じゃ、そろそろ部室に戻りますか」

宙助たちは戦況報告も兼ねて部室に向かった。

心の傷が多少、浅くなった龍之介は城門高校に辿り着いていた。あまり乗り気ではないが戦況報告も兼ねて部室に顔を出すつもりだろう。

今の龍之介は安保部所属のスピリットアカレイドとは思えない程、弱体化したSA『CCR』しか発動できない。

「はあ……」

大きな溜息を吐き、龍之介は部室に向かって歩き出した。

【第十五章 松野浦龍之介と『クラッシュクラスター』】（後書き）

一日に二話投稿出来るとは……… すごえぜ!! お正月POWER!!

流石、一日中ネットサーフィンしていただけた事はある……… 俺も伊達に『ネットダイヴァー』やってる訳じゃねえ!!!

という訳で感想待ってます。

【第十六章 妨害の狙撃手】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「俺の『兄弟』がこの様とはなあ。ガツカリだぜ」b
yサード〉

【第十六章 妨害の狙撃手】

それは宙助たちが部室に戻る時に見た光景だった。拓巳たちが何やら遠距離からの敵に狙撃されていたのである。どうやら増援要請を受けたはずの拓巳たちが来れなかったのは、ここで足止めされていたからのようだ。しかも長距離通信妨害の上に、川浪不たちは拓巳たちとは別ルートで動いていたため、妨害を感知出来なかったのだろう。

「狙撃……手……！？」

「くっ、どうやら片付けねえといけねえ問題がまだあったようだな」

「早速、拓巳たちを助けに行くぞ！！」

宙助、浩孝、川浪不の三人が戦闘体勢を取る中、遠距離の敵が苦手な密友は何やら険しい顔をしていた。接近戦専門の彼は天敵であるスナイパーが嫌いだったからである。

「行くぞおおおおおおおおおおおッッッ！！！！」

咆える密友。密友は狙撃を受けている拓巳たちの許へ駆け付けるために、足に出した『フラットメイス』で地面を蹴った。戦場の舞台は人工森林。土が爆ぜ、周辺に砂埃を撒き散らす。木の何本かが大きく揺さ振られた。しかし木が沢山生えているという事もあって、周囲には狙撃手の他にも伏兵が潜んでいた。

草むらから飛び出してきた伏兵は無数の木の葉を貼り付けた茶色のギリースーツに身を包み、同じくギリースーツで木の葉を貼り付けた小銃、M-16A4を構えていた。川浪不たちは勿論、宙助もこの兵士たちに見覚えがあった。

兵士たちの役職名は『影兵』。足止め、陽動、闇討ち、伏兵等の特殊任務を得意とするSTEALTH・DECOYの特務隊員たち

だ。影兵たちは、まるで拓巳たちへの道筋を阻むかのように小銃で弾幕を張る。しかし、負傷した宙助と浩孝たちの足止めは出来ても、【紫腕のラインハルト】こと影由密友を止める事は出来なかった。

しかし、その数において安保部を上回るSTEALTH・DEC OYの隊員だけあって、草むらから次から次へと影兵は出現した。その度に密友は『フラットメイス』で千切っては投げ、千切っては投げと孤軍奮闘するのだが埒が明かなかった。弾幕の質は一定を保っていた。相手側の指揮官は兵士を一度に出さず、分散して出撃させる事によって兵力を温存していたのだった。

この時、影兵たちを指揮していたのはクサヴァーバシユというドイツ人名のコードネームを持つ、甲山草徒という男子生徒であった。彼は部隊の指揮能力において定評があり、個人での戦闘能力も高い男だった。

白い手袋を詰め、紺色の軍服を着用しているエリート隊員然とした中尉、草徒は黒い髪をワックスで両サイドの髪を流し、後頭部でぴったり合わせた髪形をしていた。

草徒は腰のホルスターから軍用ライトブリットのB-A89・バーストハングを抜き、影兵たちと共に撃った。光の塊がゴム弾の雨に混ざって飛んでくる。

だが、密友は『フラットメイス』を纏わせた腕でそれを纏めて薙いだ。ドシュー！！！！という音と共にエネルギー体が霧散し、弾がパラパラと地面に落ちた。

「幾ら雑魚や雑兵が集まったところで、それは烏合の衆だ！！！！」

「【紫腕のラインハルト】！！！！やはり噂通りの化け物か！！！！」

「エルヴィス・プレスリーみてえな髪型しやがって！！！！」

密友は草徒に狙いを定めた。密友は草徒からの光の銃撃を弾きながら急接近してきた。草徒の腹に拳が迫る。

「アギヤ！！！！」

ズォ！！！！

草徒は密友の一撃によって地面に沈んだ。その一撃の衝撃波で周りに居た影兵たちも何人か吹き飛んだ。直撃を受けた草徒は勿論、吹き飛ばされた影兵は木の幹に衝突し、気を失った。凄まじい威力に大地と大気が震えた。流石は近接の鬼、【紫腕のラインハルト】だ。草徒はまだ、動ける影兵に連れて行かれ、撤退していった。

深緑色のフードの付いたグリーンスーツ——グリーンマントに身を包み、銀髪をアップスタイルに纏めた狙撃手・フィネ・アウフシュナイターは拓巳と対峙していた。彼女の使用している銃、SR-25はアメリカ海軍特殊部隊SEALS等で運用されている、非常に信頼性が高く、また最も精度の高いセミオート射撃銃の一つであるとして世界中で認知されるようになったスナイパーライフルである。消音器を取り付け、木の葉の付いた深緑色の布に包まれた、この狙撃銃は十字の照準に拓巳を捉えていた。

一方、安保部制服を着た拓巳は一見すると狙撃銃に見えるライフルを携え、フィネの狙撃を回避しながら、フィネに弾を撃ち返していた。

拓巳の持つ銃の分類は軽機関狙撃銃——LMSR。

その銃の名はT-LMSR fr (Takumi-Light-Machine-Sniper-Rifle-fusillade-aven)、通称・フューゼレイドレイヴンで拓巳がオリジナルで開発した専用のライフルである。

この漆黒のLMSRは全長420ミリメートル、重さ4500グラム、スチール製で有効射程距離は700メートル、装弾数はドラム弾倉で75発という仕様で、高威力の弾丸がある程度連続して射撃するくせに、それなりの集弾性、射撃精度を誇る。しかも拓巳は

この銃を用いながら自分の能力による弾道予測に加え、琴音の空間把握系の能力『マイソナー』の補助を受けているため、FINEを徐々に追い詰めていた。

しかしFINEも並みのスナイパーではない。位置がばれ、蜂の巣にされる前に的確に移動するため、体力は消耗しているとはいえ未だに無傷であった。そのため既に両者は数百発もの弾丸を消費していた。

「（俺の『ヴィヴィッドプロフィット』は連続で十秒しか使えないし、十秒ギリギリまで使い切れば十秒間のチャージが必要になる………」

拓巳はそう考えながらも短距離なら通じる無線で琴音と通信しながら木の陰より草むらに居るであろうFINEに撃ち返す。

乾いた銃声が林道に響く。金属音を立てながら葉莢が飛び散り、地面に落下する。正にそこは戦場だった。拓巳は以前、自分の父親と共に渡り歩いた戦場を思い出していた。

「（懐かしいな……この感覚。俺は今、確実に生きている事を実感している……）」

拓巳は木陰から飛び出し、次の射撃ポイントへと急ぐ。ギリースーツも着ずに隠れて狙撃する拓巳はFINEに比べ発見される確率が高いのだが、拓巳はその差を技術で埋めていた。

全方向に気を配り、上手く身を隠す。これは拓巳が戦場で見に付けた技術の一つだった。

拓巳は弾切れを起こした銃のマガジンを交換し、弾を装填した。そして、インカムに向かって小声で言葉を放つ。

『雨崎。敵の居場所を』

『分かりました………検索終了。三時の方向の草むらです！！』
『了解』

琴音は拓巳とFINEの位置を把握し、拓巳の視点になったつもりで居場所を教える。拓巳はそこを、すぐさま狙撃する。客観的に見ても見事な連携だ。

拓巳は指示された草むらを集中砲火した。草むらに数十発もの弾丸が吸い込まれるようにして飛翔していく。だが草むらはもぬけの殻だった。既にFINEは狙撃ポイントを変更していた。

「（しかし……さっきから一発も中らないと言うのは不可解だな……SAか？）」

『見栄崎さん！！ 次は十二時の方向の焼却炉の裏です！！！！』
『了解。狙撃する』

「（なにせよ相手の弾数も残り僅かだ……持久戦に持ち込めれば——）」

拓巳がそう思いながらも木陰から弾幕を張ろうと顔を焼却炉に向けた、その時だった。

「「！！！」」
「ザッザッザッ……」

数十人ものSTEALTH・DECAY側の増援が軍靴を鳴らし近付いてきていたのだ。

琴音もその存在を認識したらしく、驚愕の表情を顔に貼り付けていた。

「（何てこった……！！！！ 一人ならまだしも、一個中隊クラスの人数の相手なんて無理だ！！！！）」

拓巳は軽機関狙撃銃を抱え、琴音に後退を呼び掛けるサインを送り、敵の援軍と正反対の方向に走って行った。

「よお、『人殺し』」

「！！！」

その頃、龍之介はある青年と対峙していた。その青年は背広のような灰色の軍服、白いワイシャツ、黒いネクタイを身に着け、黒い革手袋を詰め、黒い革靴を履いていた。

そしてその容姿は『龍之介と瓜二つ』であつた。

「デメエ……誰だ……？」

「俺か？ お前と同じ竜騎兵だよ、松野浦龍之介。……いやラスト
「ワイヴァーン」

「竜騎兵……ラスト「ワイヴァーン」……？」

「そうだ。ま、俺はサード「ワイヴァーン」だからサードとでも名乗
つておくかな」

「さつきから訳の分からん事をペラペラと……ふざけているのか？
大体、何で俺と同じ顔をしているんだ？」

龍之介は刀の柄に手を掛け、臨戦態勢に入った。しかしサードと名乗った青年はそんな龍之介の行動にも構わずニヤリと笑みを浮かべた。

「そうやって……また人を殺すのかあ？」

「！？」

「見てたぜえ……お前がマーカス「バーンズ」をぶつ殺そうとしてる
所……。でも惜しかったナア。アイツ、死んでねえぜ？ でも良い
感じに殺意籠ってたよ、お前のWS捌き。そこは褒めてやるよ」

龍之介はサードが『マーカス「バーンズ」が生きている』と言った事に一瞬、ホツとした。この男は、『もしもマーカスが本当に死んでいるとしたら』その点を重点的に責めるような人間だ。だからそれを責めず、別の面からの精神攻撃に出たと言う事は、この男の情報は信じていいものだった。が、直ぐに彼に敵意を向けた。この男・サード「ワイヴァーン」は龍之介の神経を逆撫でしようとしているのか言動の要所要所に悪意が籠っていた。

龍之介は眼光を鋭くし、彼を睨んだ。

「テメエ……気に入らねえな。……吹っ飛ばす!!!!」

龍之介は何かを掴む時のように掌を中途半端に広げ、『CCR』を顕現させた。未だに精神への影響があるのか、彼のSAは不安定だが、それでも殴りかかる。

「オイオイ……ラストがサードに歯向かってんじゃねえよ!!!!!!」

同じ顔をした二人は激突した。一方はSA、もう一方は『素手』で対応していた。その動作は美しく、まるで輝いているかのようだった。

そして何故か龍之介は彼の手を爆破出来なかった。爆破による爆風は両者の衣服をたなびかせるほどに確かに発生していて、どうやらSAの不発では無さそうなのだが。

彼・サード＝ワイヴァーンは無傷であった。

「テメエ何ぞの相手に、SAを使う必要はねえナア!!!!」

「何だとお!!」

「力不足だっって言ってるんだヨオ!!!!!!」

両者は一度、弾かれるように離れ、宙を舞い、地面に着地した。そこで異変が起こった。

「——ッ!!!!??」

龍之介の顔が切り裂かれたのだ。右の眉毛から右頬に続く傷、左頬から鼻の右上端に続いている傷、下唇の左端から額の中央にまで続く傷が龍之介の顔にあった。

幸い、皮膚が切れるだけで、目や鼻はキチンと形を保っている。しかし、顔からは決して少なくない量の血が吹き出て、地面に垂れた。「見切れなかったようだナア、俺の刀を」

「か、たな、だと、おお……!!?」

龍之介は痛みに蹲り、顔を抑えながらも、サードを睨んだ。

「そ。この『刀』だよ」

サードは笑いながら龍之介の前に自らの『掌』を持って行った。掌に詰められた少し厚めの手袋の指、手の甲の部分には鋭利な刃が収納されており、隙間から美しい金属光沢を覗かせていた。

「これが俺の愛刀、肩透かしの手刀だ」

肩透かしの手刀。そう呼ばれた、その刃物は刀と言うには余りにも異質で異端であった。収納されている刃の集合体。その一つ一つの刃は細いが強靱で頑丈であった。正に『手刀』とでも言うべきその得物の目的は『素手と見せかけて相手を斬りつける』という卑怯極まりない物だった。

そう言えば、と龍之介は思考する。

「（そう言えば……奴の掌……離れる時に『輝いて』いなかったか！？）」

「おっと、その顔はようやく気付いたようだなあ。鈍すぎるぜ」

そう、龍之介はサードと離れた時に顔を斬られていたのだ。

その事実には呆然としている龍之介にサードはくくく、と笑い、言った。

「いいのか？ そんな所でた打ち回って。仲間がヤラレソウダぜ」

「なッ！？」

サードが指差す方向には敵の援軍に追われ、撤退している拓巳と琴音の姿があった。龍之介は思わず立ち上がってその方向に目が釘付けになった。

そしてサードに何かを言おうとして向き直ったとき、サードの姿は無かった。

代わりに一枚のメモ用紙があった。そのメモ用紙にはこんな内容の言葉が綴られていた。

『顔を触ってみろ。それが、お前が竜騎兵である証だぜ』

一応、龍之介は、そのふざけた内容のメモに従い、顔を触ってみた。
驚いた事に傷は跡形も無く消えていたのであった。

【第十六章 妨害の狙撃手】（後書き）

お久しぶりです。受験期なのでかなり投稿が遅れました。
感想待ってます！！

【第十七章 作戦終了後の帰り道】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「あゝ、今回も働いたなゝ。疲れた疲れた、と」by
川良不ゝ

【第十七章 作戦終了後の帰り道】

顔の傷の治りに気味の悪さを感じながら龍之介は走っていた。

「（顔がどういう原理で元に戻ったかは知らねえが、今は拓巳と琴音を助けるほうが先だ！！）」

龍之介は自分を取り敢えずラスト「ワイヴァーン」という存在だという事を認め、そのことについて考えた。

第一に自分たち『ワイヴァーン』とはどのような存在なのか。

この問いはサードと名乗った青年が着ていた軍服とワイヴァーンが架空の生物である飛竜——紋章学上でのワイヴァーンの図像は「強い敵意」を表し、戦争時や軍隊を誇示する必要がある時に使用される——である事から、

「（……俺は何かしらの実験の被検体なのか？）」

被検体、というのは別に突飛な話ではない。SA能力を軍用目的に使う研究はSA能力が発見された当時から様々な秘密結社で行われている事で、現にその研究の一環としてSAを受け継ぐ者の誘拐や売買も日本で多発している。

仮に龍之介の一家が誘拐され、その実験の生き残りが龍之介とするならば、

「（……その実験の際にデータ収集として採取された俺の体細胞があったとして……）」

あったとして。それがクローン製造に使われているとしたら、あるいは、

「（そのクローンが……サード、なのか……？）」

有り得ない話ではない。龍之介の爆破能力は希少で軍用に向いてい

る。そして龍之介の幼少期の記憶は地主に拾われた時からのものしか、ハッキリとしたモノがないのだ。

この事から実験の被検体、という仮説は十分に成り立つ。

第二にその『ワイヴァーン』に秘められたSAはどんなモノなのか。

この問いは、まだ全ての事は分からない。今のところ、奇妙な再生能力といったところだろうか。しかしこれからの安保部の業務である「対能力者戦闘」で自分にインプットされている新しい能力目覚めていく可能性は高い、と龍之介は自覚していた。

そして最後に『ワイヴァーン』はサードと龍之介——ラスト以外にも最低二人は居るかもない、という事だ。

サードやラスト、といった名前はいかにも研究者が好みそうな名前前で他にもファーストやらセカンドやら、居そうな感じがする名前だと、龍之介が推測したからである。

そうこう考えている内に龍之介は拓巳たちの元に辿り着いた。

「おゝい、拓巳！！！」

「りゅ、龍之介！！ 助かった！！！」

「どうしたんだ？ この大軍さんは」

「敵の増援だ！！」

龍之介は陣竜影子宗太郎を、拓巳はT・DPを右手に携え、大軍と向き合った。

「二人なら」

「なんとかなるよな」

そこから二人の時間稼ぎが始まった。『なんとかなる』というのは、相手を全滅させる事では無く、相手を攪乱し続ける事だった。

龍之介も拓巳も一人で複数人の相手をするのは苦手だ。勝率が見込めるのは一対一の状況のみだ。

それでも龍之介は震える手で刀を握り、非殺傷モードで大軍の内の一人に斬り掛かった。相手は衝撃膜のお陰で傷は付かないが、それでも派手に吹き飛んだ。

拓巳も拳銃で次々に相手の眉間を撃ち抜く。凄まじい衝撃が兵士学生の一人を卒倒させた。

龍之介が三人纏めて薙ぎ払い、そこから拓巳がT・LMSRfrの残弾を敵の集団に叩き込む。

迫り来る弾丸を龍之介が刀の衝撃膜で受け止め弾き返し、拓巳がT・DPを乱射する。琴音もFN・P90の残弾を援護射撃として消化していった。

一見、攻勢に見えるが龍之介たちは徐々に後退していった。なるべく、一対一に近い状況に持って行こうとするが、三人だけの戦力では無理があった。

フィネと復活した草徒が率いる部隊は規模も錬度も上等で、二人の指揮官によつて、よく統率されていた。その中には草徒の率いていた影兵の姿もチラホラ見られた。

「クソツタレ！！！！ まだまだ出て来やがる！！」

兆弾が木々の間を飛び跳ねる。

「クソツ！！ 吹っ飛ばす！！！！」

爆発の音と衝撃が響く。誰かのエナジージェネードが炸裂したようだ。爆心地に居た龍之介が、きりもみしながら吹っ飛び、茂みに墜落する。

「数野くんたちはまだなんですかー！！？」

銃弾のシャワーが安保部員とSTEALTH・DECoy側の隊員に降り注ぐ。どちらも敵の接近を許さず、弾幕を可能な限り張り続ける。

「押せ押せえ！！！！」

弾幕を乗り越え、拓巳に襲い掛かる学生兵士たちの怒鳴り声。

「勝機は我らに有り！！！！！！！！」

「ア————ツ！！！！」

両陣営の隊員の怒声と悪態と悲鳴と銃弾が飛び交う。

多くの薬莢が飛び散り、金属音を奏でる。

そこかしこが熱気で暑くなる。

「何時、応援は来るんだッ！！！！」

正にそこは地獄だった。

宙助たちが龍之介たちに合流し、その状況を脱するまで、あれからおよそ十分掛かった。

現在、龍之介たちは学園安全保障部室で結果報告を終えたところだった。流石に龍之介もマーカスを殺しかけた事やワイヴァーンの事は報告しなかったが、それ以外のことは全て報告した。

「ふんふん……分かったわ。ご苦勞様。……敵の規模も大きくなってきたるわね」

「そうだな……影兵の運用や武装やらが派手になってきてるしな……」

……

「僕たちが戦ったあの副官……かなりのランクの能力者だったしねえ」

「素早く片付けられなくなってきたしなあ」

記録をつけるサヤは密友、川浪不、浩孝と何やら話し合っている。

どうやら戦況はあまり芳しくないようだ。拓巳たちはそれに神妙な顔付きで聞き耳を立てていた。勿論、龍之介もそうしているのだが、何か他の三人よりも重たい雰囲気だ。

龍之介は帰還後、一人でトイレに行っていた。長時間の作戦の中で我慢していたのだが、作戦終了と共に尿意が込み上げてきたのだ。そしてトイレに駆け込み、用を足した龍之介は顔に激痛を感じた。何事かと、鏡を見てみると顔の傷が再び出現していたのだ。どうや

ら、用を足した時の気の緩みでS Aが解除され、あの奇妙な治癒状態から脱してしまったようだ。

そのことに気付いた龍之介はすぐさま、気を引き締めた。それに呼応するかのようにまた彼の顔の傷は消え、奇妙な治癒状態に移行した。

龍之介はそんな事もあり、考え事をしていたのだ。

「（……あの治癒能力はS Aで傷口を塞ぎ、その部分の代替物になるようだけど……ふとした気の緩みでS Aを解除しようものなら傷が再び開くのか……面倒だな）」

龍之介は、これからは暫くお風呂でも気が抜けないなあ、という思考を巡らせた。

彼の考え事がちょうど終わった頃、サヤたちも会議が終わったようだ。

「じゃあ私、報告書を伊豆香先生に提出してくるからちょっと待っててね」

サヤはそう言い、密友らと共に部室から退室した。こうなると、残り時間は暇で仕方が無い。

なんとなく、沈黙の空気が部室内を満たそうとしていた。

「ふう……それにしても今日は疲れましたねー」

と、琴音が沈黙を打ち破るように切り出す。

「そうですねー、あんな大部隊が投入されてくるとは……」

「武器の手入れとか、しとかないといけないかもなー」

「ですねー」

「それにしても龍之介がWSを使えるとはなあ」

「びっくりですよ」

「足痛え」

「大丈夫かよ。腫れてんじゃん」

「まあなんとか……痛えー」

といった雑談をしているとサヤたちが報告を終え、戻ってきた。そ

の手には、なにやら分厚い茶封筒が何束か存在した。そしてサヤたちの顔も何故かホクホクしている。

「どうしたんですか？ それ」

「報酬よ、報酬。作戦は一応、成功だしね」

「報酬？」

「金一封よー！」

ドサドサと机の上に置かれた茶封筒にはそれぞれ龍之介たちの名前が書かれていた。龍之介はその中から自分の取り分の封筒を取り、中身を確認し、驚愕に目を丸くした。

「こんなに貰っちゃって良いんですか！？」

「馬鹿ね。危険な作戦に従事する私たちには当然の報酬よ？」

「しかし……ひい、ふう、みい……」

「ははは、凄え」

「当分は金に困らないな」

三人は感嘆の声を上げ、琴音に至ってはその金額の多さに茶封筒を無言で抱えていた。

「じゃあ、解散って事で」

龍之介たちは制服に茶封筒を仕舞うと部室からゾロゾロと出て行った。

玄関まで行くと伊豆香が待っていた。どうやらサヤが報告を終えてからずっと待っていたようだ。

「皆さーん、帰りますよー」

龍之介と琴音は他のメンバーと別れ、暗い夜道を歩いていた。二人は帰り道がほぼ一緒なのだ。

「……」

「……」

やはり男女二人っきりで歩くのは両者共に緊張するもので二人は暫くの間、無言で歩いていた。

しかしそれに険悪さは微塵も感じられなかった。龍之介も琴音も出会って間もないが、お互い、『そんなに悪い人じゃない』という認識を持っているからだ。なんとなく恥ずかしいので、といった類の、沈黙。

「（今日は金曜日か……）」

龍之介はふと思った。明日は休日である。

「（出来ればどこかに遊びに行きたいなあ）」

連日の激務で龍之介は遊ぶ暇も無く働いた。だから彼は、休日は安部部も休みなので、久々——少なくとも龍之介の体感では、の話だが——に羽目を外したいと思っていた。

「（出来れば、）」

雨崎さんと。龍之介はそんな淡い期待を持っていた。しかし、彼女イナイ歴イコール年齢の龍之介はその事を切り出せずにいた。

沈黙が続く。

「あの……」

「な、なんでしょう？」

琴音が切り出した。龍之介もそれにぎこちなく答える。

「明日、休日じゃないですか？」

「え、ええ（キタ——！！！！！！）」

龍之介は内心、小躍りした。

「で、出来れば、ですけど……」

「は、はい」

「遊びに行きませんか？」

「え、ええ良いですけど（キマシタ——！！！！！！）」

「皆で」

「あ、はい」

龍之介は付け足された言葉に肩を落としかけたが、なんとか体裁を

取り繕った。

「さつき、皆で居た時に言い出せばよかったんですけど……タイミングを見失っちゃって……」

「あ、ああ。ありますよね、そういう事」

「だから言うなら今かなあ、って思いました」

「じゃ、じゃあ僕が連絡しておきますよ」

「あ、ありがとうございます！！ 私は先輩方に連絡します！！」

二人はそれから、どこに行くのか、とか、何時に集合か、だとかそういう話題で盛り上がった。龍之介は、まあこれでも良いか、と思うのであった。

【第十七章 作戦終了後の帰り道】（後書き）

なんとか事件を終結させる事ができました！！（いやぁ～大変だったなぁ）

思いのほか、長くなってしまったんで困ってたんですけど^^；
そんなわけで感想待ってます！！

【第十八章 そうだ。遊園地に行こう？】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「今回は出オチか……」 by 謎の男ゝ

【第十八章 そうだ。遊園地に行こう？】

結局、琴音の提案した遊びには、ほぼ全員が賛同した。ほぼ、というのは、密友、川浪不、浩孝の三人が都合により不参加だからである。

集合場所は東久留米駅。行き先は最近オープンした『東久留米ゴールデンパーク』というアミューズメントパークだ。

龍之介は集合時間である、午前七時の二時間前である五時に起床していた。

理由は簡単、着ていく服を吟味するためである。龍之介は、こういう時に着ていく服を選ぶ事は苦手であったからだ。

龍之介は滅多に開けないクローゼットから埃を被った衣類を何着か取り出した。

白のアルマーニ製シャツ、ブルーストライプのアルマーニ製ネクタイ、アルマーニ製黒いレザーシューズ、地主の知り合いであるイタリアのテーラーに作ってもらった、アラミド繊維を織り込んだライトラといった具合で『普通』の私服の存在が皆無であった。しかも何かにつけてアルマーニ製の高級服が出てくる。親の居ない彼に世話を焼いている地主が買ってきた物だ。

しかし制服で行く訳にもいかず、結局、龍之介は白いシャツ、水色のネクタイ、黒革ベルト、戦闘用背広、黒いレザーシューズどもを選んだ。

彼はその他の持ち物を確認した。財布——昨日の金一封が入っている——、携帯電話、ティッシュ、ハンカチ、腕時計——スウォッチの銀の腕時計だ——、自宅の鍵、スカーレットセントリー、予備弾薬の入ったカートリッジなどだ。

「準備良し。さてと行くか」
龍之介はそう独り言を言い、家を出た。

まだ寒さが残る今日、東久留米ゴールデンパークに行くのは龍之介を入れて、八人だ。拓巳、宙助、琴音、かぼす、刃先、サヤ、伊豆香と龍之介。

龍之介が来た時、集合場所には拓巳が居た。拓巳は黒いワイシャツに黒いスラックスの着用の上から黒いロングコートを羽織るだけという格好だった。

「よっ、拓巳」

「お、龍之……どうしたんだ？ その格好」

「あ、これか？ 着ていく服が無かったんだよ」

「お前……」

「そ、そんな哀れな者を見る目で俺を見るなッ！！ っていうかお前、早くね？ まだ一時間三十分前だぜ？」

龍之介は腕時計を示して言った。現在の時刻は五時三十分だ。

「べ、別に楽しみだった訳じゃないんだからねっ！！」

「男のツンデレはやめろ。で、本当は？」

「遅れちゃ悪いだろ？ だけど、ちよつと早く来すぎたか……」

「俺もそう思う……ってロバーツ先輩とかぼすちゃんは？ お前らの事だし一緒に来ているんだろ？」

「ああ、二人なら今、食い物を買に行ってるぜ」

ほら、と拓巳は駅前のコンビニを指差した。コンビニ内には確かに二人が居た。

「あ、ホントだ」

「な？」

龍之介はその後、コンビニから戻ってきた二人から鮭おにぎりを貰い、四人で十五分くらい雑談をした。サヤもかぼすも龍之介に服装の事を聞き、哀れな目で彼を見たのであった。

サヤは長袖の細く青い横縞が入ったＴシャツの上からライダーズジャケットを羽織り、ブーツカットパンツと黒いパンプスを履く、という格好で、かぼすはクリーム色のブラウスと同色の膝まで丈のあるスカートを着用し、その上から淡い桃色のコートを羽織るという服装だった。

十五分くらい経つと琴音と刃先が来た。琴音はセーターとキュロットパンツの上からシヨールカラージャケットを羽織り、ニーハイブーツを履くという服装で、刃先は白い半袖シャツと青いダメージジーンズとオレンジのラインが入ったスニーカーを着用し、その上からトレンチコートを羽織る格好だった。

「皆さん、遅くなりました！！」

「ごめん。早めに出たつもりだったんだけど」

二人は肩で息をしながら、そう謝罪した。

「まだ集合時間一時間前ですけどね」

龍之介は、時計を見ながら二人をフォローする。女子を気まづくさせるのは、精神衛生上良くないからだ。

しかし刃先と琴音は、

「でも待たせるって行動は罪悪感を生むよね」

「そうですね」

やはり気にしている様子だった。

「気にしないで下さい。今、来たところですから」

「そ、そうなんですか？　なら良いんですけど……」

琴音はそう言つて気にしなかったが刃先は龍之介の手や顔が寒さで少し赤くなっている事に気付き、苦笑していた。

その後、宙助と伊豆香がやって来た。

「いや〜お待たせっ!!!」

と、元気良く挨拶した伊豆香は水玉模様のワンピースの上からダッフルコートを着用している。

そして宙助だが、

「おい、お前その格好……」

「はは、似合うだろ?」

「いや、なんというか……」

派手であつた。彼は白の長袖シャツとジーパンを着用し、その上から紅い革ジャンを羽織っている、という格好だったのだ。

「いや、何も言うまい……」

「?」

自分の服のセンスも良いとは言えない龍之介はそれ以上追及しなかった。

「それじゃあ、全員揃った事だし」

「行きますか」

龍之介たちはタイミングよく来たバスに乗った。

暫くバスに揺られた彼らが到着した東久留米ゴールデンパークは最近出来ただけあつて、かなり綺麗な所であつた。

「わ〜!!! 見て見て!!!! 観覧車〜!!!!」

と、興奮した様子で伊豆香がびよんぴよんと跳ねている。宙助はそれをニマニマと眺めている。

「はいはい。少し落ち着こうね」

刃先は早速、安保部関係者に馴染んだのか、そんな伊豆香を優しく嗜めていた。

「さつさと中に入ろうぜ」

「寒いしな」

龍之介たちは足早に券売所で入場券を購入し、入場門を潜った。途端、眼前に広がる様々なアトラクションが彼らの目を引いた。

ジェットコースター、フリーフォール、バイキング、大人でも楽しめる本格的なお化け屋敷、空飛ぶ絨毯、エトセトラエトセトラ。

やはり、こういう時に感じる高揚感は幾つ歳を取ってもあるものだ、と龍之介は思った。

「今日はフリーパスを買ったから一々、券を買わなくてもアトラクションは楽しめるわ。何から乗る？」

と、サヤが発言した。こういう時、さりげなく場をリードする能力は、やはり彼女が安保部副隊長だからだろうか。

「まずは王道のジェットコースターからだろ」

「そうだな。ここのジェットコースターって結構有名だから早めに乗ってこうぜ」

と、龍之介と拓巳は言った。ここのジェットコースターは『臨場感が半端無い』という噂で、男ならば一度は乗ってみたい、と二人は思っていたからだ。

「乗ろー乗ろー!!!」

と、伊豆香も言い出した。好奇心が尽きない彼女はジェットコースターの方から聴こえてくる悲鳴や叫び声でテンションが上がってきてしまったようだ。

「しょうがないですね……」

伊豆香を除く女子勢は何やら乗り気でないようだ。

「どうしたんだよ。テンション低いな」

「ここのジェットコースター……『やり過ぎのスリルが味わえる』って有名なんですよ」

「仕様だろ、仕様。もしくは誇張表現じゃね？」

「そうだと良いんですが……」

「兎に角。乗ってみないと始まらないでしょ」

龍之介のその一言で女子勢はその重い腰を上げたのだった。

そんな感じで賑やかにジェットコースターへと向かう龍之介たちを見る二人の男が居た。

「……」

二人の男は、息を潜め、しかし自然に周囲の風景に溶け込んでいた。

一方の男——髪型をソフトモヒカンにした男は掌の中で水を踊らせていた。

もう一方の男——整髪料で髪を細かくツンツンと立たせている男は掌の中で塵を踊らせていた。

二人は暫く、龍之介一行を見るだけであつたが、彼らとの距離が少しばかり開くと、席を立て、尾行を始めた。

その動きは、まるでプロの暗殺者のように無駄の無い、自然な動きだった。

【第十八章 そうだ。遊園地に行こう?】（後書き）

更新期間がイマイチ安定しない絶賛受験生の私ですが、その上、日常編も満足に掛けないとは……いつも事件の発端を忍ばせてしまいます^^；

感想待ってます!!

【第十九章 そうだ。遊園地に行こう?】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「ここまでかませ犬臭漂うやられ方は初めてです」b
y 佐郎〉

【第十九章 そうだ。遊園地に行こう？】

ジェットコースターの乗り場に着いた龍之介たちの前にあったのは頑丈なシートベルトの付いた椅子と最低限の保護カバーが取り付けられている物がレールの上にあるだけの存在だった。つまり龍之介たちの乗るジェットコースター『ジェットシートDX』は座席に座った時の視界の広さが通常より段違いに広いのだ。また座席には床も無いため足も宙ぶらりんになることだろう。

龍之介たちはコースターの前に立ち、啞然としていた。

「なんだこれ……」

「スカスカだな」

「身長制限は何とかクリアしたぜ」

龍之介たちはそんな事を言いながらも座席に座り、シートベルトを下ろした。ガチャリ、という音と共にシートベルトがしっかりと固定される。

「だから嫌だったんです……！！」

「今更、泣き言いつでも仕方ないわよ、琴音ちゃん。精々、楽しみましょう……」

「ひゃゝ、下が見えるよ」

「楽しそー！！！！」

「お兄い……怖いよお……」

女子勢は泣きべそ二人、諦め一人、好奇心二人といった具合に態度が別れた。係員がシートベルトがしっかりロックされているかどうか丁寧にチェックして、

『それではスタートします。皆様、極上のスリルをご堪能下さい』

シートが走り出した。

最初に彼らを待ち構えていたのは山なりのコースだった。徐々に山の頂上へと『ジェットシートDX』は進む。

頂上に到達した。かなりの高さだ。シートは一時停止したかのようにつくりになる。

「来るぞ来るぞ」

「この緊張感……いいねえ」

ひい

そして落ちた。急降下だ。

[illegible]

乗客の悲鳴を無視するかのよう、シートはそのままのスピードで垂直方向に360度回転するように進化した。俗に言うループだ。回転は五回あった。

「死ぬ死ぬ死ぬってこれえ ええええええええええ！！！！ まじや
バイヤバイヤバイ！！！！」

回転後、休む間も無く第二の山が彼らの目の前に出現した。どうやらこの山とリニアモーターで加速をつけるようだ。更に落下。

[illegible]

今度は螺旋状に回転しながらシートは前に進んだ。三回くらい浮遊感を味わう。

シートは更に進む。かなりのスピードで、たまにレールを支える支柱などの構造物が直前まで迫るなどして、スリルは絶える事が無い。

「うわあああああああああああああッッッ！！！！！」
そして第三の山。これは位置の山より更に高い。頂上からあの巨大な遊園地の全体を見下ろせた。

「今度は何だ……？」

高い所からの螺旋落下だった。シートは地面に対し、ほぼ水平になりながら、回る。廻る。そのスピードは乗客にかなりのGを与える。「アアアアあああああつああああああああああ！！！！！」螺旋落下が終わった後も、瞬時にまた上昇する。

そして最後にその第四の山の頂上から先程とは違い、輪の短く、地面に対して六十度ほど傾いた螺旋落下。

その後、ゆっくりとプラットホームに戻って来た。

「はあ、はあ、はあ」

「こ、これを考えた、や、や、奴は頭がオカしい……」

龍之介たちはフラフラになりながら出口から出て行った。さながらゾンビの大軍のように。

『こちら火水。対象は『ジェットシートDX』を出たぞ』

『こちら拍子木。了解した』

『抜かるなよ』

『分かってるって』

そう言ってタワシのようなツンツン頭の少年、拍子木佐郎は通信を切った。

佐郎は龍之介たちを疲弊させるため、その休日を妨害するという任務をSTEALTH・DECAYから受けている城門学園のフリーの傭兵学生である。

彼はこの任務に相棒である火水燃継と共に従事していた。

彼の現在地はちょうど、彼らを見下ろせるラウンジのベランダに居た。佐郎の居るベランダと龍之介たちの居る大通りの高低差はおよそ四メートルある。

彼はそこから飛び降りた。

周囲に人はあまり居ない。そのため、彼の奇行は目立たなかった。

「よつと」

軽い段差を乗り越える程度の掛け声と気持ちで彼は前回り受け身を取るようにして難無く着地した。ダメージどころか服に汚れも付いていない。

その理由は彼が編み出し、実践している、ある『体術』にあった。

移動式実践体術、『脱衝』。パルクールなどの移動法の動きに敵の攻撃や戦闘時に受ける様々な衝撃への対処法もしくは回避法として開発された体術である。様々な脅威から『逃げる』事にその本懐を置き、その後の対処、つまり自身の攻撃で相手を鎮めるもしくは沈める業である。

今、彼は四メートルの高さからの落下により生じた衝撃を『受け流した』のだ。

「さて、と」

彼は目の前の龍之介に狙いを定めた。彼は一対一の戦闘を好んだ。完全なる『受け流し』は、一対一の時に出来る、と彼は自分の実力を評価していた。

彼は一対一を好む戦士。龍之介と同じように。

だから彼は今回の任務における戦闘方針も。

奴が一人になった時を狙う、と。

そういう風に決めた。

そうと決まれば、と佐郎は近くのベンチにおもむろに腰掛けた。

彼はプロフェッショナルで、専門家で、スペシャリストで、熟練者であった。

だから待つ。ひたすら待つ。最大の機会が来るまで待つ。
待ち続ける。

「はあ、喉が乾いたな」

刃先が気を抜くようにして、何気無く言った。何気無い提案だ。

「じゃあ何か買ってくるよ」

と、龍之介。彼も何気無い提案としてそう言った。

「じゃあ、コーラで」

「私はお茶でお願いします」

「俺は炭酸系でなんか買ってきて来てくれ」

「じゃ、じゃあ私も炭酸系」

「わ、私も!!」

「私、オレンジジュース!!!!」

「俺もお茶で」

「へいへい、と」

注文を受ける。何気無いやり取りだ。龍之介は少し遠くに設置された自動販売機に急ぐ。

拓巳たちからの視界から外れた、人気の無い、そのフィールドで。

龍之介はそこで、白地に青いラインが入ったシャツをオレンジのTシャツの上から羽織り、青いジーンズを着用している少年と対峙した。

相手からは明確な殺意を感じ取れた。

自販機のスイッチに手を掛けたまま、龍之介は言った。

「お前、何者だ……?」

「俺は『脱衝』の使い手、拍子木佐郎」

「ダッショウ……? ヒョウシギサロウ……?」

「詳しく言うと俺は城門学園でフリーの傭兵学生をやってる男でデメーラの休日の妨害を委託された」

「へえ、面白い事言うじゃん。本気かよ」

「ああ。マジと読んで本気と書く」

ズオツツツ!!!

周囲の雰囲気、空気が変質した。龍之介と佐郎の二人によって。

「お前のSA……」

「ん？」

「お前もスピリットアカレイドだろ？ お前のSAはなんだよ」

「塵を操る能力。お前は？」

龍之介の問いに佐郎はサラリと答え、問い返した。

「爆破能力」

龍之介も簡潔に答えた。佐郎が口元をニヤリと歪めた。

「面白え、掛かって来いよ」

「いいぜ。吹っ飛ばしてやる!!!!!!」

龍之介は言うなり、佐郎に殴り掛かった。何事も先手必勝、それが彼のポリシーだ。

佐郎はそれに冷静に対応する。

「はっと」

龍之介の拳を彼はジャンプしながら体をひねる動作で回避し、背後に回った。

「な!？」

「これが『脱衝』の回避技、だぜ!!!」

そこから彼は龍之介の背中に素早く肘鉄を打ち込んだ。

「が!!」

「更に!!」

更に彼は衝撃を受け、仰け反る龍之介に蹴りを放った。龍之介はそこからノーバウンドで弾き飛ばされ、自販機に衝突して、

「かつは!!」

やっと止まった。佐郎の凄まじいまでの脚力に龍之介はただただ驚いた。

「ゴハッ、エフツ!!!!!!」

「大した事ねえなあ、松野浦龍之介」

咳き込む龍之介に佐郎は嘲笑うかのように言った。彼の右手で塵が踊る。

「これで任務完了だ。喰らえ、『塵装』」

『塵を掌握する』能力、『塵装』によって生成された一振りの塵製の日本刀を、彼は高らかに掲げた。刀身が漆黒の刀だ。

「少し眠つてろ」

「……」

ドゴッ……！

龍之介は振り下ろされる塵日本刀を全力で回避した。正に間一髪で。龍之介が居た場所は、容赦無く抉られた。

「く、クソッ……！ 殺す気か……？」

「待ちやがれ……！」

逃げる龍之介に佐郎は、左掌の中で塵を踊らせ、塵製の拳銃を生成した。グリップまで漆黒の拳銃だ。同じく塵製の銃弾が塵拳銃から音も無く発射された。

「大人しく寝ている……！」

「ヒュッ……！」

龍之介は無様に半ば転げながら、足元にあった丈夫そうな小石を何個か拾い、塵弾目掛けて、発射した。

親指と人差し指を曲げて拳銃の形に保持した手に乗せた小石に、超指向性を持たせた爆風を与えたのだ。

龍之介に発射した小石弾は佐郎の塵弾を見事に命中、粉碎した。

塵弾は空中で木っ端微塵になる。塵は塵に還るのだ。

「まだまだア……！」

龍之介は更に、ある程度、威力に手加減を加えた小石弾を佐郎に向けて放った。

「くッ……！！！！（『脱衝』が間に合わないッッ……！！！！）」

佐郎の編み出した『脱衝』は高速で飛来する、小石の突撃を全て回避できるほど、極められた体術ではない。よって佐郎に小石弾の完全な回避は不可能なのだ。

「吹っ飛べ！！！！」

ズドドドドドッ！！！！

龍之介の放った小石弾は佐郎の右肩、左腕、左胸、鳩尾、右腰、左太股に計六発命中した。めり込んだ。佐郎の体が宙に浮く。

「ゴッ！！！」

ドパッ！！！！

佐郎は小石弾を受け、その衝撃で近くの池に落ちた。水面は大きく乱れ、水飛沫が飛ぶ。

「は……はあ」

拍子木佐郎の完全な沈黙を確認し、龍之介は大きく息を吐いた。そして独り言を一言。

「全く、迷惑な奴らだぜ」

そう言った彼は思い出したかのように、御使いを果たすべく少し拉げた自販機に足を運ぶのであった。

【第十九章 そうだ。遊園地に行こう?】（後書き）

最近はペース良く投稿出来てます。劣化してるところがあったら言
って下さい!!

という訳で感想お待ちしています。

【第二十章 そうだ。遊園地に行こう?】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「こっからがパーティータイムだ」by燃継ゝ

【第二十章 そうだ。遊園地に行こう？】

拍子木佐郎との戦闘を終えた龍之介は、何事も無かったかのように拓巳たちの許に戻った。実際、目に見えたダメージを受けていないのだから、何事も無かったかの『ように』というのは正しい。

龍之介は、飲み物を配る途中、宙助と伊豆香の姿が無いことに気が付いた。

「あれ？ 宙助と伊豆香先生は？」

「ああ、あの二人なら待ち時間が退屈だったんで、ゴーカートに乗ってるよ」

ほら、と拓巳が指差した先には、確かにゴーカートに乗っている二人の姿があつた。随分と楽しそうだな、と龍之介は思った。

「飲み物が冷めないと良いがな」

「そだな」

龍之介は自分の分であるコーラの蓋を開けた。プシュツ、と爽やかな音が響く。

松野浦龍之介には、コーラを一気飲み出来る、という特技がある。その後にゲップも出さずに飲める、という密かな特技だ。

龍之介はコーラ飲みとしての矜持として、その特技に日々磨きを掛けていたため、一気飲みの動作は極めて素早く、滑らかだ。

爽やかで目が覚めるような刺激が彼の喉を通過する。彼は僅か十秒でそれを飲み終えた。

「えい」

右手で握った空き缶の表面を軽く爆破させ、ゴミ箱まで飛ばした。

カコンツ！ と軽快な音を立て、スチール製の空き缶はキチンと分別された。

「器用だな」

「どうも、と」

拓巳は龍之介の隣に座っていた。二人は何も喋らない。ベンチを占

領する、その二人の雰囲気はどこか真剣みがあった。何か二人で話したい事があるのかしら、と察したサヤは琴音とかぼすに、お手洗いに行かない？ と誘い、二人から遠ざけた。

二人だけになり、龍之介はようやく、拓巳に話し掛けた。

「あのさ」

「ん？」

「サプレッサー、持っていないか？」

「何か事件か？」

拓巳は龍之介の質問に質問で返した。龍之介は黙り込む。

「ほらよ」

拓巳は沈黙を答えと受け取り、筒状の物体を手渡した。龍之介もそれを受け取る。

長年、付き合っている二人だからこそ、だ。

「ぶつはあ！！！」

拍子木佐郎は息を吹き返すかのように池から出た。髪も服もびしょ濡れだ。幸い、通信機は防水処置が成されてあったため、正常に作動した。

『もしもし、俺だが』

『火水か？ やられたよ』

『何い！？ 松野浦にか！？』

『ああ、新入生だと油断してたよ』

『全く……そこに居ろ。直ぐ行く』

『ああ、待ってるぜ』

通信はそこで終了する。佐郎は通信相手であり、相棒の火水燃繼

の到着を待った。

通信終了から二十秒後、燃継はパルクールの要領でそこに到着した。彼は佐郎から『脱衝』を学んでいる。彼もまた『脱衝』の使い手だ。燃継は濡れ男状態の佐郎を見て、溜め息を吐いた。

「おいおい、それでも気紛れ組の傭兵学生かよ。情けねえ」

「面目無い……」

気紛れ組、とは城門学園にある、生徒、先生問わず様々な依頼人から依頼を受け、それを実行する組織である。【気紛れ傭兵】というところ傭兵学生がリーダーである。

燃継は『水を操る』能力のSA、『ウォーターバレット』で佐郎の服や髪から余分な水分を吸い取った。

見る見る内に佐郎は乾いていった。その進行状況に比例するかのよう燃継の掌には、ブヨブヨとしたまるで無重力空間にあるかのように丸まった水の塊が溜まっていった。

「ほらよ。完了だ」

「ありがとな」

すっかり乾いてさっぱりした佐郎は、

「さてと、任務を続行するか」

「そうだな。でなければボスに怒られる」

「ボスのあのSAは正直、喰らいたくないしな」

「あれを喰らったらと思うと……寒気がするぜ」

「てな訳で今度は三人で襲撃だ」

「三人？ 俺とお前と……後は誰だ？」

「“侍商売”だ」

現在、この日本は治安が悪く、住民は各々、様々な武器を取り、自衛をしている。しかし幼稚園児や小学生低学年は、自衛を上手く出来ない者が多い。そこで用心棒——勿論、中高生や大人の中에서도利用したい人は利用している——が商売として成り立つようになってきたのだ。その中でも刀を使う用心棒を“侍商売”と呼ぶ。

彼らはそれを万が一に備え、雇っていたのだ。しかも同年代、同級生の侍商売を。

そう燃継が言った後、一人の侍が佐郎の方に歩み寄ってきた。

「紹介しよう。那美矢甲紀先生だ」

「先生は止せ。那美矢でいい」

無愛想にそう返した男は、髪を総髪——帯刀を許された現在、特に侍商売の中で再び流行り始めている髪型だ——に纏め、和服を着こなし、草鞋を履き、太刀と脇差を挿した侍のような風貌の男であった。年の割に目は鋭く、猛禽類のような雰囲気を漂わせている。

太刀の号は鍋斬り明徒、その由来は、試し切りとして鉄鍋を切ったところ、綺麗に真つ二つとなった事からで、刃長は二尺七寸、刃文は一定の間隔ではぼ整然とした互の目で、深緑色の鞘に収められている。

脇差の号は顎突明徒、その由来は、とある侍商売が、戦闘の際に相手の顎をこの脇差で突き刺し、絶命させた事からで、刃長は一尺四寸、刃文は真つ直ぐな直刃で、これまた深緑色の鞘に収められていた。

両方とも現代刀工の奇才にして変態と畏られている、仕合明徒の作である。

「那美矢さんは居合い道の達人で、SA能力者でもあるんだ」

「都合により能力効果は言えんがな」

「いいですよ。使う時になったら使って下さい」

「了解だ。そのタイミングはこちらで計らせて貰う」

こうして気紛れ組の二人は侍商売を一人足して、遊園地の風景へと溶け込むようにして歩き出した。

流石に集団で行動している内は襲って来ないだろうと推測した龍之介は、最低限の注意を周囲に配って、後は純粹に休日を楽しむことにした。

このゆつくりとした上昇は、悪く言えば死刑台への十三階段、日常的に言えば歯医者さんの待ち時間、といった緊張感を彼ら一行にもたらししていた。次第に地面から遠くなつていく景色は何とも言えないものだった。

そして頂上に到着。

全員、固唾を吞んで、落下に備える。

「「「「「「「「「ぎや ああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 あああアツツ!!!!!!」「」「」「」

龍之介は彼らの中で一番絶叫マシンが好きなメンバーで、それ故

に何回も乗った経験者だった。その龍之介でもそれぐらい評価するほどの落力。彼らは擬似引力というべき力を感じていた。

そして終了後。龍之介はベンチで休んでいた。常に気を張り巡らせていたら、疲れてしまい、戦闘時に力が出ない事や琴音たちに気付かれてしまったため、龍之介と拓巳は交代で周囲を見張っていた。

何事も無く午前十二時に差し掛かった頃、伊豆香が不意に、

「何か食べたいな」

と、言い出した。他の七人も、そう言われれば、と空腹を実感し始めた。

「何か食べに行きますか」

龍之介の提案に、彼らは一も二もなく承諾した。

幸い、フリーフォール『スターインパクトEX』の近くには様々な料理が食べられる御食事処、《レストラン・ゴールデンパーク》があった。

先日、食事をしたファミレス・ミラノコンツェルンとは違い、スムーズに席を確保した龍之介たちは、ランチバイキングとドリンクバーを注文した。

「わーい！！ バイキングだー！！！」

伊豆香は席確保後、すぐさま、種類・数共に大量に並べられている、バイキング会場に素早く取り付きに行ってしまった。

その性急な様子に刃先と宙助は、

「あ、ちよつと……スイマセン、伊豆香先生の手綱握ってきますね」

「お、俺も行くよ」

と、席を立ち、彼女を追った。龍之介はその様子に微笑ましく思いながら、

「何か取ってきましようか？」

と、琴音たちに言った——勿論、「いいですよー。自分で行きますって」と優しく遠慮され、辞退されたが——後、自分の料理を取りに行った。

一方、その頃。

「居たぞ、あそこだ」

「くっそ、呑気に食事なんてしゃがって……！！！」

「ふむ、彼らがターゲットか」

と、茂みからレストラン内を覗く奴らが三人居た。

佐郎と燃継と甲紀だ。彼らは執念深く、龍之介たちを気付かれな
いように気配を消しながら尾行してきたのだ。

「我々も行くとするか」

「ええ、甲紀さん。出番ですよ」

「うむ」

「じゃあいつちょ、やりますか」

三人はごく自然な感じにレストランに入っていったのだった。

【第二十章 そうだ。遊園地に行こう？】（後書き）

どうも、お待たせいたしました。

そういえば、ガールズラブ要素が足りないなあ、なんて思う、今日この頃ですが、皆さんはどうお過ごしでしょうか？（最悪な挨拶）
ご多忙な皆様の適度な清涼剤を提供できれば幸いです。
という訳で感想待ってます！！

【第二十一章 そうだ。遊園地に行こう?】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「まだあわてるような時間じゃない」by膳ゝ

【第二十一章 そうだ。遊園地に行こう？】

「少し、席外すな」

龍之介はそう言って、拓巳と宙助を連れて、琴音たちの居るテーブルから離れた。佐郎たちの気配を察知したからである。無論、佐郎たちは龍之介たちを引き付けるために、わざと気配を漏らしているのだが。

佐郎たちは、琴音たちの居るテーブルのすぐ近くに居た。といっても、佐郎たちの居る所は琴音たちからは見えないボックス席だ。「よお、待ってたぜ。表に出な」

言いながら佐郎が出口を親指で指した。龍之介たちもそれに頷き、甲紀たちにくる形で、静かに外に出て行った。

龍之介たちが店から出て、人気の無い寂れた広場で、決闘を始めようとする最中、それを木の上から見る二人組が居た。

一人は整髪料で、前髪を左に流し、両サイドの髪を後ろに向かつて流した髪型をした、ボタンを二個ほど外している白いワイシャツの上から白の方眼模様の入った紺藍色の背広を着ている十四歳の長身な男と、もう一人は、可愛い顔付きだが無表情で、茶色が斑点のように黒に混じった、短く切り揃えている髪をした、紅いパーカーに黒いスラックスを着用している、これまた十四歳の小柄な女だった。

流し髪男が双眼鏡を覗いているパーカー女に言う。

「おい、早良。佐郎と燃継は上手くやってるか？」

サワラ、と呼ばれたパーカー女は双眼鏡を覗きながら、

「はい、膳兄貴。今のところは、さっきの佐郎の失態以外は、ですけど」

と、抑揚の無い声で言った。

この二人、男の方は木乃原膳、女の方は西山早良といい、城門学園と東久留米市付近では、結構有名なスピリットアカレイドのコンビであった。

【気紛れ傭兵】膳兄貴と【無感情武装参謀】早良。傭兵学生組織、気紛れ組のナンバーワンとナンバーツーである。

「ふむ、このまま任務を遂行してくればいいが……」

「心配なのですか？」

「まあな。あいつ等はまだまだまだヒヨツ子だ。そりゃあ心配にもなる」

「面倒見が良いんですね」

「いつもの事だろ」

二人は静かに佐郎たちを木の上から見守っていた。

「さて、死合おうか」

甲紀がそう言い、太刀・鍋斬り明徒を右手で抜いた。佐郎も燃継もそれに続き、自分のSAを発動させた。

三人は曲がりなりにもプロであった。

三人はジリジリと龍之介たちとの間合いを取る。自分たちの技能とSAを使った戦闘において、最も得意する間合いに。

佐郎は中距離。彼は塵を使い、攻撃、妨害、防御といった風にオールラウンダーに戦う事ができるからだ。燃継は遠距離。彼は水を使い、遠距離から攻撃することを得意とするからだ。甲紀は近距離。無論、彼の武器が刀だからである。

龍之介たちも戦闘態勢に入る。

龍之介は中距離。普段なら愛刀・陣竜影子宗太郎を用いた近接戦闘を得意とする彼だが、今は昨日の夜、機能の回復を確認した発火・熱風系能力『クラッシュクラスター』と愛銃・スカーレットセントリーを用いた中距離戦闘を選択した。拓巳は遠距離。拓巳の情報獲得系能力『ヴィヴィッドプロフィット』は使用の際、『未来を見る』ためにどうしようもない隙が生じてしまう。そのため戦闘では相手との距離を取らなければならない。だから彼はFLASH・SOUNDの指揮官で、スナイパーで、後衛なのだ。宙助は近距離。宙助は自身の小柄な体格と移動系能力『ハイウェイシューズ』を用いた近接戦闘を得意とする、チキンだが堅実なFLASH・SOUNDの前衛だ。そうなる と 必然的に、佐郎は龍之介と、燃継は拓巳と、甲紀は宙助と戦うことになった。

佐郎は龍之介を睨み付けて言った。

「よお、松野浦、龍之介……だっけな……。やっとさっきの借りが返せるぜ」

「拍子木……佐郎……!!!」

龍之介と佐郎の戦闘は始まった。龍之介は『ノンアクティブ・スラスト』を用いた渾身の左足による中段前蹴りを放つ。しかし佐郎はそれを『脱衝』を使って難無く回避した。

龍之介は続けて、右手刀、右ストレート、左ストレート、右足の中段横蹴りのコンボを佐郎に放つ。勿論、能力補正付きだ。

しかし、

「ははっ!!! 遅え、遅え!!! その動きは見切ってたんだよ!!!」

『脱衝』の使い手・拍子木佐郎には通用しない。初戦の油断は一ミリも見られない。

「こっちの番だぜ!!!」

掛け声と共に佐郎の凶悪な蹴りが龍之介に飛来する。佐郎は右の前蹴りで龍之介の右肩、左腕、左胸、鳩尾、右腰、左太股をメッタ打

ちにした。

それは龍之介が初戦で佐郎に小石弾を撃ち込んだ箇所と寸分の違いも無かった。

「これで『体』の借りは返せたな。だが!」

台詞と共に、次は佐郎の拳が龍之介に飛んで来る。正拳突きだ。

その拳は先ず、龍之介の顔にめり込む。

「まだ!」

繰り出されるのは突きの連打。ラッシュ、ラッシュ、ラッシュの連続コンボ。次々と、休む事なく、龍之介の肉体の様々な箇所突き刺さる。

「『心』の借りが返せてねえ!」

「う、ぐ、ぎ、ああああああああああ!」

シッパアン!」

そしてブラジリアンキック。宙に見事な弧を描き、龍之介の頭に炸裂した。

「く、くあああ」

満身創痍の龍之介は暴力の暴風雨と化した佐郎から力無く少し距離を取り、

ジャキン!」

サプレッサー付きのスカーレットセントリーの銃口を素早く彼に向けた。

「うおおおおおおお!」

プシュ、パシュ、パシュ。

発砲。サプレッサーこと消音器のお陰で空気の抜けたような音が鳴る。銃弾が走る。

「ハアツ!」

対する佐郎は大気中、地面の塵を総動員させ、障壁を作る。塵障壁は塵弾とは違い、かなりの硬さを持つ。ゴム弾程度は弾き、防ぐ事が出来る。

「無駄だ! 『塵装』!」

ポロポロポロと。案の定、三発のゴム弾は地面に空しく落ちる。

「く、そ」

龍之介は更に引き金を引く。弾倉内の弾を使い果たすが、カートリッジを換え、更に撃ち続けた。

しかし弾丸は塵の壁に空しく遮られ、佐郎には届かない。

龍之介は焦っていた。佐郎には自分のチカラが届かない事に。

佐郎も焦っていた。龍之介のダメージが直ぐに回復する事に。

二人とも焦り、互いにその事には気付かない。

一方、宙助と甲紀の戦いも始まっていた。

「……」

「……」

宙助はナイフを、甲紀は太刀を、それぞれ構え、隙を窺っている。

先に動いたのは宙助だった。宙助はナイフを投げ、自分も甲紀に突っ込んで行った。甲紀も太刀でナイフを弾き、返す刀で宙助を袈裟掛けに斬ろう——非殺傷モードなので正確には、殴打だが——とした。

だが、

「はああツツツ！……！」

ズシャアアアアアアアアツツ！……！！

宙助は地面の砂を蹴り上げ、甲紀の視界と動きを妨害する。甲紀も砂をすぐさま吹き飛ばすが、宙助は既に彼の懷に潜り込んでいた。弾かれたナイフを右手で拾い、持つて。

だが何度も言うように甲紀もプロだ。彼も既に脇差・顎突明徒を左手で抜いていた。二刀流だ。

「ここで斃れる」

「喰らうかッ！！」

宙助に脇差が迫る。が、宙助はそれを見事に回避した。彼はナイフを甲紀の鳩尾に向けて走らせる。

そして同時に甲紀の術中に見事に嵌まった。

「カッ！」

宙助は短く息を漏らす。

何事かと、視線を下に落とすと――脚だ。甲紀の脚が宙助の腹にめり込んでいた。

脇差は凶。右手のナイフは甲紀には届かない。

――まあ左手のナイフは別だが。

「グッ！！」

甲紀も宙助の保険に引っ掛かった。

宙助は甲紀というプロをナイフ一本で倒せるとは思っていなかった。現実はそのままで甘くないし、上手くも行かない。

それを認識した上での左手のナイフ。

保険用のサブナイフ。ライクリーフというコンブレイドとは別に作っていた薄く鋭いハンドメイドナイフ。

それは、その存在は見事に甲紀の隙を突いた。

一方、拓巳と燃継の戦いも始まっていた。

「遠距離ってさ、派手じゃないけど中々面白いポジションだね」

「ああ、結構ハマる」

彼らはそんな雑談をしながら、

拓巳は目を朱、蒼、碧と、様々な色に、鮮やかに光らせ、燃継は手に、常に、生き物のように流動する水を纏わせ、

――隙を窺っていた。

「どこまで戦場を見渡せるか、どこまで冷静で居られるか」

「時には大胆、時には狡猾」

「それが」

「遠距離の人間に求められる」

「条件だろ？」「資格だろ？」

まるで芝居のような見事な異句同意。

「あんたとは気が合いそうだよ、見栄崎拓巳」
「お前もな、火水燃継」

先に動いたのは燃継だった。燃継の水流操作系S A『ウォーターバレット』で操られた水は弾丸のように三発、発射された。

それに対し、拓巳は弾道を『ヴィヴィッドプロフィット』で予測し、的確に回避する。水弾は拓巳の後方の壁に三つの小さな、しかし深い穴を空けた。

「（たかが水を凝縮して撃ち出した弾が何て威力なんだ！！）」
「オラオラ、行くぜ！！！」

燃継の右手には既に数十発の水弾が生成されていた。その水弾が拓巳に向かって高速発射される。どうやら水弾の生成元は左手のペットボトルのようだ。

「（なら俺は！！）」

拓巳はサプレッサーを取り付けたT・DPのグリップを強く握り、
「（その“供給源”とやらを叩き潰す！！！！）」
狙いを定め、引き金を引く。

パスツ！！！！ 空気の抜けるような音が鳴る。発射された一発の弾丸は、燃継の体に吸い込まれるようにして、空中を走る。そしてその弾丸は左手のペットボトルを弾き飛ばした。水を撒き散らしながら、ペットボトルが宙を舞う。

それを見た燃継は、

「いいぜ、いいぜ！！！！ だが、」

歡喜に身を震わせながら、咆えた。

「まだ足りねえ！！！！」

水の壁を作る。いや、正確に言うと人型の水の塊だ。地面に撒き散らされた水で構成されているようだ。

突然の登場に驚きながらも、拓巳はそれに向かって八発のゴム弾を放った。しかし人型の水塊は弾を漏らさず受け止め、

「消し飛べ！！！」

掛け声と共に、

バシューウウウウウウウウウウウウツツッ！！！！と、あちこちから、レーザービームのような水圧カッターを吹き出した。取り込んだ弾丸も水圧で撃ち出される。

その水圧カッターと弾丸に、地面が、壁が、木々が、挟られる。

「うおおおおおおおおおおおッッ！！！！！」

拓巳も咆える。咄嗟に腕を交差させ、被弾率を減らそうと、正面の表面積を減らす、右肩と左足の腿が斬られ、ブシャツと血を吹き出した。

「くっ、くっ」

鋭い痛み、彼は腕と肩を押さえる。水圧レーザーは彼の体を、かなり深く抉った様だ。

「ハハハ、どうだ！！　これが我が『ウォーターバレット』のチカラだ！！」

燃継は自分の優位性を確認し、誇らしげに言った。だが、

「ちょ、調子に、乗ってて……良いのか……？」

拓巳は不敵な笑みを浮かべていた。まるで燃継への何らかの対策が完了したかのような、そんな顔だ。「なに？」

一瞬。燃継は周囲に拓巳のトラップの有無の確認をする。

拓巳はその一瞬——水塊人形のコントロールを外さなければならぬ、その一瞬に、
「ッ！！」

全てを、賭けた。

拓巳は地面を蹴って燃継との間合いを詰めた。遠距離の、指揮官で、スナイパーで、後衛の兵士では、考えられない間合いへ。

「（正直、引っ掛かってくれるか、どうかは半々だった……龍之介じゃないが、『ところがどっこい』って奴だ！！！！）」

拓巳は右拳を握り締める。確実に当てる、そんな意思を秘めた瞳で

目標を見据えて。

「（コイツ！！ 遠距離だけでなく近距離も……！？）」
そこまで考えていた燃継の顔面に、

拓巳の渾身の一撃が突き刺さった。

【第二十一章 そうだ。遊園地に行こう。】（後書き）

受験も終わり、ようやく小説に専念できるようになりました。
という訳で感想待ってます。

【第二十二章 そうだ。遊園地に行こう?】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「膳兄貴の行動にはついて行けません」by早良〉

【第二十二章 そうだ。遊園地に行こう？】

「むッ！？」

龍之介の回復、宙助の抵抗、拓巳の反撃を双眼鏡で見て、膳は驚いた。彼は、龍之介たちがまさか、ここまで粘るとは思っていなかったからだ。

思わず、手に力が入り、双眼鏡はミシミシと音を立てた。

「（あいつら……ただの『新入生』でも『研修生』でも無い……。何か……特別な『資質』を持ってやがるッ！！）おい、早良！！」

「何ですか？ 兄貴」

「今から佐郎たちを援護するッ！！ あの『新入生』共、なんか訳有りだぜ！！」

「了解」

膳と早良は木から降り、少し離れた場所に居る佐郎たちの元へと向かった。

一方その頃、レストランで、

「お兄いたち、遅い……」

「松野浦さんたち、遅いですね」

と、食事を終えたかぼすと、ナポリタンスパゲッティを食べながら琴音が呟いていた。彼女たちは先ほどから頻りに時計や出口辺りに目を向け、龍之介たちの事を気にしていた。

「確かにそうね、もう二十分以上居ないわ。ちょっと心配だわ」

と、サンドウィッチを咀嚼しながらサヤが言った。彼女も、冷静な様子をしているが、その心は彼らへの心配で埋め尽くされていた。

「様子見てきましょうか？」

と、オレンジジュースを飲んでいた刃先が言う。しかし、

「大丈夫だよ、あの子たちなら!!」

そう言う伊豆香はカレーライスを無邪気に頬張っている。彼女のその仕草はもつと見ていたい愛らしいものだが、琴音たちの行動予定的には今は龍之介たちの方が優先順位が上だ。

「そう言ってもねえ……やっぱり見に行きましょう」

結局、そのサヤの一言で全員、外に様子を見に行く事にした。

佐郎は殴りながら焦っていた。

「(クソッ!! クソッ!!)」

ガスッ、ドスッ、バキッ!!

痛々しい打撃音を響かせながら、龍之介に蹴りや拳をめり込ませながらも、彼は焦っていた。

「(何故、コイツにはダメージが与えられないッ!?)」

龍之介は佐郎からのダメージを『表面上』は、一瞬で回復していた。SAが彼の傷を埋め、ダメージを感じさせないように働いているからだ。勿論、龍之介はSA無しでは立ってられない状況にまで陥っているのだが、表面上はまだまだ余裕そうに見えるし、佐郎もそう感じていた。

「うおおおお!! これが俺の『瞬間偽装』だッ!!」

龍之介は、己の発動させている能力名——昨日の夜に考え付いた——を口走っていた。小学生の頃、SAを喧嘩に使っていた時からの癖だ。

「(『瞬間偽装』だあ!? 一瞬で傷を回復SAなんて、どんなチートだよ!!)」

「はああ!!!」

弾切れになった拳銃を捨てた龍之介の拳が佐郎に迫る。佐郎はそれを避けるが、その動作にはキレが無く、緩慢になっている。

「(く、クソ!! 結構疲れてきたぜ……)」

長期戦で、プロと言えどまだ中学生の佐郎は疲労を感じていた。

「はッ！！ ふんッ！！」

龍之介の蹴りが風を切る。佐郎にその攻撃が掠り始めた。塵のガードによって完全なヒットは防いでいるが、それも限界に近付いている。

「く、くそおおおお！！！」

佐郎は『塵を操る』SA能力である『塵装』ともう一つの、『火花を操る』SA能力、『ファイヤスパーク』を用いた、粉塵爆発を必殺技としていたが、

「（ここじゃあ粉塵爆発が出来ない！！ 目立ちすぎる！！！）」

彼ら、傭兵学生の大半は隠密行動を主とし、あまり目立ちたがらない。また堅気の間人を巻き込むのを最大の恥としている。佐郎もそういった志を持つ、傭兵学生だった。

「……吹っ飛ばす、……ぜ……！！！」

息も絶え絶えな龍之介が佐郎の眼前に迫っていた。拳が構えられ、素早く、何度も突き出される。

「う、りやりりやりりやりりやりりりりやッッ！！！」

突きの連打。先ほど、佐郎が龍之介に向けて行った攻撃がそのまま再現される。

「おおおおおおおおおおおッッ！！！！！！！」

佐郎の全身の様々な部位に突き刺さった拳が、

「うりやあッ！！！」

最後に佐郎の顔面にめり込んだ。しかし、

「や、やるじゃなあか！！！」

佐郎は倒れない。素人相手に負ける訳にはいけない。そんな彼は叫び声を上げ、戦闘を続行する。彼と龍之介と殴り合いの状態に陥った。

甲紀は倒れながら驚いていた。何故なら、対処したはずの宙助に、深手を負わされていたからだ。

「ば、馬鹿なッ！！ この、俺がアアアア！！！ 攻撃をッ！？」

「フッ……甘え、甘えよ！！ テメエは、心の奥底で俺を『初心者』だと油断していたようだなあ！！ ……グッ！！」

甲紀に一矢報いた宙助も腹を手で押さえていて、苦しそうだ。甲紀と宙助——二人とも、その全身を駆け巡る痛みによつて、しばらくは動けない状態だ。

しかし、そんな状況で甲紀は、カチャリと、太刀が宙助に向けた。

「この、ままじゃ……終われねえ！！ 任務は達成する！！」

「な、何を！」

ブンッ！！ 風を切る音がした。宙助の鼻先で太刀が空を斬つたのだ。後、もう少しで鼻が叩き折れていたかも——そんな危機感が、宙助の全身を嫌な汗で湿らせる。

「チ、クシヨウ！！！」

宙助は地面を転げながら、必死に逃げようとした。幸い、ダメージが溜まつた状態で無理に動いた甲紀は、地面に伏している。しかし、「逃がすか！！」

ガシッ！！ と宙助は、這い蹲っている甲紀に足を掴まれた。倒れたまま足を放さないその様子は、ゾンビを彷彿とさせ、宙助の恐怖を更に煽つた。刀が振り上げられ、宙助の脇腹に突き刺さる。

「ぐ、おおおおおおおおおおッッ！！！！！！」

幸い、非殺傷モードなので、刃は体を傷つける事はないが、それでも宙助は激痛を感じ、大きく叫び声を上げた。

「ふ、ふははあ！！ どうだッ！！」

「クソヤロウッ！！」

宙助はお返しとして、甲紀の右肩にリーフライクを突き刺す。しかもかなり力を込めて。

「ぐ、はっ！！！！」

勿論、宙助のナイフも非殺傷モードなので肩は切り裂かれない。し

北感によつて苦しそうに歪められていた。一方で、先ほどの打撃のダメージが残るものの何とか立ち上がった燃継の表情には、勝利の愉悦が表れていた。

「勝った……勝ったんだ！！俺はッ！！」

燃継はその場で拓巳を見下ろす。拓巳は悔しそうに燃継を見上げていた。

燃継は、彼に止めを刺そうと、拳を振り上げる。いくら格闘センスが薄くとも、ダメージが体に蓄積されている拓巳にとって、その一撃は、避けなければならぬものだ。しかし彼は、もう動けない。振り下ろされる拳を前に拓巳は、思わず目を瞑った。

と、その時。

「そこまでだ！！」

人氣が無く、龍之介たち以外居なかった筈の広場に一人の少年が居た。

年齢は十三歳くらいだろうか。そばかすの少し入った顔と、輝きを失い、くすんだ金髪に頭頂部から生えている一本のアホ毛が特徴的な、その少年は、白い長袖ワイシャツに灰色のスラックスを身に着けていた。

その場に居た、彼以外の全員の視線がその声がした方向を向く。

「弱き者に耳を傾け、強き理不尽捻じ伏せる！！拳に籠った、この信念！！ そんじょそこらじゃ曲がらない！！ 名乗る正義は伊達じゃない！！——正義の味方、ここに参上！！」

そう言つてポーズをビシッと決めた少年は、彼らにゆっくりと近付いてきた。

「おい坊主。痛い目遭いたくなかったら、ふざけてねーで、さつさと帰りな」

そんな突然現れた上に名乗り口上まで叫んできた彼に燃継は、低くドスを利かせた声で警告する。しかし彼は歩みを止めない。ポケッ

トに両手をつつ込みながら、

「正義の味方である、この僕が来たからには、貴様らのようなチンピラには好きにさせん!!」

「んだと、テメエ!!」

少年の生意気な言い種にカツとなった燃継は地面に蹲っている拓巳を放置し、少年に殴り掛かった。

だが、少年は落ち着いた様子でそれを見ている。今にも口笛で一曲奏でそうな、そんな感じのドヤ顔を決めている。

そのドヤ顔に更に苛立つた燃継の拳が勢いを増して少年に接近する。しかし彼は依然として余裕の姿勢を貫いている。拳が、彼の眼前にまで迫った頃、少年はやっとポケットから手を出した。

拳と少年の顔との距離が数センチになった所で、

「おらッ!!!」

少年の拳が唸った。正拳の構えでその拳は、拳とそれに連なる腕に、何か細いが筋肉の凝縮体のような引き締まった黒と白のツートンカラーの腕が——ちょうど密友の『フラットメイス』のように——重なるようにして顕現したかのが見えた。

少年の眼前に迫っていた燃継の拳が、少年の顔に直撃するより遙かに速く、空を鋭く切るそれは、ズゴッ!! という音を立てて、燃継の顎にクリーンヒットする。

「くはっ!!! なっ、か、く.....」

すると。拳を入れられた燃継の様子がおかしくなった。体が小刻みに震え、動きが止まっている。——否、止まらせている。まるでスタンガンを食らったかのように、『麻痺』しているように見えた。「..... 僕の名はファビオ。ファビオ!! バルツァッリだ.....。——覚えておけ」

少年は、燃継の耳元で静かにそう呟くと、龍之介たちの方向にゆっくりと向き合った。

「さあ。ゲームの始まり——へなっぶッ!？」

ファビオが最後まで台詞を言い終わる前に、彼の目を閉じてニヒル

な表情を浮かべていた顔面に、佐郎の拳がめり込んだ。ファビオはそのまま、「ううつ」と少し唸り、パタリと気絶してしまった。そんなファビオの呆気無さに、その場にいた一同は、啞然とした全員、「彘？　これで終わり？」と言わんばかりの、表情を浮かべている。

ファビオの離脱と時を同じくして、膳と早良も現場に到着した。

「おい、佐郎、燃繼、あとその侍商売。この『新入生共』は普通の『新入生』とは違うようだ！！……もう任務は十分達成した状況だッ！！　さつさとトンズラかますぜ」

「しかし……アイツ等が！！　まだケジメがついてません！！」

突如現れた上司の、突然の撤退命令に、佐郎たちの表情は難色を示した。

「後で、気晴らしでもさせてやるッ！！　だが、今は撤退だ。このままじゃただの兵隊の無駄遣いだ。さつさと撤退するぞ」

「急いで下さい。早くしないと置いていきますよ」

駆け付けた膳と早良に促され、佐郎たちは渋々、その場を撤退する。佐郎は動けない燃繼の肩を担ぎ、甲紀も宙助を引き剥がして、走り去っていった。

「あ、クソ！！　待て！！」

「りゅ……龍之介……今は、追わない方が……良い……」

「た、拓巳！！　大丈夫か！！」

「なん、とかな……。命に……別状は、無い……」

そう龍之介に言った拓巳だが、どこと無く苦しそうだ。そこに先程殴り飛ばされていたファビオが、いつの間にか復活して傍まで来ていた。

「大丈夫なんですか！？　その人」

「あ、キミはさっき助けてくれた——」

「ファビオです。ファビオ＝バルツァッリ」

ファビオは龍之介の言葉を遮るように言った。

「ファビオさん！！　レストラン・ゴールデンパークに行つて、

「サヤ」ロバーツという人を連れて来てくれませんか!!」

「いいですと——」

「その必要は無いわ!!」

今度は誰かがファビオの言葉を遮るように叫んだ。その声は龍之介たちの聞き覚えがある、クールな女性の声だった。

その声の主は、安保部副隊長にして龍之介がファビオに連れて来て貰おうとしていた、サヤであった。その後ろには琴音たちも居る。

「拓巳くん!!」

「お兄い!!」

サヤと、サヤに後ろから付いて来ていた、かぼすが倒れている拓巳に駆け寄り、二人で彼を抱き寄せた。涙で潤んだその瞳は、彼女たちがいかに心配しているかを表していた。

「勝手な行動ばかり取って!!」

「こんなに傷だらけになって!!」

「ふ、二人とも……息が……あと、傷があ……!!」

「あなたたちは、まだ『研修生』なんだから……!!」

「お兄いはいつも無茶して……!!」

「し、死ぬ……!!」

拓巳は戦闘が終わった後も、二人の強い抱擁によってダメージを受けているようだ。

「あ、あの……お二人さん？ 拓巳、さん？ が苦しそうですよ？」

そんな光景を見て、ファビオは恐る恐る二人の女性に警告した。しかし二人は、拓巳を抱きしめるのに夢中でそんな事は聞こえていないようだった。

【第二十二章 そうだ。遊園地に行こう?】（後書き）

どうも、篤岡です。今のところ順調に投稿中です。
今後なるべく早く早めに投稿していきたいです。
って言う訳で感想待ってます!!

【第二十三章 そうだ。遊園地に行こう?】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「この物語、新キャラ登場率高くね?」byファビオ
〉

【第二十三章 そうだ。遊園地に行こう？】

ファビオと龍之介たち——勿論の事だが、龍之介、宙助、拓巳はその場でサヤと伊豆香に治療を受け、戦闘以外の行動は取れるようになっていて——は、一旦、レストラン・ゴールデンパークに戻り、気紛れ組の襲撃について話し合っていた。

「つまり……拍子木佐郎と名乗る傭兵学生と戦ったのがキツカケなのね？」

「はい……」

サヤの第一の問い掛けに龍之介は申し訳なさそうに頷いた。

「拓巳ちゃんと数野くんはその事を知ってたの？」

「はい」

といった風に、あくまで強気な姿勢——さっきまで重傷を負っていたのが嘘のようだ——を保つ拓巳と、

「は、はい……。店を出る時に龍之介と拓巳から大体の事は聞きました……」

と、少し弱気な宙助は、サヤの第二の問い掛けに答えた。

琴音たちは真剣な面持ちでその様子を見ていて、ファビオはレストラン内のテレビで国際情勢のニュースを見ていた。

「それじゃあ、火水燃继っていう傭兵と侍商売の事だけ……」

こうしてサヤの龍之介たちへの質問が続く中、ファビオはニュース——中東諸国の軍事関連の報道だ——を見て、寂しそうに、こう呟いた。

「これが、この世界の選択か……」

そして、おもむろに携帯電話——黒くてシンプルなデザインの機種だ——を取り出すと、

「僕だ、どうやら奴らはこの前の事をまだ根に持っているらしい。まったく……学習しない連中だ」

とか、

「ああ、分かってる。そうだな、あいつなりの考えだ。少し泳がせて見るか」

等と言って、最後には、

「ああ、分かった。また連絡する。——レム・セウム・アディ」

と、謎の言葉を残して電話を切り、またおもむろに電話を仕舞うと、寂しそうに焼き魚定食を食べ始めた。

サヤはそれを啞然としながら見て、

「（で？ この痛い男子中学生に助けられたの？）」
と、龍之介たちに言った。

「（痛いって失礼ですよ！！ 結構な実力者なんですから、ファビオくん）」

龍之介はそれに対し、ファビオへのフォローを入れる。

いくら中二病が発病した痛い男でも命の恩人は命の恩人だ。龍之介は義理堅い男であり、恩は忘れないのだ。

ファビオは暫く飯を食った後、「それじゃあ僕、用事があるんで」と、レストランを後にした。

質問も一区切りつき、サヤは烏龍茶を一口飲むと、龍之介たちに優しく語り始めた。

「いい？ 貴方たち。貴方たち、新生は『研修生』として経験を積まないと一人前にはなれないの。だから、まだ無理して功績を挙げようとしないで、私たち上級生の戦いを見ていなさい」

「……はい、分かりました」「……」

琴音もサヤの言葉に龍之介たちと異口同音で同意した。そこで伊豆香が、

「それじゃあ……」

「……」

「今から、遊び再開しよつか!」

その場に居た龍之介たち全員が伊豆香の提案に再び異口同音で賛同した。

龍之介たちがアトラクション周りを再開し始めた頃、レストランから出たファビオ「バルツァ」は携帯電話で誰かに連絡を取っていた。

「もしもし……俺ですけど」

「おお、ファビオか」

「……任務は達成しました。しかし良いんですか？ 彼らはアナタの敵かも知れないですよ？」

「良いんだよ、それくらい。あ、そうそう。『空気粘土』と『急速代謝』もそっちにつけてやる。ソイツらを使って近日中に安保部員を襲わせてくれ。奴らの出方を見る」

「は、はあ」

「シャツキとしたまえ、中学生だろ？」

「アナタが元気有りすぎなんですよ……」

「きみはイタリア人だろ？ もっと、ほら、陽気に」

「イタリア人だって、いつも陽気な訳じゃありませんよ」

ファビオはその後電話相手の言葉にも「はいはい」と軽い返事をするだけで、最後に「へいへい、レム・セウム・アディ」と、投げやりに電話を切った。

「まったく、あの人の方が僕よりイタリア人っぽいや」

ファビオはそう独り言を言い、

「……そろそろ『替わる』時間か、な……？」

と、続け、瞑想をするかのように眼を閉じた。

彼は自分の意識に語り掛けた。

——聴こえてますか？

レストランを出てから龍之介たちは様々なアトラクションで遊んだ。気付けば、もう夕刻に近付いていた。

という訳で最後に観覧車に乗って、今回の遊びのシメとすることにした龍之介一行だが、

「なんで、観覧車が二人乗り用なんだ……？」

この遊園地が誇る、唯一の観覧車、『グレートリングSP』のゴンドラは横幅が狭く、縦幅が普通の観覧車と同程度の広さの観覧車であった。

「ま、ウダウダ言っても、しょうがない。ちょうど八人だし、割り当て決めるか」

「じゃ、じゃあ私、お兄いとー！」

拓巳が割り当ての事を話した途端、まるで先制攻撃を掛けるかのように、拳手しながら、かばすが叫んだ。

しかしそんな抜け駆けにサヤは、

「いいわよ。私、刃先ちゃんと乗るから、兄妹水入らずで乗りなさい」

と、笑顔で返した。

「へ？ え？ ボクですか！？」

「そうよ」

「は、はあ……いいですけど……」

勝手にペア決めが進みがちなので、拓巳は他者の意見も聞くことにした。

「意見がある奴いるか？」

言いながら、彼は龍之介、宙助、琴音、伊豆香を見るが、不服は無

（大丈夫です。アナタの存在は隠し通せます。だから彼らは殺させません）

（どうだろうな……おっとそろそろ『替わる』ぞ）

（もう『替わる』時間ですか？）

（ああ、さつさと『替われ』）

脳内会話が終わる頃、ファビオの様子がおかしくなった。顔や手、足が震え、全身から汗を吹き出している。また、蒸気のようなもので吹き始めた。

そして変化が起こった。体付きが女っぽく——いや、女の物になっていく。髪が肩の辺りまで伸び、振り乱したような感じになる。その体が、胸が少し膨らみ、ウエストが細くなり、柔らかい質感の造形になる。そばかすが消え、男として端正だった顔が女として端正な顔に変わる、否、『替わる』。

そして、なにやら『触れれば怪我をしそう』オーラが湧き出すようになった。

目が見開かれた。ファビオは意識内の誰かと『入れ替わった』ようだ。

「ふ~~~~。やはり『外』は良いな……」

ファビオの中に潜む別人格、アリーチェ「バルツァッリは活動を開始した。」

——龍之介・琴音SIDE——

太陽が地平線に沈む中、龍之介と琴音を乗せたゴンドラは、頂上に向かってゆつくりと、山なりに上がっていった。

「綺麗ですね……、夕日」

「はい、乗って良かったです……。この観覧車」

龍之介たちはちょうど、日没直前に観覧車に乗っていて、日の入りを眺める事が出来ていた。眩しくも優しい光を放つ太陽が沈んでい

く中、琴音は龍之介に向かって言った。

「今日はありがとうございました。私、今日の遊びを実行できるまでの勇気が無かったんです。昨日今日知り合ったばかりの人たちと遊びに行く勇気が……」

「いえいえ、今日は僕も楽しませてもらいましたから、礼には及びませんよ」

龍之介と琴音は、観覧車のゴンドラの中で互いに微笑み合った。

——拓巳・かぼすSIDE——

「お兄い……今日は楽しかったね」

「ああ、そうだな。あんまりこういう所に来る機会なかったもんない」

「……お兄い、また来ようね」

「ああ、気が向いたらな」

「お兄い……」

かぼすは拓巳に寄り添って、その肩に頭を預けた。

心地よい静寂がゴンドラ内を支配する。

「かぼす……」

しかし拓巳はその静寂を打ち破るかのように言う。

「なんでお前、俺の隣に居んの？」

「……」

現在、このゴンドラの一人分の席は二人の人間が密着する形で使っている。

——サヤ・刃先SIDE——

サヤはゴンドラが上がり始めると直ぐに、刃先を弄び始めた。こちらにも一人用の席に二人座っている。ギューギュー詰めの状態だ。

「ここが良いの？ 刃先ちゃん」

「あ、いや……ボク、そんな……」

刃先は顔を真っ赤にし、サヤも頬を薄く桜色に染めている。

サヤは刃先の、耳、唇、首筋、胸、へそ、股、太腿を指や舌で弄くり回す。

サヤが拓巳をかばずに譲った理由は、この、刃先とのスキンシップのためであった。

「うふふ、えっちな刃先ちゃん♪」

サヤは刃先の肩に手を回し、彼女の耳元に甘い吐息を吹きかける。

「そ、そんな……っ！！　ボクが、えっちなんじゃないくて、サヤさんの……っ」

刃先もそんなサヤの言葉を必死に否定する。が、その声は途中で途切れる。急にサヤの右手が胸を揉みくだしたからだ。

「あらあら、気持ち良いの？」

サヤは刃先の股を左の白魚のような指で弄り、グチャグチャに鷲る。

「う、うう……」

「うふ、可愛いわぁ」

サヤは刃先の耳たぶを優しく口に啜えた。

「あ、あうう……」

現在、このゴンドラでは濃厚なじやれ合いが展開している。

—— 宙助・伊豆香 SIDE ——

「今日は楽しかったねー！！　宙助くんっ！！」

「ええ、そうですね。伊豆香先生」

無邪気に騒ぐ伊豆香とそれを微笑ましそうに眺める宙助。このゴンドラには暖かい空気が漂っていた。

「私ね！　バイキングが一番、楽しかったんだ！！　びゅーんってなって、それからごーって行って！！」

「そうですねえ（かわええなあ）」

「お化け屋敷は怖かったなあ」。最後の最後であんなサプライズが

あつたとは、思いもよらなかったよ!!」

「そうですねえ（癒されるわ）」

「ちゃんと話聞いている？」

「そうですねえ（はあゝお持ち帰りしてえ）」

「聞いて無いじゃん!!」

プンスカ、という擬音が似合いそうな様子で怒る伊豆香に、宙助は夢中であつた。

遊園地から帰宅する龍之介は、皆とは別の道を歩いていた。普段、帰り道がほぼ一緒な琴音も途中の道で別れてしまった。

だから今の龍之介はたった一人で、ポツポツと街灯で照らされた夜道を歩いている。

「（ふむ……何とか『瞬間偽装』の事については誤魔化せたな……）」

「

龍之介は擬似回復系SA『瞬間偽装』を他の安保部メンバーには秘匿していた。

理由は簡単だ。このSAは気味が悪いからだ。使用している本人がそう思うのだから、よっぽどのモノだ。

この能力は傷を一瞬で治す——事は出来ないが、傷をSAで埋める事で、『表面上』は治ったかのように見せかけるといふ、正に『偽装』能力なのだ。

勿論、傷の治りは、傷の規模にもよるが通常に比べ速く、『気色悪い』。

「（トカゲの尻尾じゃないんだからなあ……）」

龍之介はこの能力を知られる事で、今の彼らとの関係が崩れるのが怖かった。

だから龍之介はこの能力を隠匿し、秘匿し、『偽装』する。

【第二十三章 そうだ。遊園地に行こう?】（後書き）

遊園地編はこれにて終了です。

次章からは新展開——するのかなあ……？

という訳で感想待ってます。

【第二十四章 企業戦士、阿亜嗚呼】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「嗚呼、この世は無情で無常だ。なんてったて才能の
ある人間が成功する、そんな方程式が存在するんだからね」by嗚
呼〉

【第二十四章 企業戦士、阿亜嗚呼】

ある日の正午。時系列的には龍之介一行が遊園地に行った三日後、火曜日の昼休みだ。東久留米の駅前にある会社、『株式会社エイムカルプリット』のビルの屋上で、阿亜嗚呼という会社員がベンチに腰掛け、昼飯を食べていた。

「ふむ、やはり『オールデイス』のサンドウィッチは美味いな……」

この山吹色の背広を着た二十代半ばの男、嗚呼はエイムカルプリットの社員で、こけた頬に薄茶色の短めの髪を半分ずつ左右に分けたような髪型が特徴的な男だ。

嗚呼は昼飯を食べながら、この屋上から望める景色を見ることを習慣としていた。屋上は彼の、社会の荒波に揉まれ、傷ついた心を癒してくれる場所であった。

そのヒーリングスポットから眺められる景色とは――人々の行き交う、駅界隈であった。

「ふむ、やはり落ち着くな……。『上から人を見下ろす』のは……」
この男はSA能力者、つまりスピリットアカレイドであった。しかも彼はかなり強力な能力を持っていた。しかし彼はその能力を秘匿していた。

理由は簡単だ。このSAは強力すぎて迫害されやすいし、何より彼が能力を使って好き勝手するにはその能力を秘匿した方が色々と都合が良いからなのだ。

そんな彼は見ての通り、人を見下さずにはいられない男であった。

彼の仕事はSA能力者のスカウトであった。勿論、エイムカルプ

リット上層部は彼に『優秀な人材を集めて来い』としか言っていない。

しかし彼は決まって、S Aを使用できる人材をスカウトした。その年齢、性別を問わずに。『フアビオや『空気粘土』、『急速代謝』の使い手も彼がスカウトした、S A能力者である。しかも彼らの能力値も——彼よりは劣るが——高い。

『優秀な人材は優秀な人間にしか集められない』、それが彼の仕事を行う上でのポリシーであり、彼自身の座右の銘であった。彼は別段、ナルシストな訳ではなかった。が、客観的に自分を見て、『優秀』であると思っているからこそ、彼は『優秀な人材集め』を自らの天職と定めているのであった。

そんな彼のスカウトの方法はいたってシンプルであった。

まずは自分の『スカウトしに来た』という活動目的を相手——事前に良さげな人間を見つけておき、観察して吟味した『対象』——に話し、拒否するようならば自らの能力を見せつけ、屈服・スカウトするという手法であった。

彼はその手法で一度も失敗、敗北をしたことが無い。それほどまでに彼の能力は強力で、ある種の無敵能力と言っても過言ではなかった。

能力名は『マンハッタンⅡオースティン』。

昼休みが終わった午後。彼は外に出掛けていた。スカウトだ。

「（お、アイツはこの前、商店街で見掛けた……中々の資質の持ち主だったな）」

嗚呼は、街中で以前から目をつけていたターゲットを見つけた。

ターゲットの名前は、古村仙治。ざんばら髪が特徴的な十代後半のこの男の能力は『ボマーコーティング』。『物体に爆弾を付属出

来る『能力だ。』

龍之介の能力に似ている気もするが、全然違う。

彼の『ボマーコーティング』は、触れれば即爆発する『クラッシュ
ユクラストー』とは違い、任意のタイミングで爆発でき、爆破できる
対象の数も多い。しかし本体と離れている分、威力は『クラッシュ
ユクラストー』よりも小さい、という特徴を持っている。

同じ爆破能力でもここまで違うのだ。

そして嗚呼はそんな仙治の『遠距離から複数の物を爆破できる』
というポイントに目をつけ、仙治を『優秀』な人間だと評価した。
だから嗚呼は仙治をスカウトするのだ。

「（あ、裏路地に入ったぞ……）」

嗚呼も仙治の後を追いつ、裏路地に入った。裏路地は人気が無く、ひ
っそりとしている。ビルに囲まれて日の光が入らないのか、涼しい
場所だった。

「きみ。少し良いかい？」

「ん？ 何だ？」

「きみを『とある組織』にスカウトしたいんだが……少し時間を貰
えないか、話がしたい」

「は？ 『とある組織』？ ああ、能力者組織の勧誘ね……だが断
る」

「どうしてだい？」

「メンドクセー、からだ。確かに俺の能力がスゲー性能なのは分か
る。けどだよオ、その能力を誰かのために使ってエーのは、『と
てもメンドクセー』」

「ふっ、ふっ、ふっ……」

仙治の持論を聞き、しかし嗚呼は口に片手を当て、静かに笑い始め
た。

「何が可笑的いー!!」

嗚呼の態度に腹が立った仙治は怒鳴った。額には青筋が浮かんでい

る。

「いやさ、きみの新たな欠点、『世間知らず』ってところを発見できてさ……嬉しいんだよ。また情報が握れた!!」

この男、嗚呼は『人間観察手帳』に自分が思いのままに人間を操るために、情報を書き入れている。彼はその手帳に情報が溜まれば溜まるほど、『人を操る』というゴールに近づく実感を得て、至上の喜びを得ている。

「（な、何だあ？ この男は……厄介事は『面倒だ』）」

彼・古村仙治はこの男・阿亜嗚呼が厄介な人物だと感じたのか、足早にその場を立ち去ろうとした。幸い、今の嗚呼は情報を得た喜びを噛み締めている最中で仙治には気が向いていない様子だった。

だがしかし、

「待てよ」

「（な!?!）」

彼は肩を掴まれていた。仙治と嗚呼の居た位置にはかなりの距離があった。

それでも、この会社員風の男・阿亜嗚呼はしっかりと肩を掴んでいた。しかも一瞬でその距離を詰めて。

「（コイツ……何時の、間に……ッ!?!）」

「まだ話は終わってないんだぜ？ テメエ、『人の話は最後まで目を見て聞きましょう』って……学校で習わなかったのかよ——

——ッ!?!?!?!」

嗚呼は仙治の肩を眼前まで掴み寄せて、人差し指でグリグリと彼の額を指した。

「（コイツは……ヤバいッ!! イカれてんのか!?!）」『ボマーコーティング』!?!?!」

嗚呼の異常性に冷や汗をダラダラ流しながら、仙治は『ボマーコーティング』を発動させた。仙治が爆弾を貼り付けたのは、

「（その小石、だあああああああ!?!?!?!）」

ズドオオオッ!?!

仙治の爆弾は小石ごと見事に爆発した。爆風は、嗚呼の服と皮膚を焦がし、爆破された小石の破片は、彼を貫く。筈だった。

「消えたッ!？」

小石が爆発した瞬間、嗚呼はその場から忽然と消えていた。嗚呼を盾に小石の爆発を防ごうとしていた仙治は小石の破片をモ口に喰らい、その場に倒れた。

「く、うう、ふうううッ……!!」

仙治は傷口を押さえながら呻いた。

「一体何が？」

『どうして奴は消えた？』

そんな思考が彼の脳内を駆け巡った。仙治は辺りを見回した。上、下、右、左、前方、後方。全方向を見渡しても、嗚呼の姿は見られない。影一つ無い。

「(まさか……奴は『空間移動系能力者』ッ!?!!)」

この奇妙な現象の答えとして、彼はそう考えたが、

「(いや……空間移動系ならば直ぐに姿を現さないとおかしい……)」

「

長年の対能力者戦で培った経験がそれを直ぐに否定する。

そして嗚呼の能力の正体は直ぐに分かった。

「いきなり爆破して……危ないじゃないか……」

「(後ろッ!?)」

またもや彼は嗚呼に肩を掴まれていた。何時の間にか現れた、嗚呼によって。

「よく計算された攻撃だった……が、私には効かないよ」

「ぼ、『ボマーコーティング』ッ!」

仙治は、その肩に掛けられた手を振り払い、爆弾を取り付けた小石を何発か投げつけた。

「だから無駄だと言っているのに……」

嗚呼の苦笑をよそに、爆弾小石は嗚呼の後ろに行った。前方で爆破すれば仙治本人に被害が及ぶ——それを考えた上での爆破発動の延長。

これが仙治の『計算された攻撃』であつた。

「（未だ、未だ、未だ爆破はせず……『今だッ』！！）」
ズドズドズドオオオオ！！

複数の小石が爆発した。破片が飛び散り、近くに居た嗚呼に直撃

「（——しないッ！？ また、あの『妙な技』かつ！）」

破片は嗚呼の『居た』位置を通り過ぎ、壁に、道路に、そして仙治に当たつた。

「グハッ！！ えはああッ！！（不味いッ……！！ また『同じ』だ！！ このままじゃ、俺は俺の攻撃でッ……！！）」

死んでしまふ。それが彼の導き出した答えであつた。

自分の攻撃を喰らつた仙治はその場に俯けに倒れた。

と、同時に、再び、どこからともなく、阿亜嗚呼が出現した。

「分かつたかい？ 無駄なんだよ、無駄。大人しくスカウトされろ」
「グッ……（確かに、このままでは……）」

古村仙治の『ボマーコーティング』は阿亜嗚呼には通用しない。『妙な技』によつて全て回避させられてしまふ。

氣を落とす仙治に嗚呼は慰めの声を掛けようとゆっくりとした近付いて来た。

「しかし良い戦いだつた。やはり私の審美眼に狂いは無いと言う訳か。……では、今度こそ『スカウト』、させて貰うぞ」

そして慰め終わると、懷から小さな丸く薄い装置を取り出した。

「これはね、私のスカウトを断つた人間に着けさせている『アンリミテッド・アビリティ・デバイス』、略してUADって言う装置でね……。脳を活性化させることで、強制的に人の才能や能力を無限に引き出すシロモノなんだ。ま、副作用が半端じゃ無いが……面白

い装置だよ。それにこれは洗脳装置の役割も兼ねているんだ。今のきみにはピッタリだろ？」

「や、やめろッ……!!」

嗚呼の手が仙治に近付く。

「やめないさ」

ブツリ。

嗚呼は仙治の首から頸椎にUADを埋め込んだ。UADは首にスッポリとめり込むと、首にミシミシと『根』を張り始めた。皮膚に張り巡らされる根の形が、浮き出ているため、その様子は外部からも確認できる。

「う、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！！」

「ふふふ……また一人ゲット。古村仙治、コンプリートだ。アハ、あはは、あははは……アハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！！」

暗い裏路地に不気味な嗚呼の笑い声が響く。

これが彼の仕事、スカウト。彼は人材収集を趣味にしている。

そして彼の能力『マンハッタンII オースティン』。それは『自分の設定した対象、事象を数十秒先の未来に飛ばす』能力。

【第二十四章 企業戦士、阿亜嗚呼】（後書き）

最近調子がいいです。更新スピードが上がってます。

ちよくちよくミスをしているんで、活動報告も参照にどうぞ。

そんな訳で感想待ってます。

【第二十五章 任務の無い日、安保部にて】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「……」 by 『幽霊』〉

【第二十五章 任務の無い日、安保部にて】

ある日の午後。時系列的には龍之介一行が遊園地に行った三日後、火曜日の放課後だ。特に任務も無い松野浦龍之介は安保部部室——龍之介一人で貸しきり状態だ——で、自分の持ち込んだ雑誌を読み耽っていた。WSを取り扱った雑誌——タイトルは『週間WSマガジン』——だ。

先日の戦闘でWS戦をやらかした龍之介は損傷した機体の修繕のため、色々と考えていた。破損したパーツはどこから取り寄せるか、値段はどれ位だろうか、いつそ新しい機体を作るor買う方が早いんじゃないだろうか、等等。

「（全く、WSを空輸出来る『奴ら』の資金調達機能が羨ましいよ……）」

『奴ら』とは学園に蔓延るスクールギャング、STEALTH・DECOYの事だ。

龍之介は、彼らとの戦闘で、STEALTH・DECOYには有力な資金源が存在する事を実感した。なんでも金持ちのボンボンが数名、加入しているらしい。

ペラペラペラ、と。龍之介は雑誌を捲る。開いたページには今月、販売が開始する新鋭機体がズラリと載っている。

「（はあ。新型機、買おうかなあ。でも金がなあ。あの金一封じや、足りねえし……。やっぱり世の中、金か？ 金なのか？）」

「お、すつ、元気か？ 暇か？」

世の中の真理に迫らん勢いで悶々としていた龍之介に声が掛けられる。声の主はクラスメイトにして同僚兼親友の見栄崎拓巳だった。

「『今月のニューフェイス』……？ 何だ？ お前、新型機でも欲しくなったのか？」

「ああ、まあ。でも金がさ」

「部の経費で落とせないか？」

「無理だろ、新入生だし。研修生だし」

「だろゝな」

龍之介たち新入生は『研修生』として安保部に配属されている。まだ一人前ではないという事だ。つまり彼らは経費も落とせない。半人前なのだ。

「そう言えば……雨崎さんや宙助は？」

「雨崎は、何か『もふにゃ』とか言うペットの餌をやった後に再登校で来るって……後、宙助は保健室だ。伊豆香先生と遊んでるっぽい」

「まあ今日は任務来てないからな。先輩も適当な時間で帰って良いてって言うてしな」

龍之介はそう言いながら席を立ち、安保部に備えてある冷蔵庫と食器棚からコーラのビンとガラス製のコップ——二つとも龍之介が持ち込んだ物だ——を取り出し、コーラを氷の入ったコップに注ぎ始めた。

「本当にお前、コーラ好きだな」

「やらんぞ」

「別にいいさ。一人で飲んでろ」

拓巳は鞆からJLC——城門学園生に支給されているノーパン——を取り出し、なにやら作業を始めた。

部室内が静寂で満たされる。龍之介は気まずさを感じ、拓巳に再び話し掛けた。

「拓巳、暇だ」

「ああ暇だな」

拓巳はJLCの画面を眺めながら、興味無さ気と言った。

「何かゲームでもやろうぜ」

「あんのかよ、ゲーム」

「いや、無いけどさ……あ、そうだ!!」

「何だ？ 何かあったのか？」

「『エロ連』やろっぜー!!」

「ああ、あれか。懐かしいな」

『エロ連』とは。略さず言うとなら『エロを連想する言葉の言い合い』で、文章じゃなく、単語だけでもエロい事を連想しそうな言葉——例えば「縄」や「棒」など——を言い合うゲームである。ルールとしては『一回に一単語』、『順番に言っていく』、『パスは三回まで』、『あからさまにエロい言葉はNG』、『一回言った言葉は二度入っては駄目』というモノがある。ちなみ動詞か名詞かは問わない。

「じゃあ行くぞ。『蠟燭』!!」

「『絆創膏』」

「『果実』!!」

「『下着』」

「うん……『パンツ』や『ブラジャー』じゃないからギリギリセーフ、か……? じゃあ『契る』!!」

「ふむ……では『縛る』」

「中々やるな。『手首』!!」

「吉良かよ……『鎖骨』」

「よし、じゃあ——」

「——えっと、『木馬』……!!」

「「!?!」」

突如、現れた『第三の声』に、龍之介たちは衝撃を覚えた。

「な、何で……!?!」

「お前がここに居るッ……!!」

第三の声の主、それは、

「えへへ、暇だから来てみた。面白そうなゲームだったからさ。ボクもつい、まじっちゃった」

龍之介たちのクラスメイトのボクッ娘、松崎刃先だった。何やら顔を赤らめている。

「『えへへ』じゃねーよ！！（ば、馬鹿な！！ 刃先がこのゲームを『面白そう』だとツ……………！！）」

「いきなり入って来て……………ビックリするでしょうが！（確か、俺の記憶が正しければ……………刃先はもつと純情だった筈だツ！！）」

「その事は謝る。すまなかった。でもボクも混ぜて欲しいよ、その『ゲーム』」

「あ、ああ……………。そこまで言うなら……………（馬鹿なツ！！ やっぱりおかしいツ。そう言えば刃先の奴、この前行った遊園地で、ロバーツ先輩と観覧車に乗った時から様子が少しおかしかった……………そしてこの『三日間』！！ 刃先はあの時よりもつとおかしくなった……………。観覧車の時とこの三日間で、刃先に何が起こった！？）」

「分かったよ……………。（とりあえず、様子を見よう……………）」

龍之介と拓巳は、刃先を加えて、ゲームを再開した。一番手は龍之介だ。

「じゃ、じゃあ先ずは俺からか……………『啜える』」

「次は俺か……………『挟む』」

「えつと、じゃあ……………『舐める』」

「（刃先め……………中々の強敵だぜ……………って女の子がそんなに大丈夫なのか？）『発射』」

「（な、『舐める』って……………せ、セーフか？ 一応……………）ならば『赤チン』で」

「え、『AV機器』」

「じゃ、じゃあね……………『垂らす』で、どうだ！！」

「（……………）えつ、と……………『放課後補修』」

「（……………）か、『観音開き』」

「ど、『奴隷』で……」

そう言った途端、刃先は顔をもっと赤くして、汗を掻き始めた。目も泳いでいる。

「（（コイツ、何があつたア——ッ！！））」

「（い、いや、マジで何があつたんだよオオオオオ！！！！ 刃先ッ！！）え、じゃあね、は、『はめ込む』……で」

「（も、もう何がなんだかqあwせdrftgyふじこ1p）……『肉まん』……」

「（落ちて着け落ちて着け落着けエ！！ 深く考えるな、見栄崎拓巳……）『汁』」

「お、『お持ち、帰り』……あ、あはは」

刃先は更に顔を赤くした。龍之介と拓巳は冷や汗を大量に流している。

「あ、あはは！！ 皆凄いなあ！！ これじゃあ決着が着かないから、もうお仕舞い！！」

龍之介がここぞとばかりに、中断を宣言する。拓巳もそれに乗った。

「そ、そうだよな！！ ハイハイ、止め止め！！」

「えー……」

不満そうな刃先を尻目に龍之介はコーラを飲み、拓巳はJLCを弄り始めた。

「ふん……ま、いつか」

刃先も諦めて、部室内を色々と見て回り始めた。龍之介も拓巳もその事を注意しない。刃先が触っていい物と駄目な物の区別が出来る人間だと知っているからだ。

再び、部室内が静寂で満たされる。今度は刃先が気まずさを感じ、龍之介たちに話しかけた。

「そ、そう言えば、東久留米に幽霊が出没するって噂、聞いたこと

あるか？」

「幽、霊……？」

「幽霊って、あの心靈写真とかの？」

二人はその話に興味が湧いたようで、龍之介はコップを机に置き、拓巳は作業を止めた。

「うん、ボクたちのクラスでも見た人が居るって——ああ、野球部の後藤くんが見たって言ってた」

「どんな幽霊なんだ？」

「えっとね、紫色のシャツにオリーブ色のスラックスを穿いた、二十代半ばの男の幽霊らしいよ。偶に拳銃を持って、歩いてる時があるんだって」

「なんで幽霊だって分かったんだ？」

「えっと……確かある時、不良がその幽霊に喧嘩を吹っ掛けて、殴り掛かった事があつたんだって……でもその幽霊、殴った時の感触が、ただ『服を殴っただけ』って感じだったらしいんだ」

「『服を殴っただけ』……？ 肉の感触はしなかったのか？」

「うん、どうやらそうみたい。だから『幽霊』だって……」

「でも幽霊ってさ……霊感のある人にしか見えないんじゃないの？ その不良は霊感あつたのか？」

「ううん、無かつたらしいよ。その幽霊に会うまで、心靈現象にあつた事は一度も無いんだって」

「じゃあ、『新手のスピリットアカレイド』じゃねえの？」

「違うらしいよ。何でも、不良たちがその後、その場から立ち去ろうとした幽霊を追いかけたらしいんだって……。それで、幽霊が曲がり角を曲がった時に、不良たちはソイツに追いついたんだけど……」

「……」
「追いついたんだけど……？」

「目の前で消えっちゃったんだって、その幽霊。しかも曲がり角の先は行き止まり」

「え！？ な、何かその場から脱出できる要因は無かったのか！？
ほら、マンホールとか、乗り越えられそうな壁とか……」

「無かったって。その曲がり角、ビルとビルに挟まれた所でマンホールも無かったって」

「無かった、のか……！？」

「瞬間移動じゃないのか？」

「違うつてさ。瞬間移動みたいに一瞬じゃなくて、次第に薄くなるように消えていったらしいから」

「『次第に消えていくように』……か……」

それではまるで本物の幽霊だ。噂話は本当なのか？ と、そんな思考が龍之介の頭を駆け巡った。また同時に龍之介は、その『幽霊』を確認してみたくなった。自分の目で見て、確かめたい。そんな気持ちになった。

「なあ刃先……。その幽霊に会いに行ってみないか？」

「『幽霊に会う』？」

「そうだ……。お前の話を聞いてたら、俄然興味が湧いてきた」

「俺もだ」

「まったくキミたちは……好奇心の絶えない、冒険少年かい？ ま、嫌いじゃないよ、そういうノリ」

刃先は龍之介たちの提案に呆れながらも、賛同した。

「こんにちはー！！ 遅くなりましたー！！」

それから十分ぐらいしてポニーテールの女子、雨崎琴音が入室してきた。龍之介たちは『幽霊にどう会うか』のアイディアを出し合っているところだった。

「あ、どうも」

「あれ！？ 刃先ちゃん！！？ どうしてここに？」

「ちょっと暇でしたから……寄っちゃった。駄目だった？」

「ううん！ 別に構わないよー！」

そう言いながら琴音も席に座り、拓巳と龍之介も彼女に挨拶した。

「おっす、雨崎」

「こんにちは、雨崎さん」

「こんにちはー二人とも！！ そう言えば松野浦くん、昨日は指摘しなかったけど……敬語に戻っちゃってるよ？ もっとフランクに！」

「あ、すいまーごめん！」

「コイツの女子への敬語は脊髓反射レベルで染み付いたもんだからな」

と、拓巳が龍之介をさり気無くフォローする。

「ボクは女子じゃないっていつのかい？」

「いや、そうじゃなくて……口調の所為かな？」

「ああ、ボクの、この『ボク』っていう一人称と男っぽい口調かい？」

「そう、それ」

「ならボクが『私』って言ったら、敬語になるのかな？」

「まあ、そうだろうね」

「変な習性だなあ」

「自覚はしてるよ」

龍之介は刃先の鋭い物言いに思わず苦笑した。

「ふうーん、そうなんだ。……そう言えばさ、皆、何の話してたの？」

どうやら琴音も『幽霊探し』仲間に入る事になりそうだったので、龍之介は琴音にいままでの経緯——『エロ連』の件は除く——を話した。

「へえー、そんな噂話が……」

「で、今、『幽霊にどう会うか』を話し合ってたんだ」

「今のところは『目撃情報の多かった所をぶらつく』って案が一番有力だな」

「私もそれが良いと思いますよ……あ、あと、現場で聞き込みとか……」

「つまり『目撃情報多発地点で聞き込みを行いながら、ぶらつく』んだな？」

「お、いいね！！ それ」

「装備はどうする？ 拳銃を持ってるって噂だろ？」

「ああ、拳銃は持って行った方が良さな。……っと、刃先、お前、拳銃持ってるか？」

「持ってるよ、一応。護身用に」

そう言っただけで彼女が取り出したのはオートマチックの拳銃、ベレッタM92だった。イタリアのピエトロ・ベレッタ社製の拳銃で今やコルト・ガバメントに代わりアメリカ軍の制式拳銃になっているものだ。

「OK。あ、龍之介、お前は刀も持つとけ」

「了解。雨崎さ——いや雨崎。拳銃持ってる？」

「あ、うん。持ってるよ」

そう言っただけで、琴音も拳銃を取り出した。リボルバー拳銃、四インチのヘビーバレルタイプのS&W・M10だ。1920年代に登場して以来、通称である「ミリタリー&ポリス」の名のとおり世界各国の軍隊や警察において広く使われ、現代リボルバーの原点となった実績ある拳銃である。

全ての準備が終わり、龍之介は拓巳に、

「よし、拓巳。今、何時だ？」

「そうだな……午後五時三十分くらいだ」

「ふむ……先輩も今日は適当に帰って良いって言うてたから……早速、探索に出掛けるとするか！」

「そうだね。確かに目撃情報が多い時間帯の三十分前だよ、今」

「ベネ……」

龍之介はタイミングの良さに思わず、イタリア語で『良し』と言ってしまった。

龍之介たちは街に出た。夕方の街にはまだまだ人が多く行き交っている。駅に近くなればなるほど。

目撃情報多発地点——緯度35,760785、緯度139,536246に位置する、東久留米東口中央公園に龍之介たちは居た。水飲み場に砂場、ベンチ、滑り台がある、至って普通の公園。特徴があるとすれば、四方を道路で囲まれている事だろうか。

「ここが噂の『目撃情報多発地点』……？」

「雰囲気にしても、外観にしても……別段、変わった所は無いな」

「うん、普通の公園だね」

「でも、ここで『幽霊』は最も多く目撃されているんだ……ちょうど今、午後四時と午前零時、午前四時、午前六時、午後一時——これは十三時と言った方が良いかな？　そして午後六時に、ね」

「一日に六回……目撃情報が多くなる……。回数も時間も不吉だな」「『死ぬ』の四に、『獣の数字』の六、『真夜中』の零、『最後の晚餐』の十三……こうして言ってみると、数字の種類も『四種類』で不吉だ……」

「お、おい！！　止めておこうぜ、そんな事言っの……」

龍之介は拓巳の発言に、錯覚だろうか、背筋に寒いモノを感じ、怒鳴った。

「わ、分かってるって……あ、そろそろ六時だぜ」

現在時刻は午後五時五十二分。もうすぐ『獣の数字』が入った、午
前六時だ。

龍之介たちが異常に気付き始めたのは、それから暫く経った時の事だった。

「お、おい！ 皆、あれを見ろ！！」

公園の中心地点で木の葉が舞い始めた。周囲に風は無く、とても不自然な様子だ。

シーソーや木は独りでに揺れ始め、水飲み場で水が流れ出す。付近の道にある電灯もチカチカと点滅している。

「おい、何が起こっているんだ！？」

「不味いんじゃないの、これえ！！」

「うう、怖いよー！！」

「落ち着けえ、落ち着けえ……ッ！！」

全員が軽いパニック状態になった。周囲が暗くなってきた所為もあるのだろう、パニックは更に加速していく。

「く、そ……皆！！ 素数を数えて落ち着くんだッ！！ 素数は誰にも碎けないと、某神父も言っていた！！」

「に、2、3、5……」

「7、11……！！」

「13、17あ……うう」

全員で素数を言い合うが、その程度では異常現象は収まらない。

今度は足音が聞こえてきた。ザシュ、ザシュ、ザシュ、と見えな何かが近付いてくるような、そんな足音。足音と共に足跡も近付いてくるのだが、それを発生させている本体どころか足すら見当たらない。只、足音と足跡が近付いてくる。足跡はスニーカーが作っているような形だった。

「おいおい、いよいよ幽霊っぽいな……」

「おい、開き直って冷静になつてんじゃないえよ」

「うう……もう駄目だよお……」

「あ、諦めないで、琴音ちゃん。二人が何とかしてくれるよ！！」

「俺たち任せかよ！！ 少しは手伝ってね！！」

「あ、二人とも！！ あれ見て！！」

龍之介と拓巳の嘆きを他所に指差す刃先。その先には顕現し始めた『幽霊』の姿があった。

正確には、顔の半分と右腕、左足、胴体の一部が顕現している。その顕現している中でも途切れた部分、その断面は黒く塗り潰されている。

明らかに人間ではない、その『幽霊』に龍之介たちは言葉を失った。

【第二十五章 任務の無い日、安保部にて】（後書き）

皆さん、こんばんは。大地震が起きて大変な事になりましたね。皆さんはご無事でしょうか。皆さんと被災地の方々の安全を心よりお祈りしております。

私、篤岡義人はこれから、事態が収束するまで節電を心掛ける為に、更新頻度を落としていきたいと思っています。

作業もなるべく簡略かしていきますので、作品に稚拙な部分が出てくる場合があるかもしれませんが、ご了承下さい。

地震で緊張した皆さんの心を解していける作品をお送りしていきたいと思っています。

今回はあまり感想を待っていません。節電の為。

【第二十六章 幽霊、内岡喜作】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「我が能力を誰も捉える事は出来ない」by喜作〉

【第二十六章 幽霊、内岡喜作】

「……」

幽霊の顕現は数秒の内に完了した。今はどこからどう見ても人間の姿をしていた。

幽霊は噂通り、紫色のシャツにオリーブ色のスラックスを着用し、二十代半ばの男性の外見をしていた。髪は全体的に短くし、前髪だけ立たせている。

そして幽霊は宙に浮いて、無言で龍之介たちを見下ろしていた。

「これが、噂の幽霊……」

龍之介は息を重たく吐くかのように、そう呟いていた。そうさせるほどの圧倒的な圧力、存在感がその幽霊から湧き出ていたのだ。

幽霊は暫く龍之介たちを見た後、180度方向転換し、クリスチヤンアカデミー方面に向かって走り出した。もっとも、浮いた状態なので地面に足を付けて走っている訳ではない。幽霊は空中を飛んでいた。しかもかなりの速度で。

「な、あ！！　しまった！！　奴を『追跡』出来るか！？　雨崎ツ！！」

「『既に』補足済みだよ！！」

ここまで来れば龍之介たちも簡単には引き下がれない。毒を喰らわば皿まで。

龍之介たちも『ラン・アンド・チェイス』で幽霊を捕捉し、追跡を開始した。

『ラン・アンド・チェイス』によると幽霊はクリスチヤンアカデミー方面から遮断機方面に向かって高速で移動中とのことだった。

「くそ！！　歩きじゃ無理だ！！　『クラッシュクラスター』！！」
手にSAを纏った龍之介は『クラッシュクラスター』による爆風移

動、ブーストを起動させ、宙に浮く。先日の戦闘のショックで、未だに性能が安定しない『クラッシュクラスター』だがなんとか飛べた。

今すぐ幽霊を追跡したいところだが、その前に、

「雨崎!!」

「なに!？」

「?まってくれ!!」

「へっ!?! え!?! あ——」

龍之介は素早く、琴音を負んぶした。しっかりと背中で彼女を支えた龍之介は空高く、飛んだ。

「奴を引き続き、追跡してくれ!!」

「わ、分かった!!」

『ラン・アンド・チェイス』は幽霊を捕捉し、追跡する。この『追跡』からは何者も逃れられない。それが琴音の能力。

「目標は遮断機を越え、駅に向かって移動中!! 今は飛行を止めてる!! 地に足を付けているよ!!」

「了解!! ショートカットだぜ!!」

龍之介は公園から駅まで一直線に飛んだ。幽霊が飛行を止めているという事は、幽霊の移動速度は若干だが落ちている。その程度なら龍之介の『クラッシュクラスター』の限界出力で追いつける。いや追い越し、先回りできるレベルだ。

「ここで奴を待ち伏せる……雨崎は奴を捕捉して、位置報告を」

「分かった!! 頑張ってね」

「応。任せとけ」

龍之介は駅の近く——駐車場と餃子屋に挟まれた道で、幽霊を待ち受ける。

ドドドドドドドド

幽霊の足音が聞こえてくる。どうやら——人間のレベルでだが——かなりのスピードで駅方面に近付いてきているようだ。しかも実

体化した状態で。

「（自在に実体化してきている……？　なるほど、格闘戦もできる仕様か）」

龍之介は、左手を開き前方に持っていく、右手は硬く握りしめ右脇腹の方にゆっくりと持っていく、いつもの構えを実行する。

「目標は大きく跳躍……！」

琴音の報告の直ぐ後、幽霊は龍之介の目の前に着地した。

龍之介と『幽霊』は見つめ合う。

龍之介が構えたまま固まる中、幽霊も構えを取る。手を空手チョップのように、手刀のようにし、ゆっくりと自分の眼前に構える。そんな構えを取った。

周囲の視線を無視し、二人の間には只ならぬ雰囲気が漂う。

何時、戦闘が起こってもおかしくない、そんな状況で幽霊は口を開いた。

「何だ？　お前は……。さっきの公園から蠅のように付いて来て……」

「アンタに興味を持った。って理由じゃ駄目か？」

「駄目だな。俺にはこれから『やらなきゃいけない事』があるし……お前は鬱陶し過ぎる」

二人は再び無言で見つめ合う。琴音は龍之介をサポートし、同時に邪魔にならないように、直ぐに動いて、安全そうな場所からその様子を見ていた。

「うりゃあ……！」

先ず龍之介の拳が闘いの火蓋を切って落とした。

「（なるほど中々の拳速だが……回避出来ない程じゃない）」

幽霊は首を僅かに反らし、易々と龍之介の拳を回避した。同時に拳を叩き込む。

「（速い……！）」

龍之介は幽霊の拳を『ノンアクティブ・スラスタ』でジャンプし、何とか回避する。

宙に浮いた龍之介は下に居た幽霊に足を伸ばして、蹴る。しかし幽霊は腕でその蹴りを軽くあしらうと、上空に向けて拳を放つ。

龍之介はその拳を、更に『空中』でジャンプし、距離を取り、着地する。

「（やはり……アイツは自由に実体化と透過を使えていない！！時間が掛かるのか、どののかは知らんが、奴が俺との格闘戦に応じているというのはそういう事だ！！）」

思考しながら龍之介は牽制に蹴りを二、三発放つ。幽霊は、体を少し動かし、蹴りを難無く回避する。

「（そして奴が攻撃を回避しているという事は！！　幽霊に俺の攻撃が効くって事だ！！）喰らえ！！　掃討のオオオグレエエトオ！！　フィスト！！！！」

ヒュバアアア！！！！　という効果音が付く程、勢いの乗った拳を龍之介は放った。

幽霊はそれを驚異的なジャンプ力で回避し、東久留米駅西口付近の噴水オブジェの頂上に降り立った。

既に警察を呼ばれても仕方が無い状況だが、警察官が全員、スピリットアカレイドという訳ではない。寧ろ大半が無能力者たちだ。やはり、対能力者戦闘に慣れていないところがある。能力犯罪対策部隊もあるにはあるのだが、未だギリギリ、喧嘩のレベルを超えない龍之介と幽霊の戦闘は、部隊の出動を足踏みさせていた。そのため駆けつけた警官たちの行動は、周辺の一般人の避難の手助けに留まっていた。

第一、龍之介が身に着けているのは、地域でそれなりの力を持っている安保部の制服である。『能力者の始末は能力者に任せれば良い』、そういう雰囲気がある東久留米駅西口周辺に漂っていた。

第二に、日本は現在、治安が悪い。これは日本以外の国にも言えた事だが、スピリットアカレイドが地上に姿を現し始めてから、どの国も前より治安が悪くなった。つまりこういった『能力者戦闘』

などの犯罪行為は日常化しつつあるのだ。例えば龍之介と幽霊をスルーして買物や帰宅をする者や戦闘を見物する者が居るように。

「うりゃア!!」

龍之介は右拳を構え、地面を蹴って、爆発するように飛んで、噴水の上に立つ幽霊に突撃した。

「ずりあ!!」

幽霊も突撃する龍之介の頭部を蹴りかかる形で応戦する。

結果。龍之介の拳が幽霊の顔面にめり込み、幽霊の足が龍之介の頭部側面に直撃した。

「ゲギツ……!!」

「ガフツ……!!」

ザパン、ザパンと、龍之介も幽霊も噴水の下——池に落ちた。しかし幽霊は素早く池から揚がり、道路に降り立つ。

「（やはり……!! コイツの移動性能はスゴイ!! ……だが格闘戦のセンスも技術も!! 俺と同ランク!! 同レベルだ!! 今までの戦闘で確信した!!）俺の『好奇心を満たす』気になったか？」

びしょ濡れになった龍之介はゆっくりと立ち上がった。水滴が滴り、池に小さく落ちる。

そんな龍之介を幽霊、内岡喜作はジツと見ていた。

「（コイツ……俺に『興味があるから』という……それだけの理由で……俺との戦闘、それ一つに集中している……。バカなのか天才なのか……分からない）いいや、無理だね。言っただろ、用事があるって。アポ取って、出直しな」

「益々興味が湧いた……。アンタの正体も……。アンタの用事も……。知りたくなった!! 俺の名前は松野浦龍之介!! アンタを倒して、正体と目的を聞き出してやる!!」

「名前ぐらいは教えてやっても良いかな。……。俺は内岡喜作だ。俺はお前を倒して、『用事』を達成させて貰う」

そして戦闘が再開された。

「ずりや、りやあ！！！」

そうになると、どれだけ当てられるか。それが問題になってくる。

「ずりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやり
りいいああ!!!」

[illegible]

「ズリアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

双方、存在を削る。そんな応酬。

「ずりゃあッ！！！！」

267

付いた。二人とも間合いを十分に取り、また睨み合いに移る。

再び、格闘戦に移ると思いきや、

「ふ」

喜作は何やら不敵な笑みを浮かべ、踵を返した。龍之介は驚き半分、不信半分の心持ちで、喜作を止めに掛かる。

「おい！！ 待て、まだ勝負は——」

「いや、勝負は決した」

「な——ッ！！」

「俺は既に！！ 『お前に触れている』！！ ……俺への興味を無くせ。強制的に、な……発動せよ、『L o s e s s T h e I n t e r e s t』」

「るーじず、じ、いんたれすと……？ うぐつ！ くふつ……これ

はッ！（何なんだ！？ この感覚！！ 奴への意識が……）」

「さてと……隠蔽はお手の物だぜ？ 俺のSAは」

「ま、待て……ッ！！」

「いいや、待たない。待つてもお前には何も出来ない。俺と話す事も、闘う事も、追う事も出来ない……それが俺の『L o s e s s T h e I n t e r e s t』の効果……。現にお前は今、自分の意思で立つことも出来ない。呼吸するのがやつの状態だろ？ ……好奇心は猫を殺す、と言うが、好奇心がなければ……猫、いや生き物は何も出来ないのだよ」

龍之介は蹲りながら喜作の去り際を見た。周囲には『ガス』のような、『オーラ』のようなモノが漂っている。

「（あれが……奴の、SA……）」

龍之介にそれ以上の考察、観察、推測は出来なかった。

『対象から興味、好奇心を奪う』。それが幽霊、内岡喜作のSA『L o s e s s T h e I n t e r e s t』の能力なのだから。

琴音は、龍之介と喜作の戦闘一部始終をただ見ている事しか出来なかった。

「（凄い戦闘……あれが松野浦くん？）」

龍之介自身の格闘のセンスや技術は一般中学生レベルだ。が、『クラッシュクラスター』の能力補正があれば、ある程度、アクロバティックな闘いが出来る。

琴音が目撃したのは正にそれだった。龍之介は彼女の目の前で飛んで跳ねて殴った。まるでスタントのように。

そして戦闘は龍之介の敗北によって決着していた。龍之介は現在、駅前の本屋付近で倒れている。重傷とは行かないまでも意識を失っているに等しい状態に陥っている。

「と、兎に角！！ 松野浦くんの様子を見に行かないと！！」

琴音が物陰から動き出し、人混みを掻き分け、龍之介に近付こうとした、その時。

『L o s e s Ⅱ T h e Ⅱ I n t e r e s t 』が発動した。

『L o s e s Ⅱ T h e Ⅱ I n t e r e s t 』は生物の意識に干渉するSA能力である。

この能力は能力者であり幽霊でもある、内岡喜作が『自身の行動を誰にも邪魔されたくない』という欲望が顕現した能力である。

彼はこの能力を死後に手に入れている。生前は無能力者であった。その能力は『対象から興味、好奇心を奪い、最終的に何も出来ない不能にする』と言うモノ。本体に触れられたり、殴られたりすれば『一巻の終わり』な、この能力は、近距離だけでなく遠距離にもある程度の効果を表す。

近距離の場合は、対象をすぐさま自失、虚脱状態に陥れる事が出

来るが、遠距離の場合は効果範囲に居る対象を時間が掛かるが、ぼんやりとした呆けた状態にする事が出来る。

前者が龍之介、後者が琴音と群衆、警官たちの陥っている状態だ。この能力は性質上、隠密行動、暗殺、逃亡に向いている。

「そして私の『目的』にとって無くてはならない存在……分かったか？ 松野浦龍之介」

こうして喜作はその場から易々と立ち去った。

見栄崎拓巳、松崎刃先は龍之介たちより少し遅れて東久留米駅西口に到着した。もつとも、既に全ての戦闘が終わった後だった。

「西口ロータリー付近の人たちの様子がおかしい！！何かあったな……。新手のスピリットアカレイドのSA攻撃、か……？」

「取り敢えず様子見しながらバスロータリーの情報を集めよう！！今は情報が足り無すぎる！！松野浦ちゃんと琴音ちゃんの事も！！ここで何があったのかも！！」

「だな！」

二人は辺りを見回す。ロータリー付近の人間は誰も彼もが『呆けている』。『ボーツとしている』。まるで『抜け殻』のように。

「刃先！！あそこの人に幻影の炎を浴びせろ！！」

「……分かった！！『フリー・フレイム』！！」

刃先が能力の名を叫んだ途端、ロータリー付近に居た群衆の内の一人が炎に包まれた。と、同時に無反応だった群衆の数人が、

「……！！うわっ！？何だコイツ！！いきなり燃え始めたぞ！！」

「うお！！人が燃えてる！？」

「何が起こったんだ！？」

「……！！！！うわあああああ！！！！俺が燃えてるううう！！！！」

息を吹き返したかのように動き出した。既にこの場所は『L o s e s 』The『Interest』の射程範囲外にあるので、群衆が再び『呆ける』といった様子は無い。

「よし！！ 反応があった！！ それにさっきまでの『異常』も無くなったようだ！！ 刃先、解除だ！！ 能力を解除しろ！！」

「OK！！ 『フリー・フレイム』、能力解除！！」

拓巳の合図で刃先から能力解除の指令が発せられる。幻影の火はその名の通り、幻のように消え去った。燃えた男に火傷は見られない。

「龍之介と雨崎…… 無事だと良いが……」

二人はバスターへと向かう。『L o s e s 』The『Interest』の爆心地へと走っていた。

【第二十六章 幽霊、内岡喜作】（後書き）

お久しぶりです。節電のため更新頻度を落としてお送りします。

【第二十七章 Dirty Players】東久留米駅西口バスロータリーにて

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「嫌だなゝ人を傷つけるのは……出来るだけ避けたい
よ」by南無ゝ

「おいおい……一体、何の騒ぎだよ。これ……!!」

駅付近のビルの屋上に立つ、拍子木佐郎はロータリーの惨状を見て思わず叫んでいた。彼の後ろには相棒の火水燃継も居る。

「俺はただ龍之介に一泡吹かせてやろうと思って、ここに来たのに……こんな予想GUYだぜ……なあ燃継」

「ああ。アイツ等何やってんだ？ こんな人通りで喧嘩なんておっぱじめやがって……」

汗をダラダラと垂らしながら、燃継は佐郎に同意した。

彼等は偶然、幽霊を追っている龍之介を見かけ、それをここまで追って来たのだ。そしてこの惨状に遭遇した。

彼が呆けていないのは一瞬の状況判断と持ち前の身体能力で『Losses』The『Interest』の発動前にその効果範囲外まで抜け出したからである。

佐郎たち二人がこの燦々たる状況に唖っていると、後ろから声が聞こえてきた。佐郎の連れは、まだ三人居る。一人は、

「どうやらこの現象はSA攻撃によるものらしいな……。術者は誰だ？ 群衆は全員呆けてるしなあ。同じように動かなくなった松野浦龍之介の能力とも思えないし……やはり、松野浦と戦闘をしてた奴かな？」

と、少ない情報で、冷静に周囲の状況を把握しようとしている特徴の無い髪型——厳密に言うと、前髪を眉に掛かるか掛からない程度に切り揃え、側面の髪も耳に掛からない程度に切って、後ろ髪を襟に掛からない程度に切り揃えた髪型——をしている男、菊鳩代雲。

もう一人は、

「おい。どうなってんだ？ 今、このバスロータリーで何が起こってるんだ!？」

フアビオ「バルツアツリの電話相手——阿亜嗚呼のスカウトした」

急速代謝』の使い手こと滝沢南無——若白髪を短めに切った十代半ばの少年——である。カーキグリーンのジャンプスーツを着用し、飛行眼鏡を額辺りに掛けている彼は駅前の様子を見て、酷く狼狽していた。彼は元々、悪行より善行を好むタイプの人間なので、こういった犯罪行為を見ると狼狽してしまう癖がある。一言で言うと、まだまだ甘ちゃんなのだ。

そして最後の一人は、

「騒ぐな、南無。死人も怪我人も出ていないし、俺たちには関係の無い事だ。被害も無い」

南無を冷静に窺めている、嗚呼のスカウトした『空気粘土』の使い手こと宮島香斗だ。香斗は黒いフルフェイスのガスマスクを被り、パワードスーツ——NAの最新機種、白一色で塗装されたCN・オフェンスマンを着用し、その上からフード付きの軍用コートを着ている二十代の男である。

現在、嗚呼によって派遣された、南無と香斗は、アリーチェ——ファビオの体に潜む別人格で、今の肉体操作権を取得している女性型人格——の指示でSTEALTH・DECAYと行動を共にしている。

この集団の中でリーダー格なのは代雲である。代雲は仕切るように言った。

「取り敢えず、今はあの『俺たちですら知らなかったSA能力』についての情報収集だ。……すまないな、拍子木、火水。龍之介への復讐よりも調査を優先してもらう。……滝沢と宮島も、だ！」

「……了解！」「……」

「滝沢、お前は周囲を『跳び回って』情報を集める。決して効果範囲内に入るなよ。宮島、お前はここで周辺の監視を続行。……『スナイパー』も付けてやる。ソイツと協力しろ。ソイツの無線の周波数は144.7だ。……拍子木と火水は逃走した幽霊を追え。全員、何かあったら俺に伝える。指示を出す。……全く。今日、君等と親睦を深めるためにシヨッピングをしていて本当に良かった。また手

柄にありつける……」

こうしてSTEALTH・DECAY側が急編成したチーム、ダイ
ティープレイヤーズは行動を開始した。

一方、『ある意味でダイティープレイヤーズ』な三人が物陰でコ
ソコソ動いていた。

松野浦龍之介が先日、闘った竜騎兵——サードと、その上位機種
である竜騎兵——ファーストとセカンドである。

サードは龍之介と初めて会った時と同じように凶悪な顔が、ファ
ーストは顰め面に鬘のような荒々しい髪が、セカンドは『知的なイ
メージが付属した龍之介』をコンセプトに細いフレームの眼鏡を掛
けている所が、それぞれ特徴的である。また全員、龍之介に瓜二つ
だ。

彼等——竜騎兵は、自立有機プログラム体という生命体にカテゴ
ライズされており、厳密に言うところクローンではなく、その『製造方
法』は、どちらかと言うとデザイナーベビーに近い。

自立有機プログラム体はまず、予め用意した受精卵をベースに遺
伝子操作を行い——竜騎兵の場合、容姿を松野浦龍之介とほぼ同じ
にする——、その際にスピリットアカレイドの遺伝子に見られる、
SA発現促進因子とSA進化因子を組み込まれる。前者の因子はそ
の名の通り、SAが発現し使えるようにする為の因子で、後者の因
子は、より強力なSA能力を開発する為の因子である。

これらの遺伝子操作——と言うよりは遺伝子改造を受けた自立
有機プログラム体は、必然的に『強力なSA能力を発現出来るスピ
リットアカレイド』となる。しかもその容姿は自由に変更可能。身

体能力のある程度の向上もお手の物だ。

勿論、龍之介も自立有機プログラム体である。元々、龍之介の容姿は『龍之介のモノではない』。別の『誰かのモノ』である。

閑話休題。

「しっかし……内岡は随分暴れたようだな」

と、笑いながら言うサード。この状況を楽しんでいるように見える。どこまでも軽薄で人をイラつかせる雰囲気放っている。

「……あの幽霊か？」

と、おもむろに発言するのはファースト、ファースト「ワイヴァーンだ。三人の中で一番、厳しそうな雰囲気漂っている。まるでライオンのような男だ。」

「そうでしょうね、それしか考えられません。全く暴走気味ですね、あの幽霊は。能力を手に入れたから良い気になってるんでしょうか、あの元無能力者は」

と、早口に捲くし立てるのはセカンド、セカンド「ワイヴァーンだ。東大だか京大だかに居そうな雰囲気青年だ。」

この三人はバスロータリーのすぐ近く——駅舎の頂上に居るのだが『Losses』The『Interest』の影響は受けていない。能力の性質を上手く利用し、効果から逃れているのだ。

「しかし……この『銃』が幽霊にも適用出来たとは……『製作者』も知らなかった事だろうよ」

そう言つてサードが取り出したのは、『古惚けた大型の自動拳銃のような物』だった。グリップは頑丈な櫟の木、本体は所々に錆が浮いている。カートリッジの中身は空だ。

「『可能性を引き出す銃』、アウェイクブリット……でしたっけ？
胡散臭いですね、私は信じませんよ」

「でも実際にあの浮遊霊野郎を射抜いたらSAに目覚めたんだぜ？
やっぱ、本物だったんだな」

「生物以外にも効くのか……面白い拳銃だな」

「だから信じませんよ、僕は。そんなオカルト染みた銃」

「だったら！　今、ボケまくって止まってる奴等の何人が射抜くか！！　それでSAが目覚めたり、SAが強化されたりしたらコレは本物って事だろ？」

軽薄に恐ろしい事を言うサードにファーストは威厳を持った口調で、
「止めておけ……その銃は『対象が死ぬ』可能性をも引き出してしまふ恐れがある……。もしそうならどうなるか？　こちら辺は監視カメラが多いから……。直ぐにお前の仕業だって分かってしまふぞ？」

「けどよく試してえんだよね。この銃」

「諦めろ」

ファーストの一声にサードも渋々従い、奇天烈な銃をホルスターに収めた。その後、サードは、パンパンと膨らんだホルスターを叩き、「ほらよ」という風にニヤケ顔で、応じた様子をファーストに見せる。

「で？　どうするんだ？　この後」

「ここに居ても良いんですけどね。それだと、あまり面白くないです。内岡の奴でも追いますか？」

「いや……今回はラストの様子見をしたかっただけだ……。解散、で良いだろう」

「ゲーセンでも行くとするか」

「私は書店にでも寄りましようかね」

こうしてある意味でダーティープレイヤーズもといワイヴァーンズは方々に飛び去り、その場から居なくなつた。

かのように思えた。

「へっへっへ」

サードは無邪気に笑いながら能力で上空へ跳び、ヒップホルスターからアウェイクブリットを引き抜いた。

「やっぱ、一人ぐらい良いよなア！ 撃っちゃってもよ！！ ここなら監視カメラからも映らねえし」

跳びながら、標的を選定するために止まっている大衆を舐めるように見る、サード。

「決めたッ！！ あの見るからに無気力で平凡そうな奴！！」

狙いを定め、引き金を引く。その狙いは酷く正確で、発射された――エネルギーの塊のような――弾丸は群衆の中に居るターゲットの首筋に直撃した。

「ふう…… 射撃命令はまだかしら？ …… もつとも誰を撃つかすら通達されていないんだけど……」

狙撃銃・SR-25を抱え、そんな独り言を吐くのは、STEALTH・DECOYの優秀な狙撃手にして銀髪の美少女、FINEリアウフシュナイターだ。今も、その美しい長髪をアップスタイルで纏め、都市迷彩で塗装された野戦服を身に纏っている。狙撃ポイントは西口バスロータリー付近のコンビニのある建物の屋上だ。代雲の連絡を受け、組織の移動系能力者に連れられ、ここまで駆け付けて来たのだ。

「へへへ、今日もあの子に会えると良いなあ」

あの子とは、見栄崎拓巳の事である。FINEは先日の戦闘以来、拓巳を気に入っている。異性としても、戦士としても。

「おっと、気を引き締めなきゃね。今は任務中だ」

FINEは狙撃銃を構え直す。

それはサードが民衆の一人を射抜いた直後であった。

【第二十七章 Dirty Players】東久留米駅西口バスロータリーにて

節電のため更新は控えつつも投稿します。電気は大切にネ

【第二十八章 『元』一般人、阪上ノ士】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「全く……厄介事は勘弁したいぜ」byノ士ゝ

【第二十八章 『元』一般人、阪上×士】

「う、うむ……？」

サードに射抜かれて気絶していた一般人、阪上×士は目を覚まして、起き上がった。痛む首筋を擦りながら。×士の現在位置は駅前の銀行の入り口付近である。

「痛てて……、何が起きたんだ……？ 首筋がとても痛い」

×士が撃たれた首筋には『弾痕』がしっかりと刻まれていた。いくらアウエイクバレットの弾丸が『可能性を引き出す幻の弾』でも『弾痕』はしっかりと出る。

その『弾痕』こそが『可能性を引き出した証拠』なのだ。

「俺は確か……能力者同士の喧嘩を見てて……それからどうしたわけ……？ 覚えていないな……。一体、全体、何が起こって——はッ——！」

状況を判断しようとして周囲を見回して。

自分の巻き込まれた状況の異常さに気が付いた。

「な、何で……！？」

×士が第一に驚いた事は勿論、周囲の人間が呆然と立ち尽くしている事だった。舞台が駅前という事もあって、立ち尽くしている人数も半端では無く、不気味な光景であった。

そして、

「何が……！？」

第二に彼が驚いた事、それは、

「『俺の顔』が——ッ——！！」

近く建物の窓ガラスに映った『自分の顔』であった。顔面崩壊し

た訳ではないが、その容貌には『変化』があつた。

生まれつき焦げ茶色だった髪には所々、ラインのように白のメッシュ——お陰で彼の髪は、頭というキャンパスに白と焦げ茶の縦縞模様を描いている——が数本入り、両方とも黒かった目の色は右と左で、金と赤のオッドアイとなつた。また下瞼の真ん中からは血管のような筋が出来て、顎の付け根にまで伸びていた。

「『変わっている』！？ 俺は……」

×士は自分の顔の変貌ぶりに思わず、ヘタヘタと地面に座り込んだ。その瞬間、更なる驚愕が×士を襲つた。

「うおおッ！？」

×士の体が勢い良く、飛び上がったのだ。×士がジャンプしたのではない。が、彼は向かいの歩道まで吹っ飛んだ。

「一体……！？」

そして歩道に着地すると同時に。

「うおわぁッ！！」

また吹っ飛ぶ。

「誰か……誰か止めてくれえええ！！」

幸か不幸か、この×士の奇行は『奇跡的に』情報収集中のダーティプレイヤーズの面々には気付かれなかった。菊鳩たちはプロと言つても所詮は中学生クラスの集まり。偶にミスをすることだってある。

SA能力覚醒因子が高い者が集められる、私立城門学園予備校——拓巳の妹、かばすも入学している教育施設。

その生徒、予備生である阪上×士はサードにアウェイクブリットに射抜かれ、能力に目覚めた。簡単に言うと、スピリットアカレイドになつた。

その能力は『自身が触れたモノに、触れた方向に重力を働かせる』能力。

重力の大きさは基本的に自動調整だが、触れた時にある程度、調整できる。重力を小さくする事も大きくする事も出来る。大きくする場合を対象が『破壊されない限り』無制限に大きくなるが、小さくする場合、少なくとも対象が動く程度までしか小さく出来ない。

重力はこの世の殆どの物体に作用する。生物や無機物は勿論、空気等の気体もその影響からは逃れられない。また対象の質量も関係ない。トラックだろうが、電車だろうが、触れてしまえば、触れた方向に『重力の影響を受ける』。また対象の速さも関係ない。触れた瞬間、自動調整された『重力の絶対的な力』によって吹っ飛ぶ。

そんな『重力を操る』このSAに『只一つ』例外があるとすれば、それはこの母なる大地——地面やその偉大なる地面に『固定』された建造物ぐらいだろう。

それがこの能力の制限。大事なのは対象の『繋がり』なのだ。

その『例外』に能力効果が及んだ場合、反発力が如く、本体が『逆に』重力の影響を受ける。触れた方向とは『逆のベクトル』の重力を受ける。

♂士はこの『例外効果』に直感的に気付き、『心の底から止まれ』と念じた時に、『自身がバネのように地面を跳ねる』、この不可解な現象が収まった事から、自分のSAである事を自覚した。その後、彼はこの能力を数回ほど試し、その『能力効果』を確認。

彼はこのSAを『カーソル・クラフト』と名付けた。

「ふむ……分かってきたぞ。『カーソル・クラフト』……手で触れれば、『手で力を掛けた方向』に重力に押され飛んで行く……か」

メ士は東久留米市役所方面に向かって歩いていった。その理由は、特に無い。その方向の方が能力試射に向いていると、直感で感じ取ったからである。他に予定も無い彼は、取り敢えず、気紛れでその方向に向かっていった。事実、幽霊である喜作が逃走した方向は清瀬方面に続く線路沿いの道であり、そっちの方向にダーティプレイヤーズの視線は釘付けである。

「能力射程は……三百、いや五百と言った所か……。小枝を『発射』した後に俺が移動しても変わらないから、投げる『位置』が『重力発生源』なのか……？」

道中で実験用に拾った小枝を『真っ直ぐに投げ』、どこまで行くかを測ったり、

「なるほど……効果は物体が破壊されれば『能力効果は切れる』、のか……」

同じく拾った小石を『地面に落とし』、『能力効果』を見たり、

「『制限』は分かったが……移動方法にも流用できるし、問題無いな……『カーソル・クラフト』!!」

近くにあった信号機の支柱を垂直に『蹴り』、自分自身を『重力で発射』させ、地面スレスレに滑空したりしていた。

こうして彼は自身の能力、『カーソル・クラフト』を徐々に『自分に馴染ませていた』。

一方、彼の進行ルート上にはSTEALTH・DECOY側からダーティプレイヤーズのサポートとして派遣された——STEALTH・DECOYが移動系能力で迅速に兵員を派遣する能力と市内にばら撒かれた諜報員からの情報伝達能力と素早い状況判断を兼ね備えているからこそ出来る芸当である——別働隊、レイン・マインズが活動を開始していた。

メンバーは、クサヴァーIIバシユこと甲山草徒、熱血接近戦ファイターこと鬱井清、侍系男子こと那美矢甲紀の三人の少数精鋭である。

阪上×士とレイン・マインズ三人が衝突するのには、あまり時間は掛からなかった。進行ルートからして遭遇する事は目に見えているし、×士自身が非常に『目立つスピリットアカレイド』だったからだ。

「ふん！ 菊鳩のヤロー、『君たちは放課後で暇だろうから我々の任務を手伝って貰おう』、だのと……こっちは『幽霊』なんて来ねえじゃねえか！」

「まあ落ち着けよ、クサヴァー。お陰で俺たちは『もう一人の新手のスピリットアカレイド』と遭遇できたんだぜ？」

「鬱井の言う通りだ。この情報をマーカスに持って帰れば、俺たちは菊鳩を出し抜ける」

レイン・マインズ三人が好き勝手言い合う中、×士はゆっくりと口を動かした。

「君たちは……俺の実験の邪魔をするのか？」

その静かなる問いに清が答える。

「いいや、寧ろ手助けなのかもしれないぞ？ 演習って形で」

「そうかい……どうあっても戦うつもりなのか……。いいだろう、

『カーソル・クラフト』!!」

「Good!! 行くぜ、『アンダーリアクティブ』!!」

「相手も乗り気か……」

「三対一……剣士としてのポリシーに反するが、やらせて貰う!!」

こうして×士とレイン・マインズの戦闘が開始された。

【第二十八章 『元』一般人、阪上ノ士】（後書き）

節電のため更新頻度は落としています。今回は久しぶりなキャラを出したって感じですね。

【第二十九章 C u r s o r C r a f t】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「市役所付近で戦闘が……？」 by 香斗ゝ

【第二十九章 Cursor Craft】

「おおおおおッ！！！」

「ぬううううんッ！！！」

『カーソル・クラフト』と『アンダーリアクティブ』が、市役所への大通り沿いの薬局付近で衝突した。『重力』と『斥力』。似ているようで似ていない、二つの力。

双方、対象に能力効果を与える殴打、蹴撃を躊躇無く放つ。互いに、頭、肩、腰、太腿を拳と足で掠め合う。

「はぁッ！！！」

×士の頭への回し蹴りが炸裂する。清は顔から血を吹き出すが、「ふっ」と不敵な笑みを浮かべ、冷静に×士が蹴り込んできた足を掴み、宙に振り上げ、

「潰れるッ！！！」

冷徹に振り下ろす。叩きつける先は、コンクリートに舗装された道路。

勿論、×士はダメージを受けないように、『カーソル・クラフト』の『制限』を利用し、『重力』で清の叩きつけ攻撃の威力を相殺する。

「しゃらぁッ！！！」

その後、彼は空いている左足で、すかさず蹴りを清にお見舞いする。

しかしこの攻撃も、清が「うっ」と呻き声を上げ、眼鏡のレンズにヒビが入るだけで、効果は薄そうだ。さっきから×士の攻撃は、清にはあまり効いていない。

「らぁッ！！！」

「うぐッ！！！」

逆に。今、清が放った、×士の脇腹への拳は、×士の三倍は効いてそうだ。この拳は『カーソル・クラフト』では防げない。『カーソル・クラフト』は使用後に数呼吸の間を置かなければ、使えないの

だ。

しかも。

「俺たちも忘れんなやツ!!」

「助太刀ツ!!」

清には二人の仲間が居る。草徒と甲紀、両方とも優秀な指揮官と侍だ。

拳銃ゴム弾と刀と拳が全く別の方向から、バラバラのタイミングで来襲した。

「うおおおおおッ!!」

咄嗟の判断で、メ士は清の右腕——現在、メ士の足を掴んでいる腕だ——の関節に踵落としを喰らわした。

「ツッ!!??」

激痛により清はメ士の足を放した。それによる落下で迫るゴム弾と刀の切れ先を回避する、それが彼の策である。その策は見事、成功した。

「ハイッ!!」

またメ士は、弾や刀身回避の落下と同時に清への足払いを実行していた。空中で足をグルンと回すのだ。

バシンッ!!

肉の弾かれる小気味の良い音と共に、清の足へと衝撃が走る。

「（そして落下の衝撃は……）」

『重力』で殺す。と共に『制限』の『反発』で空に昇る。

『回避』に二重三重の意味を持たせる。彼、阪上メ士は見事に『能力を使いこなしていた』。元々あった『戦闘の才能』がアウエイクブリットに撃たれた影響で、開花したのだろう。

「これが俺の……『カーソル・クラフト』ッ!!」

メ士は重力による『空中への落下』の勢いを使って、近くのビル――

―少し豪華そうなマンションに貼り付いた。右手を左手で、ビルに縫い止めるように殴り、重力で『固定する』。

その様子をレイン・マインズは驚きながら見上げていた。

「ヤロ、いきなり跳んだかと思えば、マンションの側面に貼り付きやがった!!」

草徒はすぐさま、銃口を×士に向ける。その拳動には一切の躊躇も見られなかった。

彼の使用している愛銃、S & W・M945が火を噴いた。熱くなつた薬莢が地面に二、三個、音を立てて落下した。

「はあッ!!」

しかし、×士はその正確に撃ち込まれたゴム弾を『カーソル・クラフト』でいとも簡単に弾き返す。

跳ね返つたゴムの塊が周辺に高速でばら撒かれ、周囲に居た人々が悲鳴を上げて逃げ惑つた。

「ふふふ……『無敵』だな、『カーソル・クラフト』……。どんな攻撃も『天に唾する』ってヤツだぜ……」

×士は勝利を確信しながら、

「『空気』を射出するぜ!!」

手持ち無沙汰な左手を突つ突くように、複数回殴るかのように、前後させ、『針並み』に細く発生させた『指向性』の重力で『空気』を目に見えぬ弾として発射しようとした。

「勝つたッ!! 死ねえ!!」

必殺の一撃となりうる重力空気弾がレイン・マインズの面々に向かって空を斬る。

しかし、×士の標的である彼等は余裕の笑みを浮かべていた。

「!?!」

直後、不可思議な事態が発生した。空気弾が彼等に着弾しなかったのだ。空気弾は彼等の足元の地面を抉っただけだ。

「な、何だ……！？ これはアアアアアアアア！！！」

理由は簡単。×士の『視界』が左右上下にブレていたのだ。しかもそれだけでは無い。その他にも嗅覚、触覚、聴覚、味覚——仕舞いには『直感』などの感覚さえもブレている。『どれ』が『どこから』の情報なのか分からない程にブレていた。ブレにブレるとは正にこの事だろう、というぐらい、ブレていた。

「おい、どうした？ 顔色が悪いぞ？ 酔ったのか？ まあ、あれだけアクロバティックな動きをすれば、仕方ないよな。はは、無理するなよ」

そんなヘラヘラとした軽薄な口調で話し掛ける草徒の態度から×士は『ある事を直感した』。

「て、てててててつ テメエ！！ ななななつな『何かしやがったな』！？」

「さて……どうかな？」

「……（やはりッ！！ この気持ち悪いブレはヤツのSA！！ 意識干渉系かッ！？ お陰で上手く『重力』を操れない！！）」

×士は予備生の知識で何とか相手の能力を解析しようとしているが——彼の推測通り、甲山草徒は能力を発動させていた。

その能力名は『振動感覚』。『周辺の生物の感覚、思考をブレさせる』能力だ。

彼はその影響で『感覚』や『思考』を揺さ振られ、乗り物酔いの何倍もの『気持ち悪さ』や『吐き気』を催していた。

「（お前は、もうまともに動く事は出来ない……。『制限』を突き止めない限り、な）」

草徒と連れ添い二名は勝利を確信した。それは×士の確信にはない『確かさ』を持っていた、揺ぎ無い確信。『感覚と思考』が揺れている、×士とは正反対だ。

そしてついに感覚のブレによる気持ちの悪さによる、『カーソル・

クラフト』の強制解除で、壁に手を貼り付けるだけの重力が無くなり、メスはビルの壁から剥がれ、落下した。

「うっ、うっうっ、うおおああああッ！……！（ちちち着地ッ、な何とか、ち着地ししないとおおお！！）」

そう考えるも、下にはコンクリートの車道や石畳の歩道が冷酷に待ち構えている。

「（な、なら横は……よし！！）」

あった。ビルの向かい——メスから見れば斜め左下に、森のような林のような広場があった。あそこなら木や草が上手くクッションになってくれるはずだ。

そうでなくとも、コンクリや石畳の道路に落ちるよりかは、マシだと考えたメスはマンションの側面を思いっきり蹴った。

結果。阪上メスは硬い地面に叩きつけられ、ペシヤンコになる事無く、木に引っ掛かり、服——予備生のブレザータイプ制服である。色は濃紺——を傷付けながら、何とか地面に軟着陸し、九死に一生を得た。

その頃には感覚の『ブレ』も思考のブレによる言語の『ブレ』も収まっていた。

「（あ、危ネエ——！！ もう少しで病院かあの世にイってたぜ……。……しかし、あの黒髪アメリカン風リーゼントのヤローのSAは侮れねえ……。あの『気持ち悪さ』は二度と味わいたくねえ……。この林から少し様子見しよう。気絶した振りをしながら、じつくりと、な……。）」

カサリ、と小さな物音を立て、木を少し選り分けたメスは、枝や葉の間からレイン・マイنزの様子をコッソリと見た。息を殺して、慎重に視て、そして聴いた。

「野郎、気絶したのか？ 少しやり過ぎちまったかもな……。」

「いや、奴をビルから引っ剥がしただけでも大した成果だぜ、クサヴァー。な、甲紀」

「ああ、我々の戦法はああいった遠距離戦闘には向いてないからな」
「一応、安否確認のためにゴム弾でも叩き込むか？ あ、の林に」
「ジャキ、と銀色の拳銃を林に向ける草徒。その様子に、メスは少量の冷や汗をかいた。」

「どうしよっかな」

頭をポリポリと掻きながら思案顔をする清。

「それとも私が斬り込もうか？」

そんな第一案に次ぐ、物騒な第二案の提案をする、甲紀。刀に手を掛けている。いつでも斬り掛かれる体勢だ。

「まあ良いさ、どんな方法でも。奴は俺たちから絶対に逃げられない。必ず捕まえられる」

どの方法を取るかは迷うが、必ず阪上メスを捕獲する。三人のそんな考えに、メスは心底、怯えた。と同時に激しい怒りが込み上げて来た。

「（『この俺』を必ず捕縛する、だとお？ オイオイ、舐められたもんだな）」

彼は元々、プライドの高い男であった。しかしそのプライドを尊重しすぎると、人間関係が潤滑でなくなったり、何事も上手くいかなくなったりすると言う事を、メスは良く知っていたため、彼はその『厄介な物』をあまり表には出さず、静かに生きてきた。

しかしそのメスのプライドは、今日、突然だが能力を持った拍子に、彼の心の奥底から外に顔を出したのであった。

「（ふざけるなよ、不良どもッ！！ 今の俺は『無敵』だッ！ 他人にヘコヘコしなくとも、十分、人生を成功に収める事が出来る程の能力を持ったんだぞッ！？ その俺を絶対に捕まえるだとか？ 出来もしない事を言うな！！）」

メスは草木に隠れながら、三人に向けて、見えない拳銃を両手で構えるようなポーズを取った。重力空気弾の発射体勢だ。

「（段々と腹が立ってきたぞ……。あのクソカス共には、格の違いって奴を思い知らせてやる……。一発だ、一発で決める……。あのクソリーゼントにしよう。アイツにはさっきの借りがある）」
×士は狙いを慎重に定める。その狙いは頭であった。まだ三人には気付かれていない。

「（喰らえッ！）」

重力に巻き込まれ、発射された小さな空気の塊は、草徒の頭目掛けて高速で射出された。

重力空気弾は、地球の重力の影響を受けず、真っ直ぐ飛ぶ。そしてその透明な弾丸は、そのまま、真っ直ぐに草徒の頭に直撃した。

「あばあッ！！」

彼は少量の血を地面に撒き、盛大にぶっ倒れ、気絶した。どうやら額を切ったらしい。

「おい！！ 奴はもう『動いている』ぞ！！」

「クソツタレ！！ 様子を見ていたんだな！！」

清は腰のホルスターから拳銃——彼の愛銃である、CZ75である——を一丁抜き、林に向かって乱射した。

しかし時既に遅し。×士は草むらから飛び出し、重力空気弾の二発目を準備し、狙いを清に照準していた。

「無様に撒き散らしな！！」

見えない凶弾が清に迫る。

「（コイツ……！！ ただの素人かと思ったら、違った！！ 身のこなし自体は慣れていなさそうだったが、戦闘のセンスはピカイチだッ！！）」

清は自分の判断の間違いを後悔していた。と、同時にこれからの対応を考える。

「（先ずはこの『弾』を弾きッ！！）」

彼は思った事を実行に移した。重力空気弾は『アンダーリアクティブ』で見事に弾かれる。いや霧散させられ、効果が切れたと言ったところか。

「（そして！！ 肉弾戦だツ！！ 俺の得意な格闘に持ち込めば！！）」

思いながら、彼は重力空気弾を撃った直後の×士に近付く。能力補正を掛けた蹴りを推力源にした、凄まじい突撃だ。

「（勝機はあるツ！！）バステイング・インパクトツ！！」

清は目の前の少年に重く鋭い拳を叩き込んだ。少年も腕を交叉させ、防御しようとするが、バステイング・インパクトの威力はその程度では殺しきれない。

しかし。

「その程度か？ …… 一応、防御しておいたが、無駄だったな……」少年、阪上×士は不敵な笑みを浮かべていた。見たところ、彼にダメージは無さそうだ。どうやら彼は『カーソル・クラフト』の重力で清の蹴りの威力を殺していたようだ。

そして斥力使い、鬱井清に、×士の力の余り入っていないさそうな拳、いや開かれた掌がゆつくりと接近していた。

似たような能力である、『カーソル・クラフト』と『アンダーリアクティブ』であるが、明確に異なる特性を持っている。

それは、まず、『アンダーリアクティブ』の斥力が『弾く力』、『カーソル・クラフト』の重力が『落とす力』である事。そして清の『アンダーリアクティブ』の斥力が短い間に拡散し、物体を『遠ざける』のに対し、×士の『カーソル・クラフト』の重力は長い間、一方向に集中して、物体を『落とす』という事だ。

今度は×士の手が清に接触した。

途端。

「な、何だあああああああ！！?? お、落ちる！！ 落ちていくぜツ！！」

清は後方に『落ちた』。無理矢理に、では無く、まるで地球の重力に引かれるように、惹かれるように、清は『落下』していた。

それはどんな物体も干渉を受ける、否、受けなければならぬ、絶対の力。重力の影響であつた。

「じゃあな、
『糞野郎』」

人間は落下中に上手く体を動かす事は出来ない。

「う、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お……お！！！」

鬱井清の体は五百メートル先の歩道に『落ちた』。それは、土のカーソル・クラフト』の射程範囲から出た清の体が、地球の重力に引かれた結果であつた。

清を始末したゞ土は、甲紀の方に向き直った。

甲紀はそんな挑発的な態度には乗らず、ただただ刀を構えた。使う刀は鍋斬り明徒。

と対峙する。任務への執着心、それは先日の宙助との闘いでも見られた、『足掻き』。ただし『ヤケになつて足掻いている』訳ではなく、『活路を斬り開くために足掻いている』のだ。

「へえ、闘るのかよ……。ま、イケド！」

が、しかし。

「シャアッ!!」

甲紀が素早く、そして正確に刀を振るい、『全て』の空気弾をバラバラにし、その『重力』を断った。

伊達に侍商売をやっている訳ではない。その抜刀術は見事なモノだった。

「へえ……中々、やるなあ。……でも落下中に刀を振っても意味は無い!! テメエは俺との相性、最悪なんだよ!!」

「来い!!」

迫る×士に甲紀は刀を振るう。いくら無敵の×士でも『触る直前』は斬り付ける事が出来る。下手をすれば痛みで能力を解除してしまうかもしれない、そんな思惑が、甲紀の頭にはあった。

案の定、×士は清の時より、積極的に攻撃をしてこなくなった。

「（やはり、な……。『手』の防御は普通の人間と同程度……。刀に触れば能力を使う前に拳が傷付く!!）」

「クソッ!! 日本刀なんて危ねえだろうがッ!!」

×士と甲紀の闘いに警察は介入してこない。この東久留米市の警官は先ほどの龍之介と喜作の闘いに巻き込まれ、行動不能でいるためであった。

よってこの闘いには誰の邪魔も入らない。二人だけの世界であった。

「うらああああああああッッ!!!!」

「シャアアアアアアアアアアッッ!!!!」

×士は、甲紀の嵐のような刺突、斬撃を躲しながら、拳を突いて、突いて、突いて、突いた。甲紀の抜刀術に勝るとも劣らない嵐のようなラッシュ、突きの連打である。

「ハアッ!!」

更にそのラッシュの合間に、×士は左足による蹴りも入れる。残った右足、片足だけでバランスを取り、猛攻を加えていた。そんな数の暴力に、甲紀は攻撃を避け切れなくなっていた。

「はっ！！ これで終わりだッ！！」

拳と蹴りが深々と、甲紀の顔と腹に入り、×士は勝利宣言をした。しかし、甲紀は、

「それは……どうかな？」

「何！？ ……あ、う、ぐぐ」

×士の『感覚』がブレる。先ほど体感した『気持ち悪い感覚』に、もしま、と彼は後ろを振り向いた。

そこには頭から血を流し、息を荒くしながらも、立って能力を発動している、草徒の姿があった。

「き、ききき貴様アアアアアアアアアアアッッ！！！！ そそそ、そこでくたばばばつとけけよおお！！」

言語さえもブレさせるその能力は、確実に×士を捕らえていた。

「『感覚……振、動……』、発……動だ、ぜ……」

「ぐぐぐ……！！（ま、まま不味い。こ、このままでは、奴にやられる……！ やははは、りいりい、止めを刺しておくべきだつた……）」

「てめえが……無様に撒き散らしなッ！！ 仇は取るぜええ！！ 清のなあ……」

動けない×士に草徒は拳銃を向けた。頭からの血で霞む視界の中、彼は銃口を×士に向けていた。しかし負傷しているからと言って、草徒の狙いが外れる訳が無い。

彼の放った一発目のゴム弾は、正確に×士の足に直撃した。その足は右足。唯一、地面に着いている足であった。

「うわぁッ！！」

×士は、その衝撃でバランスを崩した。両足とも宙に浮き、倒れそうになる。

「（落下の衝撃は！ 『カーソル・クラフト』で——）」
そこに、草徒の二発目、三発目のゴム弾が迫る。

「なッ!？」

「（あの驚きよう……やはりッ!! 奴は『異なる目標』に重力を設定する時! 『間』が必要なんだ!!!）」

阪上×士の『カーソル・クラフト』は、重力『空気』弾は『連射』できても、『拳』と『刀』は、同時に弾けない。『空気』という同じ目標には『連続』で能力行使が出来るが、『拳』と『刀』という異なる目標への能力行使には『再設定』の必要があるからだ。

よって草徒の『ゴム弾を弾くための重力行使』と地面激突時の衝撃を殺す『地面への反発』は同時には出来ない。

どちらかのダメージは『受け』なければいけない。

そして甲紀という侍は、そのダメージを受けた×士が怯む僅かな『間』で×士を行動不能に出来るのだ。

「くくく、くそッ!! このままじゃああッ!! ……か、かかああッ!! 『カーソル・クラフト』オオオオオオ!!!」

「（勝ったッ!! やれッ、甲紀!!!）」

「（承知ッ）」

草徒から甲紀への刹那のアイコンタクトによって甲紀からの斬撃も加えられた。どうやら甲紀は、自身の追撃の後に×士に止めを刺すようだ。これで×士の逃げ場は完全に失われたのだ。所謂、『詰んだ』状態であった。

「嗚呼嗚呼アアアアアアッッ!!」

咆える×士に地面が迫る。

【第二十九章 C u r s o r C r a f t】（後書き）

今回は長編仕様です!!

【第三十章 眠り覚め、戦闘再開】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「親友のためなら駆けつけるさ」b yアルヴィンゝ

【第三十章 眠り覚め、戦闘再開】

幽霊は走りながら考えていた。

「（松野浦龍之介は撃破出来たが……不味いな、この状況は。大勢の人間が俺の正体と能力を知りたがっている……。能力の撃ち漏らしが居たか……。派手にやりすぎたかな？）」

現在、幽霊・内岡喜作は安全に透過状態になれる場所を探していた。透過には時間が掛かるため、ちよつとやそつとじゃ見つからない場所が望ましい。

「（アイツの力を借りるか……？）」

喜作には『協力者』が居た。先日、龍之介たちの時のように偶然出会った、『とある能力者』だ。龍之介たちとは違い、幽霊である彼の正体を詮索しない人物だったので、他人とはあまり関わりたくない彼は、その能力者に珍しく心を許していた。

喜作の脳裏にその能力者の声が浮かぶ。

『いつでも頼って下さい……。貴方の許に駆けつけるのは、容易い事ですし』

幽霊は少し悩んだ。

「頼ってみようかな……？」

喜作は線路沿いの立体駐車場——この辺りには三つほど駐車場があるが、その中で一番大きく、一番線路に近い駐車場である——付近で立ち止まると、携帯電話でその能力者に連絡を取った。

後ろから佐郎たちが追ってきているとも知らずに。

喜作の仲間である、くすんで黒みが掛かった赤髪の青年は、幽霊の許に向かって走っていた。

「（まさかあの人から助けを頼まれるとは、ね……）」

この短髪で、背広——濃紺でチェッカーフラッグ模様のボタンが縦二列ある——を身に着けた青年は、幽霊である喜作を『かなりデキる能力者』と認識していたため、今回の召集は驚くべきものだった。「ま、いいや。あの人を、この『ワーストペーパー』で容易く助け出して、平穩を取り戻せば良い。容易い事だ。……それにあの方は友達だしね」

彼の名はアルヴィン。アルヴィンⅡバルフォア。

彼は今、移動速度を高めるために、汎用作業重機——WSに乗っていた。このWSは『ほぼ人間サイズ』という極端にサイズダウンされた特殊なモデルで、型式番号——WS・U654《アッテンボロー・フェレット》という名前だ。

流線型の小型フォルムとテカテカと光る装甲が特徴的で、ゴーグル型カメラアイを搭載している機体だった。

「おい！！ 龍之介、起きろッ！！」

「う、ううむ……」

琴音を起こした拓巳は、本屋の近くに倒れていた龍之介を起こそうとしていた。

『周囲の環境など、世界への関心を奪われた』事で意識が無い龍之介だが、ショックを与えれば回復した。

それが『LossesⅡTheⅡInterest』の『制限』だからだ。どんなに能力効果が深刻でも、ちょっとした刺激で起きてしまうのだ。

「な、何があった……？」

「知らねえよ。とにかく立てよ」

「あ、ああ……」

「だ、大丈夫？ 顔色悪いけど」

「あ、ああ。大丈夫だ、問題ない」

龍之介は心配している琴音に支えられ、ゆっくりと立ち上がった。
「で、問題の『幽霊』はどこに行ったの？ ボクたちは遅れて来ちゃったから見てないけど」

追跡が出来るSAを持つている雨崎琴音が居るが、刃先は能力を使う事で琴音の体力が減少しないように気を利かせ、龍之介に聞いた。
「た、多分、清瀬方面の線路沿いだ。そっちの方に向かって行ったよ……」

「そうか……。どうする？ 追うか？」

「私はどっちでも良いけど……刃先ちゃんは？」

「ボクは出来れば追ってみたいかな」

「じゃあ追っ駆けるか？ 折角だし」

「よし。だが追い駆ける前にロバーツ先輩に連絡を入れる。今回は何か事件が起きているようだしな」

そうして拓巳がサヤに連絡を入れようとした時――、

「なッ！？」

取り出した携帯電話が砕け散りながら地面に落下した。

電話を貰いたのは、ゴム弾であった。そのゴム弾は音も無く、連絡手段を破壊した。

拓巳が携帯電話を撃ち抜かれる十数秒前。

FINEがライフルを構えて待っていると、代雲から通信が入った。

「FINE!! アウフシュナイター!! 見栄崎たちが来た。見張るぞ

!! 動きがあつたら狙撃しろ!!」

「りょーかい!!」

FINEは嬉々としてライフルを構え直し、スコープの照準越しに拓巳を見た。

「（また会えたね、安保部の腕利きくん）」

FINEはライフルを動かす事以外、無駄な動作は一切しない。呼吸

も極限まで小さくする。

「（ライフルと自分を一体化させて……固定する。そうすれば安定した射撃が出来る……。標的を殺す前に自分を殺す……。ちよつと物騒だけどスナイパーの鉄則だね）」

自分を『殺し』、極限まで動きを止める。今の彼女なら、肩に鳥が泊まっても、おかしくはないだろう。それほどまでに彼女は集中していた。そしてそのお陰でライフルは一ミリもブレていなかった。

「（……）」

その内フィネは、射撃と周辺警戒だけに全神経を集中させ、他の事を考えるのを。

止めた。

フィネが拓巳の携帯電話を撃ち抜く直前、代雲は南無にも連絡を入れていた。

『おい南無！！ 見栄崎たちが見えるよな？ 直ちに迎撃に向かえ

！！』

『了解』

南無は、声には出さないが今回の任務はあまりやりたくなかった。

彼は基本的に暴力沙汰が嫌いなのだ。

「（さつさと終わらせて、ゆつくり休むか……）」

彼は能力補正を受けた体で宙を舞う。彼の能力は性質操作系なので、その能力補正による体術は、城門学園生の中でも上位のものだ。

それ故に彼は自分に自信を持っていた。

彼は凄まじい跳躍で拓巳たちに接近した。ちょうど、携帯電話が吹っ飛んだところであった。

「（南無三……ッ！！）」

プロの格闘技家並みの威力を誇る、彼の渾身の蹴りが来襲する。

「『ワーストペーパー』ッ!」

アルヴィンは出来るだけ早く、喜作の許に辿り着こうと、道無き道を自慢の能力とWSで切り開いて、進んでいた。具体的に言うと、進行上にある邪魔な壁をまるで紙細工を相手取るように『グシャグシャにして』進んでいた。WSのパワーもあるのだが、実際は彼の能力である『ワーストペーパー』の能力の効果による破壊である。

「あと数十秒で到着だな……」

彼はモニターの端に表示されたデジタル時計で時間を確認しながらも切り進んだ。

「(しっかし……このコックピット、狭いな……)」

《アッテンボロー・フェレット》は、幾ら小型機でも、なにもパワードスーツのように自身の動きに直接、連動させて動かすのではなく、通常機体と同じで、操縦桿とペダルで動かす。

こういった小型WSは、通常機とのOSの互換性という面では便利だが、コックピットがやけに狭いという欠点もある。つまりアルヴィンは現在、身を縮込ませるようにして、《アッテンボロー・フェレット》を動かしているのだ。

「(それに蒸し暑い……)」

《アッテンボロー・フェレット》はその設計上、必要最低限の装備しか搭載していない。お陰で内部のエアコンの質も三流品並みだ。おまけにこの機体は、WSではお馴染みの密閉型コックピットを採用している。その所為であまり人氣が無い機種であった。

「ま、しょうがないか……。家に置いてあるWSはコイツだけだし。機体を選び好みしている時間も無いしな……」

周辺の索敵をしつつも、アルヴィンは進む。現在、アルヴィン機の装備している武器は、ゴム弾の装填された、M16A4だけである。人間用の武装を装備出来るのは小型機の利点だ。

「(もう少し威力のある兵器をチョイスしたかったな)」

この青年、アルヴィンは後になって後悔する選択を選びがちだ。だから、いつも後悔ばかりしている。

「お、内岡さん。見つけ」

単価二十万円、精密機器の塊は大きく跳躍した。

「そこかあッ!!」

龍之介は拳銃を抜き、銃弾が発射された方向に発砲しようとしたが、
「なッ!? 敵が!! ウグッ!!」

同方向から迫り来る南無の蹴りによって、拳銃と自身の体を跳ね飛ばされ、阻止されてしまった。

カラン、カラン。と、断続的な金属音立てて、龍之介の愛銃、スカーレットセントリィは転がった。

「敵が……二人も、いるのか……?」

驚愕の表情で言う拓巳に龍之介は倒れながらも、

「拓巳!!! ボケツとしてねえで、奴を撃てーッ!!」

「あ、ああ!!」

拓巳はT-DPをホルスターから抜き、南無に向けて撃った。T-DPの連射力はかなりのモノで、ゴム弾は南無に吸い込まれるようにして、飛翔した。

しかし南無はそれを両腕で、簡単に弾き飛ばす。

「無駄だあ!! 俺には銃弾は効かねえ!! さっさとやられな!!」

余裕の表情で、龍之介に止めの手刀を叩き込もうとする、南無。しかし龍之介もただではやられない。素早く抜刀し、手刀をなんとか防ぐ。

「もっと奴に撃ち込むんだアー!!」

「オーケー!!!」

龍之介の指示に従った拓巳は、早くも全ての弾丸を撃ち尽くす。が、

洗練された素早い弾込め、クイツクリロードで、弾丸を再装填し、攻撃を再開する。琴音と刃先も拳銃を両手で構え、撃ち始めた。

しかし、

「だから無駄だと！！ 何回言えば！！ 分かるんだ！！」

南無はそれら弾丸のシャワーを、腕を高速で振るう事で、纏めて弾き飛ばした。弾かれた弾丸は四方八方に散らばっていく。拓巳たちの方にも何発か来たほどだ。

「クツ！！ こいつ！！（速いッ！！ 速すぎる！！ 反応速度も体捌きも！！ 何もかも普通の人間を超えている！！ 超人レベルだ！！ 肉体を操作しているのかッ！？）」

「今度こそッ！！ そこで気絶でもしてろッ！！ 松野浦龍之介！！」

全弾排除した南無は、起き上がろうとしている龍之介に向かって再度、攻撃を放った。凄まじい勢いで迫り来る、蹴りだ。

「松野浦くん！！」

「うおおおおおおおおおッッ！！！！」

龍之介は、琴音の悲鳴に近い呼び声に、呼応するかのように刀を振った。狙いは接近する足である。当たってダメージがあれば良し、そうでなくとも蹴りの軌道を変えられる。そんな計算をして、龍之介はその一振りに全力を掛けた

ゴキリッ！！ と、南無の左足から嫌な音が鳴った。膝辺り、正確に言えば関節部分だ。

「うぎゃああああああああッッ！！ テメエエエエエエエ！！ 龍之介エエエ！！」

どうやら彼は左足を脱臼してしまったらしい。南無はヨロヨロと力無く二、三步後退する。

「（流石に足の骨を折るのは抵抗があつて、脱臼を狙ったが……）やったか……ッ！！」

龍之介は立ち上がり、直ぐに刀を上段に構えた。その目は真っ直ぐに南無を捕らえている。

「て、テメエよお、龍之介……。流石は安保部の保安侍役ってところか？ え？ ……だが、片足をヤツた位で調子に乗るなよ……。」
俺の攻撃パターンは、まだ……」

片足立ちの南無はグツ、と右拳に力を込めて握る。

「腐る程あるぜエ——ッ！！ 『急速代謝』ッ！！」

触れれば、何でも砕けそうな右腕が勢い良く放たれた。

「ソオオオラアアアアアアアアアッッッ！！！」

龍之介はその拳目掛けて、刀を振り下した。

「アルヴィン……結構速かったな……」

アルヴィンのWSを確認した喜作は、小さく呟いた。WSは手前にあった邪魔な壁を力強く『引き千切り』、喜作の前に立ち、ようやく停止した。

『遅くなつてすみません』

搭載されたスピーカー越しにアルヴィンの声が聞こえた。ハキハキとした、好青年らしい爽やかな声だ。

「いや、呼んでからまだ一分なんだが……」

『三十秒で来るつもりでした。申し訳ありません』

「いや、十分位は掛かると思ってたんだけど……」

『友人をそんなに待たせる訳にはいけません』

「あ、まあ、ありがとう……」

『それでは行きましょうか。脱出ルートを用意してあります』

そう言うアルヴィンはチャキチャキとWSを動かし、喜作を誘導する。

と、その時。

「見つけたぜッ！！ 新手のスピリットアカレイドッ！！」

後ろから叫び声が聞こえた。振り返ると、そこには拍子木佐郎と、

「発見したのか？ 佐郎。お、居るな。二人連れか……」

火水燃繼が立っていた。どうやら俺たちを追ってきたらしいな、とアルヴィンは推測する。

「（チツ、邪魔な奴等が現れやがったぜ……）」

アルヴィンは、二人の襲撃者をロックオンし、アサルトライフルを向け、発砲した。流石は精密機械のロックオンで、狙いには狂いが見られない。正確な射撃だ。

しかし、射出されたゴム弾は二人には当たらなかった。佐郎のSA『塵装』の塵壁によって阻まれたのだ。塵壁は、佐郎と燃繼を完全に隠すかのように展開している。

「（クソツタレが……）」

心の中で、敵二人に罵声を浴びせつつ、アルヴィンは自身のSA『ワーストペーパー』を発動した。『周辺のモノを紙細工のようにする』能力。性質操作系の能力だ。

アルヴィンは再度、塵の壁に向かって発砲した。能力によって脆くなった壁には、ゴム弾でも簡単に穴を開けることが出来た。

「アルヴィン、手伝おうか？」

喜作は突然の来襲に驚きはあったが、直ぐに戦闘体勢に入っていた。彼の愛銃である、グロック18も抜き、構えている。

『いえ、大丈夫です。チンピラ二人の相手なんて僕一人で十分ですが』しかしアルヴィンはその申し出を丁重に断った。護衛対象を戦闘に参加させるのは、彼のプライドが許さなかったのだ。

アルヴィンは穴の開いた塵壁にゆっくりと近付いた。手応えはあったが、一応確認のためである。能力で創られたモノは能力が切れる、もしくは能力者が戦闘不能になると、崩れるモノが多い。しかし塵の壁は未だに形をある程度保っている。そのために確認する必要があった。

間近に立ち、WSの手であるマニピュレーターで塵の壁を触り、押し込んで破壊する。ボロボロと、塵の塊が落ち、向こう側への視

界が開いた。

しかし。

「居ない……ッ!？」

壁の向こう側には二人の敵の姿は無かった。忽然と消えていた。

「一体、どこへ!？」

アルヴィンは《アッテンボロー・フェレット》の中で狼狽した。

この青年、アルヴィン・バルフォアは計算違いをしていた。佐郎と燃繼を『ただのチンピラ』として認識していた事だ。

彼等は傭兵であった。戦闘のプロフェッショナルであった。その行動に無駄は無い。だから最初の叫び声も塵の壁も全て『無駄ではなかった』。

「まさか……」

アルヴィンは一つの『可能性』に気付いた。その『可能性』の出現は、彼に冷や汗をダラダラと掻かせた。コックピットの内部が更に蒸し暑くなった。

「まさか、奴等はッ!！」

アルヴィンは、カメラアイを使って線路沿いの大きな立体駐車場をモニターに映し出した。

そこには。

「やはり……ッ!！」

佐郎と燃繼が居た。駐車場の壁に貼り付けた塵の塊を足場にして立っているため、まるで宙に浮いているようだった。そんな彼等は初見の時とは違い、異様な威圧感を放っていた。

それは何故か。

「気付くのが、遅すぎるぜ……」

佐郎の掌で。塵ではなく、何か硬そうな『岩石』か『隕石』のような物が浮いていたから。

「全くだな。全部、準備が整ってしまったよ……」

燃繼の掌で。只の水の塊ではなく、凝縮された『水球』が浮いていたから。

その『岩』と『水球』は危険なオーラを漂わせていたから。

それが異様な威圧感の正体だった。その威圧感に、アルヴィンは危機感を覚えた。

「（ヤベエ……あいつ等、ただのチンピラじゃなかった……。あの目付き……！ 雰囲気……！ ありゃあプロだ……）」
アルヴィンは、喜作を連れてさっさと脱出ルートに向かおうとしたが。

それよりも速く、それよりも早く。

「逃がさねえ……！ 『塵装』 人工隕石……！」

佐郎は、掌の『岩』に掛け声を乗せて放っていた。凄まじいスピードだ。

「うおおおおおおおおッ……！」

アルヴィンは《アッテンボロー・フェレット》の速度を上げるが、

『岩』の接近はWSよりも速かった。

ズガンッ……！ と、衝突音が響く。『岩』がアルヴィンのWSの頭部にブチ当たったのだ。新品同然に光っていた装甲は磨り減り、大きく凹んだ。WSも派手に地面に倒れ込む。

ジジジ、という嫌な音も鳴っている。どうやら頭部を損傷した事で、カメラアイやレーダーなどのセンサー系が駄目になったらしい。彼は、直ぐにWSの体勢を整えようと、必死になって操縦桿を操作するが、

「まだ動く気かッ……！ いい加減、止まれ……！」

今度は燃繼が、掌の水球を攻撃に使った。

その攻撃方法は、『水圧カッター』。凝縮された水球から、更に細く凝縮された水が照射される。その、レーザーのように放たれた水は《アッテンボロー・フェレット》の右腕と右足を叩き斬った。

斬られたパーツが、冷却液を撒き散らしながら宙を舞った。

起き上がりかけていたアルヴィン機はその影響で、また派手に転倒する。

「くそ……クソッ!!」

半分ほど『死んだ』モニターを前にアルヴィンは悪態をついた。敵の戦力を見誤り、自分は容易く撃破され、護衛対象を危険に晒した。そんな事は彼のプライドが許さなかった。

彼は、その余りの屈辱にドンッ!! と、目の前の計器を殴りつけた。

「いいだろう……僕も本気を出すッ!! 後悔しても……遅いゼッ!!」

アルヴィン!! バルフォアは自身の愛機を『捨てる』決意をした。

【第三十章 眠り覚め、戦闘再開】（後書き）

最近、大きく更新をしました。詳しくは活動報告で。

【第三十一章 怯むなッ！！ 進めッ！！！！】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「まだ、駅前は賑やかなようですね」byセカンドゝ

【第三十一章 怯むなッ！！ 進めッ！！！】

「ハァー……ハァー……」

×士は息を荒らげながら、『地面に横たわっていた』。どうやら彼はゴム弾の『威力』を重力で殺したらしい。しかしその結果、彼はアスファルトで出来た硬い地面への衝突の衝撃をモロに喰らう事となった。その衝撃は、彼を少しの間、呼吸困難にさせた。そのために彼は息を荒らげていた。

だがそんな彼も選んだ選択肢は無駄にはしなかった。彼は地面への落下後に来る、敵からの襲撃に備えていた。

彼は、自分が衝突時の痛みで『一瞬』怯む事を覚悟していた。だから彼は、先ず追撃に迫る、甲紀の『腕で受け止める』ために左腕を、瞬時に甲紀の刀と自分の胴体の間に持つてきていたのだ。これによって甲紀が叩けるのは、×士の左腕だけになるのだ。

よって彼は止めを刺される代わりに、地面と刀、両方からの衝撃を受けた。その痛みで彼は今、息を荒らげているのだ。

しかし彼はまだ闘えた。彼は止めも刺されていないし、意識も失っていない。よって彼はまだ闘えるのだ。

そんな彼、阪上×士はゆっくりと立ち上がった。その様子を草徒と甲紀は驚きの表情で見ていた。

「中々良い作戦だったぜ……。マジでヒヤッとさせられたよ。本当に良い作戦だった……不良共の作戦にしてはなアアアアアアアアアアアッ！」

「グッ……！！（馬鹿なッ！！ アイツ、甲紀の刀から逃れるために左腕を『捨てやがった』！！）」

たしかに×士の左腕は見事に折れて、変な方向に捻じ曲がっていた。しかし彼は攻撃を止めない。

「クソッ……！！（私の刀と地面からの衝撃を喰らってまだ立てるのか！？）」

たしかに×士の体にはダメージが蓄積され、何時倒れてもおかしくない状況だった。しかし彼は歩く事を止めない。

「だがよ……だがよオオオオオオオオオオ！！ そんなチンケな作戦じゃ、俺はやられねええええええええええ！！！」

坂上×士は咆えた。その咆哮は、『どんな作戦を用いてもお前たちでは私を倒せない』という、ある種の勝利宣言だった。

「ウオオオオオオオオオオオオツツ！！！」

そんな、彼の勝利宣言に怖気づいていた草徒だが、直ぐに拳銃の銃口を向け、発砲した。

「オラアアアアアアアアアツツ！！！」

草徒の発砲に続き、甲紀も刀を振りかざし、×士に接近した。

「無駄だア！！！」

二人の反抗に阪上×士は歓喜の声を上げ、片腕で立ち向かう。

結果から言おう。龍之介と南無の闘いは、龍之介の辛勝に終わった。

次に過程を言おう。先ず龍之介は迫り来る、南無の右腕を刀で上手く払い、彼の胴体に一突き入れた。その強烈な一突きに南無は、「ウグツ！？」と呻き声を上げ、二、三步、後ろに下がった。龍之介はその隙を見逃さず、刀による追撃を加える。

一振り、二振り。刀を動かし、南無に打撃を与えていく龍之介。松野浦龍之介の脳にインプットされた剣術の知識は、彼の体を動かす原動力になる。その剣筋は、未だ、ぎこちなさが見えるモノだが、まるつきり素人と言う訳では無い。まあまあ及第点と言った所だ。

だが、南無も戦闘訓練を受けた戦士の端くれだ。そう簡単には攻撃を受け付けてくれない。事実、続く三振り目、四振り目は見事に弾かれた。

流石に同じ手が通用する相手ではない、と判断した龍之介は、刀

身の動かし方のパターンを変えてみた。が、直ぐに見抜かれて対処されてしまう。

刀での攻撃は不可能だ。龍之介の頭にそんな考えが浮かんだ。その思考に対し、龍之介が行った行動は、刀を放り投げる事であった。その突然の行動に驚いた南無の視線は一瞬だが上空の刀の方に行った。

松野浦龍之介はその一瞬の隙を見逃さなかった。CN・パンツァードライブと能力による補正を受けた彼は、南無のから空きの胴体に拳を放った。

一撃、二撃、三撃と。彼は南無に容赦ないラッシュを与えた。滝沢南無はそのラッシュに仰け反り続け、完全に、龍之介のペースに持っていかれた。その後、四撃、五撃と拳を放った龍之介は。

最後に胴体に止めの一蹴りを入れ、喰らった南無は沈黙した。

「これで……終わるか……？」

龍之介は仰向けに倒れている南無を見て、確認するかのように言った。龍之介の呼吸は荒いモノとなっている。度重なる戦闘の疲労が溜まっているのだろう。他の面々も表情に疲れの色が見える。

しかしそんな龍之介一行を菊鳩代雲という男は見逃さなかった。

「やあ諸君」

背中に背負った小型ジェットパックでゆっくりと降下してきた、軍服のように改造された制服を着こなす男、代雲は実にフレンドリーに挨拶してきた。

「元気だったかい？」

などという、胡散臭い言葉を添えて。

彼は地面に「よつと」と降り立ち、龍之介たちの方向に顔を向けた。

「お前は……菊鳩!!」

「そうだ。もしかしたら黒幕かもしれない、菊鳩代雲少佐だ」

彼はそう言いながら、倒れている滝沢南無を一瞥し、

「どうやら滝沢はお前らの相手をするのには少し実力不足だったみ

たいだな……。ま、しょうがねえか。コイツ、甘ちゃんだし」

代雲は南無を軽く蹴って退かすと、溜息を吐いた。

「全く……新兵の訓練ってのは大事だって事がよく分かったよ……。今度からはソツチの方に予算回すとするよ。お前らのお陰で学習できた、感謝する」

ふざけた口調でペラペラと、他人事のように喋る代雲。だが、

「で？ お前らは俺と戦うの？」

途中からその雰囲気が一変した。まるで、夏に薄着でハワイ旅行に行っていたと思ったら、いきなり北極に放り出されたような感じがした。

「（コイツ……なんて冷たい眼をしているんだッ！？）あ、ああ。戦うさ」

「ふうん……そうか。で？ 何人で戦うの？」

そんな代雲の底冷えする雰囲気、内心、ビビりながらも、龍之介は、

「俺だ。俺がお前の相手をする」

と、そう宣言した。

拓巳たちは驚いた。龍之介の体力は、限界に近付いてきている。その状態での戦闘は無理だと思ったからだ。

「おい、龍之介！ お前、もう限界じゃ——」

「大丈夫だ、問題ない。やってやるさ。それに——」

コイツに話もあるしさ、と龍之介は、三人を安心させるために微笑を浮かべて言った。

アルヴィン・バルフォアは、半壊したWSの中からいきなり語りだした。

「俺の能力、『ワーストペーパー』は……無敵の能力だ……。どんなモノでも『紙細工のように』突き破り、破壊する……、そんな能

力だ……。本来はお前等チンピラなんぞ瞬殺できる程の能力だ……。さっきの失態は内岡さんを逃がす事だけに集中しすぎてしまったが故……」

アルヴィンの乗っていたWSの内側から。

ばりばりばりばりばりばりばり、べりべりべりべりべり、

まるで紙が破けるような音がし始めた。アルヴィンは話を続ける。「もう見切った！！次は当たらない……！！もう、あんなチンケな攻撃は通用しない！！俺と、俺の『ワーストペーパー』にはなアー！！」

叫び終わる頃には、既に。

アルヴィンの腕は紙細工のようになったWSを内部から突き出していた。それを皮切りにアルヴィンはドンドン、WSを破り捨て、昆虫が脱皮をするかのように、中から出てきた。

「行くぜええええええええッ！！そこを動くなよオオオオオオオオオオ！！」

咆哮を上げるアルヴィンは佐郎たちに向かって、全速力で走り出した。

【第三十一章 怯むなッ!! 進めッ!!!!】(後書き)

最近スランプ気味です。

でも頑張るんで、生暖かく見守っててください。

【第三十二章 先輩の介入】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「何やら同族の匂いを感じる……」。気のせいかな？」b
yファースト〉

【第三十二章 先輩の介入】

先ず、アルヴィンによる最初の一撃で、佐郎たちの乗っていた、塵の足場は見事に崩れ去った。

「（こ、コイツはッ！！）」

落下しながらも佐郎たちはアルヴィンの攻撃手段に戦慄していた。

スピリットアカレイドが出現する以前から、人間には様々な安全装置が組み込まれてきた。

例えば。何か一つ、免許を取るにも、難しい試験で選定され、更に生後まもなくに注入されていた『非道徳的行為抑制ナノマシン』——例えば飲酒したまま、乗り物を運転させないだとか、人を故意に傷付けないように、脳に働きかける装置——が起動し、二重のセーフティを架せられるように（もつともこのナノマシンの安全性のお陰で、未成年である龍之介たちが、自動車やWS等の免許を習得できるようになったのだが）。

勿論、その安全装置は、SA能力にも適用された。SAを使って故意に人を傷付けないためナノマシンの注入が、全人類に義務付けられた（もつとも龍之介たち安保部員は合法に、佐郎たちスクールギャングは非合法に、ナノマシンの制御を『緩和』させるという抜け技を使っているのだが）。

しかし。それなのに彼・アルヴィン＝バルフォアは。

『SA』で佐郎たちを『殺す』ために動いていた。アルヴィンは、彼らの、当たれば致命傷なりうる箇所ばかり攻撃している。

「（まさか！！ 『ボディロンダリング』を行ってるのか！？ まるつつつきり！！ 犯罪者じゃねえか！！ 俺たちでも、そこまではやってねえっていうのに……ッ！！）」

犯罪者の中には、燃継が心の中で叫んだ通り、ボディロンダリング——法律で禁止されている、『抑制ナノマシンの完全解除』を行って、人を傷付けられる、いや人を『殺せる』ようになる者が少な

くない。

そんな違法行為を。この一見、学生にしか見えない彼がやってしまっている。それが、何よりも二人を身震いさせた。

一方、アルヴィンは。

佐郎たちの顔全体、こめかみ、額、目、耳、顎、首、頸椎、肩口、脇、上腕骨の隙間、手首、上腕三頭筋、心臓、肋骨、肝臓、腎臓、鳩尾、膝、腿、脛、アキレス腱、膀胱、金的といった、人間の急所を執拗に狙って。

能力の加護を受け、強化された凶悪な凶器となった全身で攻撃を続けていた。一切、攻撃を中止しないのは、人工隕石や水圧カッターを準備させる暇を与えないためである。

「（何だ……この程度か……。これなら『俺の組織』の『イエフ』の方がまだマシだぞ……。何だか、ガツカリしたな……。少しはやれると思っていたのに。さっきのは勘違い、だったのか……。？）」

イエフとは。イエフ・アリンガムとは彼が所属する『組織』、オルズ所有のドイツ製自立有機プログラム体である。操作系能力を持っている好戦的な戦士でもあり、オルズの兵隊の訓練相手から特殊任務まで、様々な用途で使用されているスピリットアカレイドだ。

閑話休題。

「（はあ、下らねえ。さっさと内岡さんを避難させて、帰って模擬戦でもするか……）」

そんな勝手な事を考えながら、片手間に佐郎たちの相手をするアルヴィン。

アルヴィンは、そろそろ締めに入るか、という様子で、徐々に攻撃のスピードを上げていく。そのスピードに、段々についていけなくなった佐郎と燃継は、攻撃を受け始め、消耗していく。

対象を紙細工のように、いや紙細工にしてしまうこの能力は、塵使いと水使いにとって、あまりにも凶悪で、強大な存在だった。

そしてそんな能力を持つ彼にとって佐郎と燃継は、やはり取るに足らない存在だった。

戦闘開始から、約十数分で、アルヴィン・バルフォアというテロリストは、拍子木佐郎と火水燃継という二人の傭兵を完全に沈黙させるに至った。

「やっぱりこの程度か……。今回は楽しめると思ってたんだが」
さてと、と。アルヴィンは近くに倒れていた佐郎の頭を軽く蹴飛ばし、

「今度こそ脱出しましょうか」
雰囲気を変えようと、直ぐに、にこやかな表情を喜作に向け、移動を促す。

だが当人の内岡喜作は渋い顔で受け答えをした。

「ああ、そうしたいのも山々谷々なんだが……。新手が現れたようだぞ」

内岡が親指で指差す先には。

「はいはい。テロリストをしょつ引きに來ましたよ、と」

学園安保部のスピード狂。『アクセルスタンピード』の使い手、金山浩孝が仁王立ちをしていた。

拓巳たちが幽霊を追に行った直後。時系列的にはアルヴィンと喜作が浩孝に遭遇した頃。

龍之介と代雲は向かい合っていた。先に話し掛けたのは代雲。

しかし彼の話の切り出しは、あまり良いモノとは言えないものだった。

「やあ、松野浦龍之介。この前はウチのボスを殺しかけたそうだな」

「ッ！ あ、ああ。まあ。でも『殺しかけた』だろ？ 実際に『殺し』てはいない……。だが、アイツには……。マーカスには、『すまなかった』と。言っておいてくれ」

「ほお、安保部員にもスクールギャングを氣遣う奴が居たとは、な」

てつきり、『そのまま死ねばよかったのに』って言われるかと思っ
たぞ?」

「アイツもウチの学校の生徒だからな。それに俺以外にも安保部には
良い奴が居るさ。お前らを更正させようとする奴は居ても、排除
しようとする奴は居ないってことだ」

「よくもまあ、そんなクサイ台詞を吐けるもんだぜ」

「クサイ台詞って……ま、俺はただ『人助け』がしたいだけだから
な」

「じゃあ俺たちの『学園への反抗』も手助けしてくれるか?」

『お前には無理だろ?』という態度で言う代雲。案の定、龍之介の
答えは、

「それは無理だ。他の人間に迷惑が掛かるからな」
代雲の予想していたものだった。

だが龍之介は彼に真剣に向き合い、そして言葉を紡ぐ。

「……だが、もし、お前らを馬鹿にしたり、貶したり、イジメたり
……命を狙う輩が出たら。その時は俺を頼ってくれ。どんな時でも
駆けつける」

彼は不良にも凡人にも優等生にも。

平等に接する男であった。

「ッ!? ……ふ、ふふふ、ふはははははは!! お前は本当に
変わった安保部員だな。ふふふ、面白い。本当に面白い奴だ。気に
入ったよ、俺たちの所に来ないか?」

「いや、駄目だな」

「ハッ、言うと思ったよ。愚問だったかな。……さて、口での『お
喋り』はお仕舞いだ。俺たちは敵同士——」

「——後は拳で『語り』合おう、ってか?」

「その通り。じゃ、まあ。フィネの奴には手を引かせるよ。少し待
つてくれ」

「ああ」

龍之介の返事を受け、代雲は通信機のスイッチを入れ、耳に当てた。

『あー、あー。こちら菊鳩。聴こえてるか？』
『こちら、アウフシュタイナー。聴こえてるわよ、バッチリと、ね』
『俺、今から龍之介と一対一やるからさ。邪魔すんなよ』
『分かったわ。……凄腕くん、追っても良い？』
『見栄崎か……。好きにしろ』
『りようかい』
『つてな訳で、準備も万端だ』
『じゃ、やり合いますか』
直後。

龍之介と代雲の拳が激突し、『語り合い』が始まった。

一方、その頃。×士と草徒たちの泥沼の死闘は。

「ちょ——と、待った!!」

突如、現れた普遍川浪不の一声によって中断させられていた。

「な、何だ！ テメエ——」

「僕の名前は普遍、普遍川浪不。学園安保部のナイスなお兄さんさ
下の名前は《かわらふ》でも《かわろうふ》でもなく《かわら
ず》、間違えないでね。僕の実力は……ん、ここでは秘密だけど。
まあ便利な能力だよ。他に質問は？」

とてもフランクな口調で、合コンのノリみたいに話し掛ける川浪不。
「そんな事を聞いてんじゃねえ!! 大体、安保部だって事は制服
を見りゃ分かる!! そうじゃなくて、テメエはここに何しに——」

「——キミたちの馬鹿げた戦いを終わらせに、だよ」

口調が、変わった。冷たい感じの、耳が氷漬けになるかのような声
だ。顔も冷酷な微笑を浮かべていて、かなり怖い。

「キミたち、少しやり過ぎじゃないかな？ 血を流してる奴が殆ど。
向こうに倒れてる奴も居たし、そこのお前なんて腕の骨が折れてる
じゃないか」

指摘されたメ士は苦虫を噛み下したような表情を浮かべ、

「クッ!! お、俺の勝手だろ!! どこで闘おうと、どこで傷付こうと、どこで、どう生きようと、俺の勝手だ!!」

「いいや、勝手じゃない。キミはウチのスクールギャングの闘争に巻き込まれた。俺はキミを守らなきゃいけない。いや、守りたい。是非守らせてくれ。それにキミはウチの予備校生だろ? ……いや

『元』を付けなきゃ駄目か。だってキミは能力を『覚醒』させたようだしね」

「ッ!!」

「その顔は……凶星、か。ま、そういう事だ。どこで、どう『覚醒』したかは分からないが……。と、言う訳で。どっちにしろキミは俺が守らなきゃいけない存在って訳だ」

「気色悪い事を言うな!! 俺は餓鬼でもねえし、お前の彼女でもない!! 俺は、俺で、俺の力で生きていく!! 親みてえな顔すんじゃない!! キメエんだよ!!」

「勝手に言っとけよ。いくら罵られても、拒絶されても、遠ざけられても、俺はお前を守る。お前みたいに『勝手に』守るさ」

「ちっ!! 調子が狂うぜ……」

一応、メ士との会話を終えた川浪不は、甲紀と草徒の方を向いた。

「さあ、お前らはどうする? こうなつたからには、俺はこの素人スピリットアカレイドを守り抜くぜ?」

「おいおい、舐めんなよ? 怪我人一人と粹がつた馬鹿のコンビ風情が……。こっちは軽傷二人だ。しかも、向こう側に倒れてた鬱井も、もう直ぐ復帰する様子だぜ?」

「そいつをこちらに渡せ、普遍。なあに、悪いようにはしない。我らの同志となるだけだ」

草徒と甲紀の台詞を聞いた川浪不は、フツと不敵な笑みを浮かべた。

「ふふふ、くくくく」

「何が可笑しい!!」

「スクールギャングの平将校と元傭兵のギャングの使い走り如きが

……この俺、普遍川浪不を打倒しよう？ それこそ『舐めんなよ』
ってこつた」

「何イ！？ 貴様ツ！！」

「貴様らのような……ウチの新入生程度に敗北し、背を向け、尻尾を巻いて逃げ、あまつさえ覚醒したての素人スピリットアカレイドに苦戦を強いられた二流、いや三流では、この俺を倒すのは不可能だと言っているんだ」

「言わせておけば！！ その減らず口、二度とたたけないようにしてやる！！」

「武士を愚弄して……無事に帰れると思うなツ！！」

草徒と甲紀は、川浪不の言葉に、それぞれ銃と刀を抜き、応じた。

そんな二人に対し、普遍川浪不という男は落ち着き払った態度で、
「OK。そんなら俺と闘って一流を証明してみろよ。俺も本気で行く。俺の『瞬間出力限定開放』の真価をみせてやる……。いくぞ！
！ 全身開放ツ！！」

こうして川浪不と草徒たちの闘いが始まった。

【第三十二章 先輩の介入】（後書き）

お待たせいたしました！！

やっと先輩二人の見せ場を作れました！！

【第三十三章 イエフという狩人】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「闘いが私を呼んでいる……」byイエフゝ

【第三十三章 イエフという狩人】

アルヴィンというテロリストの思考の片隅に浮かび上がった、イエフ・アリンガムという自立有機プログラム体。

彼は、そのドイツ風の名前の通り、ドイツに本社を置く大企業、アハツ・インダストリーで製造されたアリンガムシリーズの試作個体だ。主な用途は戦闘、という風に完全に軍用としてロールアウトされた彼は、好戦的な性格、圧倒的な体術、強力なSAの搭載、そして自身の命への執着の完全オミットというレイアウトが特徴的だ。

主に接近戦での運用を想定されており、その中でも格闘戦においては他の追隨を許さない性能を誇る。

一見して完璧な個体だと思われるイエフ。しかし彼には致命的な欠点があった。

それは、戦闘時の性能をあげようとするがあまり、好戦的過ぎて『撤退』などの戦闘意欲に欠ける命令をあまり受け付けないようになってしまった事だ。

命令無視、という欠点を抱えたイエフは結局、製品化されず、廃棄されるところをオルズが引き取られたのであった。

こうして彼は現在、テロ組織・オルズでテロリストをやっているのである。

閑話休題。

イエフは今、闘いのカオスと化した東久留米駅西口周辺にゆつくりと歩みを進めていた。アルヴィンが喜作の許に向かう途中で彼に連絡をしたからだ。現在位置は清瀬方面へと続く線路上にある、遮断機付近といったところだろうか。

第一の目的は闘い。自分に刃向かう雑魚を殲滅する事、自分を遮る敵部隊を掃討する事、油断した兵士を奇襲する事、警戒している兵士を強襲する事、そして立ち向かつてくる強者と死闘を繰り広げる事。

敵を叩き、吹き飛ばし、切り裂き、引き裂き、貫き、引き摺り、焼き、消し去り、打ちのめす事。

彼は三度の飯より戦闘、三大欲求より闘争欲、といった感じの男だからである。

その戦闘のための装備は、胸元と背中、肘、腕、腿、膝、ふくらはぎ、足を覆う、現代の戦闘機のような形状美を持つ、銀色の、ジヤケットプレートと呼ばれる種類の最新鋭軽装甲だ。動きやすい青いシャツとジーンズの上から、それを纏った彼は、悪役俳優のような強面顔に僅かな笑みを浮かべていた。

第二の目的というか第一の目的の一部である、好敵手との邂逅。彼と同等もしくはそれ以上の力を持つ者との出会い。それが、もしかしたら。闘いの力オスと化した、この『聖地』で達成できるかもしれないと思っていたからだ。

その目的のために彼が用意した物。それは己の肉体、戦士の礼装である鎧の他にもあつた。それは、最新技術が積み込まれた、一振りの刀。

レーザービームを集めたかのような光り輝く刃を持つ、一振りの日本刀型の刀。細く、それでいて力強い刀身は、触れるもの全てを焼き尽くすという意味が込められているかのような迫力を放っているという。

今は刀身展開をしておらず柄と鐔のみである、その刀の号は、零之。彼の愛刀である。

「ふふふ、ふははははははは！　楽しみだ、楽しみだぞ……。」

……アルヴィン、こんな素晴らしい場所を私に教えてくれて有難うお前のお陰で好敵手と出会えそうだ……」

闘いが待ち遠しいのか、零之を取り出し、刀身を展開しないまま軽

く振るうイエフ。

「（出来れば、久方ぶりの『戦闘』のため、適当な雑魚で力慣らしをしておきたいものだが……いい的は無いだろうか……）」

そう思いながらもイエフは周囲を見回した。ここら一帯の生物は喜作のSA、『Lose the Interest』の効果で呆然と立ち尽くしているのみで張り合いが無い。何より彼は敵意の無い腑抜けを相手にするほど、愚かではない。

やはりぶっつけ本番でやるしかないのだろうか、と彼が諦めかけた時、

「う……う、ううう……？　どうなって、やがんだ……？」

その格好——鼻やら耳やらにピアスを付け、金属製の悪趣味なネックレスを身に着けている——から見て不良らしき青年が一人、意識を取り戻した。自分の周囲の状況を不審がってキョロキョロと辺りに矢鱈と視線を泳がしている。

それを見たイエフは、その青年に一瞬注目したが、

「（む？　……何だ、取るに足らない一般人、か……）」

直ぐに、フツと、まるで虫だと思っていたモノが近くで見たらただのゴミだった、というような若干の失望と嘲笑を込めた笑みを浮かべ、気にも留めなくなった。

だがしかし。その、彼にとって何気ない行為は、視線を泳がす中で偶然にも、イエフを見ていた不良青年を苛つかせるには十分な行為だった。

青年は、自分に背を向けて立ち去ろうとするイエフを引き止めた。

「ッ！！　おい、おっさん！！　テメエ、今、俺の事、馬鹿にしたる？　え？　おい！！」

「ん？　何か用か？」

「何か用か、じゃねえ！！　テメエ、俺の事、馬鹿にしただろって言っただよオ！！　さつきよお！！　テメエ、俺を見て笑っただろうが！！」

「ん？　あ、そうだな。確かに私はキミの事を取るに足らない存在

だと思い、笑ったが……それがどうかしたか？」

「やっぱ、馬鹿にしてたんだなあ！！　おい、待てよ！！　そんな『変な』格好してよあ。他人の事、言えるのか！？　オメエがアア！！」

戦士の礼装である鎧を馬鹿にされたイエフだが、彼はその程度で怒りはしない。むしろ、理解できないなんて下等な存在だな、という哀れみと侮蔑が、彼の心に浮かんていた。

「ハッ、『変な』格好か……。キミの主観に基づく美的感覚は、コレの素晴らしさを理解出来ないか。ま、キミの格好を見れば分かる事だがね」

「アアッ！！　テメエ、やっぱし俺の事馬鹿にしてるだろ！！　ああ？　コラ」

そう言つて青年は懐からバタフライナイフを取り出した。殺傷モードに設定されている。そんな危険な物を振りかざし、青年は叫んだ。「ちよつと痛い目見て貰——！！」

突如、青年の怒声が、止まった。その原因はイエフ。イエフが、刹那の間に刀身を展開させ、そして振るつた愛刀、零之が。

ものの見事に、青年の右胸を貫いていたのだ。声が出なくなつたのは、右胸を貫いた事により、肺に血が流れ込み、息を吐けなくなつたからだろう。

振りかざしたナイフが地面に落下し、金属音を撒き散らす。

「明確な敵意を確認したため、キミの相手をさせて貰つた。キミのような存在でも、慣らしには十分だ。その点については感謝するよ。あと感謝ついでに忠告しておこう。喧嘩を売る時はそれ相応の覚悟を持って挑みたまえ。こんな悲しい結果になるからな。ま、今更だが」

言い終わり、イエフは粒子ブレードを青年の体から引き抜いた。

直後。ガクツ、という命の終わる音が聞こえ、青年は地面に伏す。イエフはその、元青年だった物に一切の興味も示さず、平然と刀を仕舞い、その場を立ち去つた。

「ククク、匂って来たぞ。この匂い、戦場の匂いだ！！ 十分なモノとは言えないが……今の私の渴きを満たすには丁度良い……。いざ赴こう！！ 懐かしの戦場に！！」

「（一体……何者なの？ アイツ……）」

東久留米駅付近で起きている事件の情報を、独自の情報網で嗅ぎ付けた吉野吉事からの命令で金山浩孝、普遍川浪不と共に、現場に集結していたサヤは、偶然にもイエフ・アリンガムの『慣らし』を目撃してしまった。

学園安保部副隊長であるサヤでも、目の前で命を奪われる光景が繰り広げられたとなると、流石に動揺していた。その端正な顔に冷や汗が伝う。

サヤはイエフが完全に去った事を確認すると、倒れている青年の許に瞬間移動した。

青年は既に息絶えていた。恐らく即死だっただろう。サヤは傷を見るために、俯けに倒れている青年を仰向けにひっくり返した。

「（声を出させないために右胸を一突き、しかも何の躊躇いも無く、正確に……。プロ、だ……。アイツ。殺しのプロ……）」

サヤは目を見開いて死んでいる青年の臉をそっと閉じさせ、手を合わせ、黙祷した。

「色々と厄介な事が起きてるわね……」

サヤの現在の装備は、FN・F2000という試験運用品の小銃、腰の鞘に収められている大型のサバイバルナイフ、制服の下に着込んだCN・パンツァードライブだ。

「（事件の收拾は浩孝と普遍くんがやってくれるはず……。私は、これ以上犠牲者が出ないように、あのプロの相手をやる……！）」
サヤは己のやるべき事を決定し、行動を開始した。

【第三十三章 イエフという狩人】（後書き）

今回は少し短めかもしれません。

【第三十四章 予知者と風の人、それとテロリスト】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「お兄い……遅いな……」byかぼす〉

【第三十四章 予知者と風の人、それとテロリスト】

見栄崎拓巳たち三人は、拍子木佐郎と火水燃継が斃れ、金山浩孝とアルヴィン・バルフォアが睨み合い、内岡喜作が宙に浮いているという、なんとも奇怪な場面に遭遇した。

「既に、ここでも……戦闘が始まっていた!？」

「状況を見るに、そうみたいだな」

拓巳の叫びに応じるように浩孝は言った。口調からして彼も最初からここに居た訳では無さそうだと拓巳は思考した。

一方でアルヴィンは、

「（はは、はははは。馬鹿な……、囲まれた、だと……!! は、は、は……）」

この四対一（喜作は護衛対象のため戦力としてはノーカウント）という状況に驚き、啞然とし、絶望し、逆に笑いが込み上げてくる程になっていた。

そんなアルヴィンは憎々しげに斃れている佐郎たちを睨んだ。

「（クソッ!! コイツ等が……コイツ等が邪魔をするから!! ここまで事態が悪化したのも!! クソ、クソ!!!! 舐めやがつて!! クズ共が!! カス風情が!! この俺に手間を掛けやがつて!!）」

心の中で、自身の斃した敵を罵倒するアルヴィンをよそに、

「先輩、つまりこの二人の傭兵を倒したのは、あの赤服つて事ですか?」

「ああ、そのようだな。ま、今はさして脅威、と言う訳では無さそうだが……」

拓巳たちには、頭を両手で覆い、文字通り頭を抱えているアルヴィンが、この世の全ての絶望から逃避しているかのように見えた。「じゃあ、早く連行して警察に引き渡しますか?」

アルヴィンの姿があまりに不憫すぎて、心配そうな顔をしながら、

ンと喜作を除く全員が驚愕の表情を顔に貼り付けている。

「な、何！？ この、禍々しい感じは！！」

「出し惜しみはしない……。今、俺が直面している状況を全力で解決する……。そうだ、この俺が乗り越えられない障害など無いんだ。故に我が道に間違いなど存在しない！！」

彼の後方の歪みが消え、代わりに等身大の人型が現れた。ソイツは、まるでダンボールなんかを素材に使った紙細工のような意匠の亜人だった。

「コイツは我が内面再現によって出来た、俺の精神の写し身、メンタルファクトだ……。俺は、コイツの事を「バートランドⅡファクト」、と呼んでいる……。コイツは幽霊である内岡さんの身体構造を、この俺が『解析』し、そのデータを利用して創ったんだが……。まあ、いい。今は無駄話よりも貴様等を叩きのめす事を考えよう」冷静になったのか、無表情のまま、喋り続けるアルヴィン。その片手間にメンタルクラフト、と呼ばれた亜人も精神を介して、前方に来るように動かす。

「ゆけ、「バートランドⅡファクト」。お前の力を『魅せて』やれ！！」

静かに、しかし内なる情熱を籠めた声でメンタルクラフトに命令するアルヴィン。

「バートランドⅡファクト」は拓巳たちをその二つの赤い目で睨みつけながら、ゆっくりと動き出した。

「糞が！！」

拓巳は、アルヴィンが動作を命じたソイツを『敵』と判断し、まだ無事な左腕で拳銃を保持し、数発放った。

しかし「バートランドⅡファクト」はゴム弾を片手で易々と弾いた。

「ふははは！！ その程度の攻撃で俺のメンタルファクトはやられはせん！！ そして！！」

突如、「バートランドⅡファクト」が走り出した。目標は、拓巳。

「叩き墜とせ!!」

アルヴィンのメンタルファクトが拳を振り上げる。狙うは拓巳の右腕。紙細工化した彼の腕を完全に潰そうとしている。

「ッ!!」

しかし拓巳はその拳をギリギリで避ける。

そう拓巳は情報獲得系能力、『ヴィヴィドプロフィット』の使い手。その効果は『視界に入った全ての事柄の未来を予知する』事。

だから彼には拳の軌道が、読めた。

「（見える……）」

拓巳の完全に広がるのは未来。薄く霞むような感じのヴィジョンで現在のヴィジョンと重なって見える。

そのヴィジョンの最大観測時間は十秒間。彼はその十秒を、能力が使えなくなる次の十秒のために使う。

能力使用から二秒経過。

「（この人型、メンタルファクトって奴は精神の具現化とか言ってたな……。もしかしたら本体へのダメージフィードバックがあるかもしれないが……。今、それを試すのは危険すぎる。今は本体への攻撃を優先、メンタルファクトへの攻撃は二の次だ!!）」

おおまかな作戦を立てた拓巳は、メンタルファクトを通り過ぎ、アルヴィンの方に向かおうとする。しかし、

「させるか!!」

「バートランド」ファクト」が踵を返し、拓巳の背中に向けて拳を放った。しつこいようだが、拓巳の能力は『視界に入った全ての事柄の未来を予知する』事。死角からの攻撃は『読む』事が出来ない。「グッ!!」（糞!!）行けると思ったが、中々素早いぞ!! このメンタルファクトって奴!!」

後ろから結構重い一撃を喰らった拓巳は、地面に前のめりに倒れた。能力使用から六秒経過。

「（クソッ!! このままでは能力使用限界時間を超えてしまう!!）」

拓巳は背中痛みを堪えながらも、地面を這いずり、何とかしてアルヴィンの許に辿り着こうと奮闘している。

そんな拓巳に、止めを刺そうと「バートランドⅡファクト」の拳が再び迫る。

「拓巳を援護しろ！！」

浩孝が叫ぶ。琴音と、拓巳が敵の傍に居るため、炎が撃てない刃先が拳銃をメンタルファクトに向け、発砲する。ゴム弾は吸い込まれるようにして「バートランドⅡファクト」の顔、拳、胴体に直撃した。

アルヴィンが若干、顔を引き攣らせ、メンタルファクトが動きを止める。その隙に拓巳が拳銃を抜き、アルヴィンの至近距離で発砲しようとするが、

「フンツ！！ 無駄な抵抗を」

メンタルファクトが動き出し、拓巳の体を浩孝たちの方に蹴り上げた。

「があー！！」

「見栄崎くん！！」

「大丈夫か！？」

倒れた拓巳に駆け寄る琴音と刃先。それをアルヴィンは見下ろしながら、

「無駄なんだよ！！ メンタルファクトを使った俺は最強だ！！ 誰も俺の邪魔は出来ない！！」

能力使用からとづくに十秒が経過。拓巳の『ヴィヴィッドプロフィール』は強制停止させられた。拓巳はゆっくりと起き上がりながら、アルヴィンを睨み付けた。

「（くっそ……！！ 未来予知が使えないとなると、どうする！？ どうする！？ 考えろ！！ この赤服をぶっ飛ばす方法を！！）」
「ふ、そんな目をしてるって事は、まだやる気なのか？ いいぜ、かかって来——」

アルヴィンの言葉が途切れた。彼の視線は『下』に居る拓巳ではな

シククラスター』の爆破が自分の手を焼かないように。

浩孝が『アクセルスタンピード』のスピードで凶器と化した空気
で、摩擦を受けて燃えないように、またはその風圧で押し潰されな
いように。

彼らは『耐性』をつけ、自身を最適化する。

金山浩孝の場合、自身の肉体を『かなり頑丈にする』事で『耐性』
をつけているようだ。

「クツ……だからどうしたってんだ？ マジックの種明かししてド
ヤ顔してんじゃねーよ。俺はまだ闘え——」

浩孝の挑発に、アルヴィンが乗ろうとした所で、

「——もういい」

先ほどから一言も話さず、宙に浮いていた喜作がそう言った。

「内岡さん!？」

「もういい、と言ったんだ。その男の言う通り、この状況はお前に
とって何のアドヴァンテージも無い。お前は立派に闘ったよ。だが
しかし、状況が悪かったんだ。撤退するぞ、さっき【乗り物師】を
呼んでおいた」

「くツ……。了解しました……」

アルヴィンたちはどうやら、撤退するようだ。そう感じ取った拓巳
は、汚名返上のつもりなのか、彼らを引き止める。

「おい……、待てよ。このまま逃がす訳ねえだろ……」

まだ復活しない右腕に代わって、左腕で拳銃を構える拓巳。

しかし喜作はそんな拓巳を見て不敵な笑みを浮かべた。

「強がるなよ。お前、結構限界だろ？」

「クツ……」

確かに拓巳は、これまでの戦闘による疲労と右腕上腕部までの紙細
工化で体力をかなり消耗していた。今も銃を構えるので精一杯だ。

琴音と刃先も同様で、浩孝も能力の反動で今は動けない。本人曰
く、「ちっ、かなり無茶しちまったか。また明日は筋肉痛だ……」
という事らしい。

「ふふふ。もう直ぐかな……」

喜作は余裕を持って腕時計で時刻を確認した。

【第三十四章 予知者と風の人、それとテロリスト】（後書き）

お待たせいたしました。

【第三十五章 爆弾魔と策士、それと空気使い。そして高速接近中の何か】（前

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「フウウウウウウウウウウウウウ！！！」 by ブイ
タリィ〉

二人は戦士として闘っているのだから。彼らは、普段の優しい松野浦龍之介ではない、普段の策士な菊鳩代雲ではない。

単純に戦士としての二人。彼らが全力でぶつかっている。

既に拳は割れている。殴り合う度に血が吹き出る。

既に脚はガクガクだ。まともに歩けず、立っているのがやっこの状態だ。

でも二人は殴り合いを止めない。どちらかが倒れるまで続く勝負。片方が中止の意思を見せれば、それは降参の合図だ。だから双方、殴るのを止めない。

「おらあー!!」

「さあッー!!」

両者の拳が交叉し、互いに互いの顔面を殴り飛ばす。鮮血がパツと飛び、アスファルトの道路に降り掛かる。

二人は衝撃に身を任せ、ヨロヨロと離れた。顔から玉のような汗が滴っている。

「くくく……そろそろ諦めたらどうだ……？ ふらっふらじゃねえか……」

「お前こそ……安保部員の癖して弱い、ぜ……。お得意の高レベルな能力でも使えばいいじゃねえか」

「バーロー。純粋な殴り合いを楽しみたいんだよ……」

「ふふふふ、ふははははははは！ 全く、お前は面白い奴だよ。

結果よりも過程、効率よりも無駄を優先する……。中々、戦闘には拘りがあるみてえだな」

「（戦闘への拘り……やっぱり俺は……）ああ、そうさ。おもしれえ奴との闘いだからな。そりゃあ、拘るさ」

龍之介は自嘲的に笑う。龍之介は確信した。自身の中で何かが確実に変わりつつある、と。

それは、学園安保部に入って、本格的に戦闘を始めるようになってから、変わり始めたモノ、精神だ。

「（闘いに目覚めているのか……俺は……）さあ、続きをやらうぜ

？」

既に、最低限だが体を動かせるようになった。

「ああ……そうだな……。今度は能力を使ったガチバトルだ」

そう言った途端、代雲の両手が輝き始めた。彼はニンマリと笑って、「改めて自己紹介させて貰おうか。俺の名は菊鳩代雲。STEALTH・DECoyの少佐だ。能力名は――」

右手を前に突き出す。掌には光り輝く文字で『不幸』と描かれている。黒色の光だ。

「『リトルフォーション』だ」

代雲が言い終わると、彼の手から光文字が射出された。結構な速さだ。あたれば痛そうな、そんな光文字。

もつとも龍之介が咄嗟に避けた所為で、電信柱に当たり、バッシュッ！！という音を立てたぐらいだったが。

「おいおい、なんだよ。光文字を高速で飛ばす能力か？」

「さて、それはどうかな？」

「なに？」

龍之介は疑問を感じた。確かに龍之介は代雲の能力が、先ほど口にしたようなチンケな能力だとは思っていない。STEALTH・DECoy幹部クラス的能力者だ。光文字には何か意味がある筈。

そこまで思考したときだった。

さっきの電信柱が折れ、龍之介に向かって落ちてきたのは。

「！？」

驚いて、半ば反射的に後方に飛び退いた龍之介。冷や汗を流しながら、彼は代雲を睨んだ。

「お前……これがお前の能力の本質か……？」

「さあ、どうかな？」

「ッ！？」

代雲の手が輝きを増す。今度は左手を自身の胸に当て、光を照射した。

代雲の体が、僅かだが金色の粒子を放っている。

「さあ……行こうぜ!!」

「（来るッ!!）」

光る代雲が龍之介に迫る。彼の後ろには金色の粒子が尾を引き、軌跡を描いていた。

その動きは、能力使用時より格段にキレが増し、速くなっていた。

「おらぁッ!!」

「ぐぐッ!!」

その拳撃も重く鋭い。龍之介が交差した腕のガード程度では防げない位だった。

「（な、何だこの能力!! モノを破壊したり、強化したり!! 一体、何系統の能力なんだ!?!）」

「おっと……、上手い具合に当たった俺の拳とは対照に……お前は当たり所が悪かったみたいだな」

「（この……言い様……まさか!!）まさか、お前の能力って——!!」

「そう、そのまさかだ」

ドス、ドス、ドス!! と、続けて放たれる拳は、龍之介に確実にダメージを与えていく。その全ては、『偶然』によって引き起こされたものだった。

「う、ぐはッ!!」

「俺の能力は——」

代雲の渾身の右ストレートが龍之介の眼前に持つて行かれる。ボロボロとはいえ、物凄い一撃だ。速さ、握りの強さ、硬さ、当たるであろう場所、どれを取っても『偶然』、最高のコンディションとなっている握り拳だ。また、その拳には『不幸』の光文字が貼り付けられている。

「ぐぎ!!」

「『少量の、幸運・不運を操る』能力だ」

松野浦龍之介の体は宙を舞い、龍之介は『不幸』を植え付けられた。

静寂を掻き乱すように。一人の男が乗った、元はトヨタ2000GTと思しき、悪趣味な改造を施された白いスポーツカーが、人々が呆け、ひっそりとした道路を爆走する。

車内にはイギリスのロックバンド、【Queen】の『Another One Bites The Dust』が流れている。オリーブドラブ色のジャケットとスラックスと黒い革靴を着用し、ノーネクタイで白ワイシャツのボタンを一つ空けた、そんな服装の男はハンドルを両手で握りながらも、音楽に合わせ、右人差し指でトントンとハンドルを叩いている。

男の名は、ヴィタリー・サヴィン。アッシュブロンドの髪と灰色の目が特徴的な、ロシア人だ。通称、【乗り物師】。

現在、彼はアルヴィンと喜作を回収に車を走らせている所である。「至急、指定ポイントに来い、か……。平静を装っていたが、焦っていたなあ。喜作の奴」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、アクセルを踏み込むヴィタリー。彼は絶妙なドライビングテクニクで広くない道路の曲がり角を縫うように進む。

能力を発動されてからというものの、龍之介は代雲に一方的な闘いを強いられていた。どの位、一方的かというと、先ず龍之介の攻撃は『運悪く』代雲に当たらず、代雲の攻撃は『運良く』龍之介にクリーンヒットするのだ。次にその『運によるシステム』を維持するために定期的に『リトルフォーション』を撃たれるのだが、至近距離での戦闘で放たれるため、その回避は困難。しかも龍之介は『不運』な状態だ。『不幸』にも『リトルフォーション』の光文字に当たって

しまう。

こうして龍之介の『不幸のスパイラル』が完成する。この悪循環のお陰で、菊鳩代雲は、自身に『幸福』の光文字を定期的に当てる、所謂『幸福のスパイラル』という幸福環を、『不運』な龍之介に邪魔されず、安全に維持する事が出来る。

「オラオラオラア！！ どうしたどうした！？ 自慢のSAって奴を見せてくれよ！！」

龍之介に代雲の容赦無い拳撃が降り掛かる。龍之介はそれを何とかして防御し、ダメージを減らそうとする。

「（く、くそ！！ これじゃあ『クラッシュクラスタ』が使えない！！）」

松野浦龍之介は考える。

「（今の状況を打開するには、先ず奴のSAを回避しなければならぬ！！ しかし俺の『不幸』が続く限りは、回避は困難だ！！）」
代雲の拳の嵐が、龍之介の交差した腕に集中する。腕からはミシミシと骨が軋むような、嫌な音が聴こえた。

「（探せ！！ 探すんだ！！ コイツの能力の弱点を！！ 必ずある筈の、弱点を！！ …… 人間が造った『システム』なんだ、SAは！！）」

「防戦一方かあ！？ 反撃して来いよ！！」

拳による攻撃に足技が加わる。代雲の攻撃は能力補正もあるが、それ以前に単体での威力も結構なものだ。

龍之介は全身の痛みに、何とか耐えながら、必死に策を練る。

「（コイツの弱点、弱点、弱点……！！ …… そう言えば、）」

龍之介は何かに気が付いた。状況を打開するための、鍵となる『何か』に。

「（コイツ、『一度に一つの事象しか運命を操っていない』？）」「
龍之介の予感ハ的中していた。

菊鳩代雲のSA『リトルフォーション』には、三つの特性がある。一つは『能力効果の短時間維持』。これは光文字が対象に貼り付く

事で発動する特性。二つ目は『効果発動後のタイムラグ』。三つ目が『能力効果は一回につき一つの対象にのみ有効』。龍之介が気付いたのがコレだ。

「（確証は無いが……賭けてみるしかないな!!）」

思考を終えた龍之介は防御態勢を解き、『クラッシュクラスター』の装甲を展開し、目の前の代雲に殴り掛かった。

「（やつと来たか!! 松野浦龍之介!!）」

代雲も龍之介に光文字を照射しながら、それに応じた。

「（ふん!! これで貴様は『不幸』になった……。俺を殴れるもんなら殴ってみやがれ!!）」

装甲を纏った龍之介の拳が迫る。

「おらああああああ!!」

「（ハッ!! 威勢は良いが当たらんのだぞ? 『不幸』なお前にはな!!）」

代雲の『リトルフォーツン』は基本的に能力発動後、自動操縦できる。『もつとも変化させやすい対象の運を変化させる』。そうプログラムしてある。

そのプログラムは偶然だろうか、龍之介の作戦を成功させる要因の一つとして起動してしまった。

結果から言うと、松野浦龍之介の拳の軌道は『不運』にも逸れる事なく、正確に菊鳩代雲の顔を射抜いた。

「はばあ!!」

情けない声を出し、代雲は仰け反った。殴られた顔には「信じられない」と驚愕の表情が貼り付けられていた。

「やはりな……」

龍之介は安堵と納得を込め、呟く。

「ば、ばびい……?（な、なに……?）」

「殴る直前に……。意図的に、能力を弱体化させた……。俺の『不運』を消費するため……。お陰でお前に一発入れる事が出来たよ……」

『リトルフォーツン』にとって龍之介を転ばしたり、彼の拳を反らす事より、SAの弱体化を促す方が簡単に運勢変化を実行できる『対象』だった。

「そんなごどが……!!（そんな事が……!!）」

「油断してんじゃねえぞ……。自分の能力に驕れば必ず隙が出来る。だから戦闘時は油断しない。戦いの基本だ」

「く、くそ……なんてこった。やっぱり安保部の保安侍役は伊達じゃないって訳か……」

「そーゆー事だ」

「くくく、やっぱり闘い甲斐があるな、お前は。油断していた事は誤るよ。たかだか一つの『システム』で貴様を封殺出来ただなんて思わなければ良かった……」

「たった一つの要因で勝敗が決する……。そこまで戦闘は甘くねえ。だから面白い、そうだろう？」

「ああ、そうだ。そうだった……。初心を思い出したよ」

くくく、と二人は笑う。

「さて……まだ続けるか？」

「当たり前だろう？」

「だな」

代雲の問いに龍之介が答え、代雲自身もまた、その答えに頷く。二人は再び、拳を構え、戦闘体勢に入った。

「じゃあ——」

「——行こうか——!」

と。二人が再び拳を交えようとしたその時。

どうん、どるううううるううううん、どうんどん、ばばばば。という騒音を撒き散らし。

『ヒヤッッッッハ——ッ!——!!』

彼らの頭上を悪趣味な白いスポーツカーが通り越した。スピーカー越しに搭乗者の物と思しき、歓喜の叫び声を吐き出しながら。

「……!!??」

あまりに突然の出来事——スポーツカーという巨大なモノが自身の上を凄まじい跳躍で通り過ぎる——に龍之介たちは驚き、動きを止めた。

白いスポーツカーは拓巳たちが進んだ方向——清瀬方面へと続く線路の脇の道——に、爆音をばら撒きながら、爆走していった。

「一体……」

「何なんだ……？」

二人の戦意は、既に殺がれていた。

【第三十五章 爆弾魔と策士、それと空気使い。そして高速接近中の何か】（後

どうも今晚は。篤岡です。

久しぶりの投稿ですね。

投稿が遅れた理由は以下の通りです。

？中間テストがあつた。

？最近、学校の宿題が多く、パソコンにあまり触れられなかった。

とても忙しい状況ですが、これからも頑張つて投稿していきたいと思ひます。

【第三十六章 限界を突破するモノ】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。今回の一言は無し。

【第三十六章 限界を突破するモノ】

「オラアアアアアアアアアア！！！！」

自身の体、全身を、己が能力『瞬間出力限定開放』で、極限まで高めた上げた普遍川浪不の跳び蹴りが、

「うがア！！」

S & W・M 9 4 5とB・A 8 9・バーストハングの二挺拳銃で応戦しようとした、甲山草徒に炸裂した。

草徒に能力使用や射撃等による迎撃をする暇さえ与えず、二つの拳銃を手放すほど強く吹っ飛ばす。その結果に至るまでの川浪不の一連の動作は、芸術と言っても過言で無いほど、洗練されていて無駄が無く、美しかった。

「先ずは一人」

吹っ飛び、倒れて動かなくなった草徒を一瞥し、川浪不は手放され、宙に舞う二挺の銃を素早くキャッチし、刀を構えている那美矢甲紀に狙いを定めた。視力及び射撃技術、全身の安定性の強化。これにより理想的な射撃体勢が整う。

「次に二人目」

「させるかッ！！」

川浪不が二つの引き金を同時に引く。ゴム弾と光弾がそれぞれの銃口から飛び出て、真っ直ぐに甲紀に向かった。

「ぬうん！！」

ゴム弾を刀で、明後日の方向へと弾き飛ばす甲紀。しかし光弾は弾き飛ばせず、彼の肩に直撃した。

「安心しろ、スタン・モードで撃った。だが、まあ動けないだろうがな」

「ッ！！——！！！」

川浪不の宣告通り、全身に染み渡る痺れが若き侍の動きを妨害する。彼は力を振り絞り、刀を地面に突き立て、何とかして痺れた体を支

える。

川浪不はその様子に、ほう、と感心した。

「頑張るじゃないか。お前のその精神に敬意を払って楽に済ましてやる」

川浪不が再び銃を構える。銃は甲紀の胸に照準された。その動作に焦りは無く、慎重かつ大胆に、実行される。

「止めだー!!」

しかし川浪不が引き金を引こうとした瞬間。

「こ、『コントロールリリース』!!」

叫んだ甲紀が左手を前にフラフラと突き出した。その弱々しい動作と共に、

ゴパツツッ!!!

B-A89・バーストハングが内部からエネルギーを吐き出しながら自壊し、川浪不の左手を巻き込んで吹き飛んだ。

同時進行で川浪不の右肩が異常に膨れ上がり、破裂するようにして血を吹き出す。

大方、最後の抵抗としてSAを発動させたのだろう。

「普遍!!」

その惨状に、士も思わず声を上げた。

「ッ!!（こ、コイツ……この状況で能力を使えるとは……。糞!!
! もう動けないと見誤っていたッ!!）」

彼は左手を押さえながら二、三步後ろに下がった。甲紀はその様子を見て、ニヤリと笑い、満足げな表情を浮かべ、静かに地面に伏した。

どうやら最後の力を使い果たし、気絶したようだ。

「（くッ……完全に計算外だ……。まさか最後の最後で能力を使うとは、な……。奴は一流を証明したって訳か……。!! ……糞!!
コイツの能力の所為か? さつきから自然治癒力の強化が上手くいかない!!）」

眼前の敵に一矢報いる事が出来た甲紀とは対照に、川浪不は自身の

吹っ飛んだ肩と手の治癒が中々出来ず、焦っていた。

草徒の話によれば、あの鬱井清がもうすぐ戦線に復帰するらしい。
「（ロバーツの奴から話は聞いている……。なんでも最近、急成長を遂げた正攻法で勝つのが困難な強力なスピリットアカレイドだ……。あの鬱井が、か？俺が最後に闘った時は、まだまだな素人だった筈だ……。隊長もそう認識していたしな。しかしアイツの話を聞く限りで素人なんてもんじゃなくなってた……。正に戦士のようだった、と。そんな語り口だった）」

ならば、と普遍川浪不は頭を素早く回転させる。

「（こんな状態で奴と闘うのは無謀だな……）」

現在、川浪不は決して軽度ではないレベルの傷を負い、回復もままならない状態だ。

取り敢えずは、ライトブリットの暴発の影響で吹っ飛んで、地面を転がっている二、三本ばかりの指を無事な方の右手でかき集め、撤退する事が無難だろう。

そう判断した川浪不は、焦げて煙を出している指を拾い上げて、ポケットに入れた。

「（さつさと保護対象を連れて本部に帰還して保健室で治療を受けるか……。もしくは高価だが、治療系SA能力者に直してもらうとするかな……）」

そう考えながら踵を返し、×士に声を掛けようとした所で。

ちようど鬱井清が戻ってきた。

「（な、なにいいいいいいいいッ！）」

清は、その体に――×士が『カーソル・クラフト』で放った、重力空気弾が体に突き刺さった影響で――いくらかの穴が開き、そこから血を流してはいたが、戦闘は続行可能なようだった。

清は辺りを見回し、自分の部隊の被害を確認すると、川浪不の存在に気が付いた。

「む……。貴様、安保部の……」

不意に掛けられた清の声に少し驚きながらも、川浪不は返答した。

「あ、ああ。そうだ。安保部の普遍川浪不だ。お前は鬱井清だな」
「ああ、そうだ。久しぶりだな。しかし……。流石、安保部と言ったところか。我が組織の精鋭二人を一人で屠るとは、な」

清の余裕そうな様子に、川浪不は内心、とても焦っていた。

「（……攻撃してくるか？）」

ならばせめて×士だけでも逃がそうと、川浪不は覚悟を決めた。

しかし、鬱井清の対応は意外なものだった。

「そう、いきり立つな。こちらに戦闘の意思はもう無い。これほどの損害を受ければ、回収は困難。素直に戦闘データだけ持ち帰る方が良い」

それに、と清は×士の方を見た。

「その×士とやらは、まだまだ戦闘が続行可能のようだしな」

清の指摘通り、阪上×士は重力空気弾を放つ準備を完了していた。彼は大きな傷を負いながらも清に右手の人差し指を向けていた。その手は、負傷の所為か、それとも『一度片付けた相手』の復活の恐怖心からだろうか、ブルブルと震えている。

「（無茶しやがって……！！腕、折れてんだろうが……！）」

「だから撤退だ。そこで、だ。……俺はお前等を見逃す。増援の報告もしない。だから俺たちを見逃せ」

清からの突然の要求。それは安保部員としての結構な失態となりうる要求だった。

しかし、普遍川浪不と阪上×士にこれ以外の選択肢は残されていない。

「分かった。さっさと、行け……」

「賢い選択だな」

清は甲紀と草徒を両肩に担ぎ、能力により飛翔。その場を風のように去った。

川浪不と×士はそこに立って、それを見送る事しか出来なかった。

【第三十六章 限界を突破するモノ】（後書き）

お待たせしました！！

今回は諸事情により短めです。

【第三十七章 狩人とテレポーター】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「全く……毎度毎度、無茶な注文してくるぜ……」 b
yオルズ空輸部隊隊員〉

【第三十七章 狩人とテレポーター】

時系列的には龍之介や拓巳の戦闘が終盤を迎えた頃。周囲が徐々に暗くなり始めてきた夕暮れ時。

線路付近の道で少女と青年が対峙していた。

「（まさか……）」

尾行に気付かれていたとは、ね。と、少女・サヤ「ロボーツは冷や汗を垂らしながら思った。サヤは青年・イエフ「アリングムを、細心の注意を払って尾行していたのだが、イエフの神憑りの注意力によって気付かれてしまったのだ。

お陰で彼女は、現在の、この『強力な敵に戦闘態勢になって向かい合う』という状況を招いてしまう羽目になった。殺人相手という事でただでさえ気が抜けないのに、目の前のイエフの不敵な笑みが、サヤにプレッシャーを与えていた。

「（ライフルか、ナイフか……どちらを選択する？）」

どちらを選んでも、目の前の殺人犯は私を瞬殺しそうだけ。と、ネガティブな考えを持ってしまふ、サヤ。しかしそれも仕方が無かった。

それほどまでに、目の前の男——イエフには威圧感があるのだ。彼が少し動けば、自分を肉塊に変えてしまふ——そんな想像を歴戦の安保部副隊長に抱かせるほどに。

イエフの武装は精々、『アンダーホール内技術』を利用した粒子ブレード一本。サヤの武装より、比較するのが馬鹿馬鹿しいくらい少ない。

「（だけど……）」

イエフにはその『程度』の装備で重装備能力者のサヤ相手に圧勝できるほどの実力をもっているように思えた。

ライフルを使えば、弾を切断され、弾かれた上で袈裟切り。

ナイフを使えば、ナイフごとバラバラに切り刻まれる。

CN・パンツァードライブの補助による格闘戦なんて愚の骨頂。
能力を使っても同じ。

どの武装を選択しても、何度脳内でシミュレーションしても、目の前の男に勝つヴィジョンが浮かんでこない。

「（どうすればいいの！？ 突破口がまるで見えない！！）」

サヤは取り敢えず、対策を考えながら膠着状態を維持する事にした。彼女の端正な顔に、一筋の汗が流れる。

睨むサヤと、余裕そうに腕を組んで不敵に笑うイエフ。二人の力関係は明白であった。

「ふむ……無闇に突っ込まず、隙を見せずに戦略を練る、か……。
良い考えだ」

「随分と余裕なのね」

「貴様では俺を倒せないからな」

イエフのその言葉に、サヤの顔が不機嫌そうに歪む。こつもあつさりと——まるで不変である世界の真理を語るかのように当たり前のように発せられた、その言葉はサヤのプライドを大きく傷付け、闘争心を煽った。

「……本当かしら？」

「まあ、少なくとも今のお前じゃあ無理だな」

サヤの握り拳に力が籠る。ここまでコケにされては、安保部副隊長のプライドが黙っていない。サヤはライフルを右手に、ナイフを左手に構えた。

「それじゃあ……！！」

彼女は豹のように身を屈め、

「試してみなさいよッ！！」

勢い良く前方に飛び出した。目標は勿論、優雅に佇んでいるイエフ
「アリンガムだ。」

サヤ「ロバーツは、高レベル能力者だが能力に頼る事は決してしない。能力に頼れば、その分、攻撃パターンが単調になり、相手に対処をされやすいからだ。」

そのため、サヤはナイフや生身による格闘技術、ライフルなどの射撃技術、歩法や跳躍などの機動技術を毎日必ずやっている訓練で高めている。

「はああああああッ！！！」

サヤの渾身の跳び膝蹴りがイエフに向かう。空気を切り裂く、そのしなやかな美脚は一撃必殺の威力を秘めているかのように思える。しかし。

「うむ」

イエフは、まるで子から投げられた野球ボールを親が受け取るかのように、サヤの蹴りを片手で受け止めた。

「速さ良し、角度良し、重さ……足らず、キレ良し、覚悟良し、練度……まあ良し。と言った所か？」

サヤの一撃を冷静に分析するイエフ。サヤは片足だけ彼に掴まれ、しかし未だ空中に停滞していた。

「（な！？ 女子中学生一人を片腕で支えているツツツ！！！）」

「まあその歳にしては上出来だな」

「くっ！！ 放せ！！！」

片足を掴まれた状態で、必死に暴れるサヤ。イエフに足を強く掴まれており、瞬間移動が上手く作動できない——掴まれた足と掴んでいる手の境界線が判り辛い為——のだろう。しかしイエフはその余裕な態度を崩ず、手も放さない。まるで癪癢を起こした子供を優しく宥める様な、そんな態度を維持する。

サヤは必死にもがき、抵抗する。そんな頑に拒む様子にイエフは困ったような表情を浮かべ、こう言った。

「そこまで言うなら……」

言いながらイエフは、サヤを捕まえている手を高らかに天へと掲げた。

「放してやるよ」

「なッ！！！？？」

ゴパツツツ！！！！ と、視界が真っ白く爆ぜた。

数瞬後、サヤの体がまるでスーパーボールのように地面を跳ねた。サヤ自身も認識できないほど速く振り下ろされた彼女の体は、凄まじい痛みを感じた。幸い、骨に異常は無いようだが、臓器や筋肉に影響があったようで、呼吸もままならない。

「ゴホッ！！ エハッ！！ うええ……」

苦しそうに咳き込んで嘔吐くサヤを尻目にイエフは悠々とその場を立ち去ろうとした。どうやら新しい獲物を探して先に行くらしい。

サヤもそれに気付き、必死で引き止める。殺人犯を見逃す事は出来ないからだ。

「ま、エホツケホツ、待ちなさい……！！」

「なんだよ？ まだ何か用か？」

「貴方には、ゴホッ……警察に出頭してもらおう、わ……！！」

「何を言っている。警察に捕まったらもう闘えなくなるだろう？ 嫌なこった。先に行けばお前等の仲間と闘えるかもしれないだろ？

お前も結構、良い筋行ってたから、楽しみなんだわ」

「……甘いわね」

「何？」

「たった今！！ 全ての戦闘が終了したそうよ！ 後は私が撤退命令を出せば作戦は完了！！ 貴方は来るのが遅すぎたッ！！」

「なっ！？」

「私も空間移動能力者……、直ぐにこの場から撤退できる！！」

そう言っただけでサヤは虚空に消えた。恐らく仲間の下へ瞬間移動したのだろう。

その場には呆然と立ち尽くすイエフ一人が取り残されていた。

「（戦場に来て……）」

久々に、楽しみだった戦場に来て。テンション上げて気に入った装備で繰り出して。腕慣らしも出来た。腕は鈍ってなかった。

前座との『戦い』も終わって。後は『闘い』を楽しむだけだったのに。

なのに。

「（敵性勢力は全軍撤退、だと……？）」

ふざけるな。何のためにここまで来たんだ。俺の期待を返せ。俺の楽しみを返せ。俺を闘わせろ。俺の渴きを潤わせろ。撤退だど？ふざけるな。何のために。何のために。楽しみだったのに。遅かったのか？ もっと早く来れば。

イエフの心の中を、これらの言葉がぐるぐると漂う。イエフの身が小刻みに震える。まるで不完全燃焼である自身の闘志を抑えきれなくなっただかのように。

イエフの目からは涙が流れていた。

「くそ……」

イエフは悔しさの余り、思わず言葉を漏らしていた。

「くそおおおおおおおおおおおッッッ！！！！！」
身を大きく反らし、イエフは叫ぶ。空気がビリビリと震えた。

叫び終え、イエフは冷静になった。ただここで悔しさと悲しみに身を震わせていても、何の足しにもならないからだ。

今の叫びは単なるストレス発散——だけではなく次なる行動へのケジメをつけるためでもあった。

冷静になった彼は無線機を取り出す。彼は素早く周波数を合わせると、顔の近くにデバイスを持っていく。その連絡先は——、

『俺だ。例のアレを一機、至急持って来い。至急だぞ、至急。……』

もし俺が少しでも遅いと感じたらテメーらの部隊の責任者を細切れにする』

彼の所属するテロリスト団体・オルズの空輸部隊だ。

イエフの脅しの効果もあってか、空輸部隊は通信終了二分後には

彼の頭上から指定物を投下する事に成功した。

普段から急で理不尽な要請を受ける、オルズ空輸部隊は予め、『空輸を要請される可能性がある物資を積み込んでおく』事や、輸送機には最新鋭の高速シャトルを使う事で、迅速かつハイクオリティな輸送を実現している。

そんな高品質な空輸によって送られてきたのは、高性能のWSであつた。

世界WS協会に登録してある型式番号でいうならば——WS・X Olance。機体名は《ランスシユート》。

金と銀のツートンカラーに彩られた、スタイルの良い最新鋭機で、短いポニーテール型のアンテナと背中中の『羽根型ユニット』が特徴的である。また双眼式のカメラアイが搭載された頭部は、まるで武者が騎士の兜を思わせるデザインであり、この機体のトレードマークである。

この最新鋭機は元々、アメリカ軍に配備される予定で、アメリカの大企業であるアラステア社によって製造された試作実験機であつた。

しかしアラステア社に潜入していたオルズのエージェントが、『アメリカ軍には勿体無いほどの機体だ』と判断し、整備や修理の都合のため——また、再製造出来ないようにするために設計図ごと強奪したのだ。

今では『アンダーホール内技術を用いた特殊改造』を施され、イエフの専用機としてオルズで運用されている。

「……素直に俺と闘っていればこんな事にはならなかっただろうに」
イエフは《ランスシユート》のコックピット内に素早く乗り込むと、機体を速やかに起動させた。二つのカメラアイが煌くように光を発する。

イエフは冷静に計器をチェックし、
「システムオールグリーン。アレクシス粒子炉、正常に稼働中」
《ランスシユート》の背中から光り輝く粒子が漏れ始めた。

特殊改造で施された仕様の一つ、アレクシス粒子炉。アンダーホール内で発見された装置で、『アレクシス粒子』という新物質をほぼ無限に発生させる機能を持ち、（原理は不明だが、粒子がエネルギーに変換できるため）高いエネルギーを生産できる。

また粒子の性質を利用して飛行出来たり、装置からの高いエネルギーを利用して荷電粒子砲や高出力レーザー、レールガンなどの、『電力が足りなくて兵器への搭載が難しい兵装』を粒子炉搭載機が使用出来たりと、様々なアドバンテージがある。

そのため近年、軍隊ではアレクシス粒子研究が盛んに進められている。

「各種兵装、異常なし。」

この高性能かつ高価な装置を搭載しているWSを使ってイエフがしようとしている事。

それは燦っている闘志を程よく消費する事である。本当は予定していた戦闘によって消費する筈だったが、戦闘対象が居なくなったために、彼は『周辺の建物を破壊する』事で闘志を消費しようとしているのだ。

「（建前としては……そうだな、『撤退する味方の脱出援護のための攪乱』、とでもしておくか……）」

幸い、本当に脱出する味方が居るからな、とイエフはほくそ笑む。

「さて、と……」

一通りの起動準備を終えたイエフは、操縦桿を強く握った。

「精々、暴れさせてもらうぞ」

《ランスシュート》は勢い良く跳んだ。

【第三十七章 狩人とテレポーター】（後書き）

お待たせいたしました!!
感想待ってます!

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「いや……あれは凄かった。なんせ『飛んでいた』ん
だからね……」byバスロータリーで事件に巻き込まれた一般市民
〉

時系列的にはサヤが瞬間移動してイエフとの『戦場』から撤退する少し前。龍之介と代雲——吹っ飛んだスカーレットセントリーを拾った後、南無は本屋の前に寝かせて、放置してきた——は、拓巳たちに合流していた。

場所は清瀬方面への線路沿いの道路である。

「全員無事みたいだな拓巳！！ そっちにド派手な車が来なかったか！？」

「ああ、来たよクソツタレ！！ 幽霊の仲間だった！！」

「え！？ あの暴走族が！！！？？」

「ああ、そうだ……って、お前。なんで菊鳩と一緒になんだ？」

龍之介の隣に居る代雲を見て、拓巳は怪訝そうに言った。その問いに対して、

「一時休戦中だ」

代雲は悪びれる様子も無くサラツと答えた。実質、敵に囲まれている様な状況で、こんな態度を取れる彼は、やはり——流石、組織の幹部と言ったところだろうか——肝が据わっているようだ。

「そ、そうか……」

余りに堂々とし過ぎていて、逆に拓巳の方が弱気になっている。

「で、暴走族が居ないって事は……」

「うん、私たちが闘ってた赤服と例の幽霊と一緒に、ね」

「まるで鞆を引っ手繰るかのように車に乗せて走り去っていったよ」

龍之介が漏らした疑問に、琴音と刃先が口々に言った。

「赤服って誰？」

「幽霊の仲間」

「仲間、もう一人居たのか……」

「しかも、新しいS Aの活用能力を使ってきやがった」

「新しい……活用能力……？」

「ああ、メンタルファクトって、赤服が言ってたんだ。……詳しく話すと長く掛かりそうだから、後で部室にて話そう。先輩たちへの説明も出来るしな」

拓巳の合理的な提案に安保部は全員頷いた。代雲も、じゃあ俺は近くに潜んで居る女スナイパーにでも詳細を聞か、と拓巳の提案に口を出さない。

「先輩と言えば……金山先輩。何時頃からここに？　っていうよりどうしてここへ？」

龍之介は思い出したかのように浩孝の方を向いて言った。

「ああ、事件を嗅ぎ付けた隊長からの命令でな。他にもロバーツと普遍が来てる。……駅前——って言うより、この道路に来たのは、見栄崎たちがこの道路に来た時刻と同じだよ。その時には既にこの道路で戦闘が始まっていたが……」

「ああ、そこで伸びてる二人の事だろ？　俺が幽霊の調査を命じたから、その時に闘ってたのかも……」

浩孝の言葉に代雲が付け加えた。

「金山先輩、他の二人はどこへ？」

「事件をいち早く収束させるために、それぞれ別ルートで現場に侵入して駅前ロータリー付近に集まったんだけど……来てねえってことは戦闘に巻き込まれたようだな。まあ、あの二人なら心配無いが」

「連絡は取れますか？」

「まあ取れないことは無いが、今は不味いんじゃないか？」

「いえ、今すぐに連絡は取りません。ただいつでも連絡を受けられるようにしておいて下さい。万が一、救援連絡が来ても直ぐに対応できるように、ですよ」

「そこについては大丈夫だ。もう準備してある」

流石はベテランの先輩だな、と龍之介は思った。

「じゃあ、今からどう行動するか、皆で決めませんか？」

「ああそれが良い——」

琴音の提案に拓巳が賛同しようとしたところで、しかし拓巳の言葉は途中で止まっていた。

理由は簡単だ。突如、満身創痍のサヤ「ロバーツが瞬間移動してきたからだ。」

「な——！！！？？？」

誰かが驚きの余り声を漏らした。それもその筈、学園安保部副隊長という結構な手練であるサヤが、丈夫なはずの服も体もボロボロな状態で現れたからだ。呼吸も荒々しいものになっていて、肩で息をしているような感じだ。

そんな傷だらけの彼女は二、三步ヨロヨロと歩いたかと思うと突然、糸が切れたマリオネットのように地面に倒れた。

すぐさま全員で駆け寄り、拓巳が体を支えた。

「大丈夫ですか！？ ロバーツ先輩！！」

「う、うう……」

拓巳がペチペチと顔を軽く叩くが、サヤの反応は薄い。どうやら気絶しているようだ。

「失礼」

そう言いながら龍之介は拓巳とサヤの間に割り込んだ。そして、そつと彼女の額に手を置いた。

彼のSA、『瞬間偽装』。傷を瞬時に『埋め』、回復させる能力。どんな傷でも痕跡を残さず直す能力。

「（もしかしたら……）」

もしかしたら。自分の能力は他人にも効くんじゃないのか？

龍之介は、何の根拠も無いが——しかしはつきりとした直感からそんな事を考えた。

「（だとしたら……試してみる価値はある！！）」

龍之介はサヤの額に乗せた掌にSAの素である福音を集中させる。手にピリピリとした刺激が走った。

「（あの、自分へと流れ込んでくるイメージを変換……。逆に相手に流す……）」

龍之介のイメージした通り——とまでは、いかないが龍之介のSAは掌を通じてサヤの体内に浸透していく。拓巳たちはその様子を、固唾を呑んで見守っている。

次第に彼女の傷が和らいでいった。普段なら、その名の通り『瞬間』なのだが、他人の体なので仕方が無いだろう。

傷が癒えていくのと同時に、サヤの顔からも苦悶が無くなっていた。

「（よし、初めてにしては上手くいったようだ）」

傷が治ったのを確認すると、龍之介はサヤの額から手を離れた。彼女は安らかな寝顔を見せて寝息を立てている。普段のクールな彼女からは想像もつかないような可愛い表情だ。

「龍之介……お前、それ新しいSAか？」

「あ、ああ。何かと便利だと思つてな」

引いてないかな、と全員の顔を窺う龍之介だったが、

「へえ、スゲエな」

拓巳もただ『すげえな』くらいの反応だったので、そんな事はちょっとした杞憂だったことに気付いた。

「まだ治癒自体に時間が掛かる未完成品だな。激しい戦闘でもしなきゃ大丈夫だろう。——っと、他に怪我してる奴はいるか？」

周囲を見渡して確認する龍之介。その質問に全員、首を横に振った。拓巳の紙細工化していた腕も、アルヴィンが撤退したお陰で治っている。

「じゃあ、ロバーツ先輩起こしますか？ 一応……」

「うむ、可哀想だが怪我した経緯も知りたいしな」

そう言う拓巳はまたもやペチペチと優しくサヤの頬を叩いた。

「う、うみゅ……」

「ほら、起きて下さい」

「はっ！！ ここは……」

やっと目を覚ましたのか、サヤは拓巳の腕から跳ね起きた。

「線路沿いの道路ですよ。貴女が傷だらけで瞬間移動してきたんで

すよ？」

「！！　そ、そうだ！！　私、殺人犯と闘って——」

「「さ、殺人犯ッ！！??」」」

「それは……　本当なのかッ!？」

「ええ、残念だけど……。既に犠牲者が一人……。って、なんで菊鳩代雲がここに？」

「あ、一時休戦中だ」

「そ、そう……」

「で、その殺人犯。どんな奴でした？」

「……　かなりの殺り手だったわ。プロの殺人者ね。被害者を見て判ったの。印象としては強面な男だったわ……。　何か鎧みたいなのも着てたし」

「鎧？」

「うん、最新式の……。携帯型のヤツだと思うけど」

「最新式——　ってえと、リキッドシエルかな？」

「リキッドシエル。とある研究施設が開発した、アンダーホールの技術を利用した新世代ボディーマーの総称である。普段は長方形の小型プレートになっていて持ち運びラクラクなのだが、いざ展開すれば一瞬で『鎧』となり、使用者の体を包むという画期的な新装備だ。」

「あと粒子ブレードも持ってたし」

「アンダーホール内技術好きですね、その男」

「ええ、でも装備はそれだけ。拳銃の一丁もなかったわ。……　よっぽど自分の腕に自信があるんじゃないかね。　っていうかそれほどの実力はあったわ。　闘ってみて分かったもの」

「……　兎に角、警察に連絡しましょう。　殺人鬼の野放しは危険です——」

「ギイイイイイイインッッ！……！！」

「——　よ？」

龍之介が携帯電話を取り出しながら、提案を出している途中、その

言葉は突然の騒音に掻き消された。

音源は上空から。上を見ると高速シャトルが龍之介たちの頭上を通り過ぎていった。結構な低空飛行だったので、衝撃が龍之介たちの体を揺さ振る。

「なんじゃありや!!??」

「た、多分!! 軍用の物資運搬高速シャトルですよ! ボク、雑誌で見た事あります!!」

「何でそんなモンがここにッ!？」

見ると、高速シャトルは清瀬方面の線路の踏み切り付近に何かを『投下』したようだった。

「あ、あそこは……!!」

その様子を見たサヤが驚愕に顔を歪ませていた。彼女の顔には冷や汗と思しき雫が大量に流れていた。

「私が例の『殺人犯と闘っていた場所』だわッ!!」

「えッ!? って事は……」

「そう!! 現在、ほとんどの人間が呆けている中、あの高速シャトルを呼び出せる人間は限られている!! しかもあの地点付近には、高確率で『殺人犯』が居る筈!! つまり、あの殺人犯が高速シャトルを呼び出し、何らかの物資——いや装備を受け取った可能性が高い!!」

龍之介の脳内に浮かんだ、ある『一つの可能性』をサヤが汲み取り言葉にした。

「だとしたら危険ですね。ただでさえ危険な殺人犯が更に凶悪化しますよ!!」

「そうだな雨崎。しかしこの距離からじゃ、装備品の受領は妨害できないな」

「しかし……何を受け取ったんだ? 高速シャトルから投下されたモノ——パツと見、結構デカかったぞ」

「兵器か何かかしら? だとしたら……軍用WS?」

「軍用WS、ですか? そんな物、出されたら勝ち目ありませんよ

「！！ 少なくともこつちもWSを出さないと……」

「拓巳くんの言う通りね……。松野浦くん、マーカスをWS出せる？」

「え、ええ。まあ」

自家用WSの事を言われ、ギクリ、と緊張する龍之介。サヤたちには、『マーカスを撤退させた』とだけ報告しているが、未だ残っている罪悪感に体が反応して、目が泳ぐ。

「一応、家まで取ってきてくれないかしら。一応、保険のようなモノだけど……直ぐにね」

「了解しました。すぐ取ってきますー！！」

龍之介はサヤの指示に従い、そそくさと『クラッシュクラスター』を展開させ、跳んでいった。その様子には、若干の焦りが見られた。「よし。じゃあ私たちは装備品が何なのか、見極めましょう。琴音ちゃん、ソナーを――」

龍之介を見送り、琴音に指示を出そうとしたサヤは、まるでゴルゴンに睨まれたかのように、石みたく固まった。

何か『大きなモノ』が先ほどの『投下地点』から勢い良く飛翔したのだ。形は人型、明らかにWSだった。

WSは、何かの粒子をばら撒きながら、宙に浮かび、こちらの様子を見下ろしていた。

「松野浦くん……出来るだけ早く、ね……」

そのWSは、サヤに、顔面蒼白状態でそう言わせるだけの威厳があった。

【第三十八章 W S・Xolance〈ランスシュート〉迎撃——その?】（後

お待たせしました!!

感想宜しく願います!

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「流石にヤバいと思って警察に通報したんですよ。警
察のWS部隊にね」by当時、逃げ惑っていた住民の一人ゝ

ジャギツ！！

そんな機械音を立てて、《ランスシユート》は上空に静止しながら、ゆつくりと拓巳たちに銃口を向けてきた。機能美溢れるW S用ライフルで、その名前は——拓巳たちは知らないが——ホーミングベルと言った。

「に、逃げるんだああああああッ！！！」

誰かが叫んでいた。声からして金山浩孝の叫びだったと思われるが、全員、そんな事はどうでも良かった。

能力を使う暇は無かった。移動に利用できる能力を持ったサヤや浩孝までもが『自身の足』で横に跳んだ。

直後。リイイイイイイイイン！！と、鈴がなるような音がなつて、ライフルの銃口から青白い光が放たれた。銃口から細長く展開したその光は、凄まじい速さと威力を内包している。

先ほどまで拓巳たちが立っていた道路をそんな青白い光が焼く。道路を舗装していた石盤はドロドロに溶けていた。幸い、拓巳たちは思いつきり避けたため、少し肌をジリジリと炙られた程度で済まされていたが、

「（アレクシス粒子発生器から得られる膨大な電力を用いた荷電粒子砲……！！人間相手になんつーもんをぶっ放しやがる！！）」
彼らを戦慄させるには十分すぎる一撃だった。地面に飛び込むようにしてビームを避けた拓巳たちは、すぐさま立ち上がって蜘蛛の子を散らしたように逃げた。他の呆けていた人々も衝撃で復活し、パニックの中逃げ出し始めた。人々の悲鳴が風船を炸裂させたように広がる。

全員が目的無く逃げる中、しかし菊鳩代雲は気絶している佐郎と燃継の許に走っていた。

「あ、おい！！！」

「くそッ！！ そっちに走ったら逆に危ないんだぞ！！」

拓巳が声を掛け、浩孝が文句を口走った。確かに浩孝の指摘通り、^{ランスシュート}敵WSは佐郎や燃継の倒れている場所を通り過ぎて、拓巳たちを攻撃しているため、代雲の行っている行動は二人と自分を危険に晒す、無謀な行為だった。

しかし、代雲は自身の部下を、気絶したままの状態で戦場に放置する事は出来なかった。

「う、お、お、お、お、お、お、お！！！」

代雲は叫び声を上げながら、《ランスシュート》の下を通り抜けた。その行為はとても勇気のいるものだっただろう。そのまま彼は二人の部下の許に駆けつける。汗と泥に塗れて懸命に走る、その姿は普段の冷静な彼からは想像も付かないようなモノだった。

そのまま代雲は素早く、安全な場所へと連れて行こうと、二人を肩に担いでヨロヨロと移動を始めた。

『無駄な足掻きを……』

《ランスシュート》の外部スピーカーから男の声が聞こえる。イエフの声だ。

イエフはWSを反転させ、ライフルで代雲に狙いを定めた。

『くたばれ！！』

機械に加工された声と共に、またリイイイイイイン！！と、音が鳴って、ビームが放出された。青白い熱線は確実に目標を仕留めようとする意思を持っているようだった。

「うわあああああああああッッ！！！」

代雲は思わず、目を瞑って両手で顔を庇うようにして覆った。荷電粒子砲の前では無力な対処で、本当は走って逃げた方が賢明なのだが、人間、こういう時は思わず立ち止まって守りの態勢に入るものだ。

このままでは確実に、代雲と佐郎と燃継は熱線の餌食となってしまう。が、何時までたっても彼らの体を荷電粒子の光が覆うことは無かった。

彼らの体は、先ほどまで立っていた地点とは全く別のところに居た。

「全く……手間取らせてくれるわね」

その不可思議な現象の原因は、サヤ「ロバーツ」の『ミリアドポイント』であつた。

サヤが、代雲たちがビームで射抜かれる直前にSAを使って彼らを瞬間移動させたのだ。

「か、感謝する！」

「ふん、早くその二人を起こしてあげなさい」

そう言つとサヤは、『ランスシュート』の方を向いた。

「（不味い、不味いわ……。早く松野浦くんがWSを引っ張ってこないと、私たちが跡形も無く消えちゃうENDを迎えそうね……）」

一方その頃。龍之介は全力で夕闇の空を飛んでいた。彼のSAの『クラッシュクラスター』の技の一つ、ブースト。彼はコントローलされた爆破能力の爆風で、空を飛ぶ——いや、跳ぶ事ができる。

「（さっきの雨崎からの緊急電話を聞く限り、色々とヤバそうな状況になつていらしいな……！！）」

彼は開いた携帯電話を片手で器用に閉じると、手頃な電信柱の先に着地する。と、同時に勢い良く『蹴り上げ』、能力によつて上空へと『飛翔』した。

「（くっそ……！！ 結構、エネルギー使うな、コレ……）」

龍之介は『飛行』を止め、地面に降り立った。ブーストは結構なエネルギーを消費する。体を跳ばす為の爆破用エネルギーは勿論、その爆破をコントロールするにもエネルギーが掛かる。

このままでは体力がもたない。そう考えた龍之介は肩で息をしながら、移動手段を『飛行』から『滑走』に変える事を思い付いた。

「（そうだ！！ 俺には『ノンアクティブ・スラスター』があるじ

やないか！！」

『ノンアクティブ・スラスター』。『クラッシュクラスター』から派生したSAで『爆破による姿勢制御』を用いる移動用の能力である。

「（コイツを長時間滑走仕様にすれば……！！）」

幸い、開発したてだった頃とは違い、ここ数日間、龍之介は毎日の反復練習により『ノンアクティブ・スラスター』をある程度、使えるようになっていた。

「（よし、出力も良いみたいだ。上半身と下半身のバランスも良好！！）出来た！！ 『ノンアクティブ・スラスター』スケートスキー……！！」

龍之介はまるで雪原を滑るスキーや氷の上を舞うスケートのように舗装された地面を滑走した。そのスピードは自動車に追い付く位は出ているだろう。

「待つてくれよな……。この新技で、直ぐにWSのとこまで辿り着くからよお……」

龍之介は西口バスロータリーにいるであろう自身の同僚に叫び、更にスピードを上げた。

目標は自宅ガレージに収納してある、WS。アクセルショット残された時間は少ない。

イエフは、WSで適当に拓巳たちを攻撃しながら考え事をしていた。

「（おかしい……おかしいぞ。報告にあった『マツノウラリユウノスケ』って奴がいねえ。刀を持った『ちよつとばかし強い』リユウノスケって奴が……）」

イエフは一応、『目星』をつけていた敵が中々見つからず、苛立っていた。お陰で手にも力が籠り、握っていた操縦桿はギチギチと音

を立てている。

「くっそツツたれがアアアあああああッッッ！！！！」
イエフは、ライフル射撃用のトリガーを引きまくり、ビーム砲を乱射する。

正面モニターの中では逃げ惑う人々の様子がよく見えた。しかしイエフが満足している様子はない。逆に苛立っていた。

「っち！！ ストレス発散にもならん……」

イエフは強敵を求めていた。弱者を甚振った所で何の意味も無い。しかし、

「（その肝心の強者が出てこないんだったら意味が無え！！）」

ガンッ！！ と、イエフは目の前のコントロールパネルの縁に拳を振り下ろした。コントロールパネルがグラグラ揺れた。

そんなこんなして、色々と行動を起こしたイエフだが段々と戦意を失っていった。戦いの要となる、肝心の『強者』が出てこなければ、自分が戦場に居る意味は無い。それにこの戦場——いや、最早彼にとって戦場という認識も薄い——には、自分を遮るモノは一切存在せず、只逃げる人々がいるのみだ。

元々、弱者を痛めつける趣味の無いイエフにとっては、この『場所』は退屈すぎた。

「帰るか……」

こうしてイエフは滅多にしない撤退を決意した。

だが今日のイエフ、どうやらやる事なす事上手くないらしい。『そのワーキングサーヴァント！！ 大人しく投降しろ！！』

撤退しようとしていたイエフに外部スピーカーから発せられたと思しき、声が掛けられた。何だ？ と、イエフは音源の方向を振り向く。

そこには、白と黒のツートンカラーのWSが居た。どうやら警察のWS部隊の物らしく、パトランプが付いていた。

「なッ！？ 撤退しようと思ったならコレかよ……」

イエフは事態が余りにも自分の意向に逆らう事に呆れ返った。ある

程度のアクシデントは戦場の常だが、ここまで来ると異常事態のよう
に思える。

「だけど……戦えるなら——まあ、良つかあ!!」

イエフは嬉々として警察用WSに突撃するのであった。

【第三十九章 W S・X O l a n c e ヘランスシュート《迎撃——その？》（後

皆さんお待たせいたしました。感想待ってます。

P・S・私的に『松野浦龍之介』は山崎たくみさんの声で再生しています。

【第四十章 W S・Xolanceへランスシュート】迎撃——その？】（前書

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「通報か。よし、この私が出る」byシュウゝ

【第四十章 WS・X01ance《ランスシュート》迎撃——その？】

時系列的にはイエフと警察のWSが勝負を始めた頃。龍之介は無事、WSに乗り込んでいた。

「よし！！ 水素エンジン、作動つと……」

WS、《アクセルショット》はマークスとの勝負で所々の装甲をボコボコと凹ませていたが動力系には問題は無かったようでキチンと作動した。

「早くしないと……皆の命が危ない！！」

龍之介は倉庫から、全速力でWSを発進させた。

所変わって西口ロータリーでは、イエフと警察官がWS戦を始めていた。イエフの《ランスシュート》に対するのは警察用WSとして試験配備されている形式番号——WS・X0easy、《イーजीモード》だ。同じような型番だが、《ランスシュート》とは関係は無い。WSの試作機は全て『WS・Xなんたらかんたら』で表記されるからだ。この機体は型番の一部——最後に書いてある英語の表記——から察するに、イージー系の試作機であり、ランス系試作機の《ランスシュート》とは別系統の試作機だ。

閑話休題。

鈴木機械製作工場製WS、《イージーモード》。人に酷似した設計されたこの機体は、高性能な人工筋肉を用いる事により、通常の機体よりスムーズな動作が出来る。その動きを阻害しないためにも通常の装甲板は使われず、表面装甲にはまるでゴムのような柔軟性を持つ『滑らかスキン』を採用している。

その形状は、細身だが丸みを帯びていて、手袋填めたような手や運動靴を履いたような足など、全体的に柔らかそうなイメージがあ

る。また頭部に二つの小さい円形のカメラアイを持っていて、肩には小型のパトランプが内蔵されている。

武装は、手に持っている刺又に、腰部にジョイントで取り付けられているWS用リボルバー拳銃、左肘にジョイントされている大型の薄いシールドだ。

『そのワーキング・サーバント！！ 止まれと言っているだろうが！！ 止まらんと本気で攻撃するぞ！！』

地面スレスレまで降下して突撃してきた《ランスシュート》の動きを刺又で妨害しながら、《イージーモード》の搭乗警察官・シユウⅡラングはスピーカーを介して怒鳴った。

しかしイエフには、その指示に従う気は全く無い。

「貴様ア！！ 良い機体を持っているなア！！！」

イエフはライフルを腰のジョイントに装着し直し、代わりに大型WS用ナイフを取り出し、

「コックピットから貴様を引きずり出して！！ 鹵獲してやるよ！！」

刺又の妨害を乗り越えて、思い切り、コックピットハッチに刃を突き立てた。

ギヤリギヤリギヤリツツッ！！！！ と、何かが削れる音と共に、腹部周辺のコックピットハッチが火花を放つ。堅く、しかし薄い装甲が徐々に削れているのだ。

しかしシユウⅡラングは慌てない。彼は冷静にパネルを操作する。「本官のWSには！！」

叫びながらシユウは、刺又を道路に捨て、腰のリボルバーを素早く装備した。その様子はまるで西部劇に出てくる凄腕ガンマンのようだ。

「まだ有効な武器がある！！」

彼はWS用拳銃の銃口を《ランスシュート》の顔面に向けて、引き金を引いた。

ズガンッ！！ という轟音が鳴り、WS用拳銃——ハウリングサ

イトの弾倉が弾丸一発分ほど回転した。

見ると《ランスシュート》の顔面装甲の右半分が吹き飛び、繊細な内部機関が剥き出しになっている。カメラアイも片方、損傷している。《ランスシュート》は、衝撃の影響でヨロヨロと後ろに少し後退した。

しかしイエフは焦っていないかった。寧ろこの状況を楽しんでいた。「軍用と言えど、所詮は試作機。所々の装甲は脆いか……。しかし！！この程度でやられるようなチャチな機体でもないのだよ！！この《ランスシュート》はア！！」再度、《ランスシュート》は、シュウ＝ラングの《イージーモード》に突撃する。その武器は、腰だめに構えている、大型WS用ナイフである。

イエフの狙いはコックピットハッチ。最悪、搭乗している警察官が死んでも、機体だけは鹵獲する。そんな考えがイエフ＝アリンガムの頭に浮かんだ。

しかし、機体の鹵獲を優先する自分とは別に、この警察官を自身のライバルとして認めたいなる自分も、イエフの中には存在した。

確かに、この男・シュウ＝ラングのWS操縦技術には、目を見張るものがあつた。特に先ほど、イエフが行った突撃行為への対処などに、その才能が垣間見えていた。

「（ここで殺してしまうには惜しい男だな……。コイツは）」

そう考えたイエフは、珍しく、突撃体勢にあつた機体を止めて、外部スपीカーを用いて敵への説得行動に入った。

「そのWSのパイロット！！大人しくその機体を降りれば、命だけは助けてやるぞ！！」

「何い！？……貴様、ふざけた事を抜かすな！！本官は日本の警察官だぞ？テロリストなんぞに、屈するつもりは無い！！」

イエフのあからさまに高圧的な態度に、シュウはプライドと正義心を大きく滾らされた。

「貴様を鎮圧して、逮捕する。それが本官の役目だ！！」

『ククク……やってみるよお!!　そこまで言うならばア……!!』
『望む所だ!!』

シユウは拳銃を、イエフはナイフを。

彼らはそれぞれの武器を持ち、戦いに臨む。

龍之介はWSの《アクセルショット》を駆り、駅へと続く大通りを『走行』していた。WSは普通に歩いて進めば、道路を荒らししてしまう恐れがあり、足の裏には『走行用車輪』が必ず取り付けられている。中には――マークスのように――威圧目的で、敢えて『足』を使って『歩く』者もいるが。

龍之介はその『走行用車輪』を用いて、道路を走っていた。

「間に合ってくれ……!!」

仲間を心配する余り、自然と操縦桿を握る手にも力が入った。

【第四十章 W S・X O l a n c e ヘランスシュート】迎撃——その？】（後書

皆さんお待ちせしました。最近、調子よく投稿出来てます。

P・S・私的に『見栄崎拓巳』の声は杉田智和さんで再生しています。

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「ええ、一方的な闘いでした。見ているこっちが思わ
ず目を瞑ってしまふほどにね」by 戦闘を遠く眺めていた野次馬ゝ

松野浦龍之介の駆る、猫耳WS・《アクセルショット》は、西口バスロータリーに転がり込むかのようにして、突入した。

「（間に合ったか！？）」

龍之介は、コントロールパネルを素早く操作し、使用できるレーダー全てを用いて、ロータリー付近を走査した。

数秒後。赤外線、超音波、通常カメラ、エトセトラエトセトラの検索結果が、モニターに次々とウィンドウを開いて表示されていく。龍之介は凄まじい速さで目を動かし、その全てに目を通した。

その結果は——、

「全員、無事か……ッ！！」

画面の隅っこに全員で肩を寄せて隠れているのが見えた。取り敢えず全員、負傷はしていないようだ。

龍之介は全員が無事である事に一瞬安堵し、そして再び気を引き締めた。何が龍之介を引き締めたのか。それはロータリーに再び漂い始めた戦場の空気もあつただろう。しかし、それ以上に龍之介の全身を強張らせる存在があつた。

そう。琴音からの電話にあつた、敵のWSの存在だ。龍之介は『ソレ』を見つけるべく、画面の隅から隅まで舐めるように凝視した。あれか！？」

目的のモノは、どうやら一足先に警察用WS——見たことも無い機体だったが、そのカラーリングとパトランプで『警察用だ』と分かった——と、戦闘を始めているらしく、直ぐに見つかった。

警察用WSは拳銃、敵であるテロリストのWSは大型ナイフを用いて戦闘を繰り広げている。

「俺だって……小学校を出て直ぐに免許とって、それから毎日シミュレーションばっかやってたんだ——！」

龍之介は機体に地面を滑らせ、二体のWSの間に割り込んだ。警

察用WSを後ろに、テロリストのWSを前に、といったポジションだ。

流石に、今まで戦っていた警察官とテロリスト——シユウとイエフも驚いたようで、外部スピーカーで怒鳴り掛けた。

『なんなんだ、そのWS！？ 危ないだろうが！！ 下がるんだ！！』

『勝負の邪魔をするな！！』

大の大人二人の怒号に一瞬、身を竦めながらも、龍之介は言い返す。

『WSを使つて闘えば、周辺に被害が出るんです！！ だから警察側の味方について、この戦闘をさつさと終わらせるんですよ！！』

言い終わると龍之介は、機体の腰部にマウントしてあつたスタン・バットをWSの両手で持った。

『その声……中学生くらいか？ 援護は嬉しいが……』

警官の戸惑うような声。流石に、警察として一般市民に援護は頼めない。しかも未成年となれば尚更だ。

『もう後には退けないんですよ。それに俺は城門学園の安保部員ですから』

しかし龍之介の心は決まっていた。自分たちの幽霊調査事が原因で駅前を戦場にしてしまった事に責任を感じているのだろう。それにWSを使つて人助けをする事は、先日の一件の償いでもあつた。

シユウもその決意を汲み取つたようで、

『分かつた。しかし怪我と無茶はするなよ』

とだけ言い、再び戦闘態勢に入つた。龍之介もそれに倣う。

一方、イエフはと言うと。

「（何だ、何だ？ この餓鬼も戦闘に参加すんのか？ ……中々、面白そうじゃないか）」

戦士としての闘志を、更に膨らませていた。

二対一。通常の一対一の時よりも周囲への気配りや集中、技能が必要とされる。一気に二人を相手にするのは、例えコンビネーションが無くても、十分に厄介だ。勿論、二人の攻撃が噛み合わず、自

滅するパターンもあるのだが、警察官パイロットの技能からしてそれは無さそうだ。彼、シユウ＝ラングは龍之介を上手くフォローしながら闘うだろう。

イエフ＝アリンガムは、この逆境を楽しんでいた。戦士として命の危機に曝されるのは、彼の生存本能を一層、刺激した。

目の前には自分に立ち塞がる、二つの障壁。久しぶりの戦闘の、メインディッシュを飾るには相応しい。

『成る程成る程。お前ら二人で掛かって来るのか？』

イエフは一応、確認の為、スピーカーで目の前の二人に問い掛けた。またもや、期待するだけして戦闘が出来ないのは耐えられないからだ。

それに対する龍之介とシユウの答えは、

『勿論だ！！』

『一般人を巻き込むのは不本意だが…… やってやるぜ』

イエフの希望を十分に満たすものだった。

WS三機による戦闘が始まった。三機は初っ端から、遠目から見てもチカチカと火花が煌くのが見えるほど激しい戦闘を繰り広げる。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

龍之介機がスタン・バットを振り上げ、イエフ機に向かい、ブウン、ブウウウン！！と、振り回す。が、イエフは上手く機体を操作し、紙一重の所で回避する。その動作に危なげな様子は見えず、ただ最低限の動きで、攻撃を回避している。

「当たらん、当たらんぞ！！ そんな攻撃イイイイイ！！」
一通り、スタン・バットを避けたイエフは、降りかかるバットをWS用大型ナイフ——デッドカウントで受け止めた。

金属と金属が擦れ合い、削れていく音が鳴り、大量のオレンジ色の火花が辺りに飛び散る。《アクセルショット》と《ランスシユー

ト》のモニターに幾千もの光が降り注ぐ。

「オラアアアアアアアア！！！」

「！！！？？」

叫び声とともにイエフ機が更に身を進める事によってデッドカウンの刃がスタン・バットに食い込み始めた。ギャリギリゴリ、という削音が一層、激しくなる。

どうやら、バットの耐久力よりナイフの切断能力の方が上回り始めてきたようだ。食い込み始めて数秒後には、バットの真ん中辺りまでナイフの刃が食い込んでいた。

「このままじゃバットが斬られちまう！！！」

「迂闊だぞ、少年！！！」

見兼ねたシューは、横からWSの拳銃で龍之介を援護する。弾丸――大きな的には砲弾だが――は、《ランスシュート》のナイフや肩腰辺りに直撃した。その影響でイエフの機体が、結構な衝撃を受ける。

「グッ！！……だが、至近距離じゃなかったから損傷は軽微だ！！！」

大きく揺さぶられた筈の機体は、しかしナイフによる攻撃を中断していなかった。未だに、ナイフは龍之介機のバットに食い込み、斬り進んでいる。

「まだ動けるのか！？ は、離れやがれ！！！」

「っち！！ やはり近距離からでないと……ッ！！！」

龍之介とシューの表情に焦りが走る。どうやらWS用拳銃の砲弾は、遠距離から撃つても効果が薄いようだ。

そうこうしている内に。

「あっ」

ギリギリギリギリギギギバキン！！ という嫌な音が響き、スタン・バットが綺麗に二分された。その切断面に歪みは無く、まるで漏電しているかのように青白い火花がバチバチと放たれている。

「くそったれ！！！」

龍之介は使えなくなったバットを相手に投げつけるように放棄し、バックステップで後退する。

「少年！！ 無事か！？」

シユウが少し焦った様子で龍之介機の無線で語り掛ける。

「無事です！ 武器をやらただけですからね……。あ、後、俺は

『少年』なんて名前じゃありません！！ 松野浦龍之介です！！」

「そうか、無事ならいいんだ。松野浦くん。で、他に武器はあるか？」

「あ、ありますよ！！ なんと暴徒鎮圧用特殊兵装が——」

ビャバアアツ！！ 突如発生する、全てを破壊する音。

「——ツ！？ 逃げる——」

龍之介の言葉を遮った音を聞き、シユウはそれが何であるか判断する前に直感で叫んでいた。シユウの言葉に反応し、シユウは左へ逃げ、龍之介は咄嗟に機体を右方向に思い切り動かした。無理な運動で関節系がギチギチと悲鳴を上げる。突然の事で色々と思考が追いつかない龍之介だったが、『何故、逃げなければならなかったかは直ぐに理解できた。』

「——！！ 馬鹿な！？ WSの腕が溶けてる——！ ま、まさか——ツ——！！」

龍之介たちは、ホーミングベルから荷電粒子の光を喰らいかけたのだ。反応してもビームを左腕部に喰らっていた。シユウの指示が無ければ、龍之介も無事では無かっただろう。

直ぐ真横を破壊光線が通っていった事に動揺しているのか恐怖しているのか、龍之介の手はブルブルと震えている。

「ゆっくり話してもいられないか……」

まあ戦場では当たり前か、と龍之介は即座に割り切る。

相手のWSは様子を見ているようで動く様子が見られなかったため、龍之介は眼前の《ランスシュート》——の手に装備されているホーミングベルをじっくりと見た。どうやらあの荷電粒子ライフルは——琴音が緊急電話で言っていた——前触れに鳴る、『リィィィ

「イイイイイン！」という鈴みたいな音が鳴らなくても、ビームを発射できるようだ。

「（音の印象を相手に植え付けて……音が無い時に撃てば立派な奇襲兵器か。いやらしい武器だな……）」

龍之介はバットがマウントされていた左腰の反対——右腰にマウントされている、装備を見た。

用途は暴徒鎮圧。分類は特殊兵装。形状は——銃、自動拳銃。黒光りするその兵器の名称はエア―ショットマン初期型。陸上自衛隊向けに開発された、金本機器製作工房製軍用WS銃——117式圧縮空気発射砲の民生仕様だ。

その名の通り、圧縮した空気を発射するというものだ。従来の空気拳銃とは違い、弾丸は一切使用せず、『圧縮した空気だけ』を発射する拳銃。龍之介がWSに乗れるようになって直ぐに許可申請して、先日、やっと許可が下りて、使用が可能になった武装だ。

「（荷電粒子砲に比べると威力不足は否めないが……射撃武器には射撃武器ってね）」

龍之介はパネルを少し操作し、右腰のWS用拳銃を、ビームを喰らわなかったため無事に稼働できる右手に装備させた。

「空気注入開始」

龍之介は更にパネルを操作し、コマンドを入力した。と、同時に圧縮空気発射砲からゴオオオ、というエアコンの稼働音を更に大きくしたような音が聞こえる。空気を吸い込んでいるのだ。拳銃内の空気タンクは数秒で満タンになり、内蔵装置が空気の圧縮を始める。

その間、敵であるテロリストのWSはじつとこちらを観察していた。どうやら準備が済むまで待っていてくれるらしい。シウも下手に動かず、敵の様子を伺っている。

「随分と親切だな……」

ぴー、という電子音が空気の圧縮が終了した事を告げた。弾数は——使用時の威力によって違うが、WS相手のときは十五発程度だろうか。

龍之介はゆつくりとした動作で銃口を《ランスシュート》に向け、照準を合わせた。しかし《ランスシュート》に動きは見られない。「なっ！？ まだ動かねえのか！！ 舐めやがって！！」

龍之介は操縦桿のトリガースイッチを力チリと押し、『空気』という不可視の弾丸を射出した。弾速はまあまあ、一般的な拳銃弾より少し遅いくらいだろうか。

兎に角、その空気弾——ゞ士の重力空気弾ではない——は、《ランスシュート》に向かって真っ直ぐ進み、照準が上手いかなかったのだろうか——胴体を狙った筈が、『イージーモード』のハウリングサイトの砲弾で損傷していた顔面の右半分に直撃し、メインカメラアイ右に止めを刺した。

「（狙いとは外れたが……ま、ラッキーという事で）」
龍之介は機体を操作し、敵機体を常に意識しながら機体を動かす。その場に棒立ちしていれば、いい的になってしまっただ。

そこで敵WSの操縦者であるイエフに動きがあった。
「常に動き回れば敵の照準をある程度、妨害できると踏んだか……。しかあああし！！ この《ランスシュート》に搭載された高性能な照準装置と！！」

《ランスシュート》が移動している龍之介にホーミングベルの銃口を向ける。

「この俺の射撃技術とその勘！！」

イエフは操縦桿のトリガースイッチに指を掛けた。

「そして、このホーミングベルの真価！！ 『ビームによる目標の自動追跡機能』からあああ！！ 逃げ切れる訳ねえだろオオオオオオオオオオ！！！！」

銃口からあの青白い熱線が放たれる。龍之介は機体の速度を上げ、辛くもソレを前方に移動し、避けた。

が、しかし。ビームは龍之介の真後ろをそのまま通り過ぎず、グニツ、という効果音が似合いそうな具合で龍之介機の居る方に向かって曲がったのだ。

「はあ!？」

龍之介は突如、方向を変えたビームへの驚愕に目を見開いて、口をあんぐりと開けた。顔に冷や汗が伝う。

ビームはヒュゴバツツ!...! という音と共に《アクセルシヨット》の右脚関節付近の装甲、人工筋肉、フレーム、その全てを貫通し、吹っ飛ばした。

「うわぁッ!？」

右脚を失い、龍之介機はスライディングをする野球選手を不恰好にしたような感じで、俯けに滑り込むように地面に転んだ。

当然、《アクセルシヨット》の前面装甲や顔面は地面で擦れ、ガリガリゴリガリゴリゴリッ!... という具合にドンドン削れた。パーツ類もバラバラポロポロと剥がれ、脱落していく。滑る時の衝撃でコックピットもガクガクと揺れる。

十数メートルほどアスファルトの地面を滑り、歩道と車道の境目でやっど停止した。

「な、何なんだ一体!？ ビームが曲がりやがった!..」

「大丈夫か!？ 松野浦くん!..」

「は、はい!! しかし今のは一体.....」

「アレクシス粒子の性質である、『反発』を用いたシールド.....更にそれを用いたビーム制御技術だろう。ビームにアレクシス粒子シールドを纏わせて、左右上下の反発の強弱を設定してビームを曲げているのだろう」

「粒子サーベルにも利用されている、『ビームの走る壁を、粒子シールドで作っている』っていうアレですか!？」

「その通りだ!..」

イエフが龍之介とシュウの会話にオープンチャンネルで介入してきた。

「粒子サーベルのようにガチガチに固めるのではなく、ビームの通る道の一部の反発を弱くする。そうすれば反対側の反発でビームが弱い反発しかない粒子シールドを突き破って進む仕掛け.....。それ

こそがこの！！ この荷電粒子砲に取り付けられた機能！！ それでそれこそが、このホーミングベルという名の所以だ！！』
ビームによる追跡機能と『リイイイイイイイン！！』という鈴の音。二つ合わせて、ホーミングベル。

「なんてこった！！ 高威力に加えて高命中度なんて！！」

「松野浦くん！！ 動けるか！？」

シユウの呼びかけに龍之介はパネルを操作して、機体全体の損傷度を調べた。モニターに次々とウィンドウが展開して、文字列が流れるように表示されていく。

前面装甲損傷率——75%。

頭部損傷率——60%、メインカメラカバー用ガラス損傷。

左腕損傷率——52%、高熱による溶解により稼動は困難とされる。

左腕を除く上半身各種関節損傷率——平均34%、左肩、右肩、

右肘、右手首、右手各種指関節損傷、しかし稼動は可能。

上半身人工筋肉損傷率——45%。

胴体部関節損傷率——12%。

右脚損傷率——92%、敵による攻撃で欠損し、使用不可。

右脚を除く下半身各種関節損傷率——平均45%、左脚、左膝、

左足首損傷、稼動は稼動は可能だが、右足欠損のため自立は不可能。

下半身人工筋肉損傷度——74%。

「くそ！！ 動けません！！」

「やはり動けなかったか……。松野浦くん、機体から脱出してくれ！！」

「無理です！！」

シユウの頼みを龍之介はすぐさま拒否した。

「俺にだって男としてのプライドがあります！！ やられたままじ

や退けません！！」

「だがどうやって——」

「——こうするんです！！」

言うと、龍之介は俯せ状態の《アクセルショット》を操作し、地面を右腕とだけの力で這いずり回って、《ランスシュート》と向かい合わせた。そのままの状態でエアースhotマン初期型を構えさせる。彼の機体は、起き上がらず——いや起き上がれなかったから倒れた状態で射撃体勢に入ったのだ。

「無茶な——ッ！！？？」

「やってやる——！」

龍之介は機体の顔を起こし、《ランスシュート》に照準を向けた。メインカメラのガラスが割れているため、モニターの映像が亀裂で阻害されているが、今は気にしてられない。

龍之介は人差し指で、操縦桿のトリガースイッチを連打した。弾が切れるまで。

「吹き飛びやがれええええええええええッッ！——！」

不可視の銃撃の雨は空を斬り、《ランスシュート》目掛けて突撃していく。

いくら高性能な機能と良きパイロットを載せた《ランスシュート》でも、『センサーだけ』が感知する、目に見えない攻撃を避けるのは至難の技だ。

エアースhotマン初期型の残弾全てを放った、団体としての『一撃』。投網のように獲物を逃がさない、その一撃をセンサーで感じ取れば、普通ならば軽く絶望するぐらいは余裕で行くだろう。

しかし。

「圧縮空気程度オオオオオオオオオオオオオオオオッッ！——！！！」
イエフの叫び声は明らかに『喜』を含んでいるものだった。

イエフの行動は極めて迅速で、酷く単純だった。イエフは素早く機体を動かし、圧縮空気弾の弾幕を、ホーミングベルを縦横無尽に振り回し、ビームで文字通り『薙ぎ払った』のだ。

射線上にある物体も焼き払いながら、荷電粒子の光は圧縮空気を掻き消す。ソイツは、ついぞと言わんばかりに龍之介の《アクセルショット》の頭部と左腕を『持っていき』、右肩と胴体を掠った。

破壊箇所の爆発の衝撃で、龍之介はコックピットユニットごとグラグラと揺さ振られた。WSに乗り慣れた龍之介の気分を悪くするほどの揺れだった。

「うわあああああああああああつっ！！！！！！！」

メインカメラを吹っ飛ばされ、その直前にモニター画面を白く焼かれ、龍之介の視界は一瞬の内に奪われた。

「松野浦くん！！」

シュウの怒鳴り声。耳だけが外界——密閉されたコックピットの外の様子を感じ取っていた。視界はモニターが真っ暗になった後も、白で塗り尽くされている。

「クソッ！！ 何も見えねえ！！」

「松野浦くん！！！！ これ以上の戦闘は無理だ！！ 脱出してくれ！！」

「ぐう！！ り、了解しました！！」

龍之介は苦い顔をしながらも、非常事態のためシュウに従う。ちょうど座席の真ん中——足と足の間に存在する、コックピットユニット周辺の装甲をパージする形式の緊急脱出装置を作動させるレバーを手探りで引き抜いた。

「！！」

だが、装置は作動しなかった。度重なる衝撃と蓄積されたダメージ、ビーム溶解による装甲の不要な溶接。

これらが原因で装置が故障してしまったのだ。抑揚の無い機械音声と（龍之介は見る事ができないが）正面モニターも装置の故障を告げていた。

『警告します。装甲のパージが装置の故障により実行できません。』

警告します。装甲のパージが装置の故障により実行できません。A Iは何らかの解決方法を検索しています』

正に絶体絶命の状況だった。

【第四十一章 W S・Xolanceへランスシュート〈迎撃——その?〉】（後

お待たせいたしました。今回はちょっと長めです

【第四十二章 W S・X O l a n c e ヘランスシュート】迎撃——その？】（前

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「ウチの開発した機体が迷惑をお掛けしました」by
ランスロットゝ

「まあ餓鬼にしては……粘った方じゃないか？ しかも、そんな旧型機で」

頭部と左腕、右肩の一部、右脚が無くなり、全身傷だらけの《アクセルシヨット》と、そのパイロット・松野浦龍之介を見て、イエフはそんな風に評価した。

龍之介の愛機である《アクセルシヨット》は、その完成こそ最近だが、製作開始時期やスペック上、旧型とされる『第二世代』——より正確にはその後期型——に分類される。

『世代』とは。その名の通り、W Sの性能や機能などを人間や生物の世代になぞらえ、表したもので、当然、世代を重ねる毎に高性能なものとなる。

今のところW Sの世代は。

W S開発の歴史の初期に製造された化石とも言われる、エンジンとフレーム、人工筋肉などの最低限を積み込んだだけで試行錯誤に明け暮れた、『第一世代』。

W Sがやつと形になってきたが、センサーもカメラも性能が低い旧型機、『第二世代』。

センサー類や装甲板もまともになり、現在、広く流通している現行機、『第三世代』。

そして、アンダーホール内技術などの新技術の発見により進化した領域、『第四世代』。

この四つ——更に初期型・中期型・後期型（次世代である第四世代は、発表からまだ間もないので、中期型と後期型が今はまだ存在していない。だから初期型のみ）の計、十。シユウの《イージーモード》は第三世代後期型、イエフの《ランスシユート》は——元々は第三世代後期型の機体だが、特殊改造により——第四世代初期型、と言ったところだ。

龍之介は敵いもしない第二世代で最新鋭機と懸命に闘った。イエフは、その松野浦龍之介の勇氣に感心していた。だからこそ。

「今日は十分に楽しめた。退いてやるか」

だからこそ彼は、その場から退いた。龍之介に敬意を払って。

アレクシス粒子を撒き散らしながら、『ランスシュート』は満足げに夕闇の空へと飛翔し、消えていった。

イエフⅡアリングムが撤退した少し後。《イージーモード》の力を借りた龍之介は無事にコックピットから出てきた。

まだ少し気分が悪くフラフラしている龍之介はシュウに支えられながら、拓巳たちの許にゆっくりと歩いていった。

「すまん。君ばかり闘わせてしまった……」

歩きながら、金髪オールバックの男——シュウは龍之介に申し訳なさそうに言った。

「い、いえ。俺も少し熱くなってました……。それに貴方のサポートが無ければ、俺は死んでいたかもしれません」

「サポート？」

「ほら、あれですよ。近くにいる時は、いざとなったら相手の攻撃を俺の代わりに受け止めれる位置にさり気なく居るとか、射撃で相手の動きを牽制してくれたとか……」

「ああ、あれか……。あれはな、癖だ」

「癖？」

「うむ、癖だ。……俺は、自分で言うのもなんだが、WSの操縦が上手い。だから、仲間と戦う時は、あの手この手で仲間がなるべく怪我しないように気をつけてるのさ。その所為かな……。多分、君の言う『サポート』ってのが得意なのは。——っと、話してる間に、相手の方が来てくれたか」

シュウの言う通り、拓巳たちが龍之介の所に駆け寄ってきた。まだまだ仕事（恐らく龍之介の機体の片付けなど）が残っているのか、シュウは、全員に感謝のお辞儀を背中で受けながら「じゃあな」とその場を立ち去っていった。

「おい龍之介！　無事か？」

「あ、ああ！！　何とかな」

「そっか、良かったぜ」

拓巳は安堵の息を漏らした。そこで彼の後ろから琴音がヒョッコリ顔を出す。

「怪我とかも無いの？」

「え、あ、うん。大丈夫だ、問題ない」

「そっ……、ふううう、それは良かったよ」

「心配掛けたな。すまない。……っと、代雲はどうした？」

「アイツ、さつきまでいたんだが……仲間を連れて戦闘の混乱に紛れてどっか行っちゃったみたいなんだ」

「そっか……ま、アイツにも都合があるんだろう」

龍之介の言葉に、拓巳はそうかもな、と頷いた。

「しっかしボロボロになったもんだね。松野浦くん、寿命は縮めるもんじゃあないよ？」

「言わないでやれ、刃先。龍之介のライフはもうゼロだ」

「は、ははは……はあ」

龍之介は乾いた笑いと共に、ガツクリと肩を落とした。確かに大した操縦技術も無しに、テロリストに挑んだのは無謀な事だったかもしれない、と心の中で思っていたが、こうもはっきりと言われると――それが自らの体を案じるような言葉だったとしても――結構、グツサリとメンタル面を抉れてしまう。

「しかし、災難だったわね。貴方のWS、大破しちゃったし。あれ、修理に出すの？」

「ロバーツの言う通り、どうするんだ？　あのWS」

先輩二人からの指摘に龍之介は目を閉じ、額に手を当て、うん、

と悩んだ。

《アクセルショット》の損害状況を見るに、修理するにはパーツは全取っ替えしなければならぬだろう。しかしそうになると、『もう新しい機体買った方が良いのではないか』という考えも出てくる。どちらもそれ相応の金が掛かるだろう。だからこそ、一円でも安い方法を取りたいのだが、それは極めて繊細な問題だ。

どちらの方法が安く済むか、その決断を龍之介は直ぐに出すことが出来なかった。

「ええっと……」

龍之介が何とか答えを捻り出そうと、四苦八苦する中。

「それに関しては任して下さい。話は聞かせて貰いました」

ソイツは突如、姿を現した。

ソイツの特徴は、茶色がかった短めの黒髪。キツチリと着こなした背広の上からでも分かる、古代ギリシャ彫刻のような体。爽やかな営業スマイル。

二十代の成人男性。その男の名は、

「私はランスロットⅡヴァリアント。アラステア社の者です」

よく龍之介がアクセスする、アラステア社ホームページの社員紹介で見かける、馴染み深い顔だった。

ホームページの件やキッチンとした名刺、本社の電話受付サービスに問い合わせた本物のアラステア社員だと判明した、ランスロットⅡヴァリアントの話を龍之介たちは真剣に聞いていた。

「ええ！？　じゃあ、あのWSはアラステアの新型軍用機だったんですか！？」

「はい。先日、テスト運転開始直前に何者かによって強奪された機体なのですが、密かに日本の……東京付近に運び込まれたという情報を手に入れましたね。情報網を張っていたら、案の定、見つかつ

たという事です」

「それでここまで来た、と……」

「はい」

話を一区切りして、龍之介たちは目の前の男——ランスロットを見た。

話によると、若くしてアラステア社開発部企画課長を担当している彼は、今回の強奪事件の収束——《ランスシュート》の撃墜とその残骸の回収——に協力してくれるならば、高性能なWSやその武器などの機材を諸々の申請込みで提供することだ。

「でも、よろしいんですか？ 無償での機体提供だなんて……」

「はい、本当は我々の警備部のWSを出したいところなのですが、強奪時にあの機体が暴れたせいで、その大半が殲滅されてしまったのです。現在、部隊の復活のため、パイロットの治療や機体の修理を急ピッチで行っているのですが、流石に間に合いそうにありません。そこで今回、あのWSと闘って生き延びた貴方に託してみようかと。勿論、嫌だったら断って頂いても構いません。曲がりなりにも私たちが製作した機体によって被害を受けた訳ですから、その場合でも貴方への補償は致しますが……どうでしょうか？」

相手が子供でも敬語を使うランスロットに龍之介は好感を抱いていた。情報提供を渋る事もなければ、補償を盾に依頼を強要してくる様子もない。

しかしそんな彼の話にも一つだけ、腑に落ちないところがあった。
「何故、俺に託そうと？ 警察関係者であるシュウさんも居ますし

……」

「では逆に聞きますが、そのシュウさんの機体は何世代型機ですか？」

「第三世代後期型だと思います」

「では、松野浦くん。君の使っていた機体は何世代型機ですか？」

「第二世代後期型……ですが。しかし……」

「理由は使用機体の世代が古いから……だけではありません。貴方

はそんな旧型機で、最新鋭機相手に粘りに粘ったんです。そんな貴方に私は……」

ランスロットは一拍置き、そして言葉を発した。

「何か『情熱』のようなモノを感じたんですよ」

「情熱……ですか？」

「はい、情熱です。だから貴方を指名したんです。勿論、貴方が言ったようにシュウさんたち——警察の方々にも補償や協力は致しますが。……で、どうでしょうか？ 結論を急ぐつもりはありませんが、出来れば答えを聞いておきたい」

「俺は……」

龍之介は言い淀んだ。テロリストの鎮圧を条件に、無料で、しかもテロリストを屠るに相応しい高性能機が貰えるというアラステア社からの要請は、勿論、今の龍之介は二つ返事で引き受けたいところだが。長年、製作に携わり、出撃こそ二回きりだが、それなりに愛着のあった機体——《アクセルショット》。その存在は、龍之介の前に踏み出すのを躊躇わせていた。

ここで一言、『いいえ』と答えれば、《アクセルショット》はアラステアからの補償によって完全に蘇るかも知れない。そんな考えが龍之介の脳内に浮かびつつあった。

「（肝心な時に愛着を実感するなんてな……）」

龍之介はチラリと、半ばスクラップと化した《アクセルショット》を見た。ボロボロになりながらも龍之介を守ってくれた、その巨人は既に動力源も停止し、距離も離れているのに、見ているだけで暖かさを感じた。

「（じゃあな、《アクセルショット》）」

龍之介は心の中であつての愛機に別れを告げ、ランスロットの方に向き直った。

「分かりました。お受けします」

龍之介はハッキリと答えた。

「引き受けて頂けますか、ありがとうございます。では、機体を見

に行きませんか？ 直ぐ傍に――ほらあそこにトレーラーが止めてあります。お時間は取らせません」

「あ、はい。見てみたいです」

龍之介はランスロットの指差した方向――表通りに駐車してある大型トレーラーを見た。WSの運搬によく用いられる車種に、アラステア社のステッカーが貼つてあるという物だ。

「最新鋭機か」。私も免許とって松野浦くんに貸してもらおうかな

「楽しみだな」。ボク、結構、WSに興味があったりするんだよね

「そうだな。俺も年甲斐も無くワクワクしてるよ」

「あら、金山くんも？ 私もね」

「一体どんな機体なんだ？」

全員、どうやらアラステア社提供の新型機が気になるようだ。

ランスロットがリモコンを操作して、トレーラーのコンテナ部を開放していく。

「おおお！！」

歓声が上がった。

中には一体のWSが鎮座していた。灰色とベージュを基調としたカラーリング、ほっそりとしているが引き締まった形状、角ばった細い双眼式カメラアイ、後頭部に取り付けられたプレート状のブレードアンテナ。

それらで構成された、その機体はとても力強く見えた。

「これがアラステア社の《ランスシュート》に続く、ランス系第三世代試作機。型式番号はWS・X11 lance。その名も《ランスラッシュ》です」

「これが……」

《ランスラッシュ》は、龍之介たちを見下ろしているかのように見えた。

「WSは明日辺り、武装込みでそちらの方に送りますので」

「あ、よろしくお願いします」

機体はお披露目用に持ってきただけで細かい調整を済ませていない上にWSの武装は明日、アラステア社東京支店に届くらしく、ランスロットは東京支店に帰っていった。

龍之介は、取り敢えず《ランスラッシュ》の分厚い取扱説明書を貰っておいた。彼は、ゲームの取扱説明書を見て、そのゲームについてあれこれ想像するのが好きな人間だ。WSの取扱説明書を受け取ったのもそれと同じような理由だろう。

「さて、と。俺たちも帰りますか」

辺りはもうすっかり暗くなっていた。しかし自宅に直帰する訳ではない。龍之介たちは報告のため一度、本部である学園安全保障部室に戻らなければならないからだ。

龍之介たちは夜道を、疲れた体を引きづりながら歩いていった。

所変わって見栄崎宅。見栄崎かぼすは拓巳の帰りを、一人で待っていた。もう夜なのに部屋の電気を点けず、暗闇の中で彼女は拓巳の携帯電話に電話を掛ける。携帯電話を操作するかぼすの能面のように感情が消えた顔が、その画面の光で青白く不気味に照らされていた。

ぶるるる、ぶるるる、ぶるるる。

「……」

これで五百六十一回目の発信になる。が、拓巳は電話に出なかった。携帯電話がFINEの狙撃で大破してしまったからだ。しかし、かぼすは拓巳が電話に出るのをひたすらに待つ。

しばらくすると機械音声が彼女に、

『おかけになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、かかりません』

と、拓巳が電話に出れない事を伝える。

彼女は電話を切り、電話帳から『お兄い』の電話番号を選び、発信ボタンを押した。

これで五百六十二回目である。

【第四十二章 W S・X O l a n c e へランスシュート〈迎撃——その?〉】(後

お待ちせいたしました。感想待ってます!!

【第四十三章　これからの活動について。安保部隊長、吉野吉事からのお話】

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。今回の一言はありません。

【第四十三章 これからの活動について。安保部隊長、吉野吉事からのお話】

「先ずはこう言わせて貰おう。みんな、本当にお疲れ様」

安保部室で報告を終えた龍之介たちを迎えたのは、吉野吉事と満身創痍の普遍川浪不、同じく満身創痍の白と茶色の縞模様頭・坂上士、そして彼らの手当てをしている島月伊豆香——と、その付き添いの数野宙助だった。

「あ、ありがとうございます。えっと……その少年は誰です？ 後、何でボロボロなんですか？ その少年も普遍先輩も（治療した方が良いか？ しかし、伊豆香先生の仕事を奪うのもなあ……。あんなに一生懸命やってるし）」

「ちよつと新しく覚醒した能力者が拉致されかけていてね。普遍くんが保護したという訳だよ」

「で、その時の戦闘でボロボロになったと……。相手は誰なんですか？」

龍之介の問いには吉事ではなく川浪不が答えた。

「甲山草徒、鬱井清、那美矢甲紀の三人だ」

「三対二で闘ったんですか？ その少年と先輩で」

「いや、その少年は戦闘に参加しなかった。だから三対一だ」

「三対一……!?」

拓巳が驚愕に叫び声を上げる。そんな拓巳に川浪不は呆れた表情で、「そうだ。別に驚く事でもないだろう？ それとも、見栄崎くんは俺が一对一や三対二でここまでボロボロになると思ってたのか？」

「そう言う問題ではなく！！ なんでそんな不利な状況で……」

「行けると思っただよ」

「ギャンブラーなんですな、先輩って」

琴音が目を丸くしながら言った。その表情は尊敬と驚きが入り混じったような不思議な表情だった。

「ギャンブラーってレベルじゃないよね、琴音ちゃん……」

「同感だぜ、刃先」

疲労の所為か、琴音の思考について行けない所為か、琴音に弱々しいツツコミを繰り返す刃先の背中を拓巳がポンポンと軽く叩く。

「それにしても、お前たちも大変だったようだな」

今回は参加してない宙助が龍之介に言った。どうやら『本日、複数の能力者とWSを所持したテロリストと戦闘しました。詳細はレポートにて報告します。以上！』などと言う大まかで簡潔な業務報告では物足りず、本人から話を聞こうとしているようだ。

「そうそう！！ 最初は興味本位で行ってみた幽霊探索で、面倒なことが嫌いな幽霊と闘うことになるわ、その後も暇人集団、STEALTH・DECoyと闘う事になるわ、突如出現したWS持ったテロリストに遭遇するわ。って具合で大変だったんだよ！！ 全く、あの時は死ぬかと思ったね。でも俺の天才的なWS捌きで——」

「熱く語ろうとしている所で悪いが…… 龍之介。幽霊と戦うことになったのはお前の所為なんだぞ……？」

拓巳が明らかに疲れ果てた、という表情で龍之介の熱弁を途中で遮った。

「うっ、そうだったか？ ま、まあ兎に角！！ 大変だった！！

これで良いんだ！！」

「良いの？ 松野浦くん。WS壊れちゃったじゃない」

「旧型機じゃあ無理があっただんですよ……」

龍之介はこれ以上の追及を逃れるため、切なげな——何かを悟ったような表情で遠い目をして、無理矢理、話を締め括った。

「WSが壊れたと言えば…… 龍之介、新しい機体の取説、貰ったんだろ？ 先輩に見せたらどうだ？」

「お、そうだったそうだった」

龍之介は思い出したかのように、吉事に『ランスラッシュ』の取扱説明書を渡す。

吉事はそれを徐に受け取ると、主要な箇所を十数秒ほどパラパラと斜め読みし、龍之介に返した。

「結構、良い機体じゃないか。最新鋭機だよ？ コレ」

「でしょう！！ 先輩！！」

「これで我が安保部の装備も充実して来たな。STEALTH・D E C O Yの奴ら、W Sも使ってくるようになったろ？ この前は何とか追い返せたけど……旧型機じゃ、結構キツかっただろ？」

「はい、まあ……（言えない！！ 爆散させたとは口が裂けても言えない！！）」

「『君の報告によると』、アイツ等は戦闘後に機体を爆破させて逃走した……。という事は、——まあ前から分かっていたことだが——アイツ等の活動資金は結構なゆとりがあるんだ。安価とは言え、車一台分の価格がする大切な機材を爆破して逃走するくらいだから」

龍之介は先日 of 報告の際、『嘘』を吐いていた。本当はW S（事故だった）が爆散させたのは、龍之介だった。しかし、龍之介はその事を安保部のメンバーに言い出せず、サードとの会話でマーカスも実は死んでいない事が判明した為、『相手は機体を爆破させ、逃走した』という風に報告していたのだ。

また龍之介は——罪悪感や罪を指摘され、償いたい気持ちもあったのだが、やはり独りになるのが怖かったのか——警察にも事情聴取の際に『事故とは言え、人を殺したとは皆に知られたくない』と言っていた。マーカスが龍之介に対し、殺人未遂となるW Sの足による踏みつけようとする行為を行っていた事や、マーカスと対決したのは正当防衛だった事もあり、警察はその口止めを引き受けてくれた。だから安保部員や学園、クラスメイトや近隣住民にも『龍之介がマーカスを殺しかけた事を知られていない』。

だが、そんな『殺人未遂を龍之介の思い通りに対処してしまった事』を、やはり心のどこかで悔やんでいて、その事が、龍之介が代雲にマーカスへの謝罪を伝えるまで彼の心をチクチクと痛める事になった。

閑話休題。

「まあ、今日は皆疲れているだろうから、分析は僕がやっておくよ」
軽く会議や分析会に成りかけていたところで、吉事がパンパンと手を叩き、その場の空気を整える。

「良いんですか？ 任せちゃって」

「良いんだよ、雨崎ちゃん。僕は今回の事件では闘えなかったからね。部隊長としてコレ位はさせてくれ。……それに君たちが戦っている間も、敵側の分析はある程度済んでいるからね。直ぐに終わるさ」

「だったら俺も手伝わせて下さい」

「数野くん？ 良いのかい？」

「はい、俺も今回は闘いに行きませんでしたから。俺もコレ位は……」

「分かった。それじゃあ手伝ってくれ」

「じゃあ、俺たちは……」

「ああ、帰ってゆつくり休んでくれ」

「分かりました、では。じゃあな、宙助」

「おお！！ また明日！！」

こうして吉事と宙助は部屋に居残り、龍之介たちは帰宅した。晴れ渡った空には、輝く星々と青白く光る綺麗な月が浮かんでいた。

現在時刻は午後八時三十分。龍之介たちが幽霊を目撃して二時間三十分が経過していた。

「ただいま」

「ただいま」

龍之介とサヤは、見栄崎家のドアを開けた。家の明かりは消えているため、拓巳は手探りで玄関の照明を点けた。

「おーい、かぼす？ 妹よ。帰ったぞ。寝てるのか？」

「……返事が無い。おかしいわね、まだ寝るような時間じゃないと

思っただけど」

いくら呼びかけても返事が無いことを不審に思った二人は明かりを点けながら、家の奥に進んでいった。

「おい、かぼす、かぼす」

「かぼすちゃん？」

尚も声を掛けながら二人はリビングルームに繋がるドアを開けた。

リビングも真っ暗だ。

「ったく。アイツ、ホントにどこにいるんだ？」

そんな事を漏らしながら、拓巳はリビングの電気を点けた。

そこには、

「うわ!!」

「ッ!!」

驚愕による悲鳴。その原因は目の前に突然、現れたモノにあった。

かぼすだ。そこにはかぼすが立っていた。俯いていて表情は見えないが、確かに拓巳の妹・見栄崎かぼすが立っていた。電気が消えていてよく分からなかったが、かぼすはどうやらずっとそこ——拓巳の目の前にいたようだ。

「び、びつくりさせんなよ……。あと居るなら返事を——」

「——どこに行ってたの？」

「へ？」

「いままでどこに行ってたの？ 連絡も無しに!! こんなに暗くなるまで!! 心配してたんだよ!!」

「あ……（ヤベ、早めに終わるかと思ってたから連絡してねえーし、ケータイもぶつ壊れちゃってたんだ……）」

「どこに行ってたの？」

口調を静かにしたかぼすは再度、拓巳に尋ねるが、言い出しにくいのか拓巳は口を閉じている。

そこでサヤがフォローに、

「ちよつと事件が発生して、それで——」

「サヤさんには聞いていませんッ!!」

「ッ！！ ご、ごめんなさい……」

入れなかった。サヤは年下である筈のかぼすの気迫に完全に押されていた。サヤはしゅん、として縮こまってしまった。

「いや、今回は本当に事件があったんだって！！ 明日辺りニユースになるだろうから、それで分かるよ！！ だからこんなに遅くなっちゃたんだって！！」

「ほんと？ じゃあなんで連絡しても反応してくれなかったの？

任務の途中は仕方が無いとしても、帰るときとかに出来るでしょ…

…？ 違う？」

「それはだな。任務の途中にケータイで連絡を取ろうとしたら、狙撃されて妨害されたんだよ。その時にぶっ壊れちゃって使えなくなっただよ。それで連絡できなかった」

「本当に？ 私を無視したんじゃない？ 無くて？ 本当にケータイが壊れて連絡できなかったの？」

「そうだよ。お前を無視する訳ないだろ？ な？」

言いながら拓巳は優しくかぼすの頭を撫でた。彼女はまるで猫のように嬉しそうに目を細める。フワフワとした髪感触が拓巳の手に広がった。

「うん……」

その後、かぼすはしばらく頭を撫でられた後、拓巳にギュッと抱きつき、彼の胸に顔を埋めた。

「（どうやら修羅場は凌げたみたいね……）」

サヤはその光景を見ると、安心して力が抜けたのかヘタヘタと座り込んだ。

見栄崎家で一発触発の修羅場が展開されている頃。龍之介は帰宅して直ぐにガレージに飛び込んでいた。ガレージ内には既に大破した《アクセルショット》の残骸が丁寧に収納されていた。

彼は途中、自販機で買ったコーラの缶を作業台に置き、ある図面を広げる。それは《アクセルショット》の装備の中の一つ、作業用アーム『猫の手』の設計図だった。

「コイツを元に」

龍之介は《アクセルショット》の残骸——特に損傷の少ない右腕の猫の手が収納されている部分を見上げた。

「この《アクセルショット》の残骸から猫の手を抜き出して」

龍之介は続けて、その残骸の傍に置いてあった軍のお下がりである灰色をしたWS用シールド——《アクセルショット》用に使ったおいた物だが、今回は急いで出撃したため、使えなかった装備だ——を見た。

「このシールドにくっ付けられれば……!!」

龍之介は一度も猫の手を使えなかった事を悔やんでいた。だから損傷の少なかった右腕に残った、猫の手を今回来る新型機・《ランスラッシュ》に何とか利用出来ないか、帰り道に悩んでいたところ、一緒に帰宅していた琴音から、「装備として利用するなんてどうです？」と、正に青天の霹靂とも言えるアイディアを貰い、今回のシールド製作を思いついたという訳だ。

「名付けて……猫パンチャーだ!!」

龍之介は早速、作業に取り掛かった。

【第四十三章　これからの活動について。安保部隊長、吉野吉事からのお話】

お待たせいたしました。感想待ってます。

P・S・私的に雨崎琴音の声は花澤香菜さんで再生しています。

【第四十四章 アンダーホール】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「琴音ちゃんたちとは仲良くやっていけそう……」 b
y 架姫〉

【第四十四章 アンダーホール】

翌日、龍之介は徹夜でフラフラになりながら、学校に登校した。

「完成したぞ」。はは……」

作業後に一応、シャワーを浴びて朝食を摂った龍之介だが、目の下の大きな隈や生気の無い目、キチンと着れていない制服などが、彼の疲労具合を如実に表していた。

彼がそんなになってまで製作したかった物の名は猫パンチャーと言っ。

猫パンチャーは、龍之介が情熱と機体への愛と徹夜時の変なテンションをつぎ込んで作成した、WS用の盾に作業用アーム・猫の手——正確にはそれが内蔵された右腕を埋め込んで一体化させた急造品で、猫の手自体は盾のグリップ部分をマニピュレーターで操作することで動かすことが出来るという代物だ。

「うぐっ、日の光が目……」

徹夜でガレージの暗闇に慣れきった龍之介の目に、太陽は殺人光線のように降り注ぐ。彼は慌てて、日陰に避難した。

「くっそ、こんな事になるんだったら、隊長の言う通り休んでおけばよかった」

口では愚痴を漏らしつつも、龍之介は内心、後悔はしていない。

今日の放課後、《ランスラッシュ》は自宅に到着する。猫パンチャーを《ランスラッシュ》に装備する事は《アクセルショット》の機能——いや魂を受け継ぐ事と同義だと、龍之介は考えていた。龍之介はそれが楽しみでならなかった。だからその日の疲れを癒さず、徹夜してまで、猫パンチャーの製作を強行したのだ。

「フウーハハハ！ 放課後が楽しみだな……」

まだ深夜のテンションが残っているのか、龍之介は意味も無く高笑いを上げる。誰かに見られなかったから良いものの、その時の龍之介はとても不気味だった。

そんな不気味な彼に、近づく影が一人。その影はポニーテールの女子の形をしていた。

「松野浦く〜ん」

影の主は快活な少女・雨崎琴音だった。彼女は龍之介と違い、昨日の夜はぐっすり寝たらしく、元気瀧刺なようだ。

「お、雨崎。おはよう」

「うん、おはよう——ってどうしたの？ その顔!？」

「ちょっと徹夜して作業をしてただけさ——つとと」

やはり昨夜の疲れが残っているのか、フラつく龍之介を琴音は咄嗟に、しかし上手にキャッチする。

「もう、駄目だよ。ちゃんと休養を取らないと」

「ははは、面目無い」

龍之介はその日、琴音に支えられながら登校した。脇腹に当たる、彼女の控え目ながらも柔らかい双丘を感じながら。

「ぎゃあああああああああ!!! ギブギブギブギブツツツ!!!」

案の定、龍之介は、琴音との幸せな登校現場をクラスメイトの男子——里山憲次や田辺吉尾ら数名——に目撃され、折檻を受けた。

「てめー、羨ま怪しからんぞ!! 龍之介エエエエエエエ!!!」

と言うのは、テクノカット少年・憲次。彼はうつ伏せ状態の龍之介にチョークスリーパーをキめていた。

「モテない僕たちに見せ付けてくれるじゃありませんか!」

と言うのは、金短髪少年・吉尾。彼はチョークスリーパーを受けている龍之介に、逆海老固めを掛けていた。普段の温厚な彼からは信じられないような様子だった。

その周りを我も我もと男子勢が、龍之介に鉄槌を下すべく待機している。琴音はそれを必死に止めようと「止めてあげてー!!」と声を掛けていたのだが、男子勢は「ノンノン。アイツは裁かれなければいけない存在なのさ」という具合で、効果は薄そうだった。

結局折檻は、ホームルーム開始のチャイムが鳴るまで続けられた。龍之介は、その間に腕挫十字固めやら膝十字固めやらヒールホールドやらの関節技を見舞われて、すっかりボロボロになっていた。

「解せぬ……」

龍之介は服に付いた埃や汚れを手で払いながら、ポツリとそう漏らした。

昼休み。持病と徹夜の影響もあってか授業中なんども睡魔が強襲して来た龍之介は、遂に四時間——十分休憩は挟むが——にも及ぶ地獄を乗り越え、机でへばっていた。

そんな龍之介に弁当箱を持ったクラスメイト——憲次が声を掛ける。

「おい、龍之介」

「何だ？ 憲次」

「屋上でメシ食おうぜ。他にも数人——特に女子とか誘ってるからさ」

「分かった、行くよ」

「もう屋上で皆待つてるから早く行こうぜ」

「ああ」

龍之介は憲次に促され、弁当箱片手に席を立った。

龍之介の通う、能力者教育学校である私立城門学園はその広大な敷地に、小学校、中学校、高校、大学の校舎が、いくつかの連絡橋と屋根で一繋がりになっている事が特徴で、それ故に生徒たちに開放されている屋上もそれなりの広さを誇る。

屋上は、学園側の粹な計らいで寝転がれば心地良さそうな芝生が引いてあり、憲次が声を掛けたクラスメイトたちは、暖かな日差しが照らすベストポイントに陣取って、龍之介と憲次を待っていた。

「おい、龍之介！！ 遅いぞ！！」

「すまねえ！！」

龍之介たちを待っていたのは、先ほど声を掛けた見栄崎拓巳と雨崎琴音、松崎刃先、それにドッジボール授業の時に拓巳班に居た姫力ツトの斉藤架姫、同じく拓巳班だった角刈り頭の後藤健吾と数野宇宙助、それにドッジボール時に結成された同盟隊のメンバーである田辺吉尾と刈り上げヘアの田代雅部の計八人だ。

全員、レジャーシートなどを引かず、直に芝生の上に陣取っている。

「結構居るな」

「頑張って集めたんだぜ！」

龍之介の呟きに憲次は、したり顔でサムズアップをして返してきた。「二人とも、そろそろ本格的にお腹が空いてきたよ……。ほらほら早く」

空腹値が限界に達している刃先に促された龍之介と憲次は、これ以上待たしてはいけない、と判断し、速やかに芝生へと腰を下ろす。

「よし！！ 全員集まったようだし、食べ始めるとするか！！」

「そうだな」

「それでは皆さん……」

「……いただきます」

吉尾が音頭をとり、食事がスタートした。

皆、各々の弁当箱を膝に乗せるやら手で支えるやらして開き、全員で見せ合いをする。色とりどりの弁当が視界を彩る。

全員、それぞれの弁当の中身を見て、おおお、と感嘆の声を漏らした。

「お、龍之介。そのミニハンバーグ、中々美味そうだな。一つくれ」「しょうがねえな。一つただけだぞ、一つただけだからな？」

「はいはいと」

「あー！ 三個も取りやがって！！」

「スマン、スマン。つい箸が滑った」

「箸が滑るって何ぞ！？」

「あ、琴音ちゃん。そのキンピラゴボウおいしそうだね。ちょっと頂戴」

「いいよ、でもその代わりにその卵焼きを」

「うん！！ はい、どうぞ。あ、架姫ちゃんも食べる？」

「うん……。じゃあ、代わりにこれを……」

「わ、美味しそうなコロツケー！！ 頂き」

「お、田辺。どうやってそんなフカフカなご飯を炊けるんだ！？」

「俺も気になる！！ 自炊生活の身として！！」

「ふふふ、これには田辺家秘伝の方法があつてですね……」

「うむむ、眠気が……ぐう」

弁当の披露や交換。それに伴う駄弁り。食事会の醍醐味だ。

まあ、中にはミニハンバーグを巡った、能力使用及び反則技使用の壮絶な争奪戦を繰り広げている者や弁当をまるで夢遊病患者のように――まあ実際、寝ているのだが――食べている者もいる。が、基本的には和気藹々とした雰囲気とその場の空気だった。

どうやら今回の食事は、憲次たちが学園安全保障部である龍之介たちを労うために催したモノらしい。

龍之介はそんなクラスメイトたちに感謝しながら、箸を進めた。

放課後。昼休み後の五時間目の数学の授業を終えた龍之介は、掃除の担当でも無かったため、同じく暇な琴音と拓巳を引き連れ、安保部室へと足を運んでいた。彼らはここ数日、

ドアを軽くノックし、龍之介たちは部室内へと入った。

「こんちわー」

「あら、松野浦くんに拓巳くんに琴音ちゃん。来たのね。いらつしやい。数野くんは？」

「数野の奴は掃除っス。後ちよつと来ると思いますが……」

「そう、ならいいわ。……今日は皆に聞いて欲しい事があるからね」「聞いて欲しい事ですか？」

「ええ。といつても肉体労働や任務つて訳じゃないわ。アンダーホールの事についてよ」

アンダーホール。複数人のSA能力者が長期的に過ごした土地に発生する、超常現象が多発する謎の天然ジオフロント——簡単に言うと思議な現象が頻繁に起こる自然に出来た地下空間の事である。世界各地に発生しており、一説には能力者が複数人集まったお陰で強化された、『想像を創造に変えるシステム』によって並行世界から物品を持ってきたと言われているが、その原理は不明。未だに研究が滞っている空間だ。

「そのアンダーホールに自然発生する物質や機械を私たちはアンダーホール内技術品と呼んでいるのは知っているわね？」

「ええ、まあ。リキッドシエルとかアレクシス粒子とかの事ですよね？」

「そうよ。そしてそれらを装備したテロリストがこの町を襲撃した……。これは私たちの行動理念でもある、学園の安全保障に関わる大問題なの」

「はい」

「私たちの持っている通常装備とテロリスト側のアンダーホール内技術装備。この二つの装備品の性能差はとても大きいわ。このままでは技術で負けている私たちと百戦錬磨のテロリストの戦力差は大きく開いたままになってしまう。よって、これから私たちは——」

「——アンダーホールに装備品を入手しに行きます」

【第四十四章 アンダーホール】（後書き）

お待たせいたしました！！ 感想待ってます！！

P・S・私的に数野宙助の声は下野紘さんで再生しています。

【第四十五章 ジオフロント探検】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「ようこそ、技術洞窟へ……」 by 将隆

【第四十五章 ジオフロント探検】

サヤの宣言から数分が経ち、宙助が部室にやって来た。

「全員、揃ったようね」

「このメンバーで行くんですか？ 隊長や他の先輩方は？」

「隊長たちには他にやって貰う事があるから、私たちと……現地での案内人一人だけよ」

「……マジすか？ 何か危険な香りがプンプンするんですが……」

「ただの採掘場だから危険は無いと思うわ。……多分。……きつと」

「自信、無いんですね……？ もしかして、STEALTH・DECOYの襲撃とか、ですか？」

「いえ、それは無いと思うわ。彼らも昨日の事件でかなり疲弊していると思うし」

サヤは龍之介の問いにキツパリとそう断言して返した。

「僕たちみたいな探索ならともかく、戦闘は出来まいと」

「そうね、だから奴らの襲撃は無いものと考えて良いの。……ただ……ただ……」

「アンダーホール自体、何が起こるかわからない場所なの。今はある程度、解析も進んで『危険性の薄い場所と濃い場所』の区分も分かってきたから、危なくないと言えば危なくないんだけど……」

サヤは不安そうに語尾をゴニョゴニョと濁す。大切な後輩たちを危険な場所に行かせるのはやっぱりどうなのだろうと迷っているのだろう。

「なぐんだ、そんな事ですか」

「え……？」

「その程度の『危険性』なら、今までも乗り越えてきたんですよ、僕たちは。だから大丈夫です。——行きますよ、アンダーホール。なあ、皆」

「ああ、勿論さ」

「行つてやる!!」

「皆が居れば大丈夫ですよ!!」

龍之介の言葉に皆が答える。

「松野浦くん……拓巳くん……数野くん……琴音ちゃん……。――」

そうね、私は貴方たちを知らず知らずの内に『守るべき者』と認識してしまっていたのね……。実際は『共に闘う者』だったのに……」

「もっと扱き使ってくださいよ、ロバーツ先輩」

拓巳はサヤの右手を両手で握り、そう言った。

それが決定打になったのか、サヤは小さく頷くと、

「じゃあ、扱き使つてやるとしますか!!」

こうして龍之介たちのアンダーホール潜入が開始された。

龍之介たちの通う、私立城門学園の地下に出現したアンダーホールは『東久留米技術ジオフロント』と呼称されていた。

その名の通り、学園の中心に存在する、中央グラウンドを取り囲むように建てられた、第一から第四校舎――その中でも北側に位置し、安保部室がある第三校舎の一階。

そこにはジオフロントに通じる、ゴツイゲートが存在した。

ゲートはコンクリートでしっかりと作られていて、入り口は特殊合金製のシャッターで固く閉ざされ、その脇には監視室が存在する。アンダーホールに入りたい一般生徒は、職員室で許可を貰い、その時に配布されるIDカードを監視室に提示し、ゲートを開けて貰うのだ。

龍之介たちも通例に従い、IDカードを持って、ゲートの前まで来ていた。後は案内人が来るのを待つばかりだ。

「ここがアンダーホールの入り口……」

「ゴツイな」

「なんてったって、ここでしか手に入らない技術の宝庫なんだから

ね。泥棒除けにここまで神経質になるのは分かるわ」

「生徒は内部の技術品を持っていても良いんですか？」

「ええ、まあ。自分の採掘したものならね。学園側からのサービスらしいわ」

「そうですか……。——つと、案内人が来たようですよ」

龍之介が指差す方向に安保部員全員の顔が向く。

その視線の先に居たのは、

「やあ」

先日、STEALTH・DECAYによる占領事件に遭った科学部の部長——橋本将隆だった。浅黒い肌と純白の白衣が見事なコントラストを醸している。

「貴方は、確か科学部部長の橋本さんでしたっけ」

「そうだ、今回はこの東久留米技術ジオフロントのガイドを任された。よろしく頼む」

「……よろしく願います」「……」

「で、今回の探索の手順だが……。まあ、今現在、発掘が進められているエリア33なんかがオススメだな。あそこは今、良い技術品が手に入り易いんだ」

「じゃあそのガイドをお願いします」

「分かった。では行くとしよう」

龍之介たちは、将隆、サヤ、琴音、龍之介、拓巳、宙助の順番で監視室の職員にIDカードを見せ、開放されたゲートの中に入っていた。

ゲートからジオフロントに通じる道は、ゲートと同様にコンクリートでしっかりと舗装されていて、各所に設置された蛍光灯の明かりもあり、歩き易いモノとなっていた。

不健康そうな青白い照明に照らされながら、コツリ、コツリと固い足音を立てながら、龍之介たちは前に進む。

数分歩いた所で、コンクリートの通路が終わり、大きな業務用エレベーターへと続いていた。

「これで下に下りるんだ。少し揺れるぞ」

将隆はエレベーターの操作盤に触れながらそう言った。

彼は全員がエレベーターに乗り込んだことを確認すると、手馴れた手付きで操作盤のボタンを二、三個押した。

ガッコン！！　ゴウンゴウンゴウンゴウン……。

エレベーターが一瞬だけ大きく揺れ、ゆっくりと降下を開始した。「しかし、大きなエレベーターですね。これ」

「なにせ、人間の他にも発掘した品や掘削機材なんかも運ぶからな。頑丈かつ巨大に出来てるのさ」

「……地震とかでこのエレベーターが使えなくなったらどうするんですか？」

「大した地震じゃなければ、一応はこのエレベーターも動くんだが……動かなくなった場合を想定して、このエレベーターにも発掘場にも水と食料が備蓄してある。それに内部の通信設備は最高級だ。救出隊もすぐに来る。心配すんな」

「そうですか……。対策は万全って事ですか」

「そうだ。いざっていう時にシエルターとして利用できるようなになっている位だからな。っと着いたぞ」

将隆の言葉通り、エレベーターはまた一瞬だけガクンツと揺れ、その鉄の扉を開いた。

扉の先には広大な空間が広がっていた。

「ここが……。アンダーホール……」

ゴツゴツとした岩のような外壁や地面。

所々で採掘を行っている鉱員たちや掘削機器。

アンダーホールは正に技術鉱山とでもいうべき出で立ちであった。龍之介たちは将隆に従い、例のエリア33に向かって、奥へ奥へと進んでいく。

「ここで掘り出された様々な機器は、どんな機能を持っているか調べられた後、学生の私物になったり、企業に提供されたり、校舎の設備になったり……。我が科学部の研究品の材料にも使われたりする」

「……そう言えば科学部って、どんなものを作ってるんですか？」

「ガラクタ扱いされるものもあれば……アンタらに納品されるようなキチンとした装備品も作ってる。——まあ今、夢中なのは」

将隆は息を少し吸い、間を空けて、

「——WSの開発だけだね」

「WS、ですか？」

「そう！ 良くぞ聞いてくれた！！ 我々科学部は、その優秀な技術力とアンダーホールの技術を以って第・四・世代のワアアキングウ・サアヴァントウを『開発』しようとしているのだよ！！」
琴音の問いに将隆は興奮気味に答え始めた。どうやら自身の自慢の発明品に他人——しかも女の子——が興味を示した事で、研究者魂に火が点いたらしい。

「——名は《裂罅》と言つてね。高速機動を主眼に置いた軽量機だ。アレクシス粒子炉搭載による、飛行機能と高出力兵装である荷電粒子砲やエネルギーシールド、高速振動刀などを実装し、新型人工筋肉と最新鋭流体関節機構の採用により次世代高次元機動を可能にした機体なんだ！！ 更に更に、進化式高性能制御AIや広範囲精密走査レーダーも積んでいるため、搭乗者の負担もなるべく減らすようにしている。——機体は完成しているから、今は細かい調整をしているんだ。もうすぐ完成する筈さ！！」

「戦闘用の機体ですか？ なんだか凄そうですね……」

「ああ、ただそれだけではない。ただの軍用機ではないのだ、我が《裂罅》は。《裂罅》は、戦闘の他にも様々な任務につける、日本初の第四世代型初期機としての完成を目指している！！ あらゆる事態に臨機応変に対応できる汎用機なのさ。……《裂罅》を完成させる為にも適当な事は出来ないからな！！ 私たちはその技術力をフルに使っているのだよ」

「凄まじい情熱ですね」

「ああ、我々はその情熱を以ってここまでやってきたのだ。が、しかし……」

ふう……、と将隆は憂鬱そうに溜息を吐く。

「どうしたんですか？」

「……テストパイロットが見つからないんだよ」

「テストパイロットですか？」

「そうだ。いくら高性能な機体を作ったとしても、その性能を十分に出し切り、データを集めてくれる人間がいなければ、機体を十分に調整出来ない。調整の為にテストパイロットがどうしても見つからないのだ」

「その様子だと学園の生徒パイロットは《裂罅》を上手く扱えなかったんですね？」

「ああ、完成した機体システムを使ってシミュレータで試したところ、全員、機体の性能を三十パーセント位しか出せていなかった。

このままでは我が《裂罅》が第四世代とは名ばかりの低性能機と評価されてしまう……。それだけは避けなければならない」

「せっかく作った機体ですもんね」

「そうだ、そうなんだよ……。——で、頼み事があるんだが……」

「テストパイロットですか？」

「そうそう、そうなんだよ！！で、頼めるかい？　この中で一人もしくは今は不在でも推薦出来る人とか！！」

「龍之介、出来るか？」

「俺は無理だよ。ランスロットさんから《ランスラッシュ》を承ってるから——テストパイロットの任務と共に」

「そうか……。よし！！俺がやろう！！」

拓巳がとんでもない事を言い放った。全員の視線が拓巳に集中する。

「拓巳が！？」

「拓巳くん、免許持ってるの？」

「龍之介と同時期、秘密裏に免許を取っていたのさ」

「何でそんな事を……」

「回りの連中に龍之介の真似だと思われるのは癪だったからさ、キリッ」

「じゃあ、引き受けてくれるのかい!？」

「ええ。もちのろん、ですよ」

「古いよ、見栄崎くん……」

「そうか、そうかそうか!! やってくれるか!! ありがとう!」

将隆が拓巳の手を両手で握り締め、ぶんぶん振り回した。

「で、腕の方はどうなんだい? WSの操縦技術の質は」

「自分で言うのもなんですが、結構いい線いってると思いますよ?」

「ま、全てはシミュレータをやってみれば分かる事か」

「そうですね。どうです? シミュレータはこの採掘の後、とか」

「良いね良いね!! そうしよう!!」

話も纏まってきた所で龍之介は仕切り直しとばかりに、

「では、先に進むとしますか。エリア33には後どれ位で着きますか?」

と、言った。

その問いに将隆は、真っ直ぐ百メートルほど先を指差して、答えた。

「あそこだよ、あそこ。あれがエリア33」

エリア33。それは岩で出来た大きな丘であった。

エリア33。その奥地には——龍之介たちは気付いていないが——二人の先客が居た。彼らは暗がりにもその身を隠し、その高き丘から二人は龍之介たちを見据えていた。

一人はファビオ・バルツァリ。前回、龍之介たちの前に現れた時のように白い長袖ワイシャツに灰色のスラックスを身に着けて、アホ毛を揺らしている。

もう一人は——、

「ふむ、あやつらか……」

深緑の背広に身を包み、古風な言葉遣いをする、その青年は思慮深

げに顎に手をやり、龍之介たち一行をまじまじと観察する。中性的な顔立ちと金色の目、そして濡れ烏色の髪が特徴的な彼は、その容姿から一見すると女性のようであった。

「はい、彼らが学園安保部の『新入生』……。まだ様子見の段階ですが、安保部にとってかなりの戦力になるかと」

「ふうむ。中々、いい眼をしておるではないか。今後に期待するとするか」

「は。ではまだ観察を続行、という事で宜しいでしょうか？」

「うむ、そうだな。そうしよう。……『王』は寛大でなくてはならぬからな」

「で、どうしましょうか？ 彼らはここ——エリア33に向かってきておりますが」

「ふん——貴様は、確かあやつらに『良い意味』での面識があったな？」

「はい」

「では、あやつらの足止めをしる。簡単なことだ。少しばかり世間話でもしてくれば良い」

「承知しました」

「頼むぞ」

言うと、彼は手に持った、何やら生物的な生々しくも禍々しいフォルムの刀をファビオに見せて、

「ここで出会いし、我が政剣——アセントハートを外界に持ち出すためにも、な」

【第四十五章 ジオフロント探検】（後書き）

お待たせいたしました！！ 感想待ってます！

【第四十六章 ジオフロント最深部】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「やはり自身の装備品は自分で選ばねばな」b y マテ
イアス〉

【第四十六章 ジオフロント最深部】

最先端発掘地点・エリア33の先客——節制王、マティアス・ヒツルスパルガー。オルズと同盟を結んだ組織——マティアスが言うには『自由国家』らしい——である、国境無き帝国の長である彼の目的は、このジオフロントでの専用装備の発掘であつた。

国境無き帝国の財政難のため、彼は未だにアンダーホール内技術で作られた装備を入手する事が出来ていなかった。

彼は悩んでいた。仮にも国境無き帝国の長である自分が、装備においてイエフやアルヴィンなどの民衆に負けていては、王の沽券に関わるというものである。

悩んだ末に彼は『それだったら自分で入手すればいい』という結論に至り、持ち前の『能力』を全力で使用し、厳重な警備網を掻い潜り、この東久留米技術ジオフロントに『無断で』潜入したという訳だ。

そこで出会つたのは、一本の刀だった。

刀といっても、ただの刀ではない。日本刀のように美しく反つた刀身に、血管のような物が幾重も巻き付いているかのように刻まれていて、柄には包帯のように白い布が巻かれている、鍔の無い刀——正しく異形。

それが彼の新しき装備である、聖剣ならぬ政剣——アセントハートであつた。

彼・マティアスは、この刀剣の宿す威力も能力も知らない。ただ——雰囲気を感じ取っていた。圧倒的な『覇』、『破』、『刃』の雰囲気を。

その雰囲気を、一目見たときに彼は判断を下した。これは王である自分が持つに相応しい、刀であると。

だから、

「（頼むぞ——ファビオ）」

彼はファビオを陽動に、何としてもこの政剣を持ち出すことを決めた。

彼の『能力』が隠密機動にも秀でた力であるが、この政剣からの圧倒的な存在感及びオーラをばら撒きながら、複数人の『監視の目』を相手取るのは些か以上に面倒だ。

このジオフロントからの脱出に失敗は許されない。見つければ御用、政なる剣は没収されてしまう。

それ故にマティアスはファビオの陽動の際に龍之介たちを避け、無事に脱出する事を決定したのであった。

「久しぶりだな諸君。ここで会ったのも、決して偶然ではあるまい？」

やせいの、ふぁびおが、あらわれた。

そんなシステムメッセージの似合いそうな位、唐突に、そして華麗にファビオ「バルツアツリは龍之介たち一行の目の前に現れた。相変わらず中二病全開である。

「お、ファビオさん。チーッス」

「おお、見栄崎氏ではないか。遊園地では生と死の狭間に追いやられかけていたが……大丈夫だったか？」

「まあ、何とかなりましたよ。っていうより、ファビオさんってこの学校の生徒さんだったんですか？」

「ああ、そうさ。この学校の中学二年生だ」

「へえ、そうなんですか。って言うことは、ロバーツ先輩と同級生って事ですか？」

「そういう事になるな」

「二人って面識ありましたっけ？」

宙助の問いに、サヤとファビオは首を横に振って答えた。

「……東久留米で唯一の能力者学校ですからね、ここ。クラス数が

多いから一人が顔を合わせる事はあまり無いんですかねえ？」

宙助もサヤのその答えに別段驚きもせず、ただ納得していた。私立城門学園の、その敷地面積の広さは、宙助たちにとってもう慣れ親しんだものだからだ。

「で、ファビオさんは何故ここに？ 発掘ですか？」

「いや……この土地は『因子』の濃度が高くて……。よく浴びに来るのだ。この地から出るオーラを」

「簡単に意識するなっ！！」

「（よく、ああやって中二病な台詞を上手く吹き替えできるな、拓巳は）」

「今日は『因子』が強い。良い発掘品が出るかもな。——ま、僕はもう帰る。存分に期待しながら発掘したまえ。今日は他に発掘者も居ないことだしな」

「ああ。……それではさらばだ!!
フーハッハッハッハッハッ
ハ!!!」

拓巳が何やら怪しい笑みを浮かべ、ファビオもそれに――高笑いで返す。

こうしてファビオ・バルツァツリは、このジオフロントの出入り口へと、ゆっくりと歩いてその場を立ち去った。

一体なんだったんだ？　それが、この場に居る、ほとんどの人間が思った彼らに対する感想であつた。

ファビオの行動の真意は、マティアス以外の誰にも知られることは無かった。

気を取り直して、発掘作業である。発掘——と言っても龍之介たち、もしくはこの場に居る全ての鉱員にそういった技術は無い。だからセンサーで反応のあったところを、そこら辺に転がっている自動掘削機にデータ入力で指示して掘り当てさせる、といった手法を取っている。鉱員とは名ばかりなのだ。

現在、龍之介たちはエリア33をセンサー片手に歩き回っている。このセンサーは、『照射式地中物質検出機』と言って、その名の通り、地面に特殊な光を照射し、その光の反射の反応を利用して地中に埋まっている『異物』を検出する代物だ。

——龍之介・拓巳SIDE?——

龍之介と拓巳は、二人並んで歩きながら、地面に光を照射している。モバイルタイプのセンサーの画面には地中の様子がリアルタイムで克明に表示されていた。

センサーは拡大・縮小が自由に出来、拡大すれば地中の深いところ、縮小すれば浅いところを見れるようになっていた。

二人は、その機能を用いて、地中を隈なく検索している。今の所、大した成果は無いが、龍之介たちはこのズームとフィールドアウトを繰り返す作業に楽しみを感じているので退屈では無い。

「たつくみ。楽しいな、コレ!!」

「ああ、地下の様子を自由に見れるって結構、面白——あ、見ろよ何か変な虫が居るぜ。こんな所にも生き物って居るんだ」

「え、マジかよ。どれどれ……。うわ、ホントだ。何だコレ? キモッ。ウネウネ動いてるよ……」

龍之介と拓巳はその虫がどこかへ行つたのを確認すると、また探索を始めた。

しかし、その後、歩けども歩けども発掘品は見当たらない。どうやらこの辺りの地下はあらかた掘り当てられているらしい。

アンダーホールには、『一度、発掘品を見つけると、その発掘場

所にはある程度時間を置かねば、次の発掘品が出現しない』というルールがある。

エリア33も最深部でなければ発掘は難しいのだろうか。と、結論付けた二人はもつと奥の方へと歩みを進める事にした。

エリア33の奥は複数の枝分かれした道で構成されている。どの道も一本道で、他のルートと交わることは決して無い。

どうやら龍之介たち以外のメンバーも、最深部を目指すべく枝分かれ道に踏み込んだらしく、それぞれの道の前に重石で地面に貼り付けした書置きが設置してあった。

龍之介たちは、事前に支給された懐中電灯を手に持ち、書置きの置いていない道を選んで、奥へと進んでいった。
もちろん自身たちの書置きを残して。

——サヤSIDE?——

サヤ「ロバーツ。彼女はどのメンバーよりも早く、中央部に見切りをつけ、最深部に足を踏み入れた人間だった。彼女も伊達に安保部副隊長をやっている訳ではない。その判断能力は新人生である龍之介たちのそれを大きく上回っているのだ。

そんな訳で意気揚々と最深部へと繰り出したサヤ。だが、彼女がしばらく進むと、先客を発見する事となった。

「あー!」

「ム、貴様ハ」

「安保部の……」

洞窟の奥地に居たのは、STEALTH・DECOYリーダー（であるチンピラ）である装甲服男・マークス「バーンズと、その腹心の部下・篠宮和人であった。

敵対する組織の幹部二人に、サヤは思わず身構え、戦闘態勢を整える。両者の間を緊迫した空気が支配し始めた。

しかし意外にも、その空気を変えたのは、

「案ズルナ。コチラニ、戦闘ノ意思ハ無イ」

敵方の大将・マークスであった。

サヤも取り合えず、ファイティング・ポーズを解く。――距離は取ったままだが。

その様子を見て、マークスは満足気に――笑ったかどうかは定かではないが、そんな感じの雰囲気を出した。

「賢い選択だな。貴様は、昨日の戦闘の影響で、全力では闘えない状態だからな」

「……………ここに何しに來たの…………？ マークス〃バーンズ、篠宮和人…………」

「貴様等ト同ジダヨ。さや〃ろば〃つ。昨日ノ戦闘デ私ノ部下ガあんだーほーる内技術デ作ラレタ装備ヲ持ツタ、てろりすと二怪我ヲ負ワサレタ様ダカラネ。装備品ノ質ノ差デ負ケルナンテノハ、馬鹿馬鹿シイ事ナンダヨ」

「そ、そう、でも――だったら…………！！ どうやってここに……………！！！？ そんな、スクールギャングの格好で……………！！」

サヤは答えを求める。本当は聞きたくないが、聞きたい。聞いてしまったら、何か取り返しのない事が起こる、それを判りつつも、聞きたい。――そんな矛盾を孕んだ気持ちで。

「愚問だな、既に半分くらいは判り始めているくせに」

そんなサヤの心情を察したのか、和人は彼女を嗤った。

「ナアニ、簡単ナ事サ。我々ハ、大枚ハタイテ雇ツタ傭兵学生ヤ侍商売ノ他ニモ、沢山ノ協力者ガ居ルノダヨ。例エバ――」
教員』、トカ」

「……」

STEALTH・DECAY側には本来、彼らを処罰し、更生させる側の教師が、味方についている。サヤはその事実背筋を凍らすものを感じた。

その事実、STEALTH・DECAY隊員を――『判断力の足りない若しくは私怨に流されやすい未成年の間違っているかもし

れない捜査結果』による不当な冤罪を避けるため安保部には現行犯以外での逮捕は認められていない為——現行犯で逮捕して、職員室に連行したとしても、無駄だという事を示していた。何故なら、捕まえた隊員は教員の手によって再び野に放たれるからだ。

「そんな……ッ！！ 馬鹿な……！！」

「事実ダ、さやゝろばーッ。我々ノばっく二八——名前八伏セサセテ貰ウガ——複数ノ教員ノ存在ガアル。事実、過去二貴様等二逮捕サレタ我等ガ同胞ハ、十分二処罰サレタト言ウ『名目』デ釈放サレテイルノダヨ」

「——嘘……ッ！！ 嘘よ！！ だって！！ それじゃあ！！ 私たちは……ッ！！」

「ソウダ、貴様等モ我々モ、所詮ハ盤上デ踊ル駒ニ過ギナイ。捕マエテハ釈放、捕マエテハ釈放。ソレヲ繰リ返シ、『弱者ヲ救ウ為ノすくーるぎゃんぐ』と『学園ノ秩序ト平和ヲ守ル正義ノ味方』二分カレテ闘イ続ケル……。マルデ出来ノ悪イ三流映画ダナ……。」
マーカスは機械音声からでも分かるくらい、自身の言葉に自嘲を込めて言った。

彼らは以前から自分たちが学園にとつての必要悪、もしくは作られたダークヒーローのような者である事を知っていた。自分たちが能力の伸びに悩む生徒の憂さ晴らしとして存在している事も知っていた。自身の強力な能力に驕って学園の風紀を乱すエリートたちを牽制する存在だという事も知っていた。

それでも——いや、だからこそ彼らは学園に抗い続けた。学園の掌で踊らされていることを承知で、学園とエリートへの反抗活動を行った。

弱者を闇の中から救う、ヒーローになりたくて。

弱者の憂さを晴らしたくて。

エリート共を震え上がらせたくて。

彼らは学園に反抗する。例え自分たちが既に引かれたレールの上を走っていたとしても。彼らはそのレールですら利用してみせると

決めた。

利用されても、利用され尽くされても——最後には利用してやる。そんな決意を元に彼らは反抗し続ける。

今までに虐げられてきた弱者の犠牲が無駄にならないためにも。

しかし——サヤ「ロバーツ、いや学園安全保障部の連中にそんな決意はあるだろうか。

それを確かめるべく、マーカスは尋ねる。

「貴様ハ——ソノ事実ヲ知ッテ……ソレカラ如何スル？」

今マデ通り、我等ト闘ウカ？ 無気力ニ」

「——私は……」

サヤはマーカスの問いに答えるべく言葉を紡ぎ始めた。

「ン？」

「それでも私は、この学園の平和を守りたいんだと思う」

「ホウ……」

「確かに……諦めるのは簡単、投げ出すのも容易。けどね——どんなに非生産的でも、どんなに無意味でも——私たちは貴方たち

と闘って、向き合わなければならないと思う。じゃなきゃ……貴方

たちは、暴力を暴力で正すという矛盾を抱えたまま、歪んでしまう。

私は、それが嫌なの。だから、私は諦めない」

「ソウカ……才前ハ、ソウナノカ……。フッフ、面白い。ソレデコ

ソ「張り合イ」ガ在ルトイウモノダ。——ナラバ貴様ハ、ソノ道ヲ貫キ通セヨ——」

マーカスはそう言い残すと、和人を連れ、サヤの前から立ち去った。

【第四十六章 ジオフロント最深部】（後書き）

文化祭終了ッッッ!!!

やっと執筆作業が進み、投稿へと至りました。皆さんお待たせしました!!!

感想待ってます。

P・S・私的にサヤロバーツの声は田中理恵さんで再生しています。

【第四十七章 その男、無能力者につき】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「少しは待たされる身にもなって下さい……」 by 尽
義〉

【第四十七章 その男、無能力者につき】

龍之介たちが地下のアンダーホールでせっせと発掘作業を進める中、地上の城門学園駐車場では、一人の男が車——黒塗りのトヨタ・コンフォート——に寄りかかりながら、煙草を吸って待ち人の帰りまでの時間を潰していた。

その男の名は鬼伏尽義。パツと見、二十代前半の青年に見える彼は、百八十センチ位の長身で、大雑把かつ適当に切ったような——それでもまあ、整った髪形をし、青い背広を着崩して着用している男で、精悍な顔つきと引き締まった体付き、左目を閉ざすように付けられた縦一線 of 古傷などが上手くマッチングして、ヤクザな雰囲気漂わせていた。

尽義は、吸っていた煙草を最後の最後まで味わってから、携帯灰皿へと仕舞い、胸ポケットに入れた年代物な懐中時計で時刻を確認する。

「遅いな……」

現在の時刻は、午後五時三十分。待ち合わせの時刻は、午後五時ちょうど of 予定だった。もう三十分も音沙汰無しだ。

自分と違い、強力な能力者である『待ち人』がヘマをやらかす事はないだろうと思うが、やはり何かあったのかと尽義は考えてしまふ。

ふ、と横を見る。

そこには自分の得物である、キルフレッドが彼と同じく車に立て掛けてあった。

今は外装甲によって何の変哲も無いロッカーに偽装されているが——このキルフレッド、アンダーホール内技術と現代の最先端軍事技術を満載した悪夢のような個人兵装だ。

まず外装甲を展開させ、本来の姿にした時の外見について説明しよう。長さは二メートルで、展開後に折り畳まれた外装甲が所々に

見られるが、その基盤は長方形のライトグレーに塗装された鉄の塊だ。そして、その鉄長方形を前後——前後の比率は2：1といったところだろうか——に区切るかのように、楕円形の穴が開いており、そこには戦闘機の操縦桿を彷彿とさせる形状の銃把が詰め込まれている。

そして内蔵火器だが、まず長い方——つまり前方には、三十三ミリ機関砲と電磁加速砲を、短い方——つまり後方には、高出力ライトブリットと電磁加速式パイルドライバーをそれぞれ搭載している。これらは銃把に取り付けられたスイッチを使用する事で操作が出来るようになってる。

また、小型アレクシス粒子炉と物質変換式弾薬製造装置——簡単に説明すると、使用者のスタミナなどの体力的エネルギーを吸収し、弾薬に変換する装置だ——を組み込んであるため、電力は実質無限、弾薬も一定の時間と体力を消費すればキルフレッド内で製造され、補充されるため、リロードも不要という素敵仕様の武器なのである。しかしそのような高性能機器を大量に積み込んだために、重量は数百キロ超え。並みの人間では十分に扱えないようになってしまった代物だ。

ちなみに彼・鬼伏尽義は、この化物兵器を気合と根性を総動員させ、前述の小型アレクシス粒子炉のちよつとした浮遊機構を腕力補助に用いて、片手で振り回しながら群がる敵を薙ぎ払って闘うスタイルを持つ。

閑話休題。

という訳で、尽義は外装甲に取り付けたベルトを持って、至って普通の金属製ロッカーに偽装したキルフレッドを軽々と背に担ぎ、戦闘準備を整えた。キルフレッドの他の装備品は、長年、愛用している拳銃のコルト・ゴールドカップナショナルマツチ（コルト・G C N M）というコルトM1911の派生型だけだが——彼には大抵の戦闘をこなせるキルフレッドがあるため、装備に不足は無い。

「さて、と。行きますか」

後は城門学園に突入するだけだ。

彼は首をゴキリッ！と鳴らし、黒い革靴で大地を踏みしめ、これから戦場になるであろう場所へと踏み出し――

「待たせたな、尽義」

そこで『待ち人』である――制約王・マティアス「ヒツツルスパルガーがようやくやって来た。その手にはどこかで調達した布を巻いた、政剣が存在している。

「ん？ 何をしているのだ、尽義。そんな珍妙な体勢のままで」

マティアスの言う通り、尽義は片足を前に踏み出した状態のまま固まっていた。そんな尽義を尻目に、マティアスは運転席の後ろの席に乗り込んだ。

「さっさと帰るぞ。目的のブツが手に入った今、ここに居る価値は無い」

鬼伏尽義は、名前の通り、義を尽くす男だ。一瞬――自らの王である、マティアスの態度に殺意が沸いたが理性で押し留め、彼は仕事道具のキルフレッドを助手席のスペースに押し込み、運転席に座る。

待ち人が来た以上、後は撤退するだけだ。この駐車場で無駄な争いを起こし、警備員でも寄越されれば、今までの仕事が全て水の泡になってしまう。

そう思った尽義はキーでエンジンを始動させ、黒い車はゆっくりと駐車場から走り出した。

「……で、僕を三十分も待たせて手に入った、それは何ですか？」

「フ――政剣だよ。私の武器に相応しい。それにだな、待たせるも何も私の装備品が無いからここにくる破目になったのだ。もし貴様の、そのキルフレッドが私のモノだったら……！！」

マティアスは恨めしそうに、尽義を睨む。

「止して下さいよ。僕はしがたい無能力者ですけど貴方はスキルランクA以上の能力者サマで、しかもアカレイド序列においてNO.5を冠する実力を持っているんでしょう？ それ位は我慢して下さい

いよ」

尽義が言う、スキルランクとアカレイド序列。これらは二つともスピリットアカレイドになった者、全員に示される能力者としての有用性だ。

先ずスキルランクについて説明しよう。スキルランク——通称・ランクは、以前、サヤが龍之介たちに言っていたように、能力の五大要素である『内蔵量』、『出力』、『効力範囲』、『持続力』、『精度』と能力の数を参考につけられる能力性能の指標である。ランクは、最底辺のEマイナーから最高峰のAプラスまでで表されるというモノだ。

次にアカレイド序列だが、これは前述のスキルランクを更に細分化したもので、スキルランクの評価を元に個人個人に付けられた、能力者としての序列——つまりは順位だ。当然、順位は数が小さいほど優秀であると言える。

つまりマティアスは、並み居る能力者の中でも優秀な、ランクA以上の能力を保有し、その序列は五番目——つまり世界で五番目に素晴らしいスピリットアカレイドなのである。

「ふ、それとこれとは話が別だ」

どうやらマティアスは、尽義に褒められ、上機嫌になったようで、目を閉じて口元を緩めている。

「そうスカ。で、アンタの付き人として派遣されたファビオくんは、どこに？」

「ファビオ〃バルツァリの事か。あやつなら正規のルートでとつくに帰ったよ。あやつはこの生徒だからな。問題はあるまい」

「なら良いんですけど……」

「何だ、貴様。顔に似合わず、他人の心配か？」

「違いま——いや、そうですけど……。僕は最近の暗部は餓鬼が多いなあ、と思ひまして……。それで、その——」

「ふん、まあ————私もそう思う事は多々ある。貴様の気持ちは分からんでもない。が、男が女々しくするのはやめろ。気味

が悪い」

「分かりました……。っと、そう言えば、僕が前に申請しておいた機体。出来てます？」

「《グランディアベリア》の事か？ ああ、申請は受理されたよ」

「本当ですか！？」

「王が民に嘘を吐いてどうする、本当だよ。——全く、自分の乗る機体をオーダーメイドするとは……。些か以上に拘るな」

「『専用機』って言葉に憧れるんですよ、僕は」

「ふむ……。まあいい。これからオルズの連中との会合だ。連中、遅れたら嫌いぞ。他のメンバーにも連絡を回しておけ」

「了解」

こうして尽義とマティアスを乗せた車は、誰にも気付かれずに振り出した雨の中、城門学園から走り去る。——発掘品の政剣は見事に盗まれてしまった。

【第四十七章 その男、無能力者につき】（後書き）

今回は番外編のような内容なので字数は少なめです。
感想待ってます！！

【第四十八章 続行、発掘作業】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言・「ん？ 誰か来たか？」 by 余泊

【第四十八章 続行、発掘作業】

—— 琴音 SIDE ? ——

雨崎琴音は、洞窟の中部辺りで、安保部メンバーの誰よりも早く、地中に眠る発掘品をレーダーに捕らえる事に成功していた。

レーダーは、画面に人間の歯のような物体を映し出している。琴音は、『コレ』が何かの役に立つような装備品になるとは思っていなかったが、せっかくなので掘り出してみる事にした。それに——
「（松野浦くんに『あの時』の事、謝らなくちゃいけないしね。もし良い物だったらその時お礼にとして渡せるかも）」

そんな思惑を胸に、琴音はモバイル型レーダーを操作し、自動掘削機へとデータを送信する。すると近くにあった掘削機が動き始め、琴音が指定した場所へと進み、ドリルやら何やらで地面を掘り始めた。その様子は彼女のレーダーからでも確認できる。

がりごりがりごりがりぎりぎり——。

掘削機から土を削る音が鳴る。安物の自動かき氷作成機が出すような音だ。が、彼女は不思議とそれを不快とは感じなかった。琴音にはそれが発掘の進んでいく様を示すモノに思えたからだ。

レーダー上に映る進行状況を見れば見るほど、彼女の期待は膨らんでいく。このレーダーに映る物体は一体何なんだろう？ と、そんな気持ちの底から湧き出てくる。

数十秒後。掘削機は動きを止め、静かにその場から退いた。掘削機の退いた場所には、少し大きめの穴が開いている。

穴の奥——その中心に、レーダーで確認した小さな物体がめり込んでいた。琴音はその穴の中に入り、軍手を填めた手でスコップを持ち、小さな物体のめり込んでいる周辺をサクサクと掘る。周囲の土ごと発掘品を取り出した琴音は、満足気に収集箱にソレを入れる

と、穴から這い上がり、自動掘削機に穴を元通りにするよう指令を送る。

自動掘削機が穴を埋める間、琴音は発掘品のクリーニングを行うことにした。

「えっと……確か、道具箱にブラシがあった筈……。——っと、あった」

琴音は、支給されたブラシを使って、丁寧に不要な土を落としていく。発掘品は、綺麗にしていく内に段々と、全体像がはっきりしてきた。

どうやら、発掘品は琴音が立てた最初の見立て通り、人の歯——しかも犬歯のような形状をしているようだ。

「何だろう？ コレ……」

発掘品を色んな角度から見たり、洞窟内の電灯に翳してみたりした彼女は質感も確かめるため、軍手を外し、直に発掘品を触ってみる。「うーん、古いような感じはするけど……。……って、え!？」

琴音は驚きの声を上げた。触っていた発掘品が——突如、自身の手にめり込み始めたからだ。

「ちょ、ちよっと、これは……。!!??」

慌てて発掘品を取り出そうとするも、時既に遅し。

発掘品は琴音の掌の中に吸い込まれてしまった。しかもソレは、そのまま彼女の腕に侵入し、腕から肘へ、肘から肩へと、胴体へと移動していく。不思議と痛みや出血は無い。

腕に異物感を感じながら、琴音は腕を押さえて、発掘品を押し出そうとする。が、腕の内部を走るソレにとっては、あまり効果は無いようだ。

「どうしよう……。!! コレ、私の中に……。ッ!」

異物は遂に彼女の胴体へと入ってしまう。見えはしないが、琴音はソレが自身の心臓へと向かっている事を感じていた。

「このままじゃ……。!! 私的心臓が……。!! ——あ」

琴音の心臓に『歯』が侵入した。歯は徐々に心臓に食い込み——

——どうやら一体化していくようだ。

「あ、ああ——あ、あ……（私の中が……変え——られ、て——

助け——松野浦——くん——）」

自身の体が何かに変えられていく感触を味わいながら、彼女は深い深い暗闇へと意識を手放した。

——サヤSIDE？——

サヤ「ロバーツは、マーカスたちが去ったのを確認し、再びレーダー片手に発掘作業を開始——しようとしたが、急な立ち眩みを起こして、フラフラとする体を、壁を支えに何とか立つ事しか出来なかった。

「あ……、体が……」

最近、ストレスが溜まっていたからかしら、とサヤは嘆く。

昨日の事件で、人の遺体を見た事。

昨日の事件で、テロリストにフルボッコにされた事。

昨日の事件の事で、学校を休んで、早朝から警察の長い事情聴取を受けた事。

先ほど——マーカスの言葉に己の信念を揺るがされた事。

サヤは心身共に大きなダメージを受けていた。もうここでじっとして居たい、そんな考えが頭を過ぎる。——しかし、

「行かなきゃ……」

彼女は立ち止まらない。立ち止まらないと決めたから。どんな時でも自分の信念を曲げないと決めたから。

サヤはゆっくりとした歩調で、洞窟の奥へと進んでいく。こんなつたら意地でも装備品を調達してやる。彼女は、そんな気持ちで足を進める。

そんな風に決意を決めた時——彼女の耳を劈く様な轟音が鳴り響いた。

——龍之介・拓巳SIDE?——

龍之介たちは洞窟を奥へ奥へと進んでいた。あらかじめ洞窟内に設置された電灯が輝いているが、やはり懐中電灯の補助が無いと心許無い暗闇がそこにあった。

「暗いな、何か出てきそうだな」

「バツカ!! 変な事言うなよ。唯でさえ雰囲気あるんだからよ」

「すまんすまん」

「しつかしリーダーには反応が無いな……」

「その内出るさ、その内」

彼らは更に歩みを進める。その足取りは軽快で、スキップでも踏みそうな感じだ。未だ見ぬ、未知なる装備品の存在が、彼らの胸を弾ませていた。

暫らく行くと、二人は洞窟とは違う大きな空洞に出た。洞窟内とは違い、照明がしっかりとしているようで、内部は明るい。

だからこそ——彼らは空洞内の異常に気付く事が出来た。

「なあ拓巳。今ってさ……俺たち安保部以外はエリア33に居ないんだよ……?」

「あ、ああ。その筈だ。だって事前に言ってたじゃないか。ロバーツ先輩が『エリア33は貸し切り』だって……」

「じゃあ、なんで人が居るんだよ」

空洞内の異常——それは、二人の男性の存在だった。

「間違えて入っちゃったとか?」

「それは——まあ有り得るかも知れないな。ファビオさんみたいのが居るかもしれない、けど……」

「じゃあさ……声を掛けて立ち退いてもらおうか?」

「そう、だな……。今は俺たちで貸し切りだし……」

ただ迷い込んで来ただけでも知れない、たった一人の人間の存在だが、龍之介たちは萎縮せずにはいらなかった。

彼らから、途轍も無い威圧感を感じ取っていたからだ。遠くから

発せられる荘厳な雰囲気、二人は知らず知らずの内に飲まれていたのかも知れない。

しかし、何はともあれ——龍之介は、空洞の中心に佇む二人に声を掛けてみる事にした。

「お——い！！ すいませ〜ん！！ このエリア33は僕たちの貸し切りなんですよ〜！！ すいませんが、別のエリアに行つてもらえませんか〜！！」

龍之介の大きな声が空洞に反響する。これだけ大きな声を出せば伝わっただろうと、龍之介たちは返事を待つ。

「すまないな！！ 我々、アクア・アライアンスの発掘時間はとうに過ぎていたか！！ 直ぐに出て行くとする！！」

男等の内の一人が返事を返してきた。とても清々しい感じの大声だ。返事からして彼らは、日本銃器やアラステア社などと名を連ねる一流企業——アクア・アライアンス社からの鉱員で——このエリア33の正式な先客のようだ。

男達は中央部からゆっくりと、二人の方へと歩み寄ってきた。

「いや、すまんね。熱中していて時の流れを忘れてしまっていたよ」

「いえ、大丈夫です。気付いて貰えて良かったですよ」

苦笑いする男——返事をして来た方の男だ——に、笑みで返す龍之介たち。どうやらこの男は好青年らしい。

彼らは——アクア・アライアンスの制服なのか——ライトグレーの背広の胸に社員証の名札を付け、薄い青のワイシャツ、深緑色のネクタイを身に着けている。

彼らは、二人の前に立ち、

「改めて自己紹介しよう。俺はアクア・アライアンス社所属のランクAプラス——NO・1、白根余泊だ」

と、最初に返事を返してきた、目を少し隠す程度に長い前髪が特徴的な明るい男が、

「……同じくアクア・アライアンスのランクAマイナー、NO・9、TⅡT……。宜しく頼む……」

と、余泊の後ろに居た、前髪を目に掛からない程度に少々長く伸ばしたショートヘア——スリングショートという髪型をした寡黙な男が、といった風にそれぞれ自己紹介をした。

「——え」

男達の言葉に、二人は固まる。無理も無い。二人の目の前には全世界に約二十七億人存在する能力者の頂点に立つ、アカレイド序列NO・1の男とアカレイド序列上位十名に含まれる男。真正銘の実力者達である。

「貴方たちが、あのアクア・アライアンスの最高戦力なのですか……!?」

龍之介は感嘆と驚愕が入り混じったような調子で、余泊に尋ねる。そんな龍之介の様子に苦笑しながら余泊は答えた。

「ああ、如何にも。我々はアクア・アライアンス内で最強と謳われる存在だ。……無論、能力だけで最高戦力の名を勝ち取った訳ではないが、ね」

「いやあ、そうですかそうですか!! こんな所で会えるなんて感動です!! ——あ、僕はランクB、アカレイド序列NO・1889の松野浦龍之介です!!」

「同じくランクB、アカレイド序列NO・1870の見栄崎拓巳です」

余泊は、二人の自己紹介にほう、と感嘆の声を漏らした。

「結構、高レベルじゃないか。能力の複数持ちか、希少な能力や強力な能力を持っているのか？」

「はい、まあ。僕は複数能力と希少能力持ちです! 拓巳は——」

「僕は……複数、能力持ちですね」

「え、マジで!! 聞いてないんだが!？」

「取っておきつて奴さ。いつか話してやるさ」

「そ、そうか。では、それを楽しみに待っているとするよ」

龍之介はなんだか納得しない気持ちだったが、本人が言いたくないのならしょうがない、と諦めをつけた。

「で。二人とも、ここで発掘を？」

「はい。僕たちはこの学園の平和を守るために活動している学園安全保障部と言っていますが、その装備の一新の為――」

――ここに来たんですが。

その後半の言葉は、ゴゴゴゴゴゴ！ という岩か何かが崩れ落ちるかのような音と大きな揺れによって遮られてしまった。

「な、何だ！？ 今のは――！」

「どうやらこの近くで何かあったらしいな……。取り敢えず、このままだと危険だ。脱出するぞ」

「わ、分かりました」

余泊とTⅡTは、洞窟が崩れるんじゃないかと混乱している龍之介たちを連れて、空洞が出る。

その間も轟音と揺れは断続的に続いていた。とても大きな、腹に響くような音で――そして琴音の書置きがあった洞窟の方角から聞こえてきた事もあり、龍之介はその音が何となく不気味に思えた。

――宙助・将隆SIDE？――

龍之介より前にエリア33奥の洞窟に入った宙助と将隆は、自動掘削機を引き連れて、レーダーを片手に前進していた。

「ホントにこっちで発掘出来るんですか？」

「私の科学者としての勘は良く当たる」

「期待してますよつと」

実際、橋本将隆には確固たる自信があった。長年、この地で研究と採掘を行っている彼にとって、発掘品がどこにあるかなど、レーダーを使わなくても、大体は分かる程だ。

「そろそろだ。ここら辺で発掘品が出る筈だ。レーダーから目を離すな――！」

「分かりました――！ 頼みますよ――！！」

宙助も将隆に乘せられ、テンションが上がってきたようだ。嬉々と

した様子でレーダーをやったら滅多ら振り回す。

「ハッハッハ、少し落ち着きたまえ。発掘品は逃げないぞ」

「分かってますけど！！　こつ、心の奥底から来る熱いパトスが…

…！！」

「ハッハ、君もそうかね！！」

二人は互いにテンションを高めつつ、探索を続ける。視線も意識もレーダーの画面に釘付けである。

だからだろうか。彼らは全く対応できなかった。――右側の壁ごと、自身を吹き飛ばした『ソレ』に――。

二人は轟音と光、そして無数に降りかかる岩石の中へと消えていった。

【第四十八章 続行、発掘作業】（後書き）

お待たせいたしました！！ 色々あつて投稿が遅れました、すいません。

感想待ってます！！

【第四十九章 新たなる胎動】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。〈
今回の一言・「……厄介な事になりそうです……」 by TTT〉

【第四十九章 新たなる胎動】

雨崎琴音。

明るく、優しい彼女の体は何か置き換えられた。人間では無い何かに。その何かによって、彼女の健康的な褐色肌は病的なまでの白肌に。

全身の感覚は以前とは比べ物にならないほど冴え渡る。視覚は鮮明かつ広大に、聴覚はありとあらゆる音を正確に聴き分け、嗅覚は野生動物を遥かに凌ぎ、触覚は目を閉じていても周りの様子を克明に汲み取り、味覚は空気すら——正確に言うならば、空気中を漂う化学物質すら味わえるようになった。

犬歯が発達し、体は羽毛のように軽い。しかし筋力などの身体能力は非常識なほど強力になっている。今ならこの洞窟の壁さえ簡単に破壊できるかも知れない。

——全身が望む。

彼女は変貌した。彼女がこの地で発掘したモノ。それは生まれながらにして吸血鬼である——真祖の犬歯であった。彼女はソレに魅入られ、吸血鬼になった。

——血を望む。

彼女の強力な嗅覚は、この地にいる、吸血鬼の食糧たる人間を感じていた。この地下構造には十数名。地上には数百人。

——血が、欲しい。飲みたい。啜りたい。舐めたい。味わいたい。

吸血鬼としての知識を得た、雨崎琴音は思考する。

——自分はデイウォーカーだから通常の吸血鬼が嫌う日光は平気だ。十字架や聖水、アイコンも——多分、平気だろう。アレは使用者の信仰心あってこそ力を発揮する代物だ。この信仰心というモノに疎い無信教国家・日本ならば問題は無い。白い杭も——まあ心臓に打たれるなんてヘマはしない。銀製の武器も論外。そんな物、彼らは持つていない。せいぜい、フォークか食事用ナイフに気を付ける程度

——今度は失敗しない。

宙助と将隆は生きていた。対応は出来なかったが、運が良かったのだろう、裂傷や打撲などのダメージはあるものの、意識もはつきりしてるし、体も何とか動かせた。

「何だ……？ 今のは……」

「何なんだ一体……？」

二人は瓦礫を何とか押し退け、這い上がった。宙助は頭から血を流し、岩石で強く打った左腕を押さえていて、将隆は小石の散弾雨によつて全身に擦り傷と切り傷を負い、口から血を流している。が、行動に支障が出ない程度の負傷だ。

「兎に角、追いかけましょう。アレは危険な存在だ」

「そうだな……。これ以上、この技術鉱山を傷つけられても困る。なあに私には数多にも及ぶ迎撃発明がある。心配するな」

二人は走り去った琴音を追い掛け、洞窟の出口へと向かう。

一方、龍之介たちも洞窟の出口——つまりエリア33の始まりの丘へと全力ダッシュで向かっていた。

「白根さん！！ 地崩れ音の発生元も俺たちと同じ方向に向かっています！！」

「そのようだな！！ つまりこれは事故ではなく、何者かが意図的に引き起こしている破壊！！ しかも最悪、俺たちを狙ったモノかも知れない！！」

「それでも、始まりの丘に進む俺たちは！！ ソイツを止める為に動いてるんですね！？」

「……そういう事だ。何、心配するな。こちらには白根の旦那がつ

いている……」

「T！T！！ 貴様、俺に全てを任せるつもりか！？」

「……アンタは一人でも大丈夫な能力を持つてるし……側近だって居るだろ、勿論、『俺ではないがな』」

「彖？ 側近？」

「今ここには、T！Tさんを除くとアクア・アライアンスの人は居ませんよね？」

「ああ、それなら——」

——コイツだ。と、余泊は走りながら右手の指を軽快に鳴らす。その音は洞窟内に響き渡り、余泊の隣の空間に変化を生む。

余泊の直ぐ隣の何も無い所に成人した人間くらいの大きさの白い発光体が生じる。走る龍之介たちについて来る、その光は徐々に色を付け、形を整えて、正体を現していく。

その正体は——やはり人間、それも成人男性だった。鳥の巣のようなボサボサな髪型をし、顎に無精髭を生やした、百七十センチ位の瘦身の男で、黒い背広と灰色のシャツを着ている。

現れた男は地面に着地し、状況を素早く確認して、自身も走りながら呼び出した白根余泊に確認を取り、周囲を見渡して——

「お前が俺を呼ぶなんて……緊急事態か、白根——ッ！？」

——松野浦龍之介を見た途端、絶句した。まるで鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔だ。

「どうかしたか？ 真逆」

「い、いや。大丈夫だ、問題ない……」

「そうか。——おおっと、紹介し忘れていたな。コイツは松直真逆。任務中は俺の能力で量子変換して待機させている——俺の切り札として雇ったフリーランスの能力者だ」

余泊は、唐突に起こった——何も無いところから人が現れるという不思議現象に驚愕の表情を見せる龍之介たち二人に、男自身の事と不思議現象が能力によるモノだという事を説明する。

「紹介に預かった、松直真逆だ。マツジキ、マサカ。マギヤクでは

無いぞ」

真逆からの手短な自己紹介に、龍之介たちも——突然、現れた真逆に戸惑いながらも手短に返す。

「ま、松野浦龍之介です、宜しく願います」

「……見栄崎拓巳です、宜しく願います」

「ああ、宜しく……」

やはり、真逆は龍之介に対し、動作がぎこちなくなるが、時間も無いので気にしていられない。

「さあ、急ごう。音が止んでいると言うことは——あの音源は洞窟を出たか、活動を止めたか……。どちらにしろ、今は破壊が起きているという事だ」

「向こうで人が被害にあっているという可能性は？ 人が相手ならば、よっぽどのが無い限り、ここまで音は聞こえませんか？」

「いや、それはない。向こう側には私が既に連絡を入れておいた。今頃は避難を完了している事だろう。エレベーターも封鎖するように指示したし、恐らくは大丈夫だろう」

——エレベーターを破壊して上に行くならば音がするはずだしね。と、余泊は付け足す。

「そうでしたか。手回し、有難う御座います」

「いや、何。城門には何時もお世話になっているからね。これ位は当然だ」

「……では——取り敢えず急ぎましょう。また、何時、破壊が再開されるか分かりません……」

TⅡTがそう締めくくると、五人はラストスパートとして一気に駆け出した。

——洞窟の出口は近い。

その頃、サヤⅡロバーツはテレポートを駆使して、洞窟の外へと

向かっていた。

——嫌な予感がする。

サヤは急ぐ。先ほどから彼女の体に『危険の匂い』が巻き付いていて、とても気持ちが悪い。

「急が、なきや……！！」

先日の闘いの影響からか体がだるくて、重い。能力の連続使用も相俟って、その感覚は存在を増していく。

しかし彼女は立ち止まらない。ただただ、進み続ける。

彼女はこの城門学園の治安を守る、安全保障部の副部長で、この場に於ける龍之介たちの最高指揮官である。

彼らを導く自分が真っ先に斃れては示しがつかない。彼女は彼らを激励し、見事に指揮し、トラブルの収束に努めなければならない。だから彼女は破壊の音源が待ち受けていると思しき現場——エリア33の始まりの丘に、一番初めに到着し——

「——何よ……これ……」

——悪夢を見た。

【第四十九章 新たなる胎動】（後書き）

最近、調子が良いのか、筆が進みます。

感想待ってます！！

P・S 私的に松崎刃先の声は田村ゆかりさんで再生しています

【第五十章 吸血鬼の雨崎琴音】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「魔術の基本は、自己暗示だ」by真逆ゝ

【第五十章 吸血鬼の雨崎琴音】

吸血鬼・雨崎琴音は激昂していた。先ずは——逃げ場を塞ぐ意味も込めて入り口付近に居た、大勢の人間の血を吸いに来たのに、彼らはとつくに逃げ遂せて、エレベーターまで封鎖していたのだ。

食糧としか見ていなかった人間の手の上で踊らされたという事実は、吸血鬼という上位存在である琴音にとって耐え難い屈辱であった。

あまりの腹立たしさにズゴンッ！と、思わず地面を思い切り踏み抜いてしまう。

「ああ——ああ——！ イライラする——！ 何なの、一体——？ 無駄に足掻かず、血を吸わせれば良いものをッ——！」

吸血鬼は頭を掻き毟る。どうやら、余ほど頭に来たようで、周囲の壁や地面、自動掘削機を手当たり次第に破壊していく。

一方、

「（ああ……良かった……。また——人を襲わずに、済んだ——）」
吸血鬼の中に残っていた、人間・雨崎琴音は安堵する。人間である彼女は未だ——自分に残された僅かな思考を働かせる。

「（どうしよう……。松野浦くんたちが脱出している事は——恐らく無い。宙助くんたちは——私にちよつとだけ残った肉体操作権で、吸血鬼に対し『死んだ』様に偽装できたけど……。同じような手段が、『コイツ』に通じるとも思えない。腕力の調整も、意識の偽装も——そう何度もやったら、『コイツ』に見抜かれるし——そんな余力は残っていない）」

ならばどうするべきか——と、吸血鬼に侵されつつある残った脳で考える。

「（肉体操作権を取り戻す？ 出来るかな、私に——いや、やらなきゃ、駄目か……。でも、どうすれば良い？ 今の私の脳の大部分は、『アイツ』に侵食されて……ソレを維持する力も、侵食して

いく力も、『アイツ』の方が上……。こんな状態で、侵食部を奪還するには、最低でも『アイツ』を気絶させる事が必要だけど……。
——そんなの他人頼みでしか出来ない」

結局、人の手を借りない限り、この状況は打開できない。

琴音はただただ、吸血鬼が再開した破壊活動を見ている事しか出来なかった。

サヤは現場に到着したもの——琴音が破壊活動の犯人だった事を確認し——様子見に徹していた。

今の琴音の様子は普通ではないし、今の彼女では目の前の吸血鬼を止められない為、その判断は賢明であった。

「（……琴音ちゃんが、『ここ』で何かしらの影響を受けたのは明白……。ならば、今の私に出来る事は、彼女を救うための手段を探す事と彼女の戦闘パターンを知る事……。この様子だと、松野浦くんたちはまだ来ていない……。よってなるべく情報を集め、合流するのが吉……！！）」

サヤは待ち続ける。——龍之介たち援軍を。

「ハアー、ハアー……！！」

「どうした数野くん！！ もうバテたか！？」

宙助と将隆は洞窟内を必死で走っていた。宙助は学園と皆の安全の為、将隆は——学園の安全もあるのだが——重要な研究施設であるこの技術鉱山を守る為だ。

今、彼らは長い長い洞窟の真ん中辺りにいるのだが、宙助は息が上がったのか、その場で膝に手をつき、立ち止まっている。

「早くしないと、取り返しがつかない事になるかもしれんぞ！！」

「わ、分かってますよ……！！　ただ、少し息が……！！」

「今は破壊音がしてこないから——もしかしたら、戦闘が終わって、下手人はひっ捕らえられているかも知れんが……。希望的観測は破壊の元だぞ？」

「ハアー、ハアー……、——っともう大丈夫、です……」

「よし、ならば先を急ごう！！」

二人は再び走り出す。それぞれの理念を元に。

——彼らにとって洞窟の出口はまだ遠い。

破壊が再び始まった。その事を『音』で感じ取った龍之介たちは、出口を目指し、足を更に速める。

しばらくすると目の前に光——洞窟内の照明とは比べ物にならない程の明るさだ——が差し込んできた。出口はもう直ぐ。彼らは走る。

走って、奔って——

「——ッ！！……どういうこった！！　どういうこった、こりゃあ！！」

——洞窟を抜け出した龍之介たちはエリア33・始まりの丘の惨状を見て、絶句した。

あらゆる所が破壊され、小型クレーターなどが見受けられる丘。

そこかしこに散らばる、掘削道具などの残骸。

——そして、その中心に立つ、破壊源たる吸血鬼。

「なんで——雨崎がッ！！」

雨崎琴音がワラッティタ。

「気を付けて！！　皆！！　彼女、様子がおかしいわ！！　今の彼女

は危険！！」

彼らをずっと待っていたサヤは、龍之介たちの場所にテレポートで駆けつけ、そう忠告する。

「先輩!!」

「ふふふ……全員、揃ったね。待ってたよ。——皆。あはは」
不気味に笑う琴音を前に、見栄崎拓巳は疑問を浮かべる。

「どういう事だ？ あの雨崎がやったってのか？ この状況を」

サヤの言動からして、これは琴音のやった事らしい。——が、確かに雰囲気は不気味だが、この破壊を引き起こすべくパワーは——
「『非戦闘系統の能力』を持つ彼女からは見受けられない。

「ん？ その反応からすると彼女の能力は、戦闘に向いていないモノなのか？」

「はい、彼女の能力は探知系S A。ここまでの破壊力はありません……」

「……同僚が言うならば間違いは無いでしょうね……」

「じゃあ!! どうやって!!??」

「彼女、どうやら『ここ』で何かしらの影響を受けたようね……」

その所为で、あんな風に……!!」

「どんな影響を受けたって言うんだ……!??」

龍之介たち『五人』は、ますます分からないといった様子だ。——

——そう、龍之介一行『六人目』、松直真逆を除いて、の話だが。

彼女・雨崎琴音を見て、色々と考えを巡らせ、ある一つの結論に辿り着き、それを肯定しなくなった真逆は——しかし——

——とうとう、その重い口を開いた。

「——君たちにとって信じられない事だし、私も信じたくない事でもあるのだが……」

「な——何ですか……?」

「彼女は……恐らく、吸血鬼になった……」

「……!!??」

真逆の衝撃の発言に、五人は驚愕の表情を浮かべる。

当たり前だ。『吸血鬼』——なんて存在は、小説や漫画でしか聞いた事の無い、言わばフィクションな存在だ。いくら超能力が一般化した、この世界でも吸血鬼なんて——異端中の異端は信じられない

い。

「本当だ……。彼女の口をよく見てみる。犬歯が発達している。……それに彼女からは尋常じゃない——『魔力』を感じる」

「ま、魔力って——！！　こんな状況で何を——　っは！！　まさか、アンタ……ッ！！」

吸血鬼は兎も角、龍之介たちは『魔力』ならば——フィクションとしても勿論だが、実在するモノとしても——聞いた事がある。彼らは、小学生だった頃、超能力・SAについての基本的な知識を学んでいた時、そのワードを知った。

『魔力』——それはSA以前の人為的超常現象とも言われる、『魔術』を行使する為に必要なエネルギーの事だ。

魔力は一般人には感じ取れず——まあ人外は簡単に感じ取れるが——、魔術師としての基本中の基本、基礎中の基礎、大前提である『魔力感知』を修める事で、感じ取る事が出来る。

つまり、松直真逆は——

「アンタ、魔術師……ッ!？」

「そうだ」

「え、お前魔術師だったの……?」

真逆の発言に、龍之介たちは一様に驚く。雇い主の余泊やTⅡTも、だ。

「そうだが……まあ、アンタに雇われてから、今の今まで魔術関連の仕事が無かったからな。言わなかった」

「そこは言つとけよ……」

キツパリと告げる真逆に、ガツクリと肩を落とす余泊。

そんな哀れな雇い主を尻目に、魔術師・松直真逆は真剣な表情で告げる。

「——という訳で。今回は『こつち』方面の問題だ。俺に任せて貰うぜ」

雨崎琴音。吸血鬼——真祖の牙に適合し、吸血鬼になってしまった少女。

彼女は、今から血を吸うであろう食糧たちに最期の楽しみとして、『会話する時間』を与えていた。

与えた時間の中で行われた『会話』によつて、人間たちの諦めがつくも良し。最後の抵抗として攻撃を加えてくるも——力試しになつて良し。

どちらにしても——彼女は愉しめる。

だから彼女は待つ。何、獲物は目の前に居る。この技術鉦山の唯一の出口は琴音の後方、脱出するには彼女を倒さなくてはならない。

「（もつとも……倒される気は無いけどネ）」

吸血鬼より下位存在である人間に負ける気は無い、とは吸血鬼としての彼女の思考だ。

「（暇だな……。爪の素振りでもやってみようかな……）」

暇になって来た彼女は、彼女は爪を展開し、適当に降り始めた。しかし流石は吸血鬼、『適当』に振ってもヒュウン、ヒュウンと風を鋭く切る音が鳴る。

——と、そんな風に暇を持て余していた彼女の前に男が独り、丘から飛んできて——降り立った。

「やあ、お嬢さん。ちよつと暴れすぎ、かな……」

黒い背広の下に灰色のワイシャツを着て、黒いボロボロのマントを羽織つた、ボサボサな髪型で無精髭を生やした男——と、ここまでは普通の人間の持ちえる特徴だ。

「僕の——“近代英雄術式”で少し大人しくなって貰おう」

しかしその男の右腕は——

「何……？ その腕……」

形状は滑らかで人間のような——しかし兵器のような機械的な意匠も含まれた、鋼鉄の装甲に覆われていた。

「この腕か……。この腕は僕の魔術品——言わば魔術を使うための

補助道具だ。しかも俺の作ったオリジナルの専用品。——名は英雄乃右腕」

「へえ。貴方、魔術師？」

「如何にも——僕は超能力者にして魔術師、松直真逆」

「私は——吸血鬼、雨崎琴音」

二人ともそれ以上の会話は必要無かった。

両者、同時に跳躍。——瞬間。無骨な拳と華奢な拳、相反する二つが激突した。

【第五十章 吸血鬼の雨崎琴音】（後書き）

お待たせいたしました。感想待ってます!!

【第五十一章 創作魔術】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言はありません。

【第五十一章 創作魔術】

松直真逆、二十三歳。十三歳の頃、北欧の魔術学院に渡り、そこで魔術を修める。

所有SAは、『対象に破壊力を付加する』、『デッドプラス』。得意とする魔術は、自身が開発した近代英雄術式。

彼の近代英雄術式とは——を語る前に魔術について軽く述べよう。通常、『魔術』とは『魔力』という誰しもが生まれながらに体内に持つ、もしくは自然界にあるエネルギーを使って世界に干渉する術の事である。魔術師は、体内に眠っている魔術線（魔力をガソリンとすると、この魔術線はエンジン）若しくは魔方陣などの体外魔術線に、魔力を通し、工程（呪文詠唱など）によって魔術を発動し、世界に干渉する。

——この世界への干渉の仕方には、主流な方法が二つある。

一つは、魔力を『自身の構築した理論』に乗せて、魔術を発動する方法。これは事前に機能をセッティングしておけば、人間の思いつく大抵の事が出来る——が、術が複雑なモノになればなるほど、魔術を発動するまでの工程が長く複雑なものになるため、世界に深く干渉する場合は、極めて非効率な方法となる。

もう一つは、魔力を世界に『刻み込まれたルール』に乗せて、魔術を発動する方法。これは物事に対する大衆的イメージ（例を挙げると、赤は暖かそう、青は冷たそうなど）や宗教や古代の逸話・神話などのルールを使って魔術を発動させるため、複雑な魔術でも、世界からある程度の補助を受けれるため、比較的（前述の方法に比べれば）簡単に行使できる——が、自身の起こしたい結果を得るために、それに最適なルールを見つけ出すのが大変となり、簡単な干渉のみを求めるならば、やはり非効率な方法である。またこの方法は——世界に刻み込まれたルールにも分布があるのか——^{ミニマライ}地域によって効果に差が出るというデメリットも存在する（例えば仏教を基

にした魔術は、ヨーロッパでの効果が薄くなるなど）。

彼の近代英雄術式は、後者の方法に分類されるが——しかし、前述の限りではなく、『宗教や古代の逸話・神話』ではなく、『現代の架空伝説』を用いて魔術を発動するイレギュラーな術式で、『現代の架空伝説』とは、現代の漫画、小説、映画、アニメなどのフィクションの事を指す。

彼に言わせれば、これらの娯楽の内容ないしキャラクターの特性は端的に示す事が出来るらしく、彼はそれらの『典型』を使って、『フィクションのような力』を行使出来る。

閑話休題。

洞窟の出口にようやく到着した、将隆と宙助の二人は驚くべきものを見た。

それは——壮絶な殴り合い。突きの速さ比べだ。

「うおおおおおおおおおッ！！」

「はあああああああああッ！！」

右腕を鉄色の装甲で覆った黒尽くめの見知らぬ男と安保部で見知った女の子が、声を張り上げてぶつかり合う。

鉄の拳と生身の拳が衝突する度に、男の拳からは火花が飛び散り、女の拳からは潰れる様な、砕ける様な、嫌な音が鳴る。

二人の力量は互角なのか、互いに掠り傷や軽い打撲はあれど、大きな怪我は無い。両者の拳は凄まじい速度で振るわれる。男にはフィクションの世界の影響である『主人公補正』が、女には吸血鬼の圧倒的な怪力が——それぞれの勢いを助長していく。

「あはははははははは！！ 人間なのに良くやるね！！」

「はっ！！ こっちにも人間の意地ってモンがあるのさ！！」

「ふふ。残念だけど、そんな余裕——」

言いながら琴音は左の拳で真逆の両拳を往なし、右の拳を硬く強く

握り締める。

「——消し飛ばしてあげるよ。」

「ッ!!」

琴音の眼が、紅くなる。人間のモノでは無い。その眼は、紛れも無い人外——吸血鬼のモノだった。

「死ねえ!!」

「ぐッ!!」

吸血鬼としての力を解放した、琴音の右拳が真逆の腹部に思い切り、突き刺さる。——が、その程度で怯んだり、吹き飛んだりするほど、彼は弱くない。

超能力者にして魔術師——松直真逆。潜り抜けてきた死線、受けてきた傷は並のモノではない。それに彼には魔術——主人公補正もあつた。

「……たかが」吸血鬼の拳の一つや二つ、受け止められずして——

真逆は、右の——鋼鉄に覆われた拳を握る。左手を翳し、鋼鉄の専用の魔術品に、魔力をこれでもかと注入、更に能力の『デッドブラス』で最大限の強化を施す。

「——何が英雄か!!」

彼の専用魔術品・英雄乃右腕にWinning Rightの刻印が蒼く浮かび上がる。魔力の注入が終わったサインだ。

「炸裂!! 勝者の——右!!」

構えていた右手を、正拳突きよろしく前に勢い良く突き出す。

——瞬間、琴音の視界は純白に染まり、気が付けば彼女の体は二、三メートル後方へとノーバウンドで吹き飛ばされ、地面を無様に転がっていた。

「（——な、何がッ……!!）」

彼女は至る所が軋んで痛む体を無理矢理動かし、なんとか立ち上がる。

「ぐ……!! 人間の、癖に……ッ!!」

成り立てとはいえ吸血鬼である彼女を吹き飛ばした術式——名を勝者の右という。

簡単に言えば、魔術品である英雄乃右腕に溜め込んだ魔力——もっとも使用者である真逆は、溜め込んだ魔力の塊に破壊力を付加して更に強めているが——を一気に放出するというモノである。

しかし、それは彼の近代英雄術式で、『フィクションの世界』の力を付与した魔力であった。

彼の術式にとっての手——更に言う右手の特殊な力は、キャラクターの能力や武器の設定によく使われる『典型』の中の一つとして挙げられる。

右手でコンクリートの壁を砕いたり、能力を打ち消したり、『気』の塊を出したり、巨大ロボットを破壊したり、武器を生成したり、ありとあらゆる武器を扱えたり、ゴミを木に変えたり、などなど。挙げていけば限が無いほどだ。

そんな規格外の力を宿す『右手』というイメージは、『読者たち』の信仰とも呼べる憧れという『思いの力』も相俟って、彼・松直真逆の近代英雄術式の基本である、『典型の加護』の一つとして強力に稼動する。

そんな只でさえ強力な力を『ブースト』させる魔力加速器の役割を果たすのが、彼の英雄乃右腕だ。

——術式と魔術品で最大限の強化が為された魔力の放出。そんなモノを受ければ、いくら吸血鬼と言えど流石に只で済む訳が無かった。

「——一応、手加減無しで放ったが……どうかな？ 俺の魔術は」

「くそッ……があッッ!!」

しかし彼女も吸血鬼。直ぐに後方へと飛び退き、再び拳を構えた戦闘体勢に入る。

「その右腕——確かに中々の威力……だけドッ!!」

彼女は爪を刀のように展開する。爪の刀は闇の如き黒に染まっいて、とても鋭利に見えた。彼女はその爪を構え——

「私の疾さに対応出来るかな!？」

——音を置き去りにしそうな勢いで跳躍する。

空中に山を描くように飛び掛る、彼女の攻撃は人間ロケットも斯くやと思われるスピードを備えている。

右手の人刺し指と中指に生える漆黒の爪刀には、真逆の喉を切り裂き、心臓を穿ち、体をバラバラに分解しようとする意思と力が十分に有った。

彼は咄嗟に——しかし確実に鋼鉄の右腕で身を守る体勢に入る。

直後——吸血鬼の爪は、上から下へと振るわれた。チュインツ!

! と、金属を掠る音がアンダーホール内に響き、虚空に火花が散る。鋼鉄の魔術品は、掠り傷は付いた程度で、防御には成功していた。

しかし琴音も一撃では終わらない。間、髪容れず二撃、三撃と——神速で爪を振るう。真逆も右腕を使い、最低限の動きで迫り来る斬撃を防ぐ。魔術品と爪が接触する度に、鋭い金属の削られる音と燈色の明るい光が散った。

「ッ、ああア!!」

「はああッ!!」

二人は爪と籠手で鏝迫り合いになる。押し切ろうとする琴音と押し返す真逆。二人の力は拮抗していて勝敗は決しないかのように見えた。——が、

「疲れてきたな!! そろそろ静かにして貰おう……!!」

真逆が状況を打破すべく動き出した。彼は突然、爪を払い除けると、バックステップで琴音と距離をおき、懐からリボルバー拳銃——コルトSAAと丸く纏めた荒縄を取り出す。

「荒野開拓の鎮圧者よ——。その身を以って暴れ牛を食い止めよ」
彼は素早く呪文を詠唱する。——すると、縄は真逆の手を離れ、独りでに動き出し、刹那の間に琴音の体をグルグル巻きに縛り上げた。彼女の胴体や腕は、その縄に覆われて見えなくなってしまう。

これは短時間ではあるが、どんな目標でも完全に束縛する事が出

来る捕縛魔術品——荒野環縄である。

「！！！」

魔術品の縄は頑丈——かつ、きつく縛られているのか、魔力による補正を受けているのか、吸血鬼の怪力を以ってしても抜け出せない。真逆はその様子を見て——更に次の魔術の行使に掛かる。

彼は眼を閉じ、拳銃の銃身を額まで持っていく。そして——呪文詠唱。

「荒野開拓の制圧者よ——。その身を以って四点を制し、囲いし者を中央に止めよ」

呪文の詠唱が終わり、銃に魔力が充填される。真逆は、コルトSA Aを腰ために構え、彼女の周囲を囲む、目には見えない正方形の頂点である四つの点に魔力の籠った弾丸を撃ち込んだ。

「銃弾結界——始動」

彼は術式のスイッチとなる言葉を静かに紡ぐ。

すると、弾丸の撃ち込まれた四点が蒼く輝き出し、それぞれを線で繋ぎ、蒼色正方形を構築する。

これが彼の誇る高速発動式結界——ブリットエア。

刻印の刻み込まれた弾丸で対象物の四方を囲み、発動する結界で、呪文を僅かに変えたり、後から追加する事で、内部のモノを捕らえたり、保護したり、苦痛を与えたり、気絶させたり出来る優れた術式だ。

「これで完成。もう好き勝手にはさせない」

「ぐう……！！！」

吸血鬼・雨崎琴音は結界内に囚われ、そう簡単には脱出できない状態だ。

こうして新人吸血鬼とベテラン異能者の闘いは幕を閉じた。

【第五十一章 創作魔術】（後書き）

試験期間中ということもあって色々ありましたが、やっと投稿です。
感想待ってます！！

【第五十二章 心の底から】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言はありません。

【第五十二章 心の底から】

真逆と琴音の闘いの直後、龍之介たちは真逆の許に駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか！？」

「問題ない。彼女も捕まえたよ」

真逆は結界内に居る琴音を見た。現在、彼女は真逆の結界の追加詠唱で気絶して、静かになっている。

「——で、これからどうする？」

『これから』というのは、吸血鬼になってしまった琴音の対処だ。流石にこのまま結界内に閉じ込めておく訳にもいかない。しかし、どうすれば良いのかも分からない。

そんな状況で全員が黙って考え込んでいると——

「——彼女の中の吸血鬼だけを封印する」

真逆が数ある選択肢の中で最良——しかし最も困難なモノを提示した。

「……！？」

「ほう、出来るのか？」

全員の反応は驚き——龍之介たち——と、関心——余泊たち——に別れる。

真逆は彼らに頷きで返し、その方法を淡々と説明し始めた。

「まずは——彼女の意識の中に潜行し、彼女が『人間だった頃』の人格が残っているかを確認する。もし残っていれば、彼女が肉体の操作権を得るように補助する。——が、残っていなければ……」

……

「——内部から吸血鬼を滅する、か？」

「出来れば——残っていて欲しいものだ。彼女の意識が」

現状で琴音を救う手立てとして使える手はこれしかなく——彼女の意識が消えるのを防ぐには、早急に吸血鬼を封印するしかない。

その場にいた全員は、真逆が提案した案に賛同する。

「では、彼女を意識の海から呼び出す為に——君ら、安保部の中から一人、アシスタントとしてついて来て貰おう。出来れば危険な場所だと、分かった上で行く覚悟がある人間が良い」

真逆が付け足すように言った言葉は、安保部全員を再び驚かした。

「私が行くわ！！　そもそも、技術鉦山に誘ったのは私！！　その責任は私にあるし……何より後輩としても仲間としても、私は彼女を助け出したい！」

「——僕が行きます」

「なっ！？　松野浦くん！？？」

「雨崎は俺の——相棒、なんですよ」

「で、でも……！！」

「行かせて下さい！！　お願いします！！　それに、こうしている内にも雨崎は辛い思いをしていると思うんです！！」

「うっ……確かに時間も無いわね……。しょうが、ないのかな……。そんなやり取りもあって、結局、自身の意思を頑なに曲げない龍之介に折れたサヤと他の安保部メンバーは、龍之介をアシスタントとして選出した。

「では、松野浦くん。君が、アシスタント役になったのかい？」

「はい！！　雨崎は僕が呼び出します！！」

真逆の最終確認に、龍之介は一も二もなく、力強く頷いた。どうやら覚悟は完了しているらしい。

「……よろしい。では、行こう。俺の肩に触れていてくれ」

指示に従う龍之介と結界内に手を突っ込み、琴音の頭に手を置く真逆。

これで準備は完了。

松直真逆は、魔力を体に流し——スウ、と軽く一呼吸してから、

呪文を詠唱する。

「潜れ、潜れ。——宝は其処に。潜れ、潜れ。——秘密は其処に」
真逆と、彼の肩に手を置く龍之介の全身が、意識潜行の術式発動の合図として淡い蒼色に光り始めた。

二人は意識がぼやけ、段々と視界が暗くなって、魂みたいなモノが体から離れていくのを感じた。意識がゆっくりと雨崎琴音の体の中に奥へ奥へと侵入し始めているのだ。

視界が完全に黒に閉ざされた時。彼らの意識は、真逆の腕を通じて、琴音の意識へ入る事に成功した。

——彼女の意識の入り口からは暗い、洞窟のような道がずっと続いていた。これこそが彼女の閉ざされた心への道であった。その道を、未だ、彼女の意識内で、形の整っていない不定形な意識体として存在している彼らはスーツと音も無く、全速力で駆け抜ける。真つ暗で視界は閉ざされているが、彼らは、その一本の道を通していく。

数瞬後。二人の視界が復活する——しかしそれは眼球から得られた情報で構築されたモノでは無く、彼らの魂というべきモノが直接感じているモノだ。だからだろうか、普段より彼らの視界は鮮やかではつきりとしていた。

そして見える景色も違う。眼下に広がるは、ゴツゴツとした岩肌が埋め尽くす技術鉱山ではなく、真つ暗な闇の世界でもなく——様々な色が混ざり合い絡み合った、正しく混沌というべき光景だった。果てが無い——この世界は限界を表す境界線が無い。どこまでも混沌とした風景が広がっていた。天井も、壁も、底も無い——言い表すなら色の種類が違う大量の絵の具をぶちまけたような宇宙空間だった。

そんな空間の中、龍之介と真逆の意識は、いつの間にか不定形から人型へと形を変え、ふよふよと浮遊していた。

「ここが……彼女の心象空間か」

「心象空間？」

「ああ、彼女の心の中に広がっている世界の事だ。S Aや魔術の起動に密接に関わっているとされている空間だ」

「へえ、そうなんスカ……。でも、何だか気味が悪いツスね」

「人間の心の中は、色んな感情が渦巻いてるからな。此処が綺麗に見えるのはイエス・キリストぐらいじゃないか？」

「そうかも——つと、こんな話してる場合じゃないツスね」

「そうだな……。よし、早速呼び掛けてみてくれ。呼び掛けに答えてくれれば、彼女はまだ無事だ」

「どんな感じで、ですか？」

「名前をただ呼ぶだけで良い。……強いて言うならば感情を込める。見ず知らずの私では駄目だ。親密な人間——君が思い切り、やれ。」

心の奥底から彼女を連れて来い」

真逆曰く、気絶して吸血鬼の意識が弱まっている今なら——思いの力が強く影響する心象世界内ならば、『名前を呼び、真に欲する』事で、意識の奥底に埋まっている彼女を呼び出す事が出来るらしい。——人間だった頃の彼女の意識が残っていればの話だが、

説明を受けた龍之介は、

「——分かりました……。……すう——雨崎！ 雨崎イイイイイイイ！——さ、め、さ、きイイイイイイイ！——」

真逆の言う通り、感情を込めて大きく叫んだ。

木霊は返ってこない。それだけ、この空間が広大であるという事だ。空間に霧散し、溶けて消えた声は、彼女には届かなかった。

「もう一回だ」

「はい！」

潔い返事と共に、

「雨崎イイイイイイイイイ！——！！」

力いっぱい叫ぶ。しかし——

「まだだ。まだ足りない」

この心象世界の何処かに押し込められた彼女には聞こえない。まるで彼女の心を写す、この世界そのものが、彼女から龍之介を引き離

【第五十二章 心の底から】（後書き）

お待たせいたしました。投稿します!!
感想待ってます。

P・S 私的に島月伊豆香の声は、門脇舞以さんで再生しています。

【第五十三章 吸血鬼封印】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。ゝ
今回の一言・「絶対に、自由になってやる！！」by遙か昔に存在
した真祖の成れの果てゝ

【第五十三章 吸血鬼封印】

龍之介の叫びに反応した心象空間に変化が生じた。——丸い、歪な穴が空間に生じたのだ。穴の中は、見ているだけで吐き気や寒気がする、寂しい闇が広がっている。

その——底が無いように見える穴の中の空間を覗いて見ると、女の子が一人、浮いていた。——雨崎琴音だ。短いポニーテールをした、褐色の女の子。見間違える訳が無い。

「松野浦くん！！ 彼女を！！ 早くしないと、穴が閉じるぞ！！」
「は、はい！！」

真逆の指示に従い、龍之介は少しずつ小さくなっていく穴——小さくなっていると言っても人間一人なら余裕で通れる位の大きさはある——に手を突っ込んだ。

琴音の方からも手を伸ばしていたようで、龍之介は簡単に彼女の手を掴む事が出来た。龍之介はその手を離さないように、しっかりと優しく握ると、

「ぬおりゃッ！！」

琴音を一気に穴の中から引き上げた。彼女の体が軽いのか、はたまた心象空間では重さという概念が通常世界とは異なるのか、龍之介は彼女を容易に引き上げる事が出来た。

また彼女を引き上げたと同時に、役割を終えたと言わんばかりに、穴は急速に収束して閉じられ、心象空間は元に戻った。

「琴音！！ 無事か！？」

思わず下の名前で呼びながら、龍之介は呆けている彼女の両肩を掴んで呼び掛ける。彼の声に、はっとなった琴音は、龍之介に向かって微笑み、

「……うん、大丈夫だよ。ありがと、助けてくれて」

彼の背にそっと手を回した。龍之介は突然の抱擁に顔を赤くして驚いた。彼女は、そんな彼の反応に気付かないのか、気付いてない振

りをしているのか、そのまま続ける。

「怖かった……。私の意識が段々消えていって、『怖い』って感覚すら感じられなくなつて……。でも自分の存在が消えていつてる事が漠然と感じ取れて……。そんな時、龍之介くんが私を呼んでくれて……。あの暗闇から引つ張り上げてくれて……。嬉しかった……。とつても感謝してるんだ」

「そ、そうか」

「うん……。それに私、謝らなきゃいけない事があるんだ……」

「こと——雨崎が……？」

龍之介が下の名前で呼んでくれなくなつた事に、少し残念そうな顔をしながらも、彼女は話を続ける。

「うん。——入学式の日の朝、私をナンパから助け出してくれたよね？」

「あ、ああ」

「その時、私……。怖くて逃げちゃつたんだ……。龍之介くんが闘つてる所から。その後も助けを呼ばなかつたし……。安保部で会つた時に——ううん、探し出しても貴方に謝るべきだった」

「気にしてねえよ、そんな事。大体、あの状況じゃあ女の子が逃げ出しても、しょうがねえし……。それに雨崎は安保部で会つた時、『ありがとう』って言うてくれたじゃないか。それだけで俺はもう、報われたと思えたんだ。あの時、飛び出していってお前を助け出せて良かったと思つたんだ。——だから、雨崎も気にすんな」

「……駄目だよ、私が気にする。だからここで謝らせて——龍之介くん、あの時は貴方を置いていって、しかも助けを呼ばずに——ごめんなさい」

琴音は誠心誠意、謝罪の言葉を紡ぐと、龍之介を抱いたまま、泣き出してしまった。

「全く……。気にしてねえつてのに……」

龍之介はそんな彼女を慰めるように、静かに頭を撫でてやる。

しばらく龍之介はその体勢のまま、琴音の頭を撫で続けていたが、

「……そろそろ良いかな？」

空気を読んで黙って見守っていた真逆が、流石に痺れを切らしたのか、目の前でイチヤイチヤされるのに耐えられなかったのか、二人だけの世界に入り込んでいる彼らに静かに声を掛けた。

「は、はい！！」

「すみません！！」

真逆の声に、はっとなった龍之介たちは恥ずかしさ故か、互いに軽く突き飛ばすかのように離れた。二人とも顔を真っ赤にしている。

「……まあ、イチヤイチヤするのは良いが、人目に付かない所でしろよ」

そんな二人に軽く忠告を入れた、真逆はこれから行う『吸血鬼封印』の作戦概要を説明し始めた。

「先ず、雨崎くんだが……。今現在、吸血鬼は気絶していて肉体の操作権の掌握が不完全な状態だ。そこに付け込み、肉体操作権を彼女に返させ、吸血鬼を心の奥底に封印する。次に俺と松野浦くんだが……。一先ず、心象世界から出る」

「出るんですか？　ここから」

「ああ、彼女が肉体の操作権を回復する際に、心象世界もまた変わる。その際に彼女以外——つまり俺たちの意識体が消滅しかねないので、一度、脱出するんだ」

「なるほど」

「で、どうやって肉体の操作権を取り戻せばいいんですか？」

「……ただ強く祈れ。それだけでいい」

「分かりました」

「では……松野浦くん！！　早速、心象世界を出る！！　準備を！

！……雨崎くんは、俺たちが見えなくなったら、祈り始めてくれ」

「「分かりました！！」」

「いい返事だ」

こうして真逆の指示の下、吸血鬼の封印が開始された。

龍之介たちが心象世界から出て行った後、一人、取り残された琴

音は一瞬、寂しげで心細そうな顔をしたが、直ぐに祈りを開始した。

龍之介たち二人は、無事に自身の肉体に意識を戻し、琴音の心象世界から帰ってきた。と、同時に真逆は、全員に琴音の意識がまだ存在していて、彼女とコンタクトも取れた事を教えた。

「では、俺はこれから心象世界内の雨崎くんのサポートをする。君たちはそれを手伝ってくれ」

「わ、分かったわ」

「――勿論、アンタたちも、だ。白根余泊、TⅡT」

「わぁーってるって」

「……了解」

全員の同意を得て、手助けを受けながら真逆たちは特殊な援護術式の構築に取り掛かる。

その内容だが――、

――四角だった結界を、強化のため六角にし。

――もしもの時のために、余泊の能力『虚偽構造』で周囲を頑丈にコーティングして、技術鉱山にこれ以上の損害が出ないように保護と、TⅡTの『御都合主義』による、成功率の上昇を施し。

――万が一に備え、コルトSAA以外の、もう一つの愛銃であるシングルショット式拳銃、タンフォリオ・ラプターに吸血鬼迎撃用の特殊な魔弾を込め。

――また術式補助として基本的な魔術である、ルーンという文字によって、自然環境などから力を得る、ルーン魔術の行使。

――例としては偶然やハプニングを味方にする効果のある『P E O R T H』の刻まれたカードを其処彼処にバラ撒いたり。^{オース}

――いざという時の為に防御や保護を意味する『E O L H』の刻^{エオロ}まれたお守りを全員に配布したり。

――結界周辺に停滞や身動きの取れない状況を意味する『I S』^{イス}

の刻印弾——ブリットエアなどの結界にも使われる物だ——をコルトSAAで撃ち込んだりするというモノだ。

「これで、良し……」

結界に強化の呪文を掛けた真逆は、額の汗を拭い、立ち上がる。

彼の琴音へのサポートとは、吸血鬼の意識と肉体の接続を弱くする気絶の継続と、吸血鬼暴走時のストッパー及び心象世界内の琴音の祈りの魔術的サポート——祈る力を外側からブーストし、強力なモノにするなど——だ。

術式の構成や仕上げは完了した。後は刻印弾などを発動するため
キーワードの簡易呪文を紡ぎ、魔力を注入する。今回は、質の良い魔術を多数展開するため、気は抜けない。

「——マルチプルゾーンアウェイク多重結界、起動——」

六角結界の刻印弾が青白く発光する。これで吸血鬼に対する気絶効果や束縛効果が更に強化された筈だ。魔術発動時の若干の疲労を感じながらも、真逆は次の呪文を告げる。

「——PEORTH、EOLH、IS、ルーンワーキング作動——ッ——」

次は、周辺に多数配置されたルーンカードや全員のお守り、結界周辺の補助用刻印弾が唸る様に光を発する。青白い発光の強さに比例して、真逆の魔力もドンドン消費され、ルーンに流れ込み、その力を発動させる。

「——セットアップ全術式行使、コンプリート完了——」

最後に、術式群の完了を告知。これにより、それぞれの術式は連結し、互いに互いの効果を高めあい、強大な相乗効果を生み出す。この術式群自体が、個々の術式に対するブースターや加速器の役割を果たすのだ。

「う、ぐう……!!」

術式は成功したようだが、流石に彼も連続魔術行使はキツいようで、しかめっ面に汗を垂らしていた。

——結局、魔力は無事、術式全体に必要なだけ分配され、魔術は行使された。

「はあ、はあ……これで、完成だ……」

魔力の大量消費により、フラフラなため、サヤと拓巳に支えられながらも、松直真逆は、対吸血鬼用術式群を完成させた事を告げる。その場に居た全員が安堵の表情を浮かべた。

「お疲れ様です」

「これで……少しでも彼女の助けになると良いが……」

今回の最大の功労者である彼・真逆は、現在、宙助から手渡された将隆謹製スポーツドリンクを飲み、タオルで顔を拭いている。

狭気のマッドサイエンティストの作った、スポーツドリンクは疲労の蓄積された真逆の体を瞬時に癒した。まるでRPGに出てくる回復用ポーションのような、尋常では無い効き目だ。これで副作用も無いのだから、将隆の科学者としての腕前が見て取れる。

——後は彼女に任せるしかない……。

準備を終えた全員が、琴音の無事を祈った。

その頃、心象世界では、琴音が両手を組んで、膝を抱え、祈りながら宙をふよふよと、漂っていた。彼女は天井も、壁も、底も無い、無限に広がる空間の中で、祈りながら淋しく独り漂う。

祈りの影響なのか心象世界の風景にも変化が生じ、所々の空間が歪んだり、揺らいだり、色が変わったりしている。

そんな不安定な空間の中、彼女は自身の意思を心の世界に反映させようと、一生懸命祈っていた。

「（元に……元に戻りたい……。私の体を戻して……。私の体を返して……。私は皆と一緒に生きたい。こんな所で独りぼっちは嫌……。だから……）」

彼女は独りでいる事を、一般人の非ではなく非常に恐れる。

——私は、生まれながらに能力を持っていた。

彼女は、生まれながらに人に気味悪がられた。

——ただ、それだけで親に疎まれ、そして遂に、両親は私を残して何処か、遠くへ行ってしまった。

彼女は、幼くして人の残酷さを知った。

——親に捨てられた後、親戚をたらい回しにされた私は、適当な家を与えられ、独り暮らしを強要された。

彼女は、若くして、当たり前で暖かな団欒の真の大切さを知った。

——独りは、嫌だよ……、龍之介くん、皆……。

「（だから……体を、返して……）」

ただただ強く祈る。それだけが体を奪われた雨崎琴音に出来る、まだ目を覚まさぬ吸血鬼への唯一の反抗だった。

一方、吸血鬼も徐々に目覚めつつあった。その原因は、龍之介が琴音を呼ぶために心象世界で叫んだ事や、琴音の祈りによる心象世界が変動し始めている事による、反動によるモノだった。

自身が気絶している事により肉体操作権が曖昧になっている事や肉体操作権が段々と琴音に移行してきている事、その琴音が外部からの魔術行使で補助を受けている事に気が付いた吸血鬼は、早速行動を開始した。

「折角、手に入れた体だからね。そう簡単には返さないよ」

今より遙か昔。とある吸血鬼の真祖が、教会に異端の狩り手として雇われたある有力な魔術師によって、その身を滅せられた時に唯一、現世に残された『牙』——それに宿った、その真祖の残留思念の成れの果て。それが現在、琴音に寄生している吸血鬼の正体だ。

その、牙に宿った吸血鬼の意識体は、窮屈な地面の下に長い間、閉じ込められていて、自由と人間の生き血を欲していた。

発掘によって、やっと外の世界に出て、自由になれたというのに、体が上手く馴染んでいなかった為に全力を出し切れず、人間風情に敗北した。この事実は元真祖である吸血鬼にとって到底、納得でき

るようなモノでは無かった。

「（体も吸血鬼として完全に変容したようだし……今度は、ニンゲンなんかには遅れは取らない。後は上手く封印されないように、肉体操作権を復活させなきゃ。でも、どうすれば良いかしら。何か解決法があれば——」

そこまで思考して。吸血鬼は、変動する心象世界の中で妖しく笑った。吸血鬼の目には、一心不乱に祈り続ける、無防備な琴音の姿が映っていた。

——あの娘に成り済まして、ニンゲン共を騙す。

それが、吸血鬼が考え出した現状への打開策であった。

【第五十三章 吸血鬼封印】（後書き）

予定より早く投稿できました。

感想待ってます！！

P・S・私的に松直真逆の声は、緑川光さんで再生しています。

【第五十四章 真祖の策】（前書き）

この物語は当然、フィクションで無茶な設定もご容赦ください。
今回の一言はありません。

【第五十四章 真祖の策】

——雨崎琴音の肉体との接続率（つまりは肉体操作権の返還率）が五十パーセントを超えたのを、魔術デヴァイスで確認できた頃。松直真逆は考え事をしていた。雨崎琴音救出作戦は現在、何の支障も無く、上手く行っている。——否、上手く行き過ぎている。

「（吸血鬼にしては……抵抗が無さ過ぎる……）」

作戦進行に何らトラブルが無い事は本来、喜ぶべき事なのだが、高等な頭脳と強い精神力を持つ吸血鬼を相手取っているという事を考えると些か不安を覚える——というのが、現在の真逆の心情だ。「ただの杞憂に過ぎれば良いが……」

この場に居る誰にも聞こえないくらいの声量で、真逆はそう呟いた。

——しかし、真逆の戦人としての嫌な予感、見事に的中する事になった。

「あ、貴女は——！」

「やあ、元気？」

心象世界内における、琴音と吸血鬼の遭遇。考えられる数々のシチュエーションの中でかなり『厄介』な部類に入るモノだ。

「げ、元気な訳無いでしょ——！ あ探掘品の所為で私の体は——！！」

「——吸血鬼になった、でしょ？ 分かってるのよ、そんな事。別にワタシは貴女に許しを請いに来た訳じゃあ無いの。——貴女を痛め付けに来たのよ」

「——え？」

吸血鬼の唐突な発言に琴音は思考が追い付けなかった。いきなり目の前に現れてきた事だけでも十分驚くべき事なのに、その上、当然

のように言い放たれた突然の暴行宣言なんかを受ければ、彼女の思考キャパシティに限界が来るのかもしれない事で。

彼女が、吸血鬼の言葉の意味を理解した頃には――、

「お・そ・す・ぎ、亀みたい」

音よりも速く動いた真祖の成れの果て「吸血鬼が、鋭くぎざぎざと凹凸の付いた、血のようにドス紅い諸刃の直刀を、驚愕の表情を浮かべたままの彼女」琴音に振り翳していた。

「――ひッ!!」

間一髪。正にその言葉が当てはまるようなタイミングで、身を後ろに引いた彼女の眼前を刀の鋭利な刃が通過する。

琴音は第二、第三の斬撃が迫る前に、後ろへと飛び退き、吸血鬼から距離を取る。

「あらら、避けられちゃった。残念」

全く残念ではなさそうに

「あ、貴女!! その刀は……ッ!？」

「どこから出したかって? どこからも出してないよ。心象世界だもん、道具なんて出せる訳が無い。ただ、吸血鬼の固有魔術を使っただけ。能力は使えるからね、この『世界』は」

「固有、魔術……!？」

――魔術。SA以前の異能。当然、琴音も小学校のSA能力についての学習でその存在を知っている。固有魔術という言葉から察するに、吸血鬼専用の魔術なのだろう、と琴音は推理する。

「そう、固有魔術――変幻する鮮血よ」

変幻する鮮血、ヘイネスブラッドとは。吸血鬼自身の生き血――つまり鮮血を媒介に、魔力を練り混ぜ、道具や武器などを生成する魔術だ。吸血鬼自らの血を織り交ぜる事で生み出した物体の操作性を高めており、正しく『変幻』自在に生成物の形を変えさせたり、手で触れずとも動かしたり、生成物を生物の体内に侵入――例えばナイフなどの刃を生成して刺したり、液体状にして飲ませたり、といった感じだ――させれば、その血液を啜る事が出来る。また、吸

血鬼自体の高い想像力を用いれば、ありとあらゆる物体を魔力の限り生成できる、という様々な性質を持った厄介なモノだ。

「貴女も吸血鬼の端くれとして影響を受けているんだから出来る筈だけど……。やり方は自分で考えてね♪」

「くっ!!」

琴音も負けじと、自慢のSAである、『ラン・アンド・チェイス』と『マイソナー』を同時発動する。彼女はどうかやら、『ラン・アンド・チェイス』で吸血鬼を追跡し、『マイソナー』でそれを補助する事で吸血鬼の動きを完璧に捕捉し、闘うつもりらしい。

能力起動を確認後、琴音は拳を構え、中腰姿勢に入る。彼女なりの戦闘体勢だ。

「お、ヤル気になったね。——来なよ」

「——ッシ!!」

琴音が鋭く跳躍し、吸血鬼も身構える。

こうして琴音と吸血鬼の肉体操作権を巡る闘いが始まった。

一方、現実世界では——。

「装備の最終チェックをしておいて!!」

魔術デヴァイスを通して、琴音の精神と肉体との接続率が上がるどころか、徐々に下がっている事に——彼女の心象世界内での異常を感じ取った龍之介たちが吸血鬼対策の準備を進めていた。

アドヴァイザー

今回の作戦指揮官である真逆曰く、「心象世界内の雨崎くんが吸血鬼と戦闘になった場合、九十九パーセント彼女が負け、肉体操作権を再び吸血鬼に奪われるだろうな。彼女は直接戦闘向きの能力を持っていないという話だし、格闘技術なんかも言うまでもなく吸血鬼の方が圧倒的に勝っているからな」という事らしく——更に肉体の接続率が下がっているという事は、十中八九、心象世界内で吸血鬼と戦闘があったのだろう。

という事で、小休憩を取り、魔力がある程度回復した真逆は魔術で出来る限り琴音の援護をし、余泊やＴⅡは戦闘態勢に入り、龍之介たちは自衛のための準備をしていた。

現在、龍之介たちには普段持ち歩いている拳銃などの最低限の装備しかなく、余泊の量子変換された物や将隆の発明品を借りている。銃などの火器は余泊から貰い、NAなどの特殊装備品は将隆から提供して貰っている。

そんな装備品の中でも彼ら・安保部の目を引いたのは、将隆が提供したパワードスーツのNAのCN・カムフラネオとノウアブルビユーという特殊な機器であった。

CN・カムフラネオ。首から下全てを覆うウェットスーツのような基本形状に変わりはないが、スーツ全体がナノマシンによる簡易¹色彩変更能力を備えており、周辺環境に即座に対応する万能な迷彩服として機能する代物で、着心地と動作補助の質が従来之物と比べ、向上している。

ノウアブルビユー。滑らかな形をした、片目を覆うくらいの大さの長方形のシルエットを持つ情報収集用特殊ゴーグルの事で、左目と右目どちらにも装着する事が出来る。吸盤のように肌に吸い付く吸着システムのお陰で簡単に装備できる物で、カメラを通して得た現実の映像情報に色々と情報を『後付』して使用者に提供する事が出来る。主な後付は、望遠や暗視、熱探知、生命反応探知、音の視覚化など。

将隆曰く、琴音を救出した後もそのまま持つていってもくれて構わないとの事。

閑話休題。

という訳で、龍之介たちは貰った品々を各々、素早く装備し始めた。龍之介たち男子勢は、その場でCN・カムフラネオに着替える事が出来たが、やはり女子のサヤは適当な洞窟に隠れ、そこで男子に見えないように着替える。緊急事態ということで、慌てて服を脱いでポロリ、なんてラッキースケベを狙っていた男子勢は、神様に

向かって小さく舌打ちをした。

龍之介たちはCN・カモフラネオを装着した後、ノウアブルビューを左目に着け、色々と情報の後付をし、機能確かめていた。

「それにしても……このノウアブルビューってのは凄いですね。こんな小さいのに沢山の機能が搭載されている」

龍之介が感心したように、特殊ゴーグルを弄っていると、将隆が得意気になって、

「ふっふっふ……。なんてったって、我が部と城門学園大学部が共同開発したナノマシン技術を使用しているし、なにしろ私が設計したんだからな！！ 凄いのも当たり前だ！！ 機能を使用していない時は、内蔵バッテリーも使用者の行動時の振動で発生する運動エネルギーや周辺の熱エネルギーを利用して自動で充電するようになっていいるから電池も要らないって仕様だ。便利だろ？」

「へー、凄いもんですね。有効活用させて頂きます」

「おう！！ しろ、しろ。存分に有効活用しろ。今回の作戦は吸血鬼なんてオカルトと闘うんだからな、こっちは最新の科学で応戦するぞ！！」

——確かにこれだけの装備があれば、吸血鬼を倒して、雨崎を助けられる！！

龍之介は、余泊から受け取ったFN・F2000の調子を確認しながら、そう思った。

小銃の調子を確認し終えた、彼は拳銃のゴム弾が入った弾倉を確認、CN・カモフラネオの動作補助の具合をチェックする。全て問題無しだ。

「準備、完了しました！！」

そう言って、龍之介が周りを見渡すと、どうやら全員、準備は完了したらしく、サムズアップで合図をしてきた。

一通りの魔術行使が完了した真逆も、それを確認すると、小さく頷き、

「そうか……。ではこれから作戦概要を説明する。——まず、現在

の状況だが、やはり彼女は吸血鬼に敗北したようだ。しかし安心しろ、彼女の意識は俺の魔術でしっかりと保護している。さきほどのように心の奥底に埋まる事は無いだろう。――次にこれからやる事だが……、十中八九、吸血鬼は彼女の肉体と自分の意識を百パーセント接続して、俺たちに襲い掛かってくる。さっきのように簡単にはやられてくれないだろう。とても危険だ。その所は十分、留意しておいてくれ。……奴らは接近戦を得意とする。吸血を防ぐため、距離を取って、余裕を持ち、応戦してくれ。後は、吸血鬼を気絶させ、彼女を魔術支援でもう一度、肉体と接続させれば、吸血鬼の意識も心の奥に封印され、作戦は完了となる。……以上だ。何か質問はあるか？」

真逆は全員の顔を一人ひとり見たが、誰も質問しようとしてこなかった。どうやら今の彼の説明で全てを把握したらしい。

「ではこれより、雨崎くんの救出作戦を開始する！！ 総員、迎撃態勢に入れ！！」

「……了解！！」「……」

龍之介たちは掛け声と共に散開し、それぞれの持ち場に就いた。

【第五十四章 真祖の策】（後書き）

やっと更新できました。しかし……これから都合により更新頻度が落ちます。すいません。

出来る限り頑張りたいと思います。

感想待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5743o/>

心の装甲

2011年11月17日14時37分発行